愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第161集

名古屋城三の丸遺跡Ⅷ
（なごやじょうさんのまるいせき）

2008

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県埋蔵文化財センターによる名古屋城三の丸遺跡の発掘調査は、今回で第８次となります。この広大な遺跡には名古屋城が築かれた江戸時代ばかりでなく、それ以前の戦国期の那古野城の築城があり、中世の寺院跡、古墳時代・弥生時代の建物跡や墓が検出されるなど、調査のたびに各時代の人々の暮らしの有り様が鮮やかに立ち現れてきます。

今回の調査でも、文字通り「新しい」発見がありました。第二次大戦時、おそらく終戦間際に陸軍により築造された幾つもの防空壕です。「爆撃の跡」といったような戦争の惨禍を直接に示す資料ではありませんが、残されていた当時のモノが伝える兵士の「日常性」に愕然とし、少なからずショックを受けました。「昭和」という考古学の世界では極めて新しい時代、しかも「戦争」の痕跡と向き合う貴重な機会であったと考えています。

戦後 60 年を過ぎた今日、これら大切な歴史を語る情報も大部分が伝聞による知識になりつつあります。こうした出土資料および掘り出された地点の歴史が伝える意味は、更に重要度を増すことになるでしょう。

調査にあたりまして、関係諸機関、周辺地域のみなさまから多大なご協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げます。

今回の調査成果が、地域の歴史理解と埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成 20 年 3 月

財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長　林　良三

例　言

1. 本書は愛知県名古屋市中区丸の内に所在する名古屋城三の丸遺跡（なごやじょうさんのまるいせき：県遺跡番号 007027）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、名古屋高等・地方・簡易裁判所庁舎増築に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局営繕部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査面積は計 1,089 ㎡である。
3. 発掘調査は平成 18 年 11 月～平成 19 年 3 月の期間で実施した。また、整理および報告書作成作業は、平成 19 年 4 月から平成 20 年 3 月にかけて実施した。
4. 現地における発掘調査は、朝日航洋株式会社の支援を受けて行い、池本正明（主査）・加藤博紀（調査研究員；現 県立津島東高等学校教諭）・武部真木（調査研究員）が担当した。なお、支援スタッフは第 1 章 1 に記す通りである。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、名古屋市教育委員会、国土交通省中部地方整備局営繕部、名古屋高裁・地方・簡易裁判所をはじめとして、多くの関係諸機関の協力を得た。
6. 本書の執筆は、鈴木正貴・加藤博紀・鬼頭　剛・蔭山誠一・川添和暁・武部真木が分担し、編集は武部が行った。なお自然科学分析結果は（株）パレオ・ラボの報告書を掲載した。
7. 整理作業は武部が担当した。作業にあたっては下記の方々、関係機関の助力を得た。
   今田清美、時田典子、水野留香、堀田春美、小川あかね、前田弘子、村上志穂子（以上整理補助員）
   （株）パレオ・ラボ、（株）テイケイトレード、写真工房 遊、（株）東都文化財保存研究所
8. 本書に示す座標数値は国土交通省に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。海抜表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。表記は世界測地系を用いている。
9. 遺物の登録は、本書図版の掲載番号を元に整理を行った。
10. 写真および図面などの調査に関わる記録類は、愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
   （財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
   〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（ 0567-67-4161）
11. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
   〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（ 0567-67-4164）
12. 本書を作成するにあたり、下記の多くの方々から多大なご指導とご助言を得た。
   記して感謝したい。　（五十音順、敬称略）
   浅川範之　伊藤秋男　伊藤厚史　井上喜久男　大西雅広　金子健一　神戸聖吾
   佐藤公保　仲野泰裕　中村隆雄、菊池　実　楢崎彰一　服部　郁　藤澤良祐
   森本伊知郎　山下峰司　渡辺　誠

目　次

第１章　調査の概要

1　調査の経緯と経過 …… （加藤） …… 1
2　周辺の自然環境 …… （鬼頭） …… 5
3　遺跡周辺の歴史的環境 …… （加藤） …… 8

第２章　遺　構

1　遺構の概要と基本層序 …… （武部） …… 16
2　中世・戦国時代 …… （武部） …… 22
3　江戸時代 …… （武部） …… 26
4　近代以降 …… （武部） …… 33

第３章　出土遺物

1　出土状況の概要 …… （武部） …… 36
2　土器・陶磁器 …… （武部） …… 36
3　ガラス製品・その他 …… （鈴木・武部） …… 100
4　金属関連資料 …… （蔭山） …… 105
5　石器・石製品 …… （川添・武部） …… 113

第４章　自然科学分析

1　土師質鍋付着物の放射性炭素年代測定　（株）パレオ・ラボ …… 115
2　動物遺体の同定（戦国期・近世・近代）　（株）パレオ・ラボ …… 118

第５章　総　括　（武部） …… 126

付表
　登録遺物一覧表

図版
　基本平面図
　写真図版（遺構・遺物）

写真図版　目次

遺構 1
1　調査区南東隅（北西から）
2　調査区全景（西から）
遺構 2
3　戦国期の堀（605SD ほか , 北から）
4　堀（605SD 北壁での断面 , 南から）
5　堀（605SD ベルト断面 , 北から）
6　溝（606SD-e 地点断面 , 南から）
遺構 3
7　上面 東半部分
（戦国期の堀・区画溝検出状況 , 北から）
8　溝（東西にのびる 603SD, 東から）
9　溝（南北にのびる 606SD, 南から）
10　溝断面（603SD 東壁にて , 西から）
11　溝断面（606SD-a 地点 , 北から）
12　溝断面（606SD-b 地点 , 南から）
遺構 4
13　下面完掘状況
（戦国期の堀・区画溝 , 北東から）
14　溝断面（607SD, 東から）
15　堀断面（606SD-f 地点 北壁にて , 南から）
16　溝完掘状況（607SD, 西から）
遺構 5
17　屋敷境の溝と柱穴列（北から）
18　調査区北東隅壁面（南から）
19　土坑完掘状況（085SK, 北から）
20　土坑遺物出土状況
（085SK ベルト南側部分 , 東から）
遺構 6
21　調査区北西部廃棄土坑群（西から）
22　土坑遺物出土状態（492SK, 北から）
23　土坑断面（389SK, 南東から）
24　土坑完掘状況と調査区北壁
（387SK,492SK 付近 , 南から）
25　土坑完掘状況と壁面
（389SK, 南から）
26　土坑遺物出土状態と壁面（380SK, 南から）
遺構 7
27　土坑検出状況
（413SK 上層掘削段階 , 南東から）
28　土坑遺物出土状態
（413SK の桟瓦と焼土塊 , 北から）
29　土坑完掘状況（413SK, 東から）
30　土坑遺物出土状態
（153SK 胞衣埋納遺構か , 東から）
31　土坑遺物出土状態（387SK, 南東から）
32　土坑ベルト断面（387SK, 東から）
33　地下室断面（381SK, 南から）
遺構 8
34　地下室完掘状況（381SK, 南東から）
35　下層遺物出土状態（381SK, 東から）
36　礎石を伴う土坑（460SK, 北から）
37　礎石を伴う土坑（120SK, 北から）
38　礎石を伴う土坑（326SK, 南から）
39　礎石を伴う土坑（412SK, 東から）
40　礎石を伴う土坑（460SK, 北から）
41　礎石を伴う土坑（408SK, 南から）
42　礎石を伴う土坑（409SK, 東から）
43　礎石を伴う土坑（495SK, 北から）
遺構 9
44　版築状埋土断面（196SK, 手前が東）
45　土坑最下層（196SK, 上から）
46　版築状埋土（部分）と段削り出し
（196SK, 南から）
47　土坑検出状況（196SK, 北西から）
48　版築状埋土最下層（194SK 付近 , 南から）
49　土坑断面（832SK, 東壁にて）
50　土坑最下層（553SK, 西から）
遺構 10
51　溝完掘状況（026SD,027SD 重複 , 東から）
52　溝断面（東壁 026SD,027SD 付近 , 西から）
53　調査区南東隅壁面（西から）

54　調査区南壁面（606SD 付近 , 北から）
55　石材廃棄 検出状況
（001SD,002SD, 北西から）
56　石材廃棄状況（001SD 部分 , 北から）
遺構 11
57　防空壕埋土（090SD, 西から）
58　防空壕出入口スロープ（340SX, 北から）
59　防空壕完掘状況（090SD, 西から）
60　防空壕と地下室（340SX と 381SK, 北東から）
61　防空壕と当時の掘削痕（340SX 周辺 , 北から）
62　産業廃棄物の分別
（煉瓦 , 石材 , コンクリート , 鉄筋等）
遺構 12
63　上面完掘状況（南東から）
64　下面完掘状況（東半部分 , 北から）
遺構 13
65　下面完掘状況（中央部分 , 北から）
66　下面完掘状況（西半部分 , 北から）

遺物 1　磁器染付碗類
遺物 2　磁器染付碗皿類
遺物 3　磁器染付・青磁・陶器
遺物 4　陶器碗類
遺物 5　陶器碗皿類
遺物 6　陶器碗皿類
遺物 7　陶器類（灯火具・その他）
遺物 8　陶器類（その他）
遺物 9　陶器類（その他）
遺物 10　陶器類（貯蔵・調理具）
遺物 11　土師質製品（鍋・釜・皿・その他）
遺物 12　土師質製品（皿・その他）・玩具類
遺物 13　玩具類・瓦・近代陶磁器・石器
遺物 14　近代陶磁器
遺物 15　近代陶磁器
遺物 16　歯ブラシ・近代陶磁器・金属製品
遺物 17　金属製品
遺物 18　ガラス製品

挿図　目次

図 1　愛知県の位置　1
図 2　名古屋城域の発掘調査地点　2
図 3　調査区の位置　3
図 4　名古屋城三の丸遺跡周辺の地質図　6
図 5　調査地点屋敷割推定図　8
図 6　1910 年（明治 10）の名古屋城　11
図 7　1921 年（大正 10）の名古屋城　11
図 8　1945 年（昭和 20）の名古屋城　12
図 9　基本層序概念図　16
図 10　南壁土層断面図（S=1/40）　17
図 11　東壁土層断面図 -1（S=1/80）　17
図 12　東壁土層断面図 -2（注記）　18
図 13　北壁土層断面図 -1（S=1/80）　19
図 14　北壁土層断面図 -2（S=1/80）　20
図 15　北壁土層断面図 -3（注記）　21
図 16　北壁土層断面図 -4（注記）　22
図 17　堀 605SD 断面図（S=1/40）　23
図 18　区画溝 607SD・603SD・606SD-a 断面図（S=1/40）　24
図 19　196SK 断面図 -1（S=1/40）　26
図 20　196SK 断面図 -2（S=1/40）　27
図 21　土坑 389SK・381SK 断面図（S=1/40）　28
図 22　土坑 492SK 遺物出土状態（S=1/30）　29
図 23　土坑 387SK 遺物出土状態（S=1/30）　30
図 24　土坑 413SK 断面図（S=1/30）　31
図 25　防空壕配置図　33
図 26　中世・戦国時代の陶磁器（S=1/3）　37
図 27　466SE 出土陶磁器 1（S=1/3）　45
図 28　466SE 出土陶磁器 2（S=1/3）　46
図 29　466SE 出土陶磁器 3（S=1/3）　47
図 30　466SE 出土陶磁器 4（S=1/3）　48
図 31　389SK 出土陶磁器 1（S=1/3）　49
図 32　389SK 出土陶磁器 2（S=1/3）　50
図 33　389SK 出土陶磁器 3（S=1/3）　51
図 34　389SK 出土陶磁器 4（S=1/3）　52
図 35　389SK 出土陶磁器 5（S=1/3）　53
図 36　389SK 出土陶磁器 6（S=1/3）　54
図 37　381SK 出土陶磁器 1（S=1/3）　55
図 38　381SK 出土陶磁器 2（S=1/3）　56
図 39　381SK 出土陶磁器 3（S=1/3）　57
図 40　381SK 出土陶磁器 4（S=1/3）　58
図 41　381SK 出土陶磁器 5（S=1/3）　59
図 42　381SK 出土陶磁器 6（S=1/3）　60
図 43　381SK 出土陶磁器 7（S=1/3）　61
図 44　492SK 出土陶磁器 1（S=1/3）　62
図 45　492SK 出土陶磁器 2（S=1/3）　63
図 46　492SK 出土陶磁器 3（S=1/3）　64
図 47　492SK 出土陶磁器 4（S=1/3）　65
図 48　492SK 出土陶磁器 5（S=1/3）　66
図 49　387SK 出土陶磁器 1（S=1/3）　67
図 50　387SK 出土陶磁器 2（S=1/3）　68
図 51　387SK 出土陶磁器 3（S=1/3）　69
図 52　387SK 出土陶磁器 4（S=1/3）　70
図 53　387SK 出土陶磁器 5（S=1/3）　71
図 54　413SK 出土陶磁器（S=1/3）　72
図 55　北西部土坑群出土陶磁器 1（S=1/3）　73
図 56　北西部土坑群出土陶磁器 2（S=1/3）　74
図 57　包含層（北西部土坑群）出土陶磁器（S=1/3）　75
図 58　110SK 出土陶磁器 1（S=1/3）　76
図 59　110SK 出土陶磁器 2（S=1/3）　77
図 60　110SK 出土陶磁器 2（S=1/2,1/3）　78
図 61　085SK 出土陶磁器（S=1/3）　79
図 62　北東部土坑群出土陶磁器 1（S=1/3）　80
図 63　北東部土坑群出土陶磁器 2（S=1/3）　81
図 64　包含層（北東部土坑群）出土陶磁器 1（S=1/3）　82
図 65　包含層（北東部土坑群）出土陶磁器 2（S=1/3）　83
図 66　包含層（北東部土坑群）出土陶磁器 3（S=1/3）　84
図 67　その他の地点の出土陶磁器（S=1/3）　85

図 68　389SK 出土平瓦・丸瓦（S=1/4）　86
図 69　389SK 出土軒丸瓦・丸瓦・軒桟瓦（S=1/4）　87
図 70　381SK 出土軒桟瓦（S=1/4）　88
図 71　380SK・492SK・413SK 出土軒桟瓦（S=1/4）　89
図 72　飾り瓦・刻印（S=1/4）　90
図 73　近代　出土陶磁器 1（S=1/3）　93
図 74　近代　出土陶磁器 2（S=1/3）　94
図 75　近代　出土陶磁器 3（S=1/3）　95
図 76　近代　出土陶磁器 4（S=1/3）　96
図 77　近代　出土陶磁器 5（S=1/3）　97
図 78　近代　出土陶磁器 6（S=1/3）　98
図 79　近代　出土陶磁器 7（S=1/3）　99
図 80　各遺跡ガラス瓶組成　101
図 81　ガラス製品 1（S=1/3）　102
図 82　ガラス製品 2（S=1/3）　103
図 83　その他の素材の製品（S=1/3）　105
図 84　金属製品 1（S=1/3）　107
図 85　金属製品 2（S=1/3）　108
図 86　金属製品 3（S=1/3,1/4）　109
図 87　金属製品 4（S=1/4）　110
図 88　寛永通宝拓本（S=1/1）　112
図 89　勝川遺跡出土蹄鉄（S=1/4）　112
図 90　石器（S=1/2,1/3）　113
図 91　石製品（S=1/3）　114
図 92　暦年較正結果　117
図 93　検出された貝類　123
図 94　検出された魚類骨　124
図 95　検出された爬虫類と哺乳類骨　125
図 96　中世・戦国期主要遺構の変遷　126
図 97　武家屋敷南辺境界の推定図　128
図 98　屋敷地 1・2 境界の推定図　129

挿表　目次

表 1　調査日誌抄　3
表 2　調査担当者　3
表 3　名古屋城三の丸遺跡周辺で
みられる地質　5
表 4　屋敷地拝領者の変遷　9
表 5　拝領した尾張藩士の事跡　9
表 6　関連年表 -1（明治から終戦まで）　14
表 7　関連年表 -2（明治から終戦まで）　15
表 8　近世陶磁器組成表（466SE）　39
表 9　近世陶磁器組成表（389SK）　40
表 10　近世陶磁器組成表（381SK）　41
表 11　近世陶磁器組成表（387SK）　42
表 12　名古屋城三の丸遺跡のガラス製品組成表　104
表 13　測定試料及び処理　115
表 14　放射性炭素年代測定及び
暦年較正の結果　116
表 15　動物遺体種名表　119
表 16　貝類数量表　120
表 17　魚類数量表　124
表 18　爬虫類および哺乳類数量表　124
表 19　防空壕の構造と規模　130

第１章　調査の概要

1　調査の経緯と経過

名古屋市内の中心部に位置する著名な史跡、近世名古屋城の敷地のうち、本丸と二之丸の東側および南側に設けられた「三之丸」が名古屋城三の丸遺跡の範囲である。遺跡の調査は、これまでに 18 次 (二の丸地区も含めると 21 次) に及ぶ（図２）。1975 年に開始されて以来、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、愛知県埋蔵文化財センターなどにより断続的に調査が行われている。

平成 17（2005）年度、愛知県教育委員会へ当該地点の埋蔵文化財所在の照会があり、依頼を受けた愛知県教育委員会が現地において遺跡の有無確認調査を行った。その結果により当該範囲は発掘調査の必要があると判断された。今回の調査は、名古屋高等・地方・簡易裁判所庁舎増築に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局営繕部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として（財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センターが行った。

調査期間は平成 18 年 11 月～平成 19 年３月であり、調査面積は、1089㎡である。調査は池本正明（主査）・加藤博紀（調査研究員）・武部真木（調査研究員）が担当して行った。また、調査の支援を（株）朝日航洋に委託して行った。スタッフは表２に示す通りである。

平成 19（2007）年度４月より整理作業を開始し、年度内に報告書を作成・刊行した。資料整理作業にあたっては、科学分析を（株）パレオ・ラボに依頼し、遺物実測およびデジタルトレース業務はテイケイトレード（株）、遺物の写真撮影を写真工房遊 , 金子知久氏に委託して行った。

（加藤博紀）

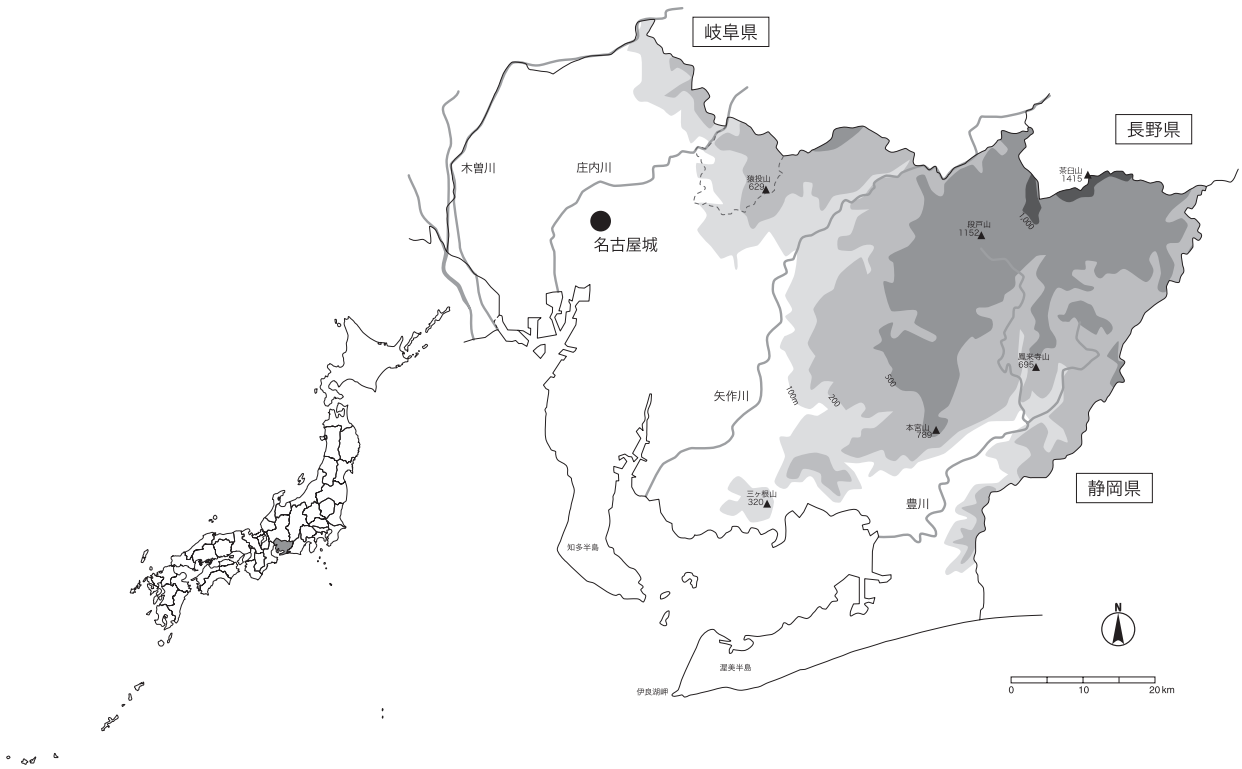
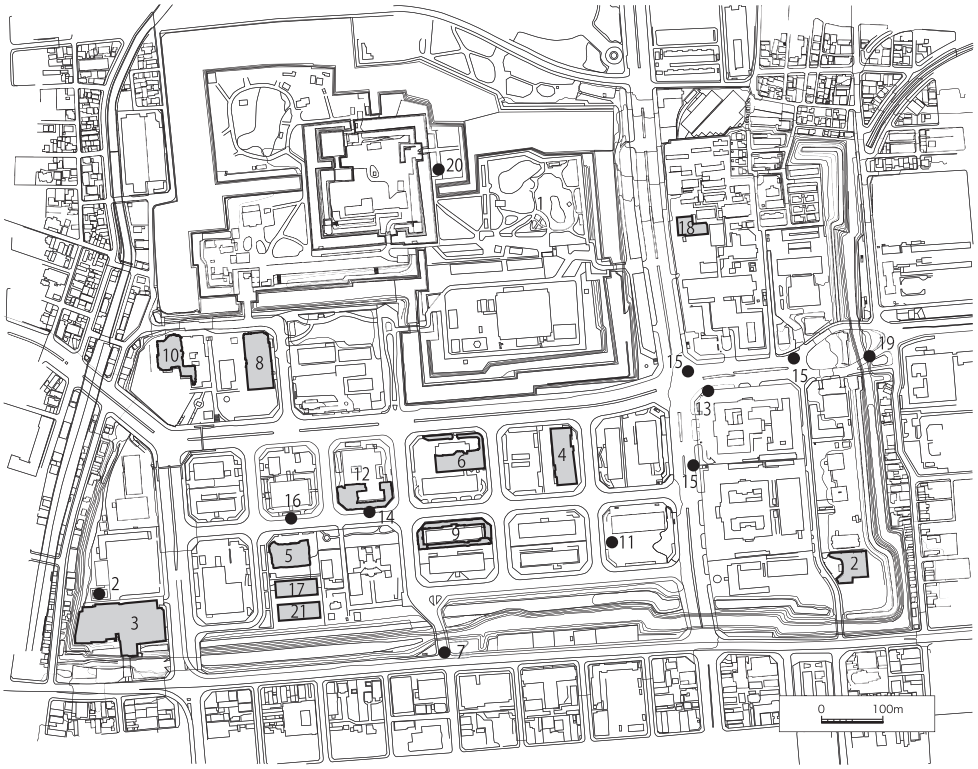


図１　愛知県の位置



	地点名	調査年	調査主体	文　　献
1	名古屋城二の丸庭園地点	1975	名古屋市教育委員会	『名古屋城二ノ丸庭園発掘調査概要報告書』
2	名古屋市公館地点	1987～1988	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡－1・2・3次調査の概要』
3	愛知県図書館地点	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ』
4	名古屋第一地方合同庁舎地	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅱ』
5	簡易家庭裁判所地点	1990～1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』
6	愛知県警察本部地点	1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅳ』
7	本町御門地点	1991	名古屋市教育委員会	『名古屋城本町御門跡発掘調査概要報告書』
8	中部電力地下変電所地点	1992～1993	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査報告書－遺構編・遺物編』
9	愛知県三の丸庁舎地点	1993～1994	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅴ』
10	名古屋市能楽堂地点	1993～1994	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』
11	無線統制室地点	1995	愛知県教育委員会	『代替無線統制室建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
12	名城病院地点	1995～1996	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第8･9次発掘調査報告書』
13	地下鉄出入口地点	1998	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第10次発掘調査報告書』
14	下水道管築造地点	1999～2000	名古屋市教育委員会	『下水道工事に伴う埋蔵文化財報告書』
15	NTT電話工事地点	2000	㈱パスコ	『名古屋城三の丸遺跡－平成12年度NTT電話工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
16	ガス管埋設工事地点	2001	㈱パスコ	『名古屋城三の丸遺跡－ガス管埋設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
17	地方簡易裁判所庁舎地点	2001	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅵ』
18	国立名古屋病院地点	2002	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』
19	東清水橋東交差点地点	2002	名古屋市教育委員会・㈱パスコ	『愛知県埋蔵文化財情報19』
20	名古屋城本丸搦手東門地点	2003・2005	名古屋市教育委員会・㈱パスコ	『特別史跡名古屋城跡本丸搦手馬出石垣修復工事発掘調査報告書－元御春屋門地点の調査』
○ 21	地方簡易裁判所合同庁舎地点	2006～2007	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅷ』

図２　名古屋城域の発掘調査地点

表１　調査日誌　抄

2006（平18）	11月16日	作業工程等打ち合わせ
	11月22日	重機による表土剥ぎ
	11月30日	発掘作業員による掘削作業開始
	12月26日	産業廃棄物搬出開始
2007（平19）	1月12日	伊藤厚史氏来訪
	1月16日	全体撮影（北側裁判所建物屋上から）
	1月17日	伊藤秋男氏来訪
	1月24日	小田寛貴氏来訪
	1月25日	ラジコンによる図化撮影・全体撮影（高所作業車から）
	1月26日	全体撮影（北側裁判所建物屋上から）・個別写真撮影
	2月8日	森本伊知郎氏来訪
	2月15日	安全パトロール
	2月20日	高木ひろし県議来訪
	2月21日	楢崎彰一氏による調査指導・ラジコンによる図化撮影
	2月22日	全体撮影（裁判所建物屋上および高所作業車から）
	3月1日	埋蔵文化財センター運営協議会視察
	3月2日	菊池実氏・伊藤厚史氏来訪
	3月3日	現地説明会
	3月6日	東壁堆積層序実測
	3月7日	北壁堆積層序実測
	3月13日	井戸（466SE）断ち割り調査
	3月14日	渡辺誠氏による遺物指導
	3月15日	補足調査完了
	3月19日	埋め戻し

表２　調査担当者

愛知県埋蔵文化財センター　調査担当

主査	池本正明
調査研究員	加藤博紀
調査研究員	武部真木

支援スタッフ

現場代理人	浅田良治
調査補助員	楠部博世
測量技師	伊藤正博
測量助手	水野聡哉

朝日航洋株式会社　中部空情支社

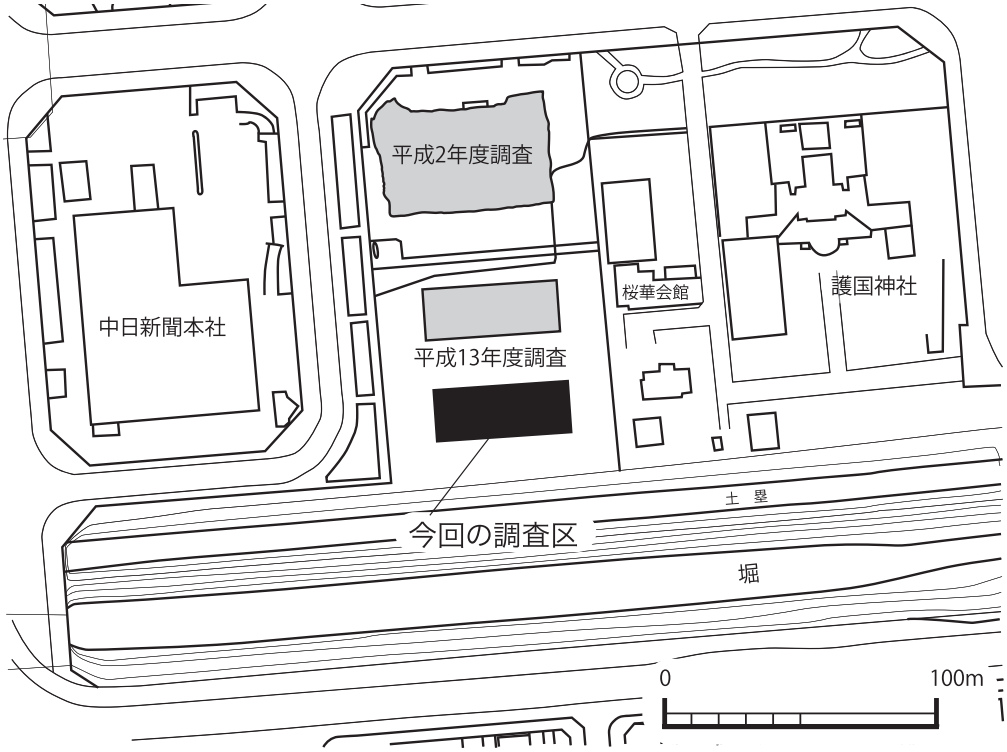


図３　調査区の位置









1　調査前風景
2　表土掘削作業
3　調査区北方にみえる名古屋城本丸
4　防空壕（SX340）掘削作業



5・6　2007 年 3 月 3 日
現地説明会開催



2　周辺の自然環境

名古屋城三の丸遺跡は名古屋市中区丸の内にある。名古屋市は愛知県の西に位置し、名古屋城三の丸遺跡の調査地点は名古屋市の中でも北西部にあたる（図４）。調査地点から約 4.8km 西には名古屋市内を流下する主要な河川のひとつである庄内川が南西へ流れ、庄内川からさらに西方約 20.2km には愛知県と岐阜県・三重県とを境する木曽川が、木曽川から約 0.7km 西には長良川、長良川よりさらに約 3.7km 西には揖斐川がそれぞれ南流し、伊勢湾にそそぎこんでいる。今回の調査地点は東海道本線・新幹線の名古屋駅から北東へ約 1.8km で、かつ現在の名古屋城天守閣から南へ約 0.8km の距離にある標高約 13m の「熱田台地」とよばれる台地の北西縁辺部に立地する。台地の直下にひろがる標高およそ 5.0m よりも低いところには地質図において白色で表される完新統が分布しており、いわゆる濃尾平野の沖積低地を形成している（図４）。調査地点での台地と沖積低地との標高差は約 8m である。なお、熱田台地の西縁に沿って名古屋港へと流れる堀川は慶長十五年 (1610 年) の名古屋城の築城に伴い開削され、慶長十六年 (1611 年) に掘割りを終える人工的な水路である（服部 , 1981）。

名古屋城三の丸遺跡周辺地域の地下地質について、地層は全体として砂礫・泥互層からなり下位より東海層群（新第三系）、海部・弥富累層（中部更新統）、熱田層下部（上部更新統）、熱田層上部（上部更新統）、第一礫層（上部更新統）、濃尾層（最上部更新統）、南陽層（完新統）などの第四系の累層から構成される（表３・図 1）。これらのうち中部更新統は丘陵～高位段丘を、上部更新統は中・低位段丘を、上部更新統最上部～完新統は沖積低地を構成している。名古屋城三の丸遺跡の立地する熱田台地は上部更新統の熱田層により構成されている。この熱田層および周辺地域の地形・地質に関しては松澤・嘉藤 (1954) による記載以来、地質学的に多くの研究・報告が行なわれてきた（総理府資源調査会 , 1956; 桑原 , 1968, 1975; 名古屋地盤調査会 , 1969; 濃尾平野第四系研究グループ , 1977; 桑原ほか , 1982; 坂本ほか , 1984; 坂本ほか , 1986）。桑原 (1975) は熱田層を最下部層・下部層・

表３　名古屋城三の丸遺跡周辺でみられる地質

<table>
<tr><th colspan="4">地質時代</th><th>層序</th></tr>
<tr><td rowspan="5">新生代</td><td rowspan="4">第四紀</td><td>完新世</td><td></td><td>沖積層</td></tr>
<tr><td rowspan="3">更新世</td><td>後期</td><td>鳥居松礫層　大曽根礫層　（低位段丘礫層）
熱田層（中位段丘礫層）</td></tr>
<tr><td>前期</td><td>八事層
唐山層</td></tr>
<tr><td colspan="2">鮮新世</td><td>東海層群</td><td>矢田川累層</td></tr>
<tr><td>新第三紀</td><td colspan="3"></td></tr>
</table>

坂本ほか (1984)，坂本ほか (1986) を参考に鬼頭が作成

上部層に区分した。熱田層最下部層は濃尾平野の中央部の地下にのみみられる砂層である。下部層は濃尾平野の地下全域に分布し、地表では熱田台地にのみ露出する海成粘土層である。熱田海進（濃尾平野地下第四系研究グループ , 1977）とよばれる最終間氷期の海進堆積物と考えられる。本層上限面の深度は濃尾平野西縁部では -140m におよぶが、熱田台地では 10m 以下である。上部層も濃尾平野の地下全域に分布する。地表では熱田台地と守山台地に露出する。主に砂層からなり、シルト・粘土層やレンズ状の礫層も挟まれる。層厚は濃尾平野西縁部で 60m 以上、熱田台地で 30 ～ 40m であるという特徴をもつ。

今回の調査では自然科学的な解析を行なわなかったものの、北側に隣接した 2001 年の調査（松田編 , 2003）で実施した深掘により、標高 7.97 ～ 11.20m までに粗粒砂層と粘土層からなる深掘層序が得られている（鬼頭ほか , 2003）。そこでは標高 7.97 ～ 8.30m にみられる粗粒砂層中の標高 8.01m の層準からは阿蘇 4 テフラ（Aso-4：86 ～ 90 ka（ka は 10^3 年前を表す地質年代単位））、その直上の標高 8.18m の層準からは大山生竹テフラ（DNP：80 ± 40 ka（木村ほか , 1999））とともに斜方輝石および単斜輝石を主体とし角閃石を含む特徴をもつ、岐阜県と長野県との県境をなす御嶽火山起源の御岳 - 奈川 (0n-Ng：約 5 万年前 (中村ほか ,1992)) も含まれた。また、黒褐色シルト質

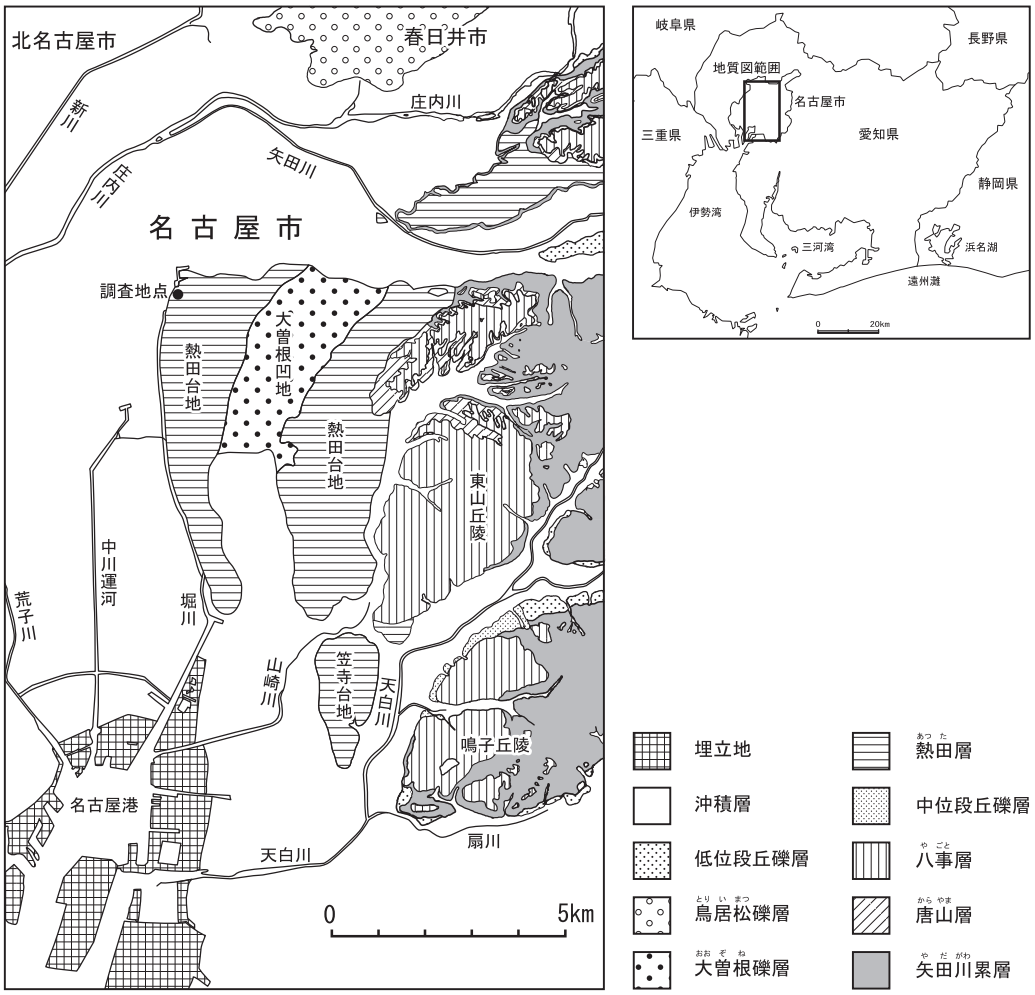


図４　名古屋城三の丸遺跡周辺の地質図

●が調査地点を示す．地質図は坂本ほか (1984)，坂本ほか (1986) を基に作成.

粘土層（標高 11.11 ～ 11.20m）の標高 11.15m からはバブルウォールタイプの火山ガラスが認められる姶良 Tn テフラ (AT：約 2 万 4 千年前（村山ほか , 1993）) が検出され、さらに姶良 Tn テフラが検出された層準よりも上位の標高 11.19m のシルト質粘土層の放射性炭素年代が暦年代較正値で 10890-10755 cal yrs BP(PLD-1594) を示し、阿蘇 4 テフラの約 9 万年前以降から姶良 Tn テフラの約 2 万 5 千年前、放射性炭素年代測定値の約 1 万年前までの地質年代や数値年代が得られている。

（鬼頭　剛）

【文献】

服部鉦太郎 , 1981, 特別史蹟　名古屋城年誌 , 名古屋城振興協会 , 303p.

木村純一・岡田昭明・中山勝博・梅田浩司・草野高志・麻原慶憲・館野満美子・檀原　徹 , 1999, 大山および三瓶火山起源テフラのフィッショントラック年代とその火山活動史における意義 , 第四紀研究 , 38, 145-155.

鬼頭　剛・森　勇一・上田恭子 , 2003, 名古屋城三の丸遺跡地下で確認された熱田層最上部層の層序と古環境 , 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集「名古屋城三の丸遺跡 (Ⅵ)」, 愛知県埋蔵文化財センター , 46-56.

桑原　徹 , 1968, 濃尾盆地と傾動地塊運動 , 第四紀研究 , 7, 235-247.

桑原　徹 , 1975, 濃尾傾動盆地の発生と地下の第四系 , 愛知県地盤沈下研究会報告書 , 愛知県 , 109-182.

桑原　徹・松井和夫・吉野道彦・牧野内　猛 , 1982, 熱田層の層序と海水準変動 . 第四紀 , 第四紀総研連絡紙 , 22, 111-124.

松田　訓編 , 2003, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集「名古屋城三の丸遺跡 (Ⅵ)」, 愛知県埋蔵文化財センター , 60p.

松沢勲・嘉藤良次郎 , 1954, 名古屋及び付近の地質 . 同地質図 , 愛知県建築部 .

中村俊夫・藤井登美夫・鹿野勘次・木曽谷第四紀巡検会 , 1992, 岐阜県八百津町の木曽川泥流堆積物から採取された埋没樹木の加速器 14C 年代 , 第四紀研究 , 31, 1.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦 , 1993, 四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討 - タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の 14C 年代 -, 地質雑 , 99, 787-798.

名古屋地盤調査研究会 , 1969,「名古屋地盤図」, コロナ社 , 東京 , 279p.

濃尾平野第四系研究グループ , 1977, 濃尾平野第四系の層序と微化石分析 , 地質学論集 , 14, 161-183.

坂本　亨・桑原　徹・糸魚川淳二・高田康秀・脇田浩二・尾上　亨 , 1984, 名古屋北部地域の地質 , 地域地質研究報告（5 万分の 1 図幅）, 地質調査所 , 64p.

坂本　亨・高田康秀・桑原　徹・糸魚川淳二 , 1986, 名古屋南部地域の地質 , 地域地質研究報告（5 万分の 1 図幅）, 地質調査所 , 55p.

総理府資源調査会事務局 , 1956, 水害地域に関する調査研究　第 1 部 , 資源調査会資料 , 46, 97p.

3　遺跡周辺の歴史的環境

名古屋城三の丸遺跡は近隣も含めると 21 次に亘り、愛知県埋蔵文化財センター、愛知県教育委員会および名古屋市教育委員会などにより発掘調査が実施されている。これらの調査によって、戦国期那古野城期・近世名古屋城期を中心に様々な知見をわれわれにもたらしてくれた。

今回の発掘調査においては、近世以前に加え、近代における三の丸区域の状況を明らかにすることができた。これまでの報告書において、既に近世以前の歴史的環境は語りつくされている感もあるため、ここでは近世以前は今回の調査範囲に関わることを中心に、近代は名古屋城三の丸遺跡範囲のほとんどを占めた旧陸軍第三師団を中心に概観しておく。

＜戦国時代以前＞

文献によると、名古屋台地の北端を占めた愛知郡那古野荘は、平安末期に白河院の近臣葉室顕隆の孫・東大寺別当顕恵が開発し、後白河上皇の女御建春門院に寄進した後、その子孫が領家職を相続し、鎌倉後期には美濃源氏の一族足助氏に渡った。その後、那古野は奉公衆・今川那古野氏の領地となった。

その後、今川那古野氏は嫡流の駿河国守護今川氏から氏豊を迎え、1522 年 (大永 2) 頃に尾張への押さえとして那古野城を築城したとされる。そして、1532 年 (天文元) または 1538 年 (天文 7) に織田信秀に城を奪われ、織田信秀の居城とされた。

この結果、今川那古野氏・織田氏の本拠とされた那古野城には交通路が集まり、旅宿や市が形成されていた情景などが近世の編纂書から窺うことができる。とくに、市場は、那古野に中市場・下市場・今市場という三つの存在が伝えられ、そして今市場の位置が、近世三之丸中小路と本丸から大手門にむかう南北路の交差地点周辺と推測され、また天王坊 (現在の東海農政局の地点) は近世名古屋城築城後も移転されることがなく、天王坊を中心に寺社や町並みがあったことが想定されている。今回の調査地点周辺は那古野城の一部に含まれるか、少なくとも地域の中心として多くの民家などがあったことが推測されよう。

＜近世＞

1582 年 (天正 10) 頃に那古野城が廃城された後、1609 年 (慶長 14) に名古屋城築城が決定され、1615 年 (元和元) には本丸御殿が完成、二之丸殿社も 1617 年には完成し、1620 年徳川義直が二之丸御殿に移った。

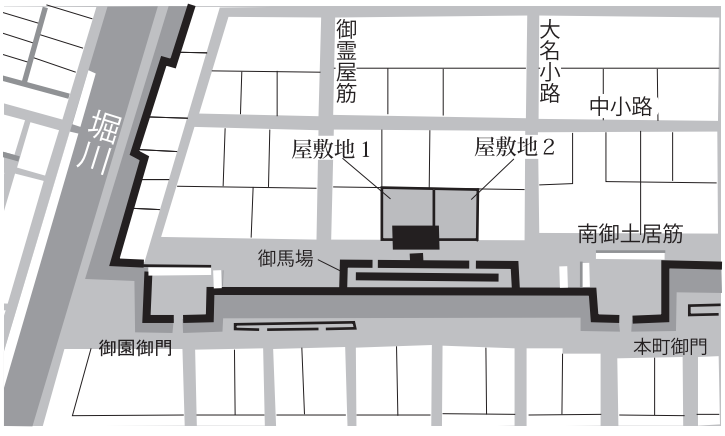


図 5　調査地点屋敷割推定図（享保末年絵図をもとにに合成、御馬場北側が調査区）

表４　屋敷地拝領者の変遷

年代	1600	1700	1800	明治維新
屋敷地1	伊奈左助重定 伊奈源五右衛門定次 伊奈左門吉次 伊奈左門吉勝	成瀬喜三郎正為 遠山彦左衛門景慶 横井伊織時申 津田幸次郎信周 津田兵部寛当 成瀬大膳正苗 成瀬竹之助正惟 下条新内孝正 下条庄右衛門正春	成瀬吉太正平 成瀬吉五郎正敦 成瀬吉左衛門喬治 成瀬健之助喬長	
屋敷地2	大道寺玄蕃直治 大道寺玄蕃直時 大道寺玄蕃直重	下条庄右衛門正員 津田悦三郎 津田幸次郎信郷 津田幸次郎信周 成瀬内膳正苗 津田又八寛当 生駒因幡致長 山澄主税英貞 寺尾悦之助実延 寺尾頼母好実 寺尾内匠就実	滝川鍋松忠貫 滝川彦次郎忠暁 下条庄右衛門正香 下条安吉正賀	

表５　拝領した尾張藩士の事跡

屋敷地	『金城温故録』にみる通称	拝領者の名前	士林泝洄にみる事跡
1	伊奈左門	伊奈吉勝	松平忠吉時に属し、浜松で千石を賜り、同心頭となって五百を加増。義直に仕えて大坂役に従軍する。
	伊奈左門	伊奈吉次	父の家領を継いで寄合となる。寛永21年大番頭となる。 万治2年職を辞して寄合となる。
	伊奈源五右衛門	伊奈定次	瑞公の時に召しだされ御通番、後に進物御番となる。父の家領の内千二百石を賜る。
	伊奈左助	伊奈重定	定次の弟。家領を継いで寄合となる。元禄10年自殺。
	下条庄右衛門	下条正春	父の家領の内千二百石を賜り、寄合となる。天和元年御書院番頭、3年御用人となり後に瑞公菟裘（隠居の意）に仕える。元禄12年三百石加増、13年大寄合となる。
	下条新内	下条孝正	渡辺新左衛門の子。元禄16年召しだされ御小姓、宝永2年養父の家領の内千二百石を賜る。宝永4年御書院番頭、享保12年御用人となる。
2	大道寺玄蕃	大道寺直重	松平忠吉の時に二千石を賜り、義直に仕える。元和6年馬廻組番頭となり五百石を加増される。
	大道寺玄蕃	大道寺直時	父の遺言により二千石を賜り大御番頭となる。慶安2年同心頭となる。万治元年家老職となり二千石を加増されるが、病身のため辞して受けなかった。
	大道寺玄蕃	大道寺直治	父の家領二千石を継ぐ。寛文9年近侍することを命ぜられ、寛文11年家老職となり二千石を賜る。延宝5年従五位下。
	寺尾内匠	寺尾就実	延宝3年寺尾直龍乱心し犬山に蟄居する。その継嗣として三千石を賜り大寄合となる。6年触流となる。元禄14年御側同心頭となる。
	寺尾頼母	寺尾好実	宝永元年父の家領を継ぎ、寄合となる。3年に病気によりその領を収公される。
	寺尾悦之助	寺尾実延	好実の家領の内、千五百石を賜り寄合となる。

同時に尾張藩上級藩士の拝領屋敷とされた三之丸区域も整備されていく。1663 年（寛文３）には、それまで二之丸内にあった付家老の成瀬・竹腰の屋敷が三之丸へ移転されたことによる三之丸内の屋敷替の結果、ほぼ屋敷配置が固定されていく。なお、調査地点南側には「御馬場」がみえる（図 5)。この「御馬場」は、『金城温故録』によると「追廻馬場」と記され、「三之丸内片端、本町御門より西御土居裾通り、大名小路筋より、元御霊屋筋の間、惣長百廿間・巾拾間 (中土居巾一間玉縁巾壱間) 片馬場、巾四間宛。騎射の節は、御土居裾に的を建らる。此御馬場にて、明和三年頃迄は、御馬乗初、遊ばされ (源順公御代より向御屋敷馬場御殿にて御式あり) し趣き。近来は三八の日並、小笠原与十郎 (騎射犬追物小笠原流師家) 騎射稽古の馬場に借用を為す。」(原文は縦書。カッコ内は二段)とあり、1766 年（明和３）頃まで藩主の行事にも利用された重要な馬場の一つであった。

今回の調査範囲に関してみると、図 5 のような屋敷地が想定され、この地には『金城温故録』によると表 4 のような藩士が屋敷地を拝領した。さらに『士林泝洄』によると、屋敷地を拝領・継承した藩士の事跡を知ることができる。これを表 5 にまとめる。

表 5 から見ていくと、屋敷地 1 に関しては、伊奈重定の自殺により同格で藩主の覚えめでたい下条正春へと屋敷替が行われているが、伊奈左門家と下条庄右衛門家とも千二百石の石高を有している。また、屋敷地 2 に関しては、二千石の大道寺玄蕃家が二代に渡って家老職に就任し石高を増やしたことから、拝領屋敷地が南御土居筋の一番西 (現在の愛知県図書館の地点) に移り幕末を迎える。かわって 1 万石を有し家老職を任ぜられていた寺尾家が、直龍の乱心により三千石に石高を減らし、大道寺玄蕃家の跡地を拝領することになった。

近世前半に限っていえば、屋敷地 1 の拝領者は石高が千二百石で、非役の寄合から大番頭や御書院番頭、御用人などへ職をえていることから、格は番頭であったと考えられる。また、屋敷地 2 の拝領者は石高が二千〜三千石で、家老や触流の職をえていることから、格は家老であったと考えられる。いずれにせよ、千石以上の藩士は近世前半において 80 家内外しかおらず、すべての藩士の 1 割弱にあたる存在であり、今回の調査範囲を拝領した藩士たちについていえば、屋敷地 1 は番頭、屋敷地 2 は家老の格を有した上級藩士が拝領していたと考えられる。

＜近代＞

1868 年（慶応４）1 月から始まる戊辰戦争で新政府軍は勝利をおさめた。しかし、この新政府軍は薩長土肥を中心とする藩軍の寄せ集めであり、新政府の直轄軍は全くない状況であった。

農民徴兵を想定した政府直轄軍創設の試みは、大村益次郎にはじまる。大村暗殺後は長州閥の山縣有朋に継承された。しかし、1871 年（明治４）西郷隆盛の提案により薩長土三藩からの献兵による御親兵が設置された。この御親兵が日本陸軍の母胎となった。御親兵設置と平行して、同年 4 月に鎮台が設置された。当初２鎮台であったものは、廃藩置県に伴い 8 月に 4 鎮台に改められた。ただし、この時の鎮台兵は旧藩兵によって構成されていた。同じ頃、名古屋でも東京鎮台第三分営として政府直轄軍がおかれたが、やはり大垣・名古屋・安濃津の旧藩兵で構成される軍であった。その封建性を払拭するべく 1872 年（明治５）11 月徴兵告諭、翌年 1 月に徴兵令が相次いで公布され、血税騒動や徴兵忌避といった農民の抵抗をうけながらも鎮台兵は徐々に旧藩兵から徴兵に切り替えられていった。

徴兵令と同時に名古屋・広島に鎮台が設置された。名古屋鎮台は、名古屋と金沢に師管をもち、名古屋の第六師管では歩兵第六聯隊・砲兵第一大隊・工兵第一小隊・輜重兵第一小隊という編成を有していた。これらの隊が旧名古屋城内に置かれたものと考えられる。

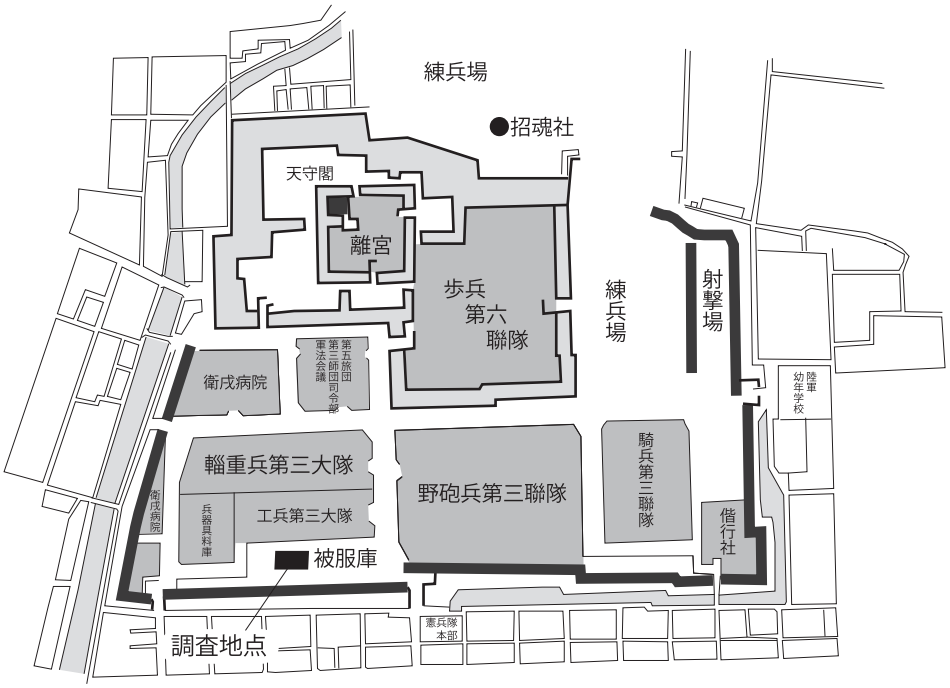


図６　1910 年（明治 10）の名古屋城

（「名古屋市實測図」『新修 名古屋市史 第５巻』付録よりトレース・加筆）

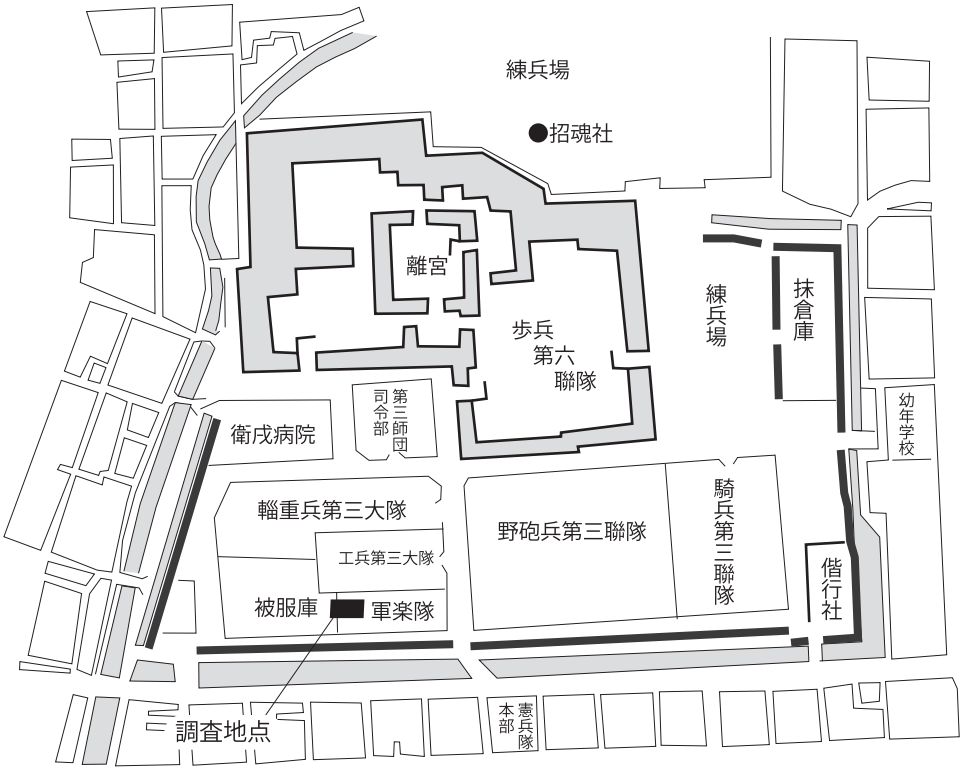


図７　1921 年（大正 10）の名古屋城

（「隣接町村合併記念名古屋市全図」『新修 名古屋市史 第５巻』付録よりトレース・加筆）

鎮台は、農民暴動や不平士族の反乱への鎮圧といった治安維持を目的としておかれたものであり、名古屋鎮台でも 1876 年（明治９）の伊勢暴動への鎮圧のために出動している。また、西南戦争にも名古屋鎮台兵が派遣された。この結果、大規模な不平士族の反乱はなくなった。その結果、陸軍は国内の治安維持を担う軍隊から外的脅威に備える軍隊、外征が可能な軍隊へと性格を変え始める。それが 1888 年 (明治 21) に切り替えられた師団制である。鎮台はすべて師団になったので、近衛師団を含め七個師団編成となった。

名古屋においても 1885 年に歩兵第五旅団司令部、1886 年に第三師団司令部が三の丸に設置され、同年輜重兵第三大隊、1888 年に工兵第三大隊、1892 年に騎兵第三大隊・野砲兵第三聯隊が創設された。すべて三の丸に設けられたが、1910 年（明治 43）作成の「名古屋市實測図」（図６）から考えると、創設順に司令部から遠方へと設置されたものと考えられる。この配置状況が敗戦まで基本とされた。

1894 年（明治 27）甲午農民戦争を契機とし日清戦争が勃発した。そして、日本軍最初の本格的外戦に勝利を収めた。当然、第三師団も出兵している。1896 年から始まる戦後の軍備拡張によって五個師団が増設され、合計十三個師団編成で北清事変、日露戦争に臨むことになる。第三師団においても金沢の第六旅団を第九師団（金沢）に移譲し、豊橋に第十七旅団、守山に歩兵第三十三聯隊を創設した。また、騎兵第三大隊を騎兵第三聯隊に改編している。この体制で第三師団は日露戦争に出兵した。日露戦争は、日本軍にとって膨大な人的被害を与えた。そこで、戦争末期に四個師団を創設し、戦後に二個師団を増設した。第三師団においても、第十七旅団を第十五師団（豊橋）に移譲し、岐阜と久居に歩兵聯隊、飛行第一大隊を創設、野砲兵の増員がなされた。また、『第三師団戦史』や 1921 年（大正 10）作成の「隣接町村併合記念名古屋市全図」（図７）によると、第三師団軍楽隊が日露戦争後から見える。

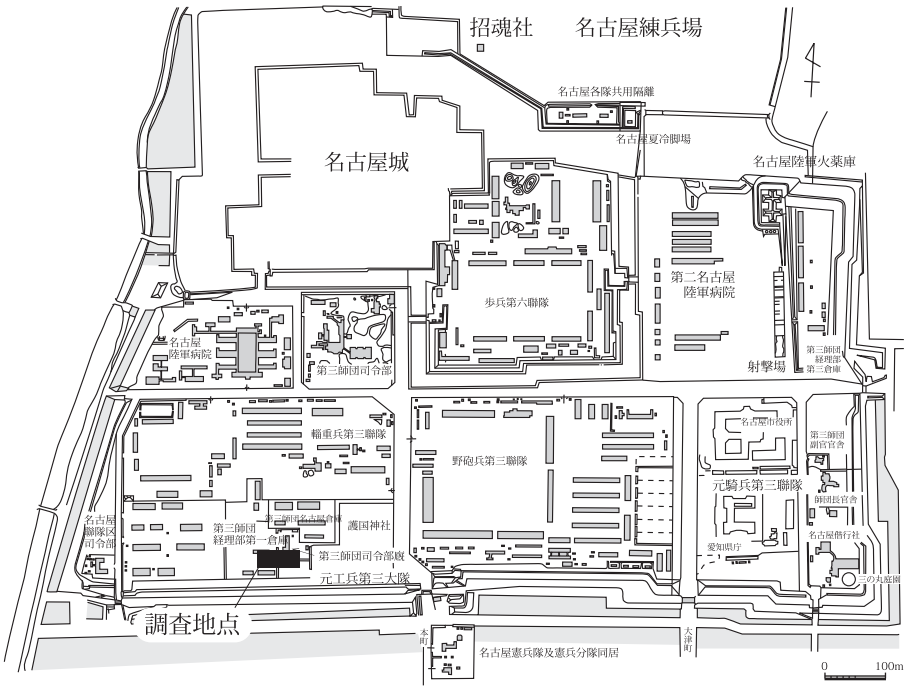


図８　1945 年（昭和 20）の名古屋城

（「名城郭内第３師団司令部周辺旧軍施設図」『中部地方建設局営繕事業三十五年史』を一部改変）

1912 年（大正元）の二個師団増設問題を契機とする大正政変で藩閥官僚が批判の対象となった。この世論にもかかわらず、1915 年には朝鮮に二個師団を増設して二十一個師団編成となり、ロシア革命への干渉のために 1918 年（大正 8）8 月シベリア出兵を実施した。しかし、大正デモクラシーの風潮、第 1 次世界大戦後の世界的な軍縮傾向と不況によって、陸軍も軍縮をせまられた。1922 年 (大正 11) から小規模な軍縮は行われてきたが、1925 年（大正 14）陸相宇垣一成によって四個師団廃止を含む大規模な軍縮が実施に移された。この宇垣軍縮は、軍備近代化のために師団廃止などによって経費を産み出したものであり、地元の要望を受けて廃止される部隊駐屯地には別の部隊を移動させる配慮もなされた。第三師団においても、飛行聯隊が浜松に創設されるなどの近代化と同時に、工兵第三大隊も浜松に、騎兵第三聯隊が歩兵第三十三聯隊の久居移転によって空いた守山に移転した。また、『第三師団戦史』によると、第三師団軍楽隊が昭和初期に廃止されている。

以上の改編によって、三の丸においても大きな変動が生じた。工兵第三大隊の跡地は輜重兵第三聯隊と倉庫の敷地拡張に利用された他は、騎兵第三聯隊跡地は名古屋市役所（1933 年（昭和 8）竣工）・愛知県庁（1938 年（昭和 13）竣工）へ、軍楽隊跡地は招魂社（1935 年（昭和 10）遷座・1939 年（昭和 14）愛知県護国神社と改称）に利用された。この配置状況が敗戦まで続く。（図 8 参照）

この後、日本は慢性的な中国との戦闘状態からアジア太平洋戦争に突入するが、第三師団も中国戦線を中心に 1946 年 (昭和 21) まで動員されることになる。戦局の悪化とともに、1944 年 7 月にサイパンをアメリカ軍が制圧し、ここが日本本土に対する空襲の基地となった。そして、日本各地への本格的な空襲が始まった。

名古屋城域では 1945 年（昭和 20）3 月 12 日・同月 19 日・5 月 14 日に空襲を受けた。護国神社は 3 月の空襲で、名古屋城天守閣は 5 月の空襲で炎上するが、調査地点も甚大な被害を受けたと考えられる。

（加藤博紀）

【引用・参考文献】
名古屋市 ,1998,『新修名古屋市史第二巻』
名古屋市 ,2000,『新修名古屋市史第五巻』
名古屋市 ,2003,『新修名古屋市史第六巻』
名古屋市 ,1967,『名古屋叢書続編第十六巻金城温故録 (四)』
名古屋市 ,1967,『名古屋叢書続編第十八巻士林泝洄 (二)』
名古屋市 ,1968,『名古屋叢書続編第十九巻士林泝洄 (三)』
林薫一編 ,1990,『新編尾張藩家臣団の研究』国書刊行会 , p.138, 197
名古屋城管理事務所 ,1979,『天守閣再建二十周年記念名古屋城古絵図』
陸上自衛隊第 10 師団司令部編 ,1965,『第三師団戦史』陸上自衛隊
社団法人営繕協会編 ,1986,『中部地方建設局営繕事業三十五年史』中部地方建設局
浅川範之 ,2005,「「兵営」の考古学－考古資料にみる軍隊生活」『近現代考古学の射程～今なぜ近現代を語るのか～』六一書房
山中恒・山中典子 ,1999,『間違いだらけの少年Ｈ－銃後生活史の研究と手引き』頸草書房
瀬戸市歴史民族資料館 ,1994,『戦争とやきもの』

表６　関連年表 -1（明治から終戦まで）

西暦	和暦		歴史事件	軍関連		その他
				名古屋（第3師団関連）	愛知県下	
1867	慶応	2				
1868	明治	元	王政復古の大号令,戊辰戦争			
1869	明治	2				
1870	明治	3				
1871	明治	4	廃藩置県			
1872	明治	5		8月東京鎮台第三分営設置		
1873	明治	6	徴兵令	7月第3軍管名古屋鎮台設置		
1874	明治	7	佐賀の乱,台湾出兵	3月歩兵第6聯隊（名古屋）軍旗拝受		
1875	明治	8	江華島事件			国産碍子（電信用）使用が広がる
1876	明治	9	新風連の乱,秋月の乱,萩の乱	12月伊勢暴動鎮圧のため歩兵第6聯隊派遣		
1877	明治	10	西南戦争			
1878	明治	11	竹橋事件			
1879	明治	12				
1880	明治	13				
1881	明治	14				
1882	明治	15	壬午軍乱			軍人勅諭発布
1883	明治	16				
1884	明治	17	加波山事件,秩父事件,飯田事件,甲申事変		8月豊橋に第18聯隊創設（歩兵第5旅団隷下）	
1885	明治	18		8月歩兵第6旅団創設/歩兵第5旅団司令部設置		
1886	明治	19		第3軍管名古屋鎮台を第3師団に改称改編,第3師団司令部設置,輜重兵第3大隊創設		
1887	明治	20				
1888	明治	21		工兵第3大隊創設		
1889	明治	22	大日本帝国憲法発布			
1890	明治	23				
1891	明治	24				
1892	明治	25		騎兵第3大隊創設,野砲兵第3聯隊創設		
1893	明治	26				
1894	明治	27	甲午農民戦争,日清戦争	2月出兵（～'95年1月）		アルミの実用化
1895	明治	28	下関条約調印			
1896	明治	29		騎兵第3大隊を騎兵第3聯隊に改編	守山に歩兵第33聯隊創設（歩兵第5旅団隷下）,第18聯隊を歩兵第17旅団（豊橋）隷下へ	
1897	明治	30				
1898	明治	31				
1899	明治	32				
1900	明治	33				
1901	明治	34				
1902	明治	35				
1903	明治	36				
1904	明治	37	日露戦争	2月出兵（～'06年1月）		陸軍食器のアルミ化進む
1905	明治	38	ポーツマス条約調印			
1906	明治	39				
1907	明治	40			第17旅団を第15師団（豊橋）移譲	
1908	明治	41				軍隊内務書改正
1909	明治	42				
1910	明治	43	日韓併合条約			

表７　関連年表 -2（明治から終戦まで）

西暦	和暦		歴史事件	軍関連		その他
				名古屋（第3師団関連）	愛知県下	
1911	明治	44				
1912	大正	元				
1913	大正	2				軍隊教育令制定
1914	大正	3	第一次世界大戦参戦			
1915	大正	4				
1916	大正	5				
1917	大正	6				
1918	大正	7	シベリア出兵宣言	8月出兵（～'19年10月）		
1919	大正	8	ヴェルサイユ条約			
1920	大正	9				
1921	大正	10	シベリア撤兵			
1922	大正	11	ワシントン海軍軍縮条約・九ヶ国条約調印			
1923	大正	12				
1924	大正	13				
1925	大正	14	宇垣軍縮	野砲兵第3聯隊野戦重砲兵第1旅団へ,野戦重砲兵第1旅団第3師団へ,工兵第3大隊浜松へ	歩兵第29旅団（豊橋）第3師団へ,騎兵第3聯隊守山へ移転し第4旅団へ,騎兵第4旅団第3師団へ	治安維持法成立
1926	昭和	元				
1927	昭和	2				兵役法公布
1928	昭和	3	張作霖爆殺事件	5月済南警備（～29年5月）		
1929	昭和	4	ニューヨーク株価大暴落,世界恐慌へ	防空演習始まる（第3師団,関連諸機関,市民参加）		
1930	昭和	5				
1931	昭和	6	満州事変			
1932	昭和	7	五・一五事件,上海事変			
1933	昭和	8	国際連盟脱退			
1934	昭和	9	ワシントン海軍軍縮条約破棄	4月満州警備（～36年5月）		
1935	昭和	10				
1936	昭和	11	二・二六事件			米穀自治管理法・重要産業統制法改正公布
1937	昭和	12	盧溝橋事件,南京事件	8月日中戦争出兵（～41年12月）		
1938	昭和	13				国家総動員法が施行される,第1回指定代用品に「軍用食器」が指定される
1939	昭和	14	ノモンハン事件,第二次世界大戦			国民徴用令・電力統制令・軍需品工場事業場検査令・総動員物資使用収用令など公布
1940	昭和	15				奢侈品等製造販売制限規則
1941	昭和	16	真珠湾攻撃	アジア太平洋戦争出兵,華中・華南で戦闘（～46年5月）		企業整備令・生活必需物資統制令・国民学校令・金属類回収令・重要産業国体令公布・治安維持法改正
1942	昭和	17		4月名古屋初空襲		碍子業を除き陶磁器業が企業整備の対象となる
1943	昭和	18	ガダルカナル島撤退			石油専売法・軍需会社法公布
1944	昭和	19	サイパン島守備隊玉砕	1月名古屋城お堀への網入れ/（11月公共待避所整備指示）/12月空襲	12月東南海地震M8.0	
1945	昭和	20	硫黄島守備隊玉砕,東京大空襲,広島・長崎に原爆,ポツダム宣言受諾,敗戦	1月空襲/2月空襲/3月名古屋大空襲（愛知県護国神社等焼失）/4月空襲/5月空襲名古屋城焼失/6月空襲/7月空襲	1月三河地震M7.1	
1946	昭和	21	日本国憲法公布	第3師団復員完了		

第２章　遺　構

1　遺構の概要と基本層序

＜主な遺構＞

確認された主な遺構には、中世・戦国期堀（２条）と溝（３条）、近世では武家屋敷に伴う溝、井戸（１基）、土坑・ピット多数があり、近代以降では溝（管埋設溝、建物基礎など）、防空壕（５基）ほか土坑・ピット多数がある。ピット状の小土坑の多くは、遺物も伴わず時期確定が困難である。ただし、埋土と検出状況の検討から中世以前に遡るものではなく、ほとんどが近世と近代に属するものと考えられる。

中世・戦国期の遺構群は、近世名古屋城築城以前に存在した「那古野城」の一端を構成していたものであり、区画施設（堀・溝）の規模、配置の軸線方向、成立の時期など、未だ不明な部分の多い当該時期の研究に新たな情報を提供することになった。

近世名古屋城三之丸において、今回の調査地点は「南御土居筋」に面する武家屋敷にあたる。これまでの調査成果と絵図等の資料からは、道・屋敷の境界が調査区を分断するように東西方向に通ることが想定された。調査範囲には、南辺土塁に沿う主要な道「南御土居筋」と、これに南面する武家屋敷の境界と正面、所謂「屋敷表」に相当する空間が含まれることになる。調査の結果、近世段階の道と武家屋敷境界については、境界の施設そのものは確定できないまでも、概ねの位置を示すことが可能となった。また、遺構および遺物の分布は比較的希薄であり、「屋敷表」と「屋敷裏」での差異が明瞭に示されることとなったが、詳細には「表」の空間にも建物、近世中期・後期の廃棄土坑が配置される場合があったことが明らかになった。

調査地点は近代以降に激しく改変を受けている。なかでも旧陸軍に関連すると思われる削平が目立ち、これまでの三の丸調査では特に著しい地点といえる。その理由の一つには、この地点が近世の「道」と「屋敷表」であり、近代初期の時点で広い空間が比較的容易に確保できたためと考えられる。

＜基本層序＞

図９に示すように、調査時点の地表面は標高 13m 前後であった。近代以降の客土は場所により様相が異なり、調査区南半部分では標高 11.8m のレベルで（幕末～）明治初期の整地層が比較的安定した状態で確認されている（図 10）。同地点では戦国期の区画溝を削平する近世初期と思われる整地が標高 11.5m のレベルで確認され、以後幕末まで数次の整地が行われている。

北半部分では幕末の整地面は確認で

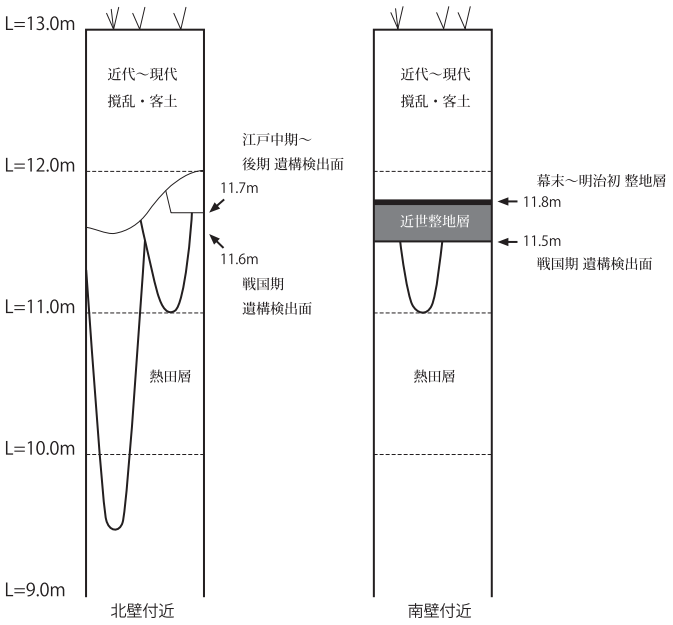


図９　基本層序概念図

きず、終戦前後の防空壕掘削と埋め戻しや建物建設等により撹拌されており、検出レベルは一定していない。北壁（図 13,14）において確認された近世中期段階の遺構（389SK）検出レベルは標高 11.7m、戦国期堀（605SD）の検出レベルは 11.6m であった。

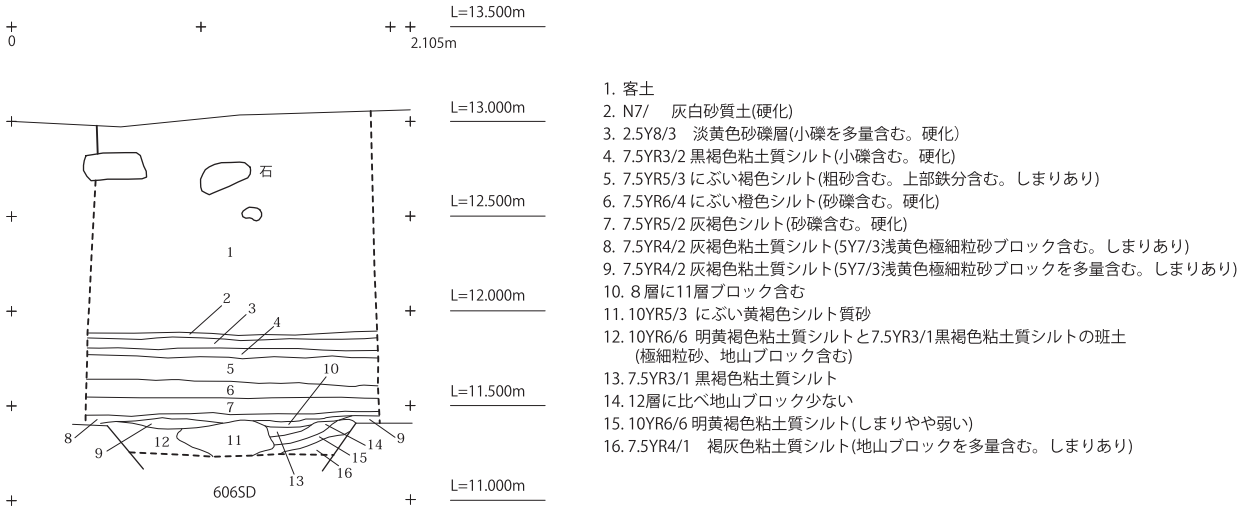


図 10　南壁　土層断面図 -1（S=1/40）

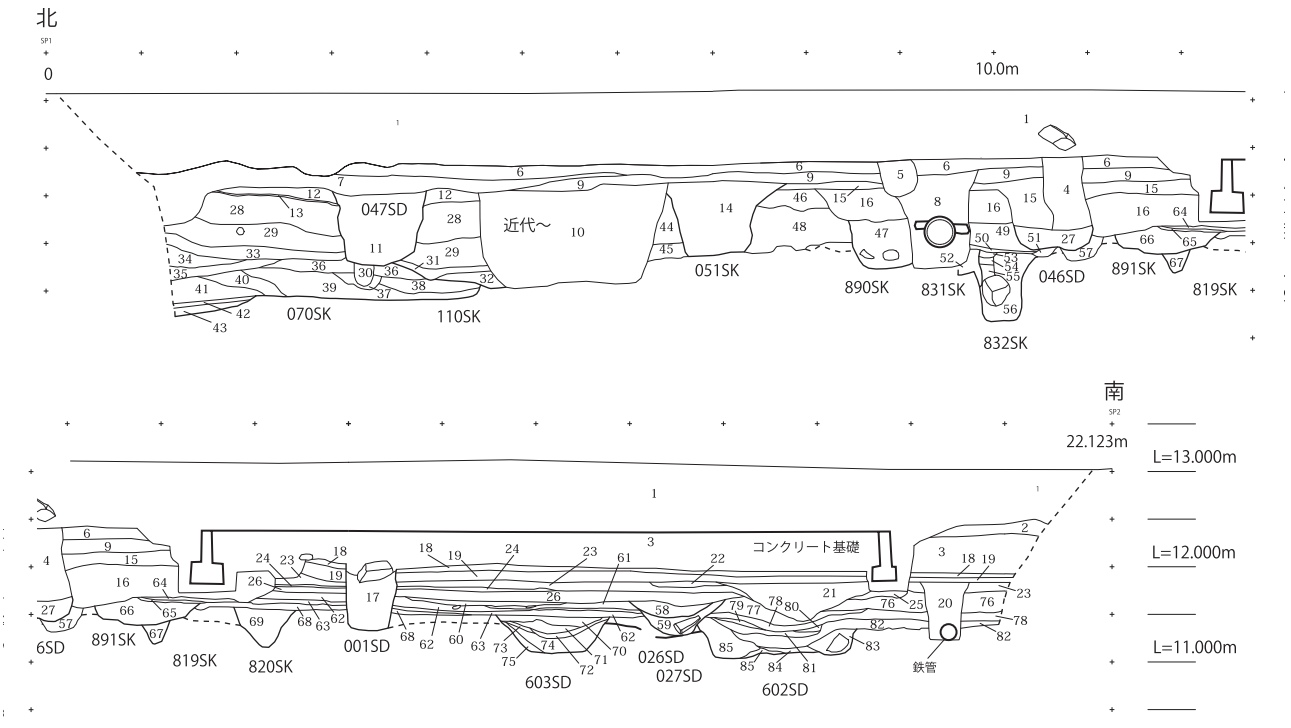


図 11　東壁　土層断面図 -1（S=1/80）

1. 客土
2. 整地土
3. 客土
4. 客土（コンクリート、レンガ、瓦、炭化物含む）
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土（地山ブロックを多量含む）
6. 7.5YR4/1 褐灰色砂質土（砂利を多量含む）
7. 10YR3/3 暗褐色砂質土（炭化物、小礫、地山ブロック含む）
8. 10YR3/3 暗褐色砂質土（炭化物を多量含む。下水管埋設土）
9. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土（炭化物、地山大ブロック含む）
10. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
（炭化物を多量含む。遺物、土管、レンガ含む。撹乱）
11. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
（下部で炭化物、小礫を多量含む。ビン含む）
12. 7.5YR4/3 褐色砂質土（炭化物、小礫、地山ブロック含む）
13. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（炭化層含む。一部被熱を受け赤褐色化）
14. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
（下部で小礫を多量含む。しまりあり）
15. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
（炭化層含む。地山ブロックを多量含む）
16. 7.5YR4/3 褐色砂質シルト（炭化物、小礫を多量含む）
17. 2.5Y6/1 黄灰色粗砂（35cm大の礫含む。しまり弱い）
18. N7/ 灰白砂質土（硬化）
19. 2.5Y8/3 淡黄色砂礫土（小礫を多量含む。硬化）
20. 7.5YR5/2 灰褐色シルトと5Y7/3浅黄色極細粒砂の混合
（小礫含む。水道管埋設土）
21. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（小礫、炭化物充填。撹乱）
22. 10Y5/1 褐灰色砂質土（小礫充填。硬化）
23. 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト（硬化）
24. 7.5YR4/3 褐色シルト（7.5YR4/1褐灰色シルトブロック含む。硬化）
25. 10YR6/1 褐灰色シルト質粘土
26. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
（小礫、地山ブロックを少量含む。しまりあり）
27. 10YR4/2 灰黄褐色砂礫土（小礫充填。地山ブロック含む）
28. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
（炭化物、地山ブロックを少量含む。粘性ややあり。しまりあり。包含層）
29. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
（炭化物、地山ブロックを微量含む。しまりあり。包含層）
30. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（瓦含む）
31. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト（遺物、炭化物、小礫含む。しまりあり）
32. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロック含む。しまりあり）
33. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト
（炭化物を多量含む。遺物、小礫含む。しまりあり）
34. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（炭化物、地山ブロックを微量含む。しまりあり）
35. 33層と同じ
36. 34層と同じ
37. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（粗砂含む）
38. 33層に5Y6/6橙色粘質土ブロック含む
39. 7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト（地山ブロックを少量含む。しまりあり）
40. 10YR6/2 灰黄褐色極細粒砂（しまりあり）
41. 39層と同じ
42. 7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト（炭化物を微量含む。しまりあり）
43. 7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト（地山ブロック含む。しまりあり）
44. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト（小礫を少量含む。しまりあり）
45. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
（炭化物、地山ブロックを少量含む。しまりあり）
46. 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト（小礫、地山ブロックを少量含む。しまりあり）
47. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
（地山ブロックを多量含む。拳大の礫含む。しまりあり）
48. 7.5YR4/3 褐色シルト（地山ブロックを少量含む。粘性ややあり）
49. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（地山ブロック充填。しまりあり）
50. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロックを少量含む。しまりあり）
51. 10YR4/4 褐色砂質シルト（地山ブロックを多量含む。しまりあり）
52. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（地山ブロックを少量含む。しまりあり）
53. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルトと5Y8/3淡黄色極細粒砂の班土
54. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
55. 2.5Y6/2 53層と同じ
56. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
（地山ブロック、下部で5Y8/3淡黄色砂質シルトを多量含む）
57. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む。しまりあり）
58. 7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト（しまりあり）
59. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト（礫含む。しまりあり）
60. 10YR7/4 にぶい黄橙色砂質シルト（硬化）
61. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（硬化）
62. 10YR7/4 にぶい黄橙色砂質土（硬化）
63. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土（小礫含む。硬化）
64. 10YR6/4 にぶい黄橙色細粒砂（硬化）
65. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（小礫含む。硬化）
66. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト（地山ブロックを多量含む）
67. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロック含む）
68. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（小礫含む。粘性ややあり。硬化）
69. 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトと
5Y7/3浅黄色極細粒砂の班土（しまりあり）
70. 7.5YR3/1 黒褐色シルトと10YR7/4にぶい黄橙色粘質土の班土
（粘性ややあり。しまりあり）
71. 7.5YR4/1 褐灰色シルトと10YR7/4にぶい黄橙色粘質土の班土
（粘性ややあり。しまりあり）
72. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
（7.5YR4/1褐灰色シルトブロックを少量含む。粘性ややあり）
73. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト（しまりあり）
74. 10YR6/6 明黄褐細シルト
（7.5YR4/1褐灰色シルトブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い）
75. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト（粘性ややあり。しまりやや弱い）
76. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト（小礫を少量含む）
77. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土シルト（小礫を少量含む。しまりあり）
78. 10YR5/1 褐灰色シルト（細粒砂、小礫含む。粘性ややあり。しまりあり）
79. 2.5Y7/3 浅黄細粒砂（しまりあり）
80. 7.5Y6/2 灰褐色シルト
（砂、10YR7/1灰白色粘土ブロックを少量含む。しまりあり）
81. 10YR5/2 灰黄褐色シルト（地山ブロックを多量含む。
7.5YR3/1黒褐色シルトブロック含む。一部粘性あり。しまりあり）
82. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト
（地山ブロックを少量含む。下部粘性強い。しまりあり）
83. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト
（10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック、地山ブロック含む。しまりあり）
84. 7.5YR5/2 灰褐色粘土
85. 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト
（地山大ブロックを多量含む。しまりあり）
86. 7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト（しまりあり）

図 12　東壁　土層断面図 -2（注記）

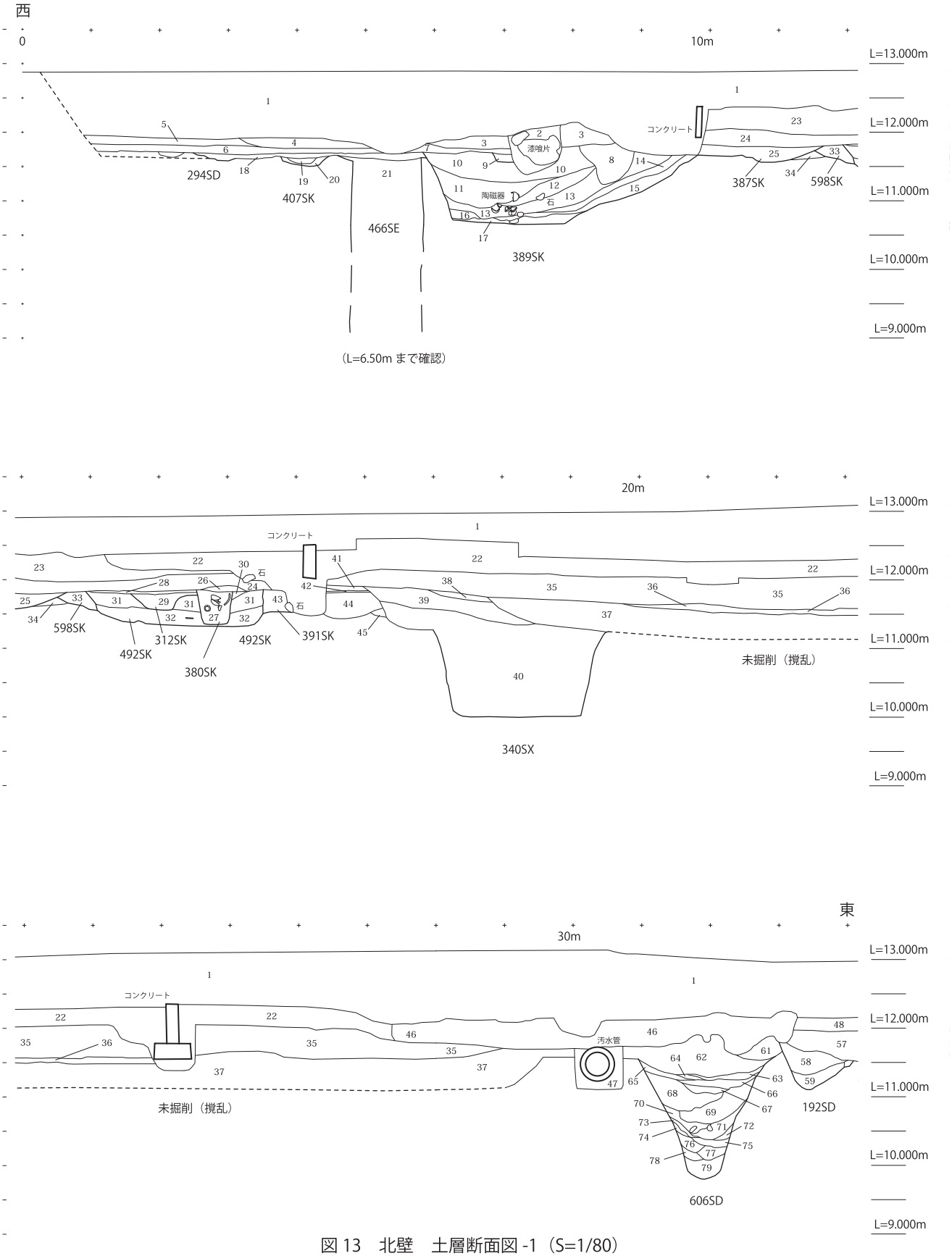
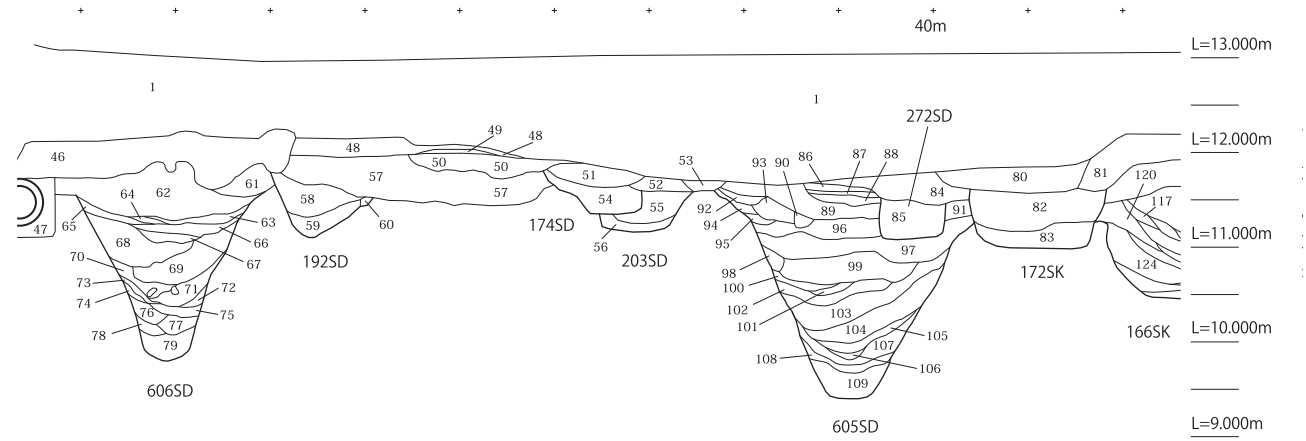
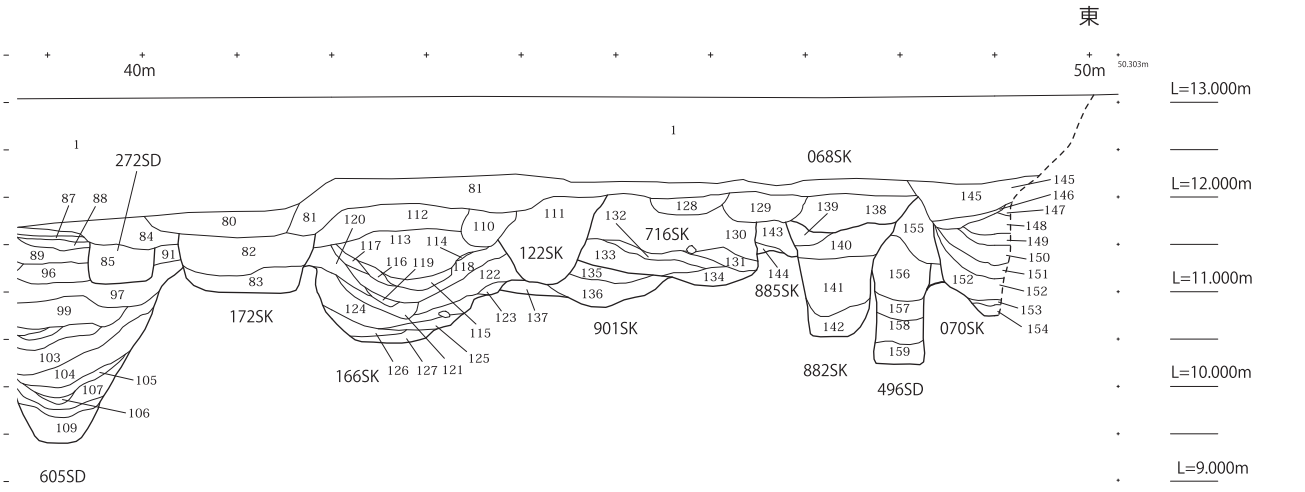


図 13　北壁　土層断面図 -1（S=1/80）





1. 客土
2. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト（コンクリート、小礫含む）
3. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト（小礫含む）
4. 7.5YR5/1 褐灰色砂質土
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂とシルトの混合（レンガ含む）
6. 7.5YR4/2 灰褐色、砂質シルト（小礫、炭化物を多量含む）
7. 6層に比べ褐色弱い
8. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（瓦、小礫含む。しまりあり）
9. 10YR4/2　灰黄褐色砂質土（小礫含む）
10. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（遺物、小礫、炭化物含む。しまりあり）
11. 10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト（遺物、小礫、炭化物含む。しまりあり）
12. 10YR4/3　にぶい黄褐色細粒砂（遺物、小礫、炭化物含む。しまりあり）
13. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（遺物、炭化物を多量含む。しまりあり）
14. 7.5YR4/2 灰褐色細粒砂（炭化物含む。しまりあり）
15. 7.5YR4/3 褐色砂質シルト（瓦を多量含む。5YR6/4にぶい橙色シルト、炭化物含む。しまりあり）
16. 7.5YR5/1 褐灰色シルト（地山ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりあり）
17. 2.5Y8/3　淡黄色細粒砂と7.5YR5/1褐灰色シルトの斑土（しまりあり）
18. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
19. 7.5YR4/2 灰褐色シルト
20. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを多量含む）
21. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト（炭化物、小礫、地山ブロックを少量含む。しまりあり）
22. 客土（コンクリート含む）
23. 客土
24. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土（レンガ、礫含む。しまりあり）
25. 7.5YR4/1 褐灰色シルト（遺物を多量含む。0.5cm大の砂礫、炭化物含む。しまりあり）
26. 10YR5/2　灰黄色シルト（0.1～0.3cmの砂礫含む。しまりあり）
27. 10YR4/2　灰黄色砂質シルト（遺物を多量、炭化物を少量含む。しまりあり）
28. 10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルト（細粒砂含む。しまりあり）
29. 10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（炭化物を少量含む。しまりあり）
30. 10YR6/3　にぶい黄橙色砂質シルト（極細粒砂含む。しまりあり）
31. 7.5YR4/1 褐灰色シルト（炭化物、小礫含む。しまりあり）
32. 31層に比べ炭化物を多量に含む
33. 10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（炭化物、地山ブロックを少量含む。小礫含む。しまりあり）
34. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む）
35. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土（砂利、礫、炭化物を多量含む）
36. 10YR5/3　にぶい黄褐色シルトと5Y7/3浅黄色極細粒砂の斑土
37. 10YR5/3　にぶい黄褐色細粒砂（炭化物、小礫、地山ブロックを多量含む。しまりあり）
38. 36層と同じ
39. 10YR5/2　灰黄褐色シルト（地山ブロックを多量含む）
40. 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトと5Y7/3浅黄色極細粒砂の斑土
41. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト（小礫含む）
42. 7.5YR5/1 褐灰色シルト
43. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む。炭化物含む。しまりあり）
44. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト（地山ブロックを多量含む。小礫含む）
45. 10YR6/3 にぶい黄橙色シルトと7.5YR4/2灰褐色シルトの斑土
46. 客土
47. 下水管埋設土
48. 7.5YR4/1 褐灰色シルト
49. 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト
50. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土

図 14　北壁　土層断面図 -2（S=1/80）

51. 49層に瓦を多量含む
52. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量、炭化物を微量含む。遺物含む。しまりあり）
53. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む）
54. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（地山ブロック、遺物含む。炭化物を微量含む。しまりあり）
55. 7.5YR4/2 灰褐色シルトと10YR7/4にぶい黄橙色粘質土の斑土（炭化物を微量含む。しまりあり）
56. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む。しまりあり）
57. 7.5YR4/1 褐灰色粘土質シルト（地山ブロックを多量、炭化物を微量含む。しまりあり）
58. 10YR7/4　にぶい黄橙色粘質土と7.5YR4/1褐灰色シルトと5Y7/3浅黄色極細粒砂の斑土
59. 10YR7/4　にぶい黄橙色シルト（7.5YR4/1褐灰色シルト、5Y7/3浅黄色極細粒砂を多量含む。しまりあり）
60. 10YR7/4　にぶい黄橙色粘質土と7.5YR4/1褐灰色シルトの斑土
61. 10YR7/4　にぶい黄橙色粘質土と7.5YR4/1褐灰色シルトの斑土
62. 7.5YR3/2 黒褐色シルト（極細粒砂含む。地山ブロックを微量含む。しまりあり）
63. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（細粒砂含む。地山ブロック小を多量含む。しまりあり）
64. 29層に比べ地山ブロック少ない
65. 7.5YR3/2 黒褐色シルト（地山ブロックを少量含む。しまりあり）
66. 7.5YR3/2 黒褐色シルト（地山ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりあり）
67. 10YR7/4　にぶい黄橙色シルト（7.5YR3/2ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりあり）
68. 7.5YR3/2 黒褐色シルトと10YR7/4にぶい黄橙色粘質土の斑土（炭化物を微量含む。しまりあり）
69. 2.5Y7/4　浅黄色細粒砂（5Y7/2灰白色極細粒砂ブロック充填。しまりあり）
70. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト（10YR6/6明黄褐色極細粒砂を多量含む。拳大の礫含む。しまりやや弱い）
71. 10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト（細粒砂、拳大の礫含む。7.5YR3/1黒褐色シルトブロックを少量含む）
72. 10YR7/6　明黄褐色細粒砂（しまりやや弱い）
73. 7.5Y2/1　黒色粘土質シルト（10YR6/6明黄褐色粘土質シルト多量含む。5Y7/2灰白色極細粒砂ブロックを含む。しまりやや弱い）
74. 7.5Y2/1　黒色粘土質シルト（5Y7/2灰白色シルト細粒砂含む）
75. 7.5Y2/1　黒色粘土質シルトと10YR6/6明黄褐色粘質土の斑土（砂、5Y7/2灰白色極細粒砂ブロックを多量含む）
76. 7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト（41層ブロックを多量含む）
77. 10YR6/6　明黄褐色砂質シルト（7.5Y3/1黒褐色シルトブロックを少量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い）
78. 76層に比べ7.5Y3/1黒褐色シルトブロックを多量含む
79. 2.5Y8/3　淡黄色粘質土（地山ブロック崩壊土。しまりあり）
80. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（小礫を多量含む。瓦含む）
81. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（炭化物、地山ブロック含む）
82. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（瓦、小礫、地山ブロック含む。しまりあり）
83. 7.5YR4/1 褐灰色シルト（小礫、地山ブロックを少量含む。しまりあり）
84. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（炭化物、小礫、地山ブロックを少量含む。しまりあり）
85. 7.5YR4/3 褐色シルト（地山小ブロックを多量、炭化物を少量含む。しまりあり）
86. 10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト（7.5YR5/2灰褐色シルトブロック含む。しまりあり）
87. 7.5YR5/2 灰褐色シルトと7.5Y3/2黒褐色シルトの斑土（細粒砂含む。しまりあり）
88. 2.5Y7/2　灰黄色細粒砂と7.5YR5/2灰褐色シルトの斑土（しまりあり）
89. 10YR3/3　暗褐色粘土質シルト（10YR2/1黒色シルトブロック、地山ブロックを多量含む。しまりあり）
90. 7.5YR5/1 褐灰色シルトと2.5Y8/2灰白色粘質土の斑土（しまりあり）
91. 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト（地山ブロックを少量含む）
92. 7.5YR3/1 黒褐色シルト（10YR7/4にぶい黄橙色シルトブロックを多量含む。粘性ややあり）
93. 92層に比べ10YR7/4にぶい黄橙色シルトブロックが少ない
94. 92層に比べ褐色強い
95. 10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト
96. 10YR4/2　灰黄褐色シルト（地山ブロックを多量含む。極細粒砂含む）
97. 10YR5/4　にぶい黄褐砂質シルト（7.5YR3/1黒褐色シルトブロック、地山ブロックを多量含む）
98. 10YR4/3　にぶい黄褐砂質シルト（7.5YR3/1黒褐色シルト、地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い）
99. 10YR5/3　にぶい黄褐砂質シルト（地山ブロックを多量含む。しまりやや弱い）
100. 10YR6/6　明黄褐色砂質シルト（地山ブロックを少量含む。しまり弱い）
101. 10YR5/3　にぶい黄褐極細砂（地山大ブロックを多量含む。しまりやや弱い）
102. 10YR5/4　にぶい黄褐砂質シルト（7.5YR3/1黒褐色粘土質シルト含む。地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い）
103. 99層に7.5YR3/1黒褐色シルトブロックを多量含む
104. 7.5YR5/4 にぶい褐色粘土質シルト（7.5Y3/1黒褐色シルトブロック、地山ブロックを多量含む。しまりやや弱い）
105. 103層に比べ粘性ややあり
106. 2.5Y5/2　暗灰黄色極細粒砂（しまり弱い）
107. 2.5Y7/3　浅黄色極細粒砂（しまりやや弱い）
108. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト（しまり弱い）
109. 2.5Y6/3　にぶい黄色極細粒砂（7.5Y3/1黒褐色ブロック含む。しまりやや弱い）
110. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロックを少量、炭化物を微量含む。しまりあり）
111. 10YR4/2　灰黄褐色シルト（地山ブロック含む。小礫を少量、炭化物を微量含む。しまりあり）
112. 10YR6/3　にぶい黄橙色シルト（地山ブロックを多量、炭化物、小礫を少量含む。しまりあり）
113. 7.5YR5/1 褐灰色シルト（小礫、炭化物を少量含む。しまりあり）
114. 7.5YR5/2 灰褐色シルト
115. 10YR7/1　灰白色粘質土（しまりあり）
116. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（細粒砂含む。炭化物を微量含む。しまりあり）
117. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（しまりあり）
118. 7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト（炭化物を多量、地山ブロックを少量含む。しまりあり）
119. 7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト（貝を多量含む）
120. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロック含む。しまりあり）
121. 7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト（炭化物を多量含む）
122. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量、炭化物を少量含む。しまりあり）
123. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む）
124. 7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト（炭化物を多量、貝、遺物含む）

図 15　北壁　土層断面図 -3（S=1/80）

125. 121層と同じ（遺物含む）
126. 7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト（地山ブロック含む）
127. 2.5Y5/3　黄褐色極細粒砂（70層ブロック含む。しまりあり）
128. 炭化物充填
129. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（炭化物を少量含む。しまりあり）
130. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（7.5YR4/1褐灰色シルトブロックを多量、炭化物、地山ブロックを少量含む。しまりあり）
131. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト（7.5YR3/1黒褐色シルトブロック、地山ブロックを多量含む。しまりあり）
132. 131層に比べ褐色強い
133. 10YR7/4　にぶい黄橙色シルト（7.5YR5/2灰褐色シルト、7.5YR3/1黒褐色シルトブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりあり）
134. 7.5YR5/2 灰褐色シルトと5Y7/2灰白色極細粒砂の班土（しまりあり）
135. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト（地山ブロックを多量含む）
136. 135層に比べ褐色強い
137. 7.5YR5/2 灰褐色シルトと5Y7/2灰白色極細粒砂の班土（粘性ややあり）
138. 10YR4/3　にぶい黄褐シルト（炭化物、地山ブロックを少量含む）
139. 10YR4/3　にぶい黄褐シルト（地山ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりあり）
140. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト（5Y8/3淡黄色極細粒砂を多量含む。しまりやや弱い）
141. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（地山ブロックを少量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い）
142. 7.5YR4/3 褐色粘土質シルト（地山ブロックを微量含む。しまりあり）
143. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土（しまりあり）
144. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む。しまりあり）
145. 10YR3/3 暗褐色砂質土（炭化物、小礫、地山ブロック含む）
146. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土
147. 10YR4/2 灰黄褐色シルト（炭化物、地山ブロックを少量含む。粘性ややあり。しまりあり）
148. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト（炭化物、地山ブロックを微量含む。しまりあり）
149. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト（炭化物を多量含む。遺物、小礫含む。しまりあり）
150. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト（炭化物、地山ブロックを微量含む。しまりあり）
151. 149層と同じ
152. 7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト（地山ブロックを少量含む。しまりあり）
153. 7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト（炭化物を微量含む。しまりあり）
154. 7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト（地山ブロック含む。しまりあり）
155. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（地山ブロック含む。粘性ややあり。しまりやや弱い）
156. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト（地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い）
157. 7.5YR4/1 褐灰色シルトと10YR7/4にぶい黄橙色粘質土の班土
158. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト（地山ブロックを多量含む）
159. 10YR6/6　明黄褐色粘土質シルト（7.5YR5/2灰褐色シルトブロックを多量含む。しまりあり）

図 16　北壁　土層断面図 -4（S=1/80）

2　中世・戦国時代

後世の削平が激しく、この時期と判断できる遺構は規模の大きな溝に限られている。重複関係により、少なくとも 2 時期に分けられる。ただし遺物は土器・陶器小片が少量含まれるのみであり、遺物の年代観による時期差は明瞭ではない。

605SD

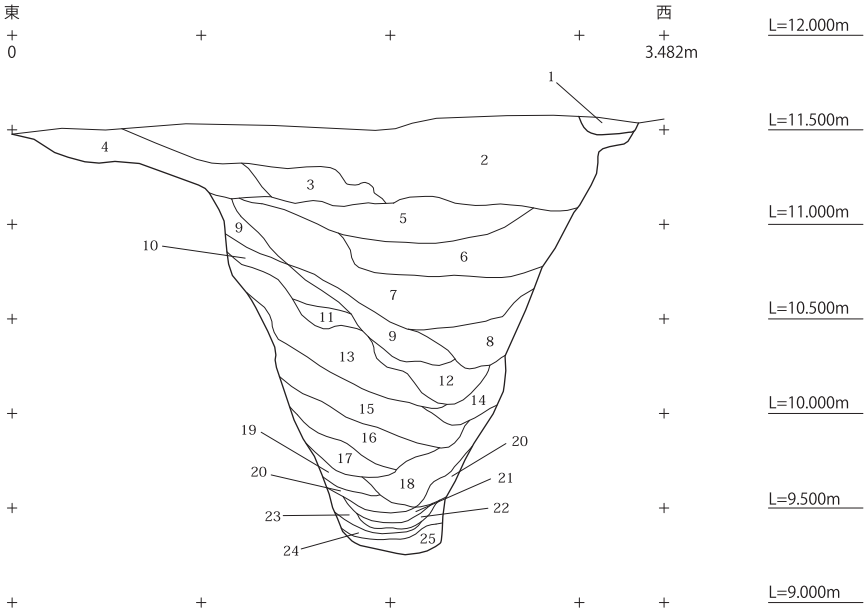
調査区を南北に通り、断面が V 字状を呈するいわゆる「薬研掘」となる溝である。長さ 17.5m の範囲で確認した。検出面で上端幅最大 2.4m、深さ 2.3m を測る。上部では溝東側に幅 60cm 程度の犬走り状の平坦部がみられる。溝の底部は比較的平坦で 50cm 程度の幅がある。ベルト（図 17）で確認した埋土の堆積状況では、上部 1/5 程度に黒色シルト、その下は細かいブロック状斑土の灰色砂質シルト、最下層の 30cm 弱は砂層を挟む暗灰色の粘土質土の自然堆積が認められる。以上により、溝の存続期間にはほぼ空堀の状態であり、廃絶時は東側より短期間に埋めらた状況が窺われる。なお、出土遺物のうち最下層で検出された土師質鍋は付着物の放射性年代測定、上層黒色土層と中層で検出された骨片などは種同定の分析を行っている（第 4 章）。

606SD（図 18）

先述の 605SD 西側をほぼ並行するように南北に通る溝である。後世の撹乱により検出部分は断続的であり、全体像が不明瞭となっている。島状に残る残存部分について、調査区南側から 606SD-a ～ f として検討した結果、北側の 606SD-e,f とやや規模が小さく一定しない南側 606SD-a,b,c の 2 タ

イプがあり、これらの境界付近 d 地点は溝 607SD と重複し、かつ b 地点で東西方向の溝 603SD に接続するという位置関係にあることから、軸線方向はほぼ一致するものの 606SD-a,b,c と 606SD-e,f は不連続である可能性が高いと判断した。

606SD-a,b,c では、a 地点は断面がやや開いた U 字状を呈し、幅 1.2m、深さ 59cm。c 地点は上端幅 0.8



1．7.5YR3/1 黒褐色シルトと 10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトの斑土
（粘性ややあり。889SK埋土）

2. 7.5YR3/1黒褐色シルト
（10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトブロックを少量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い）

3. 7.5YR4/2灰褐色シルト（地山ブロックを微量含む。しまりあり。）

4. 7.5YR5/2灰褐色シルト（地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い。）

5. 2.5Y7/3浅黄色極細粒砂
（2.5Y8/2灰白色粘土ブロック、地山ブロックを全体的に含む。しまりやや弱い。）

6. 2.5Y7/3浅黄色極細粒砂
（7.5YR3/1黒褐色シルト大ブロック、2.5Y8/2灰白色粘土ブロックを少量含む。しまりあり。）

7. 5層に比べ地山ブロック少ない。

8. 7.5YR2/2黒色シルト（9層ブロック含む。しまり弱い。）

9. 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂（地山ブロック少量含む。）

10. 2.5Y7/3浅黄色極細粒砂
（地山ブロックを多量、7.5YR3/1黒褐色シルトブロックを少量含む。しまりやや弱い。）

11. 2.5Y7/3浅黄色極細粒砂（地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い。）

12. 2.5Y7/3浅黄色極細粒砂（地山ブロック含む。しまりやや弱い。）

13. 2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂
（地山ブロックを多量に含む。7.5YR3/1黒褐色シルトブロック含む。粘性ややあり。しまりやや弱い。）

14. 2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂（13層に比べ、しまりあり。）

15. 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂（地山ブロックを多量に含む。しまり弱い。）

16. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト
（7.5YR3/1黒褐色シルトブロック含む。粘性ややあり。しまりやや弱い。）

17. 2.5Y6/3にぶい黄色シルト質砂（しまり弱い。）

18. 7.5YR2/1黒色シルト（粘性ややあり。しまり弱い。）

19. 10YR3/2黒褐色シルト（粘性ややあり。しまり弱い。）

20. 7.5YR3/1黒褐色シルト（地山ブロックを多量に含む。粘性ややあり。しまり弱い。）

21. 10YR3/2黒褐色シルト（2.5Y7/3浅黄色極細粒砂ブロックを含む。粘性ややあり。）

22. 5YR1.7/1黒色粘土質シルト（しまりやや弱い。）

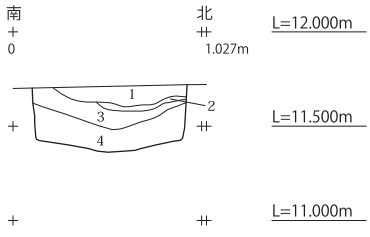
23. 2.5YR6/3にぶい黄色シルト質砂（しまりやや弱い。）

24. 22層と同じ。

25. 10YR6/1褐灰色シルト（2.5Y7/4浅黄色粘土ブロック含む。しまりあり。）

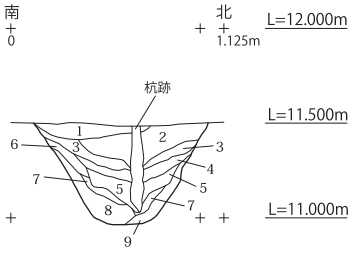
図 17　堀 605SD 断面図（S=1/40）

607SD



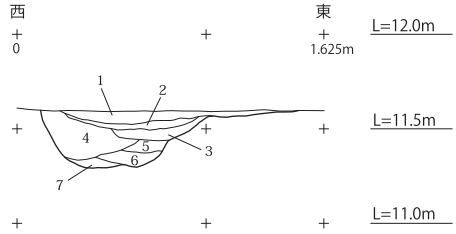
1. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR6/4にぶい黄橙色シルト小ブロックを少量含む。しまりあり)
2. 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト(しまりあり)
3. 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト
(10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト小ブロックを多量含む。しまりあり)
4. 7.5YR3/1　黒褐色粘土質シルトと10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルトの斑土
(粘性ややあり。しまりやや弱い)

603SD



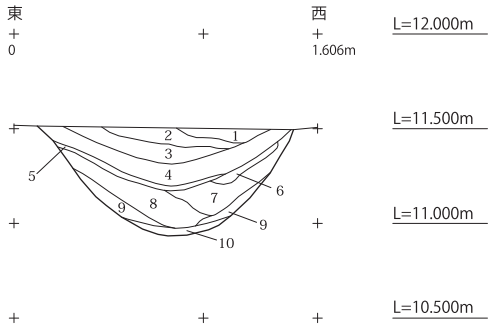
1. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR6/6明黄褐色シルトブロックを多量含む。しまりあり)
3. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト (粘性ややあり。しまりやや弱い)
2. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトブロックを少量含む。しまりあり)
4. 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト (粘性ややあり。しまりやや弱い)
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト (粘性ややあり。しまりやや弱い)
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
(10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトブロックを多量含む)
7. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト (粘性ややあり。しまりやや弱い)
8. 10YR7/4 にぶい黄橙色砂質シルト
(7.5YR3/1黒褐色シルトブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い)
9. 2.5Y7/3 浅黄色砂質シルト (しまりあり)

606SD-b



1. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR7/4にぶい黄橙色シルトブロックを少量含む)
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂 (しまりあり)
3. 7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト
(10YR7/4にぶい黄橙色シルト小ブロックを多量含む)
4. 7.5YR3/1　黒褐色粘土質シルトと10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトの斑土
(しまりあり)
5. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR7/4にぶい黄橙色シルトブロックを多量含む。しまりあり)
6. 7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト
(10YR7/4にぶい黄橙色シルト大ブロックを多量含む。細粒砂含む。しまりあり)
7. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR7/4にぶい黄橙色シルトブロックを少量含む。しまりやや弱い)

606SD-a



1. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトブロックを多量含む。
粘性ややあり。しまりあり)
2. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト (しまりあり)
3. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトの斑土
(粘性ややあり。しまりやや弱い)
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
(10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルト充填。しまりやや弱い)
5. 7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト (しまりやや弱い)
6. 7.5YR5/1 褐灰色粘土質シルト
(2.5Y8/3淡黄色シルトブロック含む。しまりやや弱い)
7. 7.5YR4/3 褐色粘土質シルト
(7.5YR6/6橙色シルト小ブロック充填。しまりやや弱い)
8. 7.5YR6/6 橙色粘土質シルトと7.5YR3/1黒褐色シルトの斑土
(しまりやや弱い)
9. 7.5YR5/4 にぶい褐色粘土質シルト
(7.5YR6/6橙色シルト小ブロックを多量含む。しまりやや弱い)
10. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(2.5Y8/3淡黄色シルトブロック含む。しまりやや弱い)

図 18　区画溝 607SD・603SD・606SD-a 断面図（S=1/40）

～ 1m、深さは 28cm、断面は浅い逆台形状を呈する。埋土は黒色シルトと明褐色粘土質土の細粒の斑土が徐々に堆積した状況が窺われる。

606SD-e,f は溝底のレベルが 11.23m ～ 10.96m と北側へ向かうほど急激に深さを増し、北壁では断面 V 字状の「薬研掘」の形状となり、幅は 1.9m と 605SD とほぼ同様の規模となる。d 地点すぐ北側から e 地点付近の溝底斜面には階段あるいは掘削痕のような凹凸が認められる。埋土は e 地点では黒色シルトと灰色砂質シルトのブロック状斑土であり、f 地点では 605SD の場合と同様に上層に黒色土が堆積し、その下は礫混じりの暗灰色シルト、砂質土斑土が短期間に埋積した状況が窺われる。

606-d 地点は僅かに残った溝底の痕跡である。南北どちらの溝に帰属するのか判断は難しい。また、606SDe,f 廃絶後の同地点真上に 606SD-a,b,c から連続する溝の存在を仮定してみたが、その痕跡は全くみられなかった。

607SD（図 18）

真北に対してほぼ直交する東西方向に直線的のびる。溝の断面形状は箱形を呈し、幅 82cm、深さ 35cm を測る。約 29m の部分を確認した。東端は 606SD-d 地点で重複関係にあり、これより東側に連続する部分は確認されていない。埋土は黒色シルトと明褐色粘土質土がブロック状に混じる斑土である。

603SD（図 18）

東西方向に直線的にのびる。605SD と重複し、西端は 606SD-b に T 字状に接続する。断面形状は地山（熱田層）を掘込む部分では明瞭な逆台形、605SD 重複部分では丸みを帯びた U 字状を呈する。上端幅 1.3 ～ 1.6m、深さ 40 ～ 50cm を測る。溝底レベルは概ね西方向に傾斜しており、606SD 溝底とは段差をもって接続している。埋土は黒色シルトに明褐色粘土質土の細粒が混じる斑土であり、堆積状況は 606SD-a 地点に類似する。溝の両側の肩に近い内側部分に径 10cm 前後の小ピットが連続する部分があり、これらは杭列の痕跡かと思われる。

以上により遺構の変遷では、605SD と 606SD-e,f の規模が大きく断面 V 字状を呈する堀が並行する時期があり、遺構の重複関係からこれらの廃絶後、小規模な溝 603SD と 606SD-a,b,c による区画が再構築されたと考えることができる。少量の出土があった遺物のうち、古瀬戸後期の資料は両者でみられるが、大窯 1（2）段階の資料は 603SD に含まれる割合が高い。

遺構の軸線では、「堀」と 603SD「溝」はともに真北から 4 度西にふれる、またはこれに直交する方向で一致している。これらと軸線方向が一致しない 607SD は、重複関係では「堀」の時期、あるいは「溝」の時期のどちらかに先行すると考えられ、以下の 2 通りが想定される。

（1）607SD → 605SD・606SD-e,f → 603SD・606SD-a,b,c

（2）605SD・606SD-e,f → 607SD → 603SD・606SD-a,b,c

北側に隣接する過去の調査地点では、今回の 606SD-e,f に繋がると思われる同規模の遺構が確認されている（SD514,『名古屋城三の丸遺跡 VI』）。一方、605SD から連続する遺構は確認されていない。設定された調査区の間には幅 10m の未調査部分があり、この間に 605SD は途切れるか、あるいは東側に屈曲する可能性が考えられる。605SD 東側には土塁も想定され、いずれにせよ 605SD と 606SD-e,f は東側を内部とする区画の開口部を形成していると考えられる。

3　江戸時代

近世名古屋城の三之丸武家屋敷では屋敷表に相当する部分であり、屋敷地境を構成する遺構（溝、柱穴、その他）、建物跡を含む柱穴、井戸、廃棄土坑などがある。廃棄土坑は調査区北西部と、隣接する屋敷地境周辺の調査区北東部に集中する。その他、南御土居筋がかかる道路整地部分も範囲として捉えることができた。

＜北西部＞

466SE

調査区西部の北壁付近に位置する径 1.1m の円形の井戸である。内部に構造物は確認されず、標高 6.5m の深さまで確認した。上層から下層まで陶磁器類を含む暗褐色粘土質土を基調とした埋土である。17 世紀中葉～後葉の時期を中心とした遺物を含む。

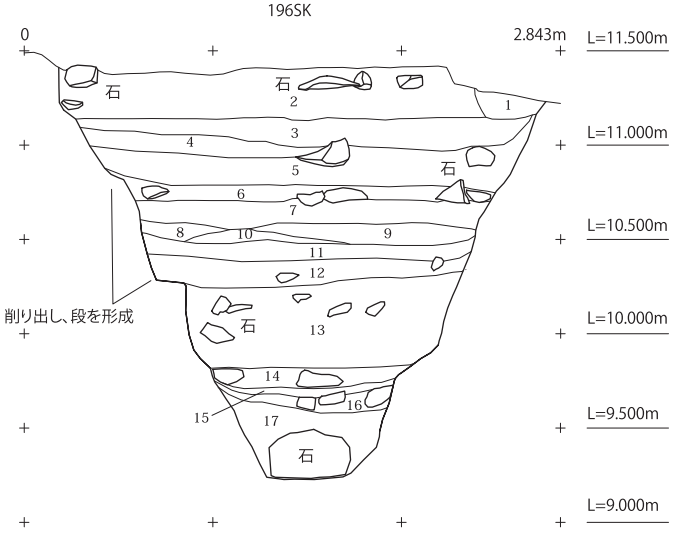
153SK

西辺が壊されているが 50 × 60cm 前後、深さ 10cm の隅丸方形の土坑である。土坑内にはロクロ土師器皿２枚（485,486, 写真図版遺構７）が合せ口の形で置かれていた。うち一点は外面底部に墨書が施されている。出土の状況などから胞衣埋納の痕跡かと推定される。

389SK

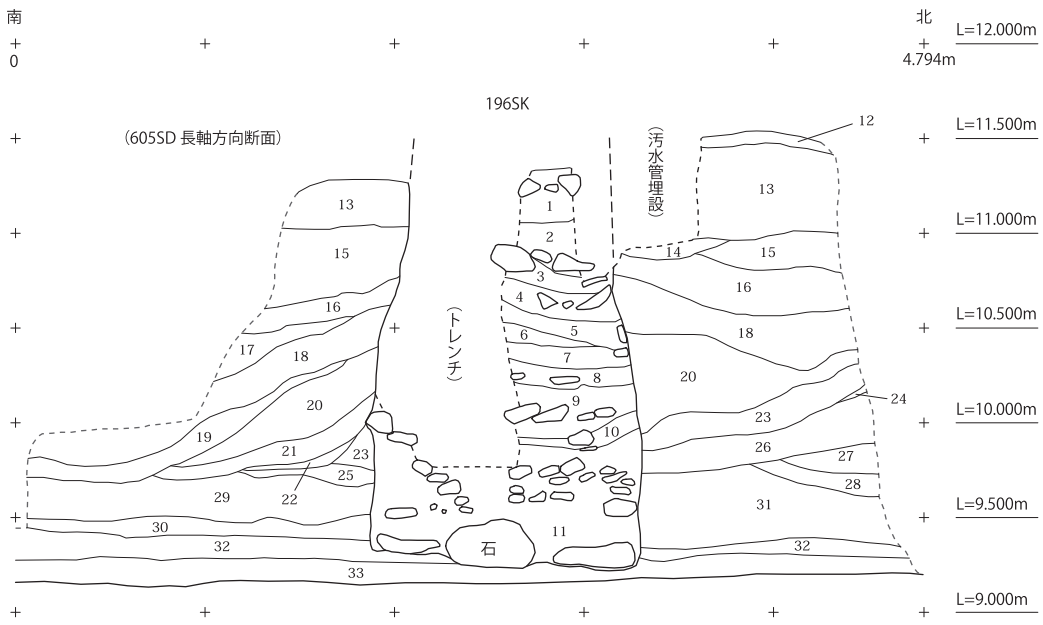
466SE に一部重複する廃棄土坑であり、北側は調査区外に広がる。検出された部分で幅 3.7m、奥行 1.8m、深さ 1.1m を測る。灰褐色シルトを基調とした埋土で、部分的に炭化物を含む。

土坑の形状が判明している南側は、一部直線的であり、断面形状は壁面がほぼ垂直に立ち上がる方形を呈する。土坑廃絶以後と思われるが、この南辺ラインに並行する方向のピット列が存在する。建物跡の復元には至らず、塀のようなものかもしれない。遺物の量は密度としては低い方であり、陶磁器類、瓦（本瓦葺）のほか土師器皿が比較的多く含まれる。466SE の廃絶とほぼ同時期、17 世紀後



0. 上部は193SKとして掘削
1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む。しまりあり）
2. 7.5YR5/2 灰褐色シルト
（地山ブロックを多量含む。1～30cm大の礫含む。しまりあり）
3. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む）
4. 7.5YR5/2 灰褐色砂質土（砂礫充填。地山ブロックを多量含む）
5. 7.5YR4/3 褐色シルト
（1～25cm大の礫を多量含む。細粒砂含む。しまりあり）
6. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
（地山ブロック充填。20cm大の礫含む。しまりあり）
7. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（細粒砂、地山ブロック含む）
8. 7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト
（砂礫層含む。地山ブロックを多量含む。しまりあり）
9. 7.5YR4/2 灰褐色礫層（1～10cm大の角礫充填）
10. 7.5YR7/4 にぶい橙色漆喰層（角礫含む）
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
（細粒砂含む。地山ブロックを多量含む。しまりあり）
12. 10YR3/2 黒褐色シルト
（5～15cm大の角礫含む。地山ブロックを多量含む。粘性ややあり）
13. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
（15cm大の角礫を含む。地山ブロックを多量含む。
粘性ややあり。しまりあり）と10YR3/2黒褐色シルトの互層
14. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫層（0.5～20cm大の礫充填）
15. 10YR3/2 黒褐色シルト（地山ブロックを少量含む。粘性ややあり）
16. 14層と同じ
17. 15層と同じ

図 19　196SK 断面図 -1（S=1/40）



1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む。1～30cm大の礫含む。しまりあり）
2. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む）
3. 7.5YR4/3 褐色シルト（1～25cm大の礫を多量含む。細粒砂含む。しまりあり）
4. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト（地山ブロック充填。20cm大の礫含む。しまりあり）
5. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（細粒砂、地山ブロック含む）
6. 7.5YR4/2 灰褐色礫層（1～10cm大の角礫充填）
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（地山ブロックを多量含む。細粒砂含む。しまりあり）
8. 10YR3/2 黒褐色シルト（5～15cm大の角礫含む。地山ブロックを多量含む。粘性ややあり）
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト（15cm大の角礫を含む。地山ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりあり)と10YR3/2黒褐色シルトの互層
10. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫層（15cm大の礫含む）
11. 10YR3/2 黒褐色シルト（地山ブロックを少量含む。粘性ややあり)と
    10YR5/3にぶい黄褐色砂礫層（0.5～20cm大の礫を多量含む)の互層（底部に35～45cm大の礫３点設置）
12. 7.5YR3/1 黒褐色シルト（10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトブロック含む。粘性ややあり。しまりあり）
13. 7.5YR3/1 黒褐色シルト（10YR7/4にぶい黄橙色粘土質シルトブロックを微量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い）
14. 7.5YR3/1 黒褐色シルト（2.5Y7/3浅黄色極細粒砂ブロック含む）
15. 2.5Y7/3 浅黄色極細粒砂（2.5Y8/2灰白色粘土ブロック、地山ブロックを全体的に含む。しまりやや弱い）
16. 2.5Y7/3 浅黄色極細粒砂（7.5YR3/1黒褐色シルト大ブロック、2.5Y8/2灰白色粘土ブロックを少量含む。しまりあり）
17. 10YR7/4 にぶい黄橙極細粒砂（7.5YR3/1黒褐色シルト大ブロック、2.5Y8/2灰白色粘土ブロックを少量含む。しまり弱い）
18. 15層と同じ
19. 10YR5/2 灰黄褐色シルト（7.5YR3/1黒褐色シルト大ブロック、2.5Y7/3浅黄色極細粒砂ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い）
20. 2.5Y7/3 浅黄色極細粒砂（地山ブロックを多量、7.5YR3/1黒褐色シルトブロックを少量含む。しまりやや弱い）
21. 19層と同じ
22. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（7.5YR3/1黒褐色シルトブロック、2.5Y7/3浅黄色極細粒砂ブロックを多量含む。しまりやや弱い）
23. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂（しまりやや弱い）
24. 2.5Y7/3 浅黄色極細粒砂（地山ブロック含む。しまりやや弱い）
25. 2.5Y7/3 浅黄色極細粒砂と10YR7/6明黄褐色シルトの斑土（しまりあり）
26. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂（地山ブロックを多量含む。7.5YR3/1黒褐色シルトブロック含む。粘性ややあり。しまりやや弱い）
27. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂（地山ブロックを多量含む。しまり弱い）
28. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト（7.5YR3/1黒褐色シルトブロック、2.5Y7/3浅黄色極細粒砂ブロックを多量含む。しまりやや弱い）
29. 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト（2.5Y7/3浅黄色極細粒砂ブロック含む。しまりやや弱い）
30. 2.5Y7/3 浅黄色砂質シルト（2.5Y8/2灰白色粘土ブロック含む。しまりやや弱い）
31. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト（しまり弱い）
32. 29層と同じ
33. 2.5Y7/3 浅黄色極細粒砂（地山ブロック含む。しまりあり）

図 20　196SK 断面図 -2（S=1/40）

半から 18 世紀初めの時期を中心とした遺物が含まれる。

381SK

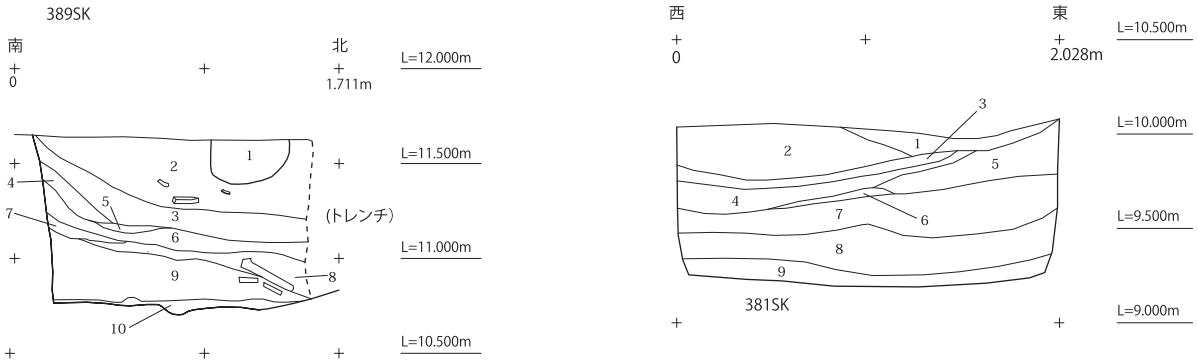
調査区内では最も南側に位置する土坑である。遺構上部は東側から 3/4 を防空壕（340SX）に削られている。平面形は整った方形を呈し、2.0m × 1.8m、深さ 2.3m を測る。壁面が垂直に立ち上がる形状であり、底部も平坦に仕上げられている。もとは地下室として構築されたと思われるが、残存部分に階段などは認められない。埋土は最下層に暗褐色土の無遺物層が堆積し、しばらく使用されなかった間に自然に堆積したものと思われる。その上は防空壕の床面レベルまで（第 2 ～ 7 層）は暗灰色粘土などが堆積し、やや散漫に陶磁器類が含まれるが、上下層での時期差はほとんど認められない。ここには炭化物ほか、魚類骨片、貝類など食物残滓と思われる動物遺体が目立って多く含まれている。（第 4 章 -2）

陶磁器類は 18 世紀後葉から 19 世紀初めの時期のものが含まれ、一部は 492SK 出土遺物と接合関係が認められた。

492SK

土坑 381SK から北西約 5m の距離にある。平面形は不整形な楕円形かと思われ、北側は調査区外に広がる。検出された範囲で、幅約 2.8m、奥行約 2.4m、深さは最大で 40cm を測る。遺構側壁の立ち上がりは緩やかで底面には凹凸が残る。埋土は灰褐色シルトを基調とし、炭化物、貝類なども含まれる。（第 4 章 -2）

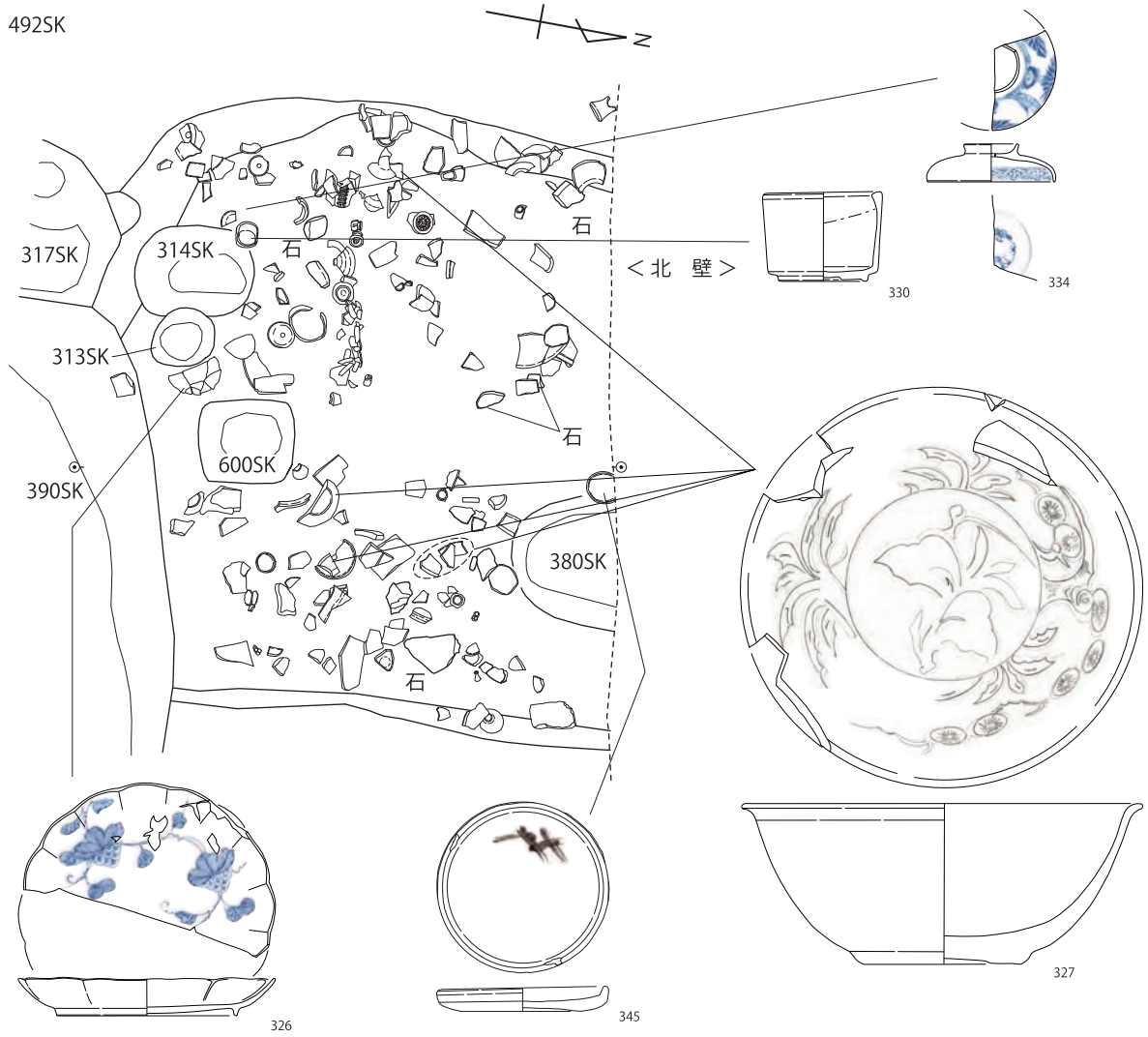
陶磁器、瓦類の密度は高く、ピット、土坑など数次の掘り込みが重複し、混入品も多いが、一括性は比較的高いと考えられる。一部は 381SK 出土遺物と接合関係にある。18 世紀末から 19 世紀前葉の時期の遺物が含まれる。

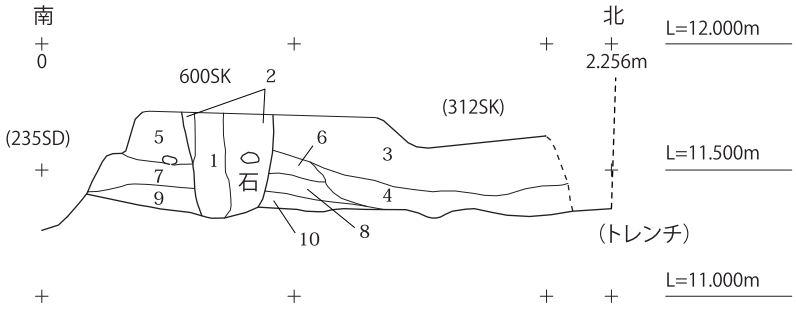


1. 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト（しまりあり。393SK埋土）
2. 7.5YR5/2 灰褐色シルト
（炭化物、小礫を少量含む。粘性ややあり。しまりあり）
3. 7.5YR4/1 褐灰色シルト（炭化物を微量含む。粘性ややあり。しまりあり）
4. 7.5YR5/1 褐灰色シルト
（拳大の礫、7.5YR8/1灰白色粘土大ブロックを含む。
炭化物を微量含む。粘性ややあり。しまりあり）
5. 2.5Y6/1 黄灰色シルト（粘性ややあり。しまりあり）
6. 7.5YR4/1 褐灰色シルト（遺物、炭化物含む。粘性ややあり。しまりあり）
7. 7.5YR4/2 灰褐色シルト
（7.5YR6/8橙色シルトブロックを少量含む。粘性ややあり。しまりあり）
8. 10YR7/3 にぶい黄橙色砂質シルト（瓦含む。しまりあり）
9. 10YR4/1 褐灰色シルト（小礫を少量含む。粘性ややあり。しまりあり）
10. 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト

1. 5Y8/3 淡黄色粘質土（地山ブロック充填。340SX埋土含む。しまりあり）
2. 7.5YR4/1 褐灰色シルト
（陶磁器を多量含む。炭化物含む。粘性ややあり。しまりあり）
3. 7.5YR6/2 灰褐色粘質シルト（陶磁器を多量含む。炭化物含む）
4. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト（陶磁器を多量含む。炭化物含む。しまりあり）
5. 7.5YR4/1 褐灰色シルト
（陶磁器、1 ～ 5 cm大の小礫を多量含む。瓦、炭化物含む）
6. 7.5YR4/1 褐灰色粘質シルト
（陶磁器を多量、炭化物を少量含む。しまりやや弱い）
7. 7.5YR4/1 褐灰色シルト
（陶磁器、炭化物を多量含む。レンガ含む。粘性ややあり。しまりあり）
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（粘性ややあり。しまりやや弱い）
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
（地山ブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い）

図 21　土坑 389SK・381SK 断面図（S=1/40）





1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（柱痕）
2. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（10YR8/1灰白色粘土ブロック含む。礫、炭化物を少量含む。しまりあり）
3. 7.5YR4/1 褐灰色シルト（炭化物、0.5～2cm大の小礫含む。しまりあり）
4. 7.5YR4/1 褐灰色シルト（炭化物を多量含む。しまりあり）
5. 10YR6/2 灰黄褐色シルト
（10YR7/1灰白色細砂を多量、10YR8/1灰白色粘土ブロックを少量含む。小礫含む）
6. 7.5YR5/1 褐灰色シルト
（10YR7/1灰白色細砂、炭化物含む。10YR8/1灰白色粘土ブロックを少量含む）
7. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（10YR7/1灰白色細砂、炭化物、小礫を少量含む）
8. 7.5YR5/1 褐灰色シルト（炭化物含む。粘性ややあり）
9. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロックを多量含む。粘性ややあり）
10. 7.5YR5/2 灰褐色シルト（地山ブロックを少量含む。粘性ややあり）

図 22　土坑 492SK 遺物出土状態（S=1/30）

387SK

492SK のすぐ西側に位置する。北側の一部が調査区外にかかるが、平面形は楕円形を呈すると思われる。検出された範囲では幅 1.8m、奥行 1.8m、深さ 30cm を測る。底面には凹凸が残る。灰褐色シルトを基調とした埋土であり、炭化物、貝類なども含まれる。陶磁器、瓦類の密度は高い。18 世紀末～ 19 世紀前半の遺物が含まれる。

413SK

調査区内では最も西側に位置する廃棄土坑であり、最終の廃棄は明治期にかかると思われる。平面形は不整形な楕円形を呈し、長さ 2.8m、幅 2.3m、深さ 29cm を測る。埋土は大きく上下 2 層に分かれ、上層は暗褐色シルト、下層は焼土ブロックが混じる明黄褐色の粘土が多く含まれる。遺物は主に下層

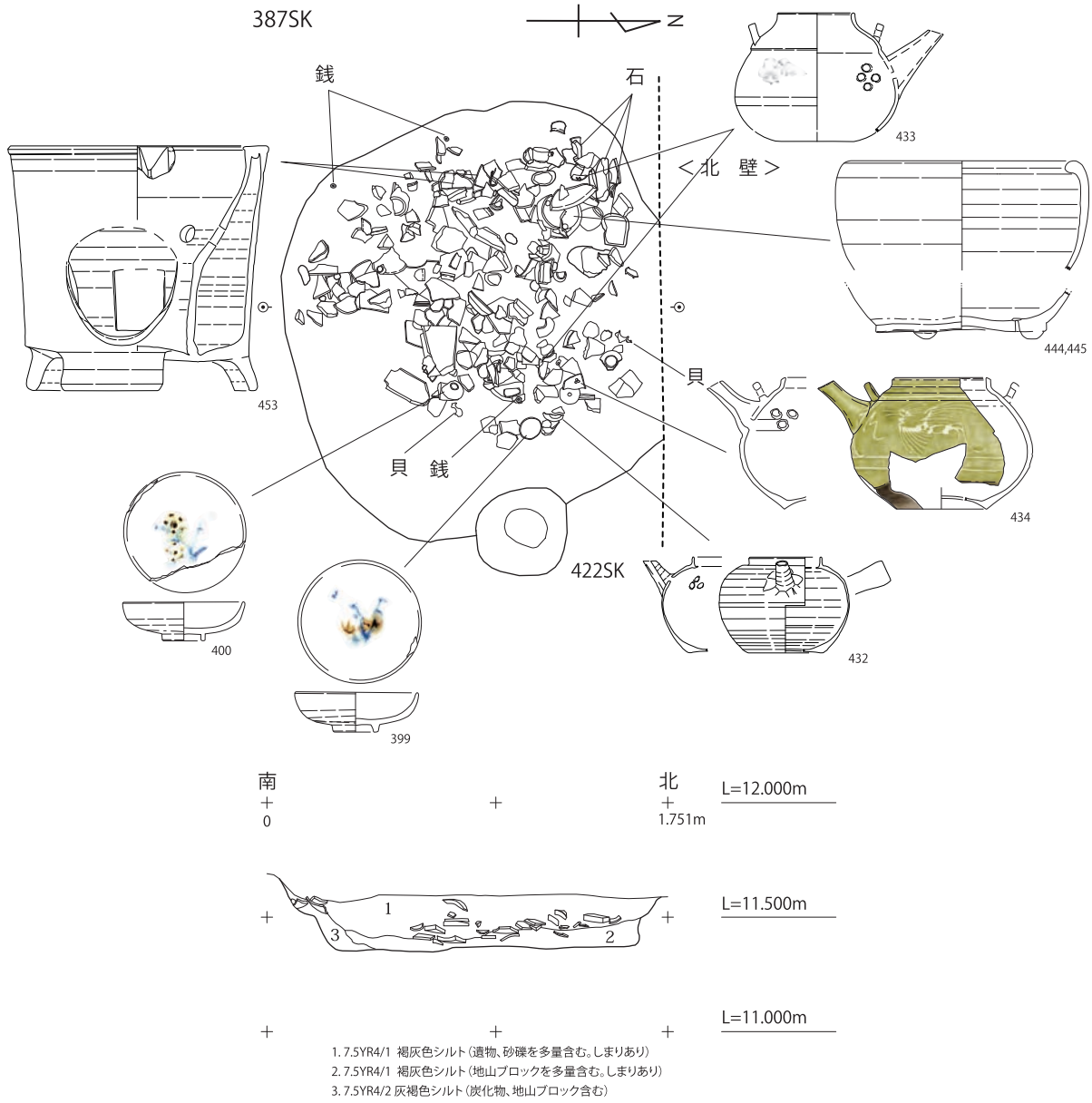


図 23　土坑 387SK 遺物出土状態（S=1/30）

に含まれ、瓦が最も多い。瓦類では桟瓦と平坦な飾り瓦が大半を占める。その他に被熱した長方形の砂岩ブロックなども数点を確認した。

＜北東部＞

496SD

南北方向の溝であり、北側は調査区外へ続くが、南側は途切れる。長さ 8.0m の範囲を確認した。上端幅約 60cm、底部幅約 50cm、深さ 1.1m を測り、断面形状は逆台形～箱形を呈する。埋土は地点により異なるが、いずれも短期間に埋められた状況が認められる。廃絶後、110SK が重複して掘削されている。

北側延長線上には過去の調査地点で確認された溝（SD10,『名古屋城三の丸遺跡 III』）があり、これと形状が類似し、位置・方向ともに齟齬はないことから連続するものと考えられる。南端の平面形は方形を呈し、戦後の汚水管埋設溝（東西方向）がすぐ南に接する位置に配されているが、重複はしていない。屋敷地を区画する境界施設と考えられ、近世を通じて強い規制力をもっていたと考えられる。

SA001（882SK,497SK,116SK）

496SD に沿って西側に並ぶ 3 基のやや大型の柱穴で構成される。それぞれ円礫の礎板石をもつ。礎石間は 1.7 ～ 1.8m を測る。北側は連続する可能性があるが、 3 基の南側には展開しない。116SK,882SK は 496SD に重複している。堀立柱の土塀あるいは板塀などの上部構造が想定される。

SA002（058SK,055SK,053SK,832SK）

後述する 196SK と 832SK を結ぶライン上に位置する、東西方向に並ぶやや大型の柱穴列である。土杭中心間の距離は 2.0 ～ 2.2m を測る。832SK 以外では礎石は確認されてない。築地塀あるいは土塀などの上部構造が想定される。

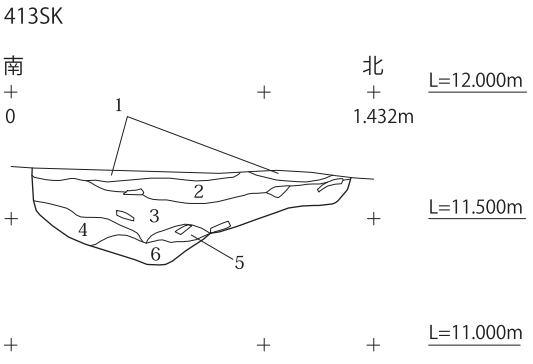
110SK

一部は東側調査区外に広がるという位置で確認された廃棄土坑である。検出部分で、長さ 2.7m、奥行 1.0m、深さ約 45cm を測る。灰褐色シルトを基調とする埋土であり、炭化物と薄い貝層も認められる。出土遺物では陶製、土製の玩具類、土師質鍋・釜類などに一括性の高い廃棄状況がうかがわれる。

土坑の位置関係について。溝 496SD 廃絶後にその上に重複して掘削されている。また、下には（おそらくは土坑）070SD があり、遺構西側のラインが一致して重複する。このラインに強い規制が認められることなどから、これらは屋敷地境に造られた廃棄土坑であり、位置的に東側の屋敷地に含まれると考えられる。

085SK

平面形が楕円形を呈する土坑である。長さ約 2.5m、



1. 7.5YR5/1 褐灰色シルト（粘性ややあり。しまりあり）
2. 7.5YR5/2 灰褐色シルト
（5 cm大の小礫を少量含む。粘性ややあり。しまりあり）
3. 7.5YR4/2 灰褐色シルト（瓦含む。粘性ややあり。しまりあり）
4. 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト
（0.5cm大の小礫を多量含む。焼土、炭化物含む。しまりあり）
5. 10YR8/6 黄橙色シルト
6. 7.5YR4/1 褐灰色シルト（粘性ややあり。しまりあり）

図 24　土坑 413SK 断面図（S=1/30）

幅 1.2m、深さ 55cm を測る。長軸方向は、溝 496SD にほぼ並行する。暗褐色シルトを基調とする埋土であり、17 世紀半ばから後半の陶器、土器が散漫に含まれる。

660SD

東西方向の溝であり、上部に近代の溝（047SD）が重複して不明な部分が多いが、幅 1.5m、深さ 20cm の部分を確認した。断面は U 字状を呈する。東壁では確認できないため、柱穴列（SA001）の西側で途切れると考えられる。

＜その他＞

602SD

調査区南東部で検出された、土塁と並行する東西方向のやや幅広の溝である。幅 1.6m、深さ 40cm を測り、東側は調査区外へ続く。長さ 10.1m の範囲で確認した。底部は平坦で両脇に溝状の凹みをもち、埋土には剥片礫を少々含む。東壁で確認される状況から、近世のある段階の整地の際に埋められたと考えられる。少量の近世陶器が出土した。

196SK

埋土の状況が不自然であり、当初は戦国期堀に設けられた土橋状の遺構と想定したが、精査の結果、戦国期堀 605SD の幅で掘込まれた近世の土坑であることが判明した。平面形は長方形を呈し、上端は長軸 2.6m、幅 1.0m、下端では幅 1.4m を測る。土坑部分の戦国期堀の埋土を除去し、最下層に大型の礫 3 個を小礫を使って据え置いた上で、新たに礫、漆喰の混じる黒色～暗褐色シルトを交互に水平に版築状に積み上げている。おそらくこの作業のため、断面 V 字状の堀の側面に数カ所の段が削り出されている。

同様の堆積状況は 196SK のほか東西両側で部分的に認められる。東側では隣接する 193SK、東壁にかかる 832SK があり、これはピット状で下位に礎石をもつ。また西側では連接する 194SK、195SK で認められ、これらは 196SK を含み同一線上に並んでいる。埋土中からは鉄釉（柿釉）徳利片、磁器染付鉢か（639）が出土し、後者は 196SK 西側の 194SK 出土遺物と同一個体であった。これらの版築状埋土の遺構群は一連のものであり、帯状に展開する形態であると考えられる。

この帯状の遺構群は、屋敷地境界と考えられる溝 496SD の南端に接するように東西に直交する位置にあり、かつ近世段階の特殊な構築物であることなどから、屋敷と南御土居筋を画する築地塀の基部（痕跡）の可能性が考えられる。193SK,194SK,195SK などもすべて直接基盤層（熱田層）を掘り込むようにして直接版築が行われており、196SK では軟弱な地盤の改良のため戦国末の埋土を除去するという地業を行ったものと考えられる。なお、196SK を壊す撹乱（汚水管埋設溝）より南側全体は薄い整地層が重なり、硬化している部分も確認できる。

その他に多数の小土坑があるが、時期の不明なものが多い。形状では、隅丸方形、円形（楕円形）、不定形などがあり、方形のタイプは一辺が 40cm 前後、円形は径 30cm 弱、40cm 前後、60cm 前後などがある。隅丸方形土坑には、円礫を礎石とするものが比較的多く含まれる。

主に調査区の中央より北側に分布し、（後世の撹乱の影響もみられるが）北西部の廃棄土坑群周辺に集中してみられる。建物あるいは塀などが配置されていたと思われるが、復元には至らなかった。また、調査区中央付近で東西に並ぶピット列が幾つか想定されるが、近代以降のものも多く含まれる。

4　近代以降

明治６年以降、名古屋城が第三師団の管轄下に置かれ、調査地点付近は被服庫→軍楽隊→第三師団経理部第一倉庫の敷地となったと思われるが（第１章３節）、その間の内部の様子は実態としては不明な部分が多い。

調査では、溝、柵列と思われるピット列、コンクリート建物基礎などのほか熱田層に深く掘り刻まれた大型の遺構５基を確認した。これらには互いに重複が認められず、ほぼ同時期に存在したと考えられる。戦時中の遺物を含み旧陸軍が占有していた時代の遺構であり、規模・機能等から「防空壕」の痕跡と判断した。

＜防空壕＞

340SX（087SD,088SD,090SD 含む）

南側に開く出入口（087SD）から南北方向、直線的に続く通路、通路東側に直角に接続する複数の部屋（088SD,090SD）からなる。通路の先北側は調査区外で不明である。出入口から通路を含む長さは 14.5m（検出範囲）、通路幅は 2.3 ～ 2.5m である。部屋は２室を検出し、奥行約 6.5m、幅は約 0.8m、検出面からの深さは約 1.4m、床面のレベルは 10.6m である。出入口は平面形が舌状のスロープとなっており、傾斜角度は約 12°～ 16°を測る。出入口の床面は平坦でなく、中央部分が若干凹み、その両脇に小さな凹みが階段状に連続する。検出当初は中央凹み部分に周囲にはない光沢が認められた。車輪の轍跡と推測される。通路および部屋の床面は段差のない平坦面をなし、部屋（088SD）の奥、壁面の隅には用いられていた角柱状の柱の痕跡が認められる（写真図版 遺構 11）。また、北側の部屋（090SD）の上部には、部屋より広い幅（1.2 ～ 1.5m）で深さ 50cm 程度掘りくぼめた段差があり、

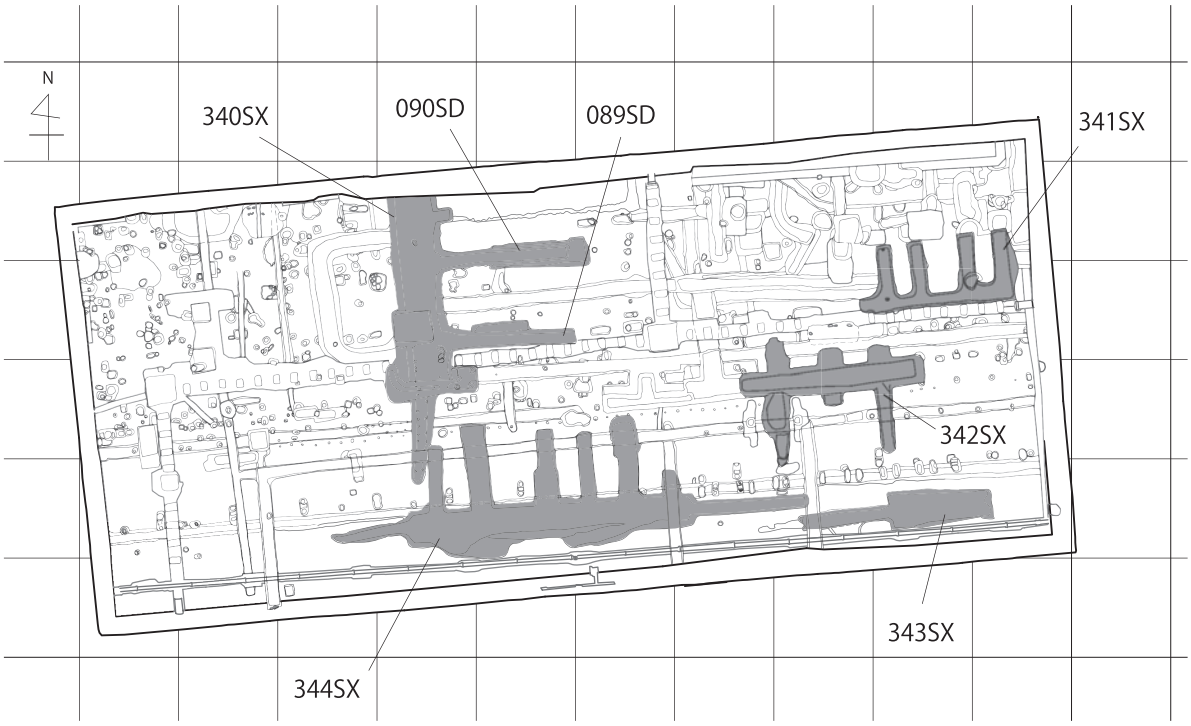


図 25　防空壕　配置図

この部分のみ天井部が厚い板状の蓋をする構造であったと考えられる。蓋受と思われる段差から床面まで 1.1m 程度しかなく、大人が立って移動することは難しい。その他、出入口から 11m ほど入った通路西側壁面には幅 25cm 程度の凹みが 2 箇所あり、照明具等が置かれたかと推測される。

341SX（021 ～ 025SD 含む）

西側に開く出入口をもつ東西通路（025SD）と、これの北側に直角に接続する 4 室（021 ～ 024SD）からなる。出入口から奥までの距離は 7.8m、部屋の長さは約 2.5m、通路と部屋の幅はほぼ同じで 0.8m、検出面からの深さは平均して約 80m である。出入口は床面が平坦なスロープとなっており、傾斜科角度は約 24°である。最も西側の部屋の突当り床面中央には、排水施設の痕跡かと思われる径 10cm、深さ 5cm の円形の凹みが設けられている。

342SX

南側に開く 2 個所の出入口と、これに直交する幅約 1.5m、長さ 4.7m の東西通路、通路に直交する 4 個所の部屋からなる。ただし、部屋と呼べるほどの空間はなく、奥行は極端に短く 0.8m から 1.7m 程度である。出入口は床面が平坦なスロープであり、傾斜角度は 14°と 23°を測る。うち 1 個所はスロープ途中で竪穴状に掘り凹められており、階段はなく、出入りには梯子が必要である。遺構の重複関係は確認できなかったが、この部分は廃絶後の撹乱の可能性も考えられる。機能としては不完全な状態と思われ、部屋の拡張を試みながらも築造途中で断念した箇所かもしれない。

343SX

東側に広く開く出入口に連続して東西に溝状にのびる。出入口床面は平坦であり、傾斜角度は約 20°である。出入口は幅 1.5 ～ 2.0m の部分が 5.0m 続き、その奥は急激に狭くなり幅 80cm の部分が 4.5m 続いたあと掘削途中と思われる不整形な部分で止まっている。検出面からの深さは 75cm 前後、床面のレベルは 10.9m 前後である。幅が狭くなる個所は基盤層ではなく、ちょうど戦国期の堀（605SD）にあたる。この遺構も機能としては不完全であり、軟弱な地盤に遭遇したため、途中で掘削を断念したのかもしれない。

344SX

出入口は 2 個所あり、東西方向の通路の南側中央付近から東側と西側へそれぞれスロープが設けられている。出入口の床面は平坦であり、傾斜角度はそれぞれ 14°～ 18°と 16°～ 20°である。通路は幅約 1.8m と比較的広く、長さ 14m の部分と、さらに東側に続く幅 0.8m の部分 5.5m 確認した。また西側にも断面天井部がアーチ状をなす掘削の途中段階の個所がみられる。通路北側にほぼ直交する方向で 6 個所の部屋が接続する。用途か築造順序によるものか、幅や奥行は一定せず規模のばらつきが大きい。規模は、西から幅 0.7m ×長さ 3.2m、幅約 1.2m ×長さ 4.0m、幅 0.9 ～ 1.2m ×長さ 3.5m、幅 0.7m ×長さ 3.3m、幅 1.0 ～ 1.3m ×長さ 4.1m、幅 0.9m ×長さ 1.1m である。検出面から 1.0m までの部分の掘削を行った。床面は確認できていない。

＜その他＞

046SD

幅 80cm、深さ 25cm 前後、断面形状は箱形の東西方向に直線状にのびる溝である。調査区東壁か

ら防空壕（340SX）付近まで確認できるが、それより西側では不明である。

047SD

幅 95cm、深さ 75cm、東西方向に直線状にのびる溝であり、断続的ながら約 20m の範囲で確認した。断面下方は隅の丸い方形で、側面は直に立ちあがる。埋土は黒色～暗灰色シルトを基調とし、陶磁器のほか、レンガ・ガラス・金属製品を比較的多く含む。近世段階と思われる溝（660SD）とほぼ重複する。

089SD

防空壕（340SX）に先行する。幅約 80cm、深さ約 40cm、断面箱形の東西方向にのびる溝であり、防空壕（340SX）東側の約 22m の範囲で確認した。完全な直線ではなく、東西では幅や方向が若干変わるため、２条の別々の溝が接している可能性も考えられる。埋土は暗灰色シルトを基調とした斑土状であり、主に西側部分を中心に軍の徽章がプリントされた硬質陶器カップ、皿類など比較的一括性の高い資料が得られた。

235SD

コの字状にめぐる幅 1.1 ～ 1.4m、深さ 45cm 前後、断面形状が逆台形を呈する溝である。防空壕（340SX）に先行する。北端はさらに北側に、南端もさらに南側に折れ、若干のびて続く様相が一部で確認できる。平面形では屈曲部は角がなく緩やかなカーブを描いて繋がっている。

026・027SD

ほぼ同じ位置に重複して掘削された東西方向の溝であり、調査範囲内では途切れず連続する。長さ約 45m、幅約 90cm、深さはそれぞれ 15cm、40cm を確認した。断面は皿状を呈し、埋土は暗灰色シルトを基調とする。出土遺物は少量の近世陶器のほか近代の磁器（摺絵）、珉平焼小判皿（702）などがある。

001・002SD

溝そのものは戦後建設された建物基礎の痕跡と思われる。幅約 70cm、深さ 90cm の部分を確認した。最下層に花崗岩礫薄片が入り、その上厚さ 50cm は砂で埋められている。その上には花崗岩角礫、煉瓦片、その他石材片が入る。溝の上部に廃棄された石材には、花崗岩では支柱の基礎や、間知石など加工痕の残る建築部材が多く含まれる。煉瓦にはコンクリートが付着し、多くの赤煉瓦に混じり少量の耐火煉瓦（856, 写真図版 遺物 13）が含まれる。

第３章　出土遺物

1　出土状況の概要

出土遺物は石製品・土器・陶磁器類、金属製品などコンテナ約 150 箱である。

材質により「土器･陶磁器」「ガラス製品･骨製品」「金属製品」「石製品」に分類して整理を行った。

掲載資料の選択においては、各時期の主要遺構出土遺物を優先した。中世･戦国期では堀と区画溝、近世は武家屋敷の井戸、廃棄土坑、区画施設関連の遺構などであり、遺物量の多い近世のみ廃棄土坑群付近の包含層出土資料からも抽出した。近代以降は防空壕出土資料を基本として、比較的一括性の高いもの、遺存状態の良好なものから抽出した。陶磁器類のほか金属製品･ガラス製品･骨製品がある。

中世・戦国期資料は隣接する過去の調査地点での様相と同様に少量であった。遺構そのものの機能や地点の性格、あるいは近世段階の整地の規模などに理由が求められよう。

近世の廃棄土坑は、調査区の北西部と北東部に分かれて分布しており、北西部の一群（466SE, 389SK, 381SK, 492SK, 387SK）は「屋敷表」に設置された事例とみることができ、北東部の一群（085SK, 110SK）は東西隣に接する２軒の屋敷の屋敷境を挟む廃棄土坑群である。前者ではまず 18 世紀代半ば以前に井戸廃絶も含めた廃棄があり、その後やや期間をおいて 18 世紀後半～ 19 世紀前半にかけて数次の廃棄が行われていたようである。後者では東側の屋敷（図５, 屋敷地２）の方が土坑の規模は大きく、境界施設の変更（屋敷間の溝 496SD →共有塀？）に伴い拡張されている。

出土遺物の分析では、過去の調査地点での様相と同様、陶磁器の産地別組成では瀬戸美濃産陶器の占める割合は高く、破片数で比較した場合には７割前後と高率で推移している。分布の傾向では調査区中央付近と南側は極端に遺構・遺物が少なくなり、前者は前庭のような空間あるいは礎石建ち建物の範囲、後者は屋敷の外側、すなわち南御土居筋と考えられる。

近代以降の遺構は直線的な溝と小ピット、土坑などであり、第二次大戦末期の防空壕跡を除いて性格を特定できるものは少ない。陶磁器類の中ではやはり軍用食器類が目立ち、薬品瓶、化粧品容器、インク瓶などのガラス製品、蹄鉄など馬具に関連するもののほか大量の用途不明の金属製品が得られた。明治以降三の丸に駐屯した陸軍第三師団に関連する具体的な資料である。

2　土器・陶磁器

＜中世・戦国期＞

605SD（1 ～ 9）

東濃型山茶碗の小片（4）のほか、施釉陶器類では縁釉小皿（6）、擂鉢（7,8,9）など（藤澤編年）古瀬戸後期Ⅲ段階から大窯２段階に属するものと思われる。土器類は非ロクロ土師器皿（1）、内耳鍋（3）がある。内耳鍋外面付着物の年代測定結果では、戦国期に収まる数値として、1520 ～ 1580 年の年代を得ている（第４章１）。

606SD-d,e,f 地点（10 ～ 16）

東濃型山茶碗（10,11）のほか、施釉陶器類は縁釉小皿（12,14）、直縁大皿（15）、卸目付大皿（16）

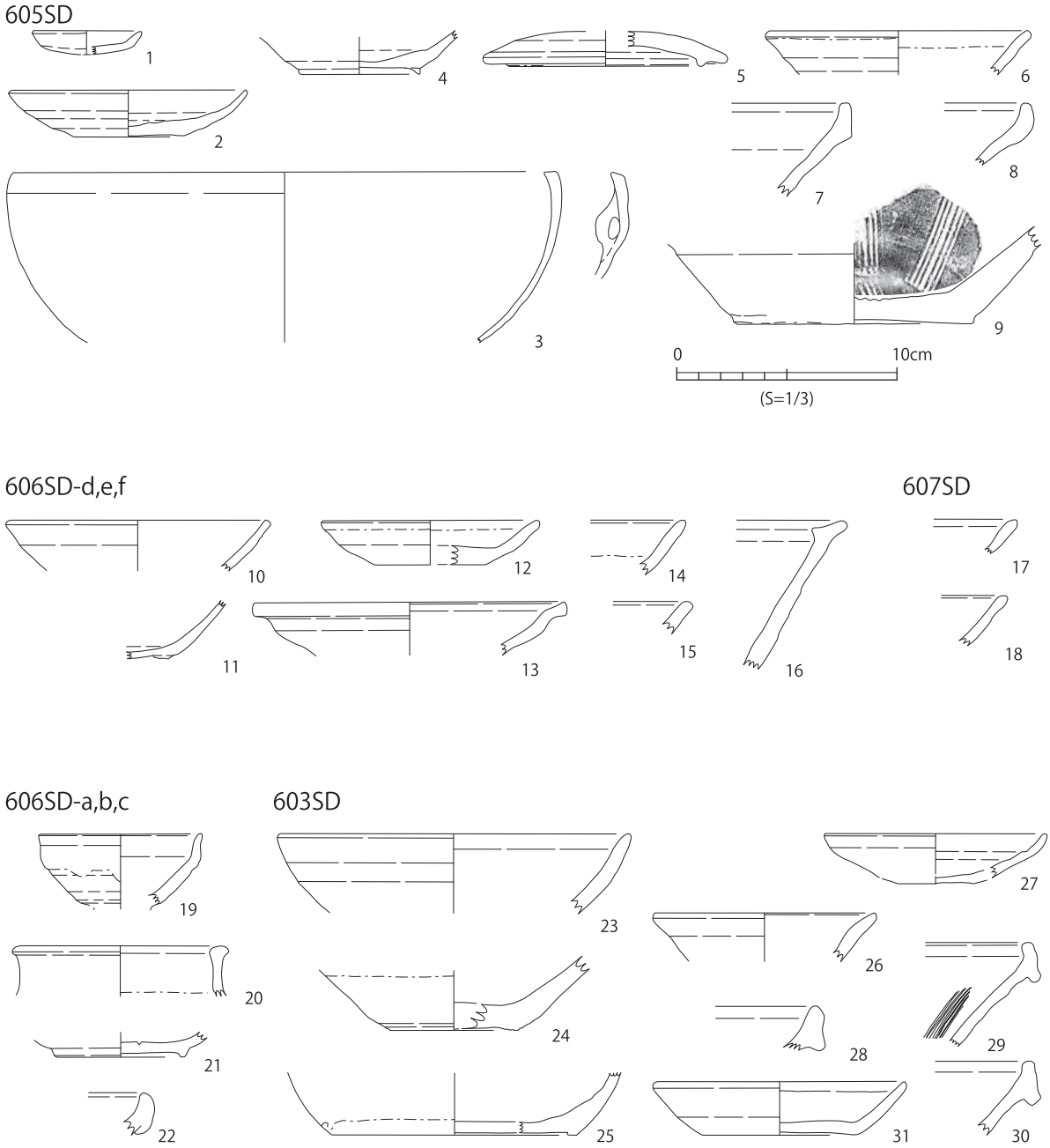


図 26　中世・戦国時代の陶磁器（S=1/3）

などの小片であり、（藤澤編年）古瀬戸後期 IV 段階に属するものと思われる。

607SD（17,18）

出土遺物は山茶碗と土師器皿の小片のほか、施釉陶器は古瀬戸後期Ⅲ段階の縁釉小皿（17）と近世の灰釉丸皿（18）のみであるが、後者は混入と思われる。

606SD-a,b,c 地点（19 〜 22）

未掲載資料に山茶碗、土師器皿、鍋片がある。施釉陶器は小天目（19）、鉄釉香炉（20）、灰釉皿（21）、

擂鉢（22）である。21 は印花をもち大窯 1 段階に、19,22 は大窯 3 段階に属するものと思われる。

603SD（23 ～ 30）

施釉陶器は灰釉平碗（23,24）、鉄釉徳利（25）、擂鉢（28,29,30）があり、古瀬戸後期Ⅲ段階～大窯 3 段階に属するものと思われる。31 土師器皿はロクロ成形である。未掲載資料には、山茶碗、片口鉢、土師器皿、土師質羽付釜、常滑産甕、古瀬戸灰釉四耳壺、鉄釉器種不明陶片などがある。

＜近世＞

出土量が比較的多い井戸（466SE）、土坑（389SK,381SK,387SK）について、器種・産地別カウントを行った。産地は瀬戸と美濃を併せて「瀬・美」として扱い、同様に京都・信楽系、肥前系をそれぞれ「京・信」「肥前」と表記した。計測の方法は、まず陶磁器類は a. 口縁部を 12 分割して計測した残存率（残存 1/12 以下を 1 ）と、b. 接合後破片数のカウントを行った（表 7 ～ 10）。a. は個体数での比較を、b. は口縁部が残存せず抽出されない器種を減らすことを目的としている。土器・常滑産陶器は、 約 1 cm 角以上の「破片数」のみを計測した。また、土師器皿はすべて灯明具に、常滑産陶器は用途が火具と判断できないものを「貯蔵具」甕として分類した。燻し瓦類、玩具類はサンプリングの方法および計測基準が異なるため、今回のカウント作業からは除外している。

なお、陶磁器類の分類については、金子健一氏の協力を得た。

【内耳鍋・茶釜形鍋】
鈴木正貴 ,1996,「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム
【焙烙】
金子健一 ,1996,「尾張出土のホウロクについて」（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 4
【焼塩壺】
身 A 類（芯に粘土紐を輪積み成形）
身 B 類（板状粘土を芯に巻き付け、底部に粘塊を充填。口縁端に蓋受を削り出し）
身 C 類（B 類の蓋受が退化、痕跡程度になったもの）
身 D 類（全体を型成形、小型で厚手）
身 E 類（蓋受のない、C 類より薄手で粗雑）
蓋 A 類（上面が曲面、側面が緩やかに開くもの）
蓋 B 類（上面が平坦、側面との境に明瞭な稜をもつもの）
【瀬戸・美濃産陶磁器】
瀬戸市 ,1998,『瀬戸市史　陶磁史篇六』
愛知県 ,2007,『愛知県史』別冊 窯業 2

466SE（32 ～ 480, 表 8 ）

完掘していない井戸の検出面から約 4 m の部分に含まれていた資料である。瀬戸・美濃産陶器の割合が高く、陶磁器類（破片数）では 72.8%を占める。次いで肥前系磁器・陶器、少量の京・信楽系陶器となる。産地比（破片数）では瀬：肥＝ 1：0.19 である。

用途でみると、供膳具が全体の 5 割以上を占め、その内 8 割が瀬戸・美濃産陶器である。供膳具全体の産地別個体数比は瀬：肥＝ 1：0.14 であるが、小碗・小杯類の器種のみ瀬：肥＝ 1：1.2 となり、肥前磁器が主体といえる。瀬戸・美濃産陶器碗類の内訳は、尾呂茶碗、灰釉・鉄釉丸碗、皿類は志野丸皿、灰釉丸皿、反り皿、輪禿皿、菊皿、型打皿、鉢類は黄瀬戸鉢、折縁鉢である。肥前産陶器は刷

表８　近世陶磁器組成表　466SE

用途	器種・器形		陶器 瀬・美	常滑	京・信	備前	肥前	不明	磁器 瀬・美	肥前	中国	不明	土器	瓦器	器種別破片数小計	用途別合計（破片数％）
供膳具	碗	残存率合計（口縁/12）	65		7		6			20	2	3				
		破片数（接合後）	85		11		14			20	1	1			132	
	小碗・小杯・猪口	残存率合計（口縁/12）	5							6						
		破片数（接合後）	4							6					10	
	皿	残存率合計（口縁/12）	163							1	0					
		破片数（接合後）	135							2	1				138	
	鉢（向付類を含む）	残存率合計（口縁/12）	32				3			2						
		破片数（接合後）	61				5			5					71	
	その他（碗・皿類）	残存率合計（口縁/12）	10				1									400
		破片数（接合後）	40				9								49	(52.3)
調理具	鍋（内耳鍋・焙烙・行平・釜・陶製鍋）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）											99		99	
	鉢（片口鉢・練鉢）	残存率合計（口縁/12）	12													
		破片数（接合後）	5												5	
	擂鉢	残存率合計（口縁/12）	26					2								
		破片数（接合後）	75					（宇治？）1							75	
	瓶（土瓶・燗徳利・銚子・急須）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他	残存率合計（口縁/12）														179
		破片数（接合後）													0	(23.4)
貯蔵具	瓶（瓶・徳利・水注・汁次）	残存率合計（口縁/12）	0							0						
		破片数（接合後）	23							3					26	
	壺（壺・茶壺・茶入）	残存率合計（口縁/12）	2			0										
		破片数（接合後）	4			（茶入）1							（焼塩壺）5		10	
	甕（半胴・常滑焼締甕）	残存率合計（口縁/12）	0													
		破片数（接合後）	3	58											61	
	蓋物（段重・香合含む）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他	残存率合計（口縁/12）						7								98
		破片数（接合後）						（栓）1							1	(12.8)
灯火具	皿（灯明具・灯明受皿・行灯皿）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）											2		2	
	秉燭	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他（瓦燈・燭台）	残存率合計（口縁/12）														2
		破片数（接合後）													0	(0.3)
火具	鉢（火鉢・瓶掛・風炉・火容・手焙・水	残存率合計（口縁/12）						2								
		破片数（接合後）		3				1							4	
	壺（火消し壺）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他（焜炉・七輪）	残存率合計（口縁/12）														5
		破片数（接合後）											（目皿）1		1	(0.7)
化粧具	紅皿	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	壺（お歯黒壺・鬢油壺）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	鬢盥	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他	残存率合計（口縁/12）														0
		破片数（接合後）													0	
神仏具	瓶（神酒徳利・仏花瓶）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	香炉	残存率合計（口縁/12）	4													
		破片数（接合後）	5												5	
	仏飯具	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他	残存率合計（口縁/12）														5
		破片数（接合後）													0	(0.7)
喫茶具	天目茶碗	残存率合計（口縁/12）	1													6
		破片数（接合後）	6												6	(0.8)
その他	鉢（植木鉢・餌鉢・擂餌鉢・煙硝擂）	残存率合計（口縁/12）	1													
		破片数（接合後）	1												1	
	水滴	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	陶錘・土錘	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）						10					1		11	
	その他（水盤・花生・水指・火入れ・灰落とし）	残存率合計（口縁/12）	0													14
		破片数（接合後）	2												2	(1.9)
不明		残存率合計（口縁/12）	2							4						
		破片数（接合後）	30							27					57	(7.5)
		破片数計	479	61	11	0	28	13	0	63	2	1	108	0	766	
		割合(%)	(62.2)	(8.0)	(1.5)		(3.7)	(1.7)		(8.3)	(0.3)	(0.2)	(14.1)			

表９　近世陶磁器組成表　389SK

用途	器種・器形		陶器 瀬・美	常滑	京・信	備前	肥前	不明	磁器 瀬・美	肥前	中国	不明	土器	瓦器	器種別破片数小計	用途別合計（破片数%）
供膳具	碗	残存率合計（口縁/12）	111				12	2		61	5					
		破片数（接合後）	128				20	4		51	4				215	
	小碗・小杯・猪口	残存率合計（口縁/12）	45							38						
		破片数（接合後）	9							20					29	
	皿	残存率合計（口縁/12）	141		2		21	1		2	0					
		破片数（接合後）	94		1		19	1		4	1				120	
	鉢（向付類を含む）	残存率合計（口縁/12）	16				8			1						
		破片数（接合後）	29				11			3					43	
	その他（碗・皿類）	残存率合計（口縁/12）														399
		破片数（接合後）														(37.0)
調理具	鍋（内耳鍋・焙烙・行平・釜・陶製鍋）	残存率合計（口縁/12）	0													
		破片数（接合後）	1										234		235	
	鉢（片口鉢・練鉢）	残存率合計（口縁/12）	3													
		破片数（接合後）	4												4	
	擂鉢	残存率合計（口縁/12）	41													
		破片数（接合後）	68												68	
	瓶（土瓶・燗徳利・銚子・急須）	残存率合計（口縁/12）		0												
		破片数（接合後）		2											2	
	その他	残存率合計（口縁/12）														309
		破片数（接合後）														(28.7)
貯蔵具	瓶（瓶・徳利・水注・汁次）	残存率合計（口縁/12）	25							0						
		破片数（接合後）	37							5					42	
	壺（壺・茶壺・茶入）	残存率合計（口縁/12）	0													
		破片数（接合後）	1										(焼塩壺)4		5	
	甕（半胴・常滑焼締甕）	残存率合計（口縁/12）	3													
		破片数（接合後）	9	47											56	
	蓋物（段重・香合含む）	残存率合計（口縁/12）								1						
		破片数（接合後）								1					1	
	その他(蓋)	残存率合計（口縁/12）	8													107
		破片数（接合後）	3												3	(10.0)
灯火具	皿（灯明具・灯明受皿・行灯皿）	残存率合計（口縁/12）	14					14								
		破片数（接合後）	3					3					141		147	
	秉燭	残存率合計（口縁/12）	0													
		破片数（接合後）	1												1	
	その他（瓦燈・燭台）	残存率合計（口縁/12）														148
		破片数（接合後）														(13.8)
火具	鉢（火鉢・瓶掛・風炉・火容・手焙・水甕）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）		5											5	
	壺（火消し壺）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他（焜炉・七輪）	残存率合計（口縁/12）														6
		破片数（接合後）											1		1	(0.6)
化粧具	紅皿	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	壺（お歯黒壺・鬢油壺）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	鬢盥	残存率合計（口縁/12）	3													
		破片数（接合後）	1												1	
	その他	残存率合計（口縁/12）														1
		破片数（接合後）													0	(0.1)
神仏具	瓶（神酒徳利・仏花瓶）	残存率合計（口縁/12）	0													
		破片数（接合後）	9												9	
	香炉	残存率合計（口縁/12）	16													
		破片数（接合後）	14												14	
	仏飯具	残存率合計（口縁/12）	2													
		破片数（接合後）	1												1	
	その他	残存率合計（口縁/12）														24
		破片数（接合後）													0	(2.3)
喫茶具	天目茶碗	残存率合計（口縁/12）	8													8
		破片数（接合後）	8												8	(0.8)
その他	鉢（植木鉢・餌鉢・擂餌鉢・煙硝擂）	残存率合計（口縁/12）	3													
		破片数（接合後）	3												3	
	水滴	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	陶錘・土錘	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）						4					3		7	
	その他（水盤・花生・水指・入れ・灰落とし・匣鉢）	残存率合計（口縁/12）	0													13
		破片数（接合後）	3												3	(1.2)
不明		残存率合計（口縁/12）	3			1				2						
		破片数（接合後）	40	1		6				17					64	(6.0)
		破片数計	466	55	1	6	105	12	0	101	5	0	383	0	1079	
		割合(%)	(43.2)	(5.1)	(0.1)	(0.6)	(9.8)	(1.2)		(9.4)	(0.5)		(35.5)			

表 10　近世陶磁器組成表　381SK

用途	器種・器形		陶器 瀬・美	常滑	京・信	備前	肥前	不明	磁器 瀬・美	肥前	中国	不明	土器	瓦器	器種別破片数小計	用途別合計（破片数%）
供膳具	碗	残存率合計（口縁/12）	148		40		0	4		31		1				
		破片数（接合後）	170		34		1	7		19		(信楽)1			232	
	小碗・小杯・猪口	残存率合計（口縁/12）	3							22						
		破片数（接合後）	3							7					10	
	皿	残存率合計（口縁/12）	97		18			2		18						
		破片数（接合後）	59		7			1		8					75	
	鉢（石皿,向付類を含む）	残存率合計（口縁/12）	11		10					2						
		破片数（接合後）	21		1					3					25	
	その他（碗蓋）	残存率合計（口縁/12）								2						343
		破片数（接合後）								1					1	(36.9)
調理具	鍋（内耳鍋・焙烙・行平・釜・陶製鍋）	残存率合計（口縁/12）	13													
		破片数（接合後）	10										120		130	
	鉢（片口鉢・練鉢）	残存率合計（口縁/12）	26													
		破片数（接合後）	10												10	
	擂鉢	残存率合計（口縁/12）	15													
		破片数（接合後）	40												40	
	瓶（土瓶・燗徳利・銚子・急須）	残存率合計（口縁/12）	21					0								
		破片数（接合後）	(蓋2含む)12					9							21	
	その他（卸皿・漏斗）	残存率合計（口縁/12）	4													203
		破片数（接合後）	2												2	(21.9)
貯蔵具	瓶（瓶・徳利・水注・汁次）	残存率合計（口縁/12）	31							12						
		破片数（接合後）	43							2					45	
	壺（壺・茶壺・茶入）	残存率合計（口縁/12）	10					0								
		破片数（接合後）	4					1					(焼塩壺)2		7	
	甕（半胴・常滑焼締甕）	残存率合計（口縁/12）	15													
		破片数（接合後）	21	65											86	
	蓋物（段重・香合含む）	残存率合計（口縁/12）	12							6						
		破片数（接合後）	10							2					12	
	その他（蓋）	残存率合計（口縁/12）	17		19					15						167
		破片数（接合後）	8		3					2			(焼塩壺蓋)4		17	(18.0)
灯火具	皿（灯明具・灯明受皿・行灯皿）	残存率合計（口縁/12）	35					1								
		破片数（接合後）	7					2					57		66	
	秉燭	残存率合計（口縁/12）	0													
		破片数（接合後）	1												1	
	その他（瓦燈・燭台）	残存率合計（口縁/12）														67
		破片数（接合後）													0	(7.2)
火具	鉢（火鉢・瓶掛・風炉・火容・手焙・水甕）	残存率合計（口縁/12）	19													
		破片数（接合後）	25	15											25	
	壺（火消し壺）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他（焜炉・七輪）	残存率合計（口縁/12）														26
		破片数（接合後）											(目皿)1		1	(4.4)
化粧具	紅皿	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	壺（お歯黒壺・鬢油壺）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	鬢盥	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他	残存率合計（口縁/12）														0
		破片数（接合後）													0	
神仏具	瓶（神酒徳利・仏花瓶）	残存率合計（口縁/12）	0													
		破片数（接合後）	1												1	
	香炉	残存率合計（口縁/12）	0													
		破片数（接合後）	2												2	
	仏飯具	残存率合計（口縁/12）								0						
		破片数（接合後）								1					1	
	その他	残存率合計（口縁/12）														4
		破片数（接合後）													0	(0.5)
喫茶具	天目茶碗	残存率合計（口縁/12）	0													2
		破片数（接合後）	2												2	(0.3)
その他	鉢（植木鉢・餌鉢・擂餌鉢・煙硝擂）	残存率合計（口縁/12）	14													
		破片数（接合後）	13												13	
	水滴	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	陶錘・土錘	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）						1							1	
	その他（水盤・花生・水指・火入れ・灰落とし）	残存率合計（口縁/12）	11													27(2.9)
		破片数（接合後）	13												13	
不明		残存率合計（口縁/12）	3					1		1		0				
		破片数（接合後）	58	2				6		9		1			76	(8.2)
		破片数計	535	82	45	0	1	27	0	54	0	2	184	0	930	
		割合(%)	(57.6)	(8.9)	(4.9)		(0.1)	(2.9)		(5.8)		(0.3)	(19.8)			

表 11　近世陶磁器組成表　387SK

用途	器種・器形		陶器 瀬・美	常滑	京・信	備前	肥前	不明	磁器 瀬・美	肥前	中国	不明	土器	瓦器	器種別破片数小計	用途別合計（破片数%）
供膳具	碗	残存率合計（口縁/12）	37		2				16	5		16				
		破片数（接合後）	47		2				15	8		4			76	
	小碗・小杯・猪口	残存率合計（口縁/12）	2							4		13				
		破片数（接合後）	4							3		14			21	
	皿	残存率合計（口縁/12）	49			0		5		7	0	9				
		破片数（接合後）	15			1		(犬山焼2)3		4	2	5			30	
	鉢（向付類を含む）	残存率合計（口縁/12）	17													
		破片数（接合後）	11												11	
	その他（碗・皿類）	残存率合計（口縁/12）														138
		破片数（接合後）													0	(22.7)
調理具	鍋（内耳鍋・焙烙・行平・釜・陶製鍋）	残存率合計（口縁/12）	53													
		破片数（接合後）	56										19		75	
	鉢（片口鉢・練鉢）	残存率合計（口縁/12）	8													
		破片数（接合後）	3												3	
	擂鉢	残存率合計（口縁/12）	9													
		破片数（接合後）	13												13	
	瓶（土瓶・燗徳利・銚子・急須）	残存率合計（口縁/12）	16	27	24			29								
		破片数（接合後）	(蓋含む)45	(蓋含む)3	(蓋)2			(蓋含む)23					(土瓶？)4		77	
	その他	残存率合計（口縁/12）														168
		破片数（接合後）													0	(27.7)
貯蔵具	瓶（瓶・徳利・水注・汁次）	残存率合計（口縁/12）	3													
		破片数（接合後）	17												17	
	壺（壺・茶壺・茶入）	残存率合計（口縁/12）						10								
		破片数（接合後）						1					(焼塩壺)1		2	
	甕（半胴・常滑焼締甕）	残存率合計（口縁/12）	37													
		破片数（接合後）	21	49											70	
	蓋物（段重・香合含む）	残存率合計（口縁/12）	6							0						
		破片数（接合後）	1							1					2	
	その他（蓋）	残存率合計（口縁/12）	2													92
		破片数（接合後）	1												1	(15.2)
灯火具	皿（灯明具・灯明受皿・行灯皿）	残存率合計（口縁/12）	21													
		破片数（接合後）	7										24		31	
	秉燭	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他（瓦燈・燭台）	残存率合計（口縁/12）														31
		破片数（接合後）													0	(5.1)
火具	鉢（火鉢・瓶掛・風炉・火容・手焙・水	残存率合計（口縁/12）	10													
		破片数（接合後）	7	13											20	
	壺（火消し壺）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他（焜炉・七輪）	残存率合計（口縁/12）														35
		破片数（接合後）											(焜炉)15		15	(5.8)
化粧具	紅皿	残存率合計（口縁/12）										4				
		破片数（接合後）										1			1	
	壺（お歯黒壺・鬢油壺）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	鬢盥	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他	残存率合計（口縁/12）														1
		破片数（接合後）													0	(0.2)
神仏具	瓶（神酒徳利・仏花瓶）	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	香炉	残存率合計（口縁/12）								0						
		破片数（接合後）								2					2	
	仏飯具	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他	残存率合計（口縁/12）														2
		破片数（接合後）													0	(0.4)
喫茶具	天目茶碗	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	0
その他	鉢（植木鉢・餌鉢・擂餌鉢・煙硝擂）	残存率合計（口縁/12）	46													
		破片数（接合後）	10												10	
	水滴	残存率合計（口縁/12）							8							
		破片数（接合後）							3						3	
	陶錘・土錘	残存率合計（口縁/12）														
		破片数（接合後）													0	
	その他（水盤・花生・水指・火入れ・灰落とし）	残存率合計（口縁/12）	14													22
		破片数（接合後）	9												9	(3.7)
不明		残存率合計（口縁/12）	10					9				17				
		破片数（接合後）	87	5				2				25			119	(19.6)
		破片数計	354	70	4	1	0	29	18	18	2	49	63	0	608	
		割合(%)	(58.3)	(11.6)	(0.7)	(0.2)		(4.8)	(3.0)	(3.0)	(0.4)	(8.1)	(10.4)			

毛目碗、青緑釉碗皿、京焼風碗皿である。

調理具鍋は土師質鍋類で占められ、内耳鍋（深いもの、浅いもの２タイプ B6 類）、茶釜形鍋（羽無釜 B4 類）、焙烙（D 類）がある。擂鉢では混入も含めて第３小期～６小期のものがみられるが、第４小期が主体である。陶器徳利類は尾呂徳利、舟徳利である。

その他に喫茶具の天目茶碗が少量ながら含まれ、大型の陶錘の出土量がやや目立つことなどが特徴としてあげられる。瀬戸・美濃産陶器の年代観により、17 世紀中葉～後葉の時期の資料と思われる。

389SK（96 ～ 202, 表９）

466SE に一部重複する土坑資料である。陶磁器類（破片数）での瀬戸・美濃の割合は 66.2%とやはり高率で、７割近くを占める。産地比（破片数）では瀬：肥＝１：0.44 となり、肥前系の割合が 466SE と比較してやや高くなっている。

供膳具の割合は 37%であり、調理具（土師質鍋類）、灯火具（土師質皿）の増加により相対的に低い数値となっている。供膳具全体でみる産地別個体数比は瀬：肥＝１：0.45 となり、小碗・小杯類では瀬：肥＝１：0.85 と瀬戸・美濃産陶器の増加が認められるもの、依然として肥前磁器の占有率は高い。瀬戸･美濃産陶器碗類の内訳は、尾呂茶碗、灰釉丸碗、腰錆茶碗、皿類は灰釉丸皿、輪禿皿、菊皿、ひだ皿、型打皿、摺絵皿、鉢類は黄瀬戸鉢少量と鉄絵鉢である。肥前系陶器は刷毛目碗、青緑釉碗、京焼風碗皿類である。

調理具鍋のほとんどが土師質鍋類であり、内耳鍋（B6 類）、茶釜形鍋（羽無釜 B4 類）である。擂鉢は第３小期～第５小期のものが含まれるが、主体は第５小期である。

陶器徳利類は尾呂徳利、舟徳利、錆徳利である。焼塩壺はすべて身 A 類である。

灯火具では陶器製灯明皿が若干認められる。土師器皿はロクロ成形で橙色を呈する。比較的一括性一括性の高い資料群である。スス付着資料は一部である。

このほか喫茶具とした天目茶碗が少量みられるほか、灰釉丸碗では器高が高く深い大型のものが目立つ。瀬戸・美濃産陶器の年代観により 17 世紀後葉～ 18 世紀前葉の時期の資料と思われる。

381SK（203 ～ 319, 表 10）

当初は地下室として築造されたと思われる方形土坑の資料である。土坑上部は防空壕（340SX）に削平されている。一部資料は 492SK 資料と接合関係にある。

陶磁器類（破片数）に占める瀬戸･美濃の割合は 75.8%と高率である。産地比（破片数）では瀬:肥:京＝１：0.103：0.085 となり、肥前系が減少し、京・信楽系は肥前系に拮抗する程度にまで増加している。

供膳具の割合が 36.9%と低くなり、貯蔵具（蓋物、常滑甕など）、火具（火鉢など）、その他（植木鉢など）がそれぞれ増加している。供膳具における産地別個体数比では、瀬:肥:京＝１：0.29：0.263 である。小碗・小杯類では瀬：肥＝１：7.33 で肥前磁器がこの器種を独占している。瀬戸・美濃産陶器の内訳は、碗類は灰釉丸碗、上絵付碗、腰錆茶碗、沈線碗、拳骨茶碗、小杉碗、笹文碗、せんじ、小中、箱形湯呑など多種の碗・湯呑がある。皿類は灰釉丸皿、輪禿皿、梅文皿、型打皿、摺絵皿、染付皿がある。鉢類には石皿が含まれる。京・信楽系では灰釉丸碗、上絵付碗、小杉碗などがある。肥前磁器は丸碗のほか、猪口がある。

調理具では､土師質鍋のほとんどが焙烙（J2 類､J3 類）に占められるようになったほか､陶製鍋（行平、耳付鍋）、土瓶などが出現している。擂鉢は第８小期が主体と思われる。

貯蔵具では、陶器・磁器の両方で蓋物が増加がみられる。陶器徳利は尾呂徳利、錆徳利、貧乏徳利がある。焼塩壺は蓋 B 類と蓋受の退化した身 C 類で、「泉湊伊織」刻印が認められる。

灯火具とした土師器皿の多くの資料ではスス、タール状の付着物が認められる。

火具では火鉢類が増加しており、火具への分類に漏れた常滑産を含めると増加率はさらに高いものと予想される。

その他に分類した植木鉢、鳥餌鉢、喫煙具の増加が目立つほか、植木鉢、喫煙具への転用の痕跡も多くの資料で認められる。

個別にやや特殊な資料をとりあげる。232 は鉛釉・透明が施された釉軟質焼成の鉢である。手づくね成形。236,237 は碗片を利用した色見と思われる。238 は水注蓋。焼締で器壁は薄く硬質の焼成である。381SK 資料には上絵付陶器が比較的多く、復元されたものでは灰釉丸碗（222,228）、蓋（233）、灰釉丸皿（246,247）などがある。胎土・釉調等より判断して、233 を除くほかすべては瀬戸窯の製品と考えられる。過去の出土資料にも同様の上絵付製品が確認されており、京・信楽製品に分類されているものも少なくない。具体的な生産窯は未確定であるが、瀬戸窯においても一定量の生産があったことを窺わせる資料といえよう。土製の玩具類は比較的良好な状態で出土しており、人形（294）、天神像（295,298）、箱庭道具茶室（297）、ままごと道具（296）などがある。ほかに緑釉丸瓦（293）がある。混入と思われる。

瀬戸・美濃産陶器類の年代観により、18 世紀後葉～ 19 世紀初頭の時期の資料と思われる。

492SK（320 ～ 393）

381SK 出土資料と一部は接合関係にある。肥前系染付型打皿（326,332）や、青磁鉢（327）上絵付銚子（344）など優品が含まれる。蕎麦猪口（320 ～ 325）は揃いで 6 点が復元でき、一括して廃棄されたと考えられる。土瓶は 381SK 資料とは異なり、直線的な注口をもつタイプである。焼塩壺（380）は蓋受のない E 類。土師質鍋は茶釜形鍋（383, 羽無釜 B4 類）と焙烙（384, J 類）があり、384 は外面底部に沢瀉文の刻印が残る。土製・陶製・磁器製の玩具類（385 ～ 393）があり、このうち 385 茶室は箱庭道具としては特に大型と思われる。381SK 資料と同形の緑釉丸瓦（381）1 点がある。混入と思われる。

瀬戸・美濃産陶器類の年代観により 19 世紀前葉の時期の資料と思われる。

387SK（394 ～ 459, 表 11）

陶磁器類（破片数）にしめる瀬戸・美濃（陶器・磁器）の割合は、68.2%である。肥前系、京都・信楽系は激減し、代わりに産地不明の磁器類の増加が認められる。

供膳具の割合は 22.7%に減少し、調理具が 27.7%となっている。供膳具碗において産地別個体数比は瀬：肥：不明＝ 1 ：0.094：0.3 となる。肥前系がほぼ独占していた磁器碗においても瀬戸・美濃産が出現し、個体数比は瀬：肥＝ 1 ：0.31 と凌駕している。碗類は端反碗、上絵付碗、丸碗、掛分碗、拳骨碗、広東碗、湯呑類などがあり、皿類は梅文皿、染付皿などである。

調理具は陶製の鍋類（行平、耳付鍋）と土瓶、急須が増加している。土師質鍋はすべて焙烙であり、表面に調整痕がほとんどみられないタイプ（L 類）が出現している。擂鉢は第 9（10）小期が主体と思われる。

その他に分類した植木鉢、鳥餌鉢、喫煙具などの割合は相対的に増加している。

資料を個別にみると、焼締急須（432）、吊手に「玉川」刻印のある上絵付土瓶（422）、筒描文様

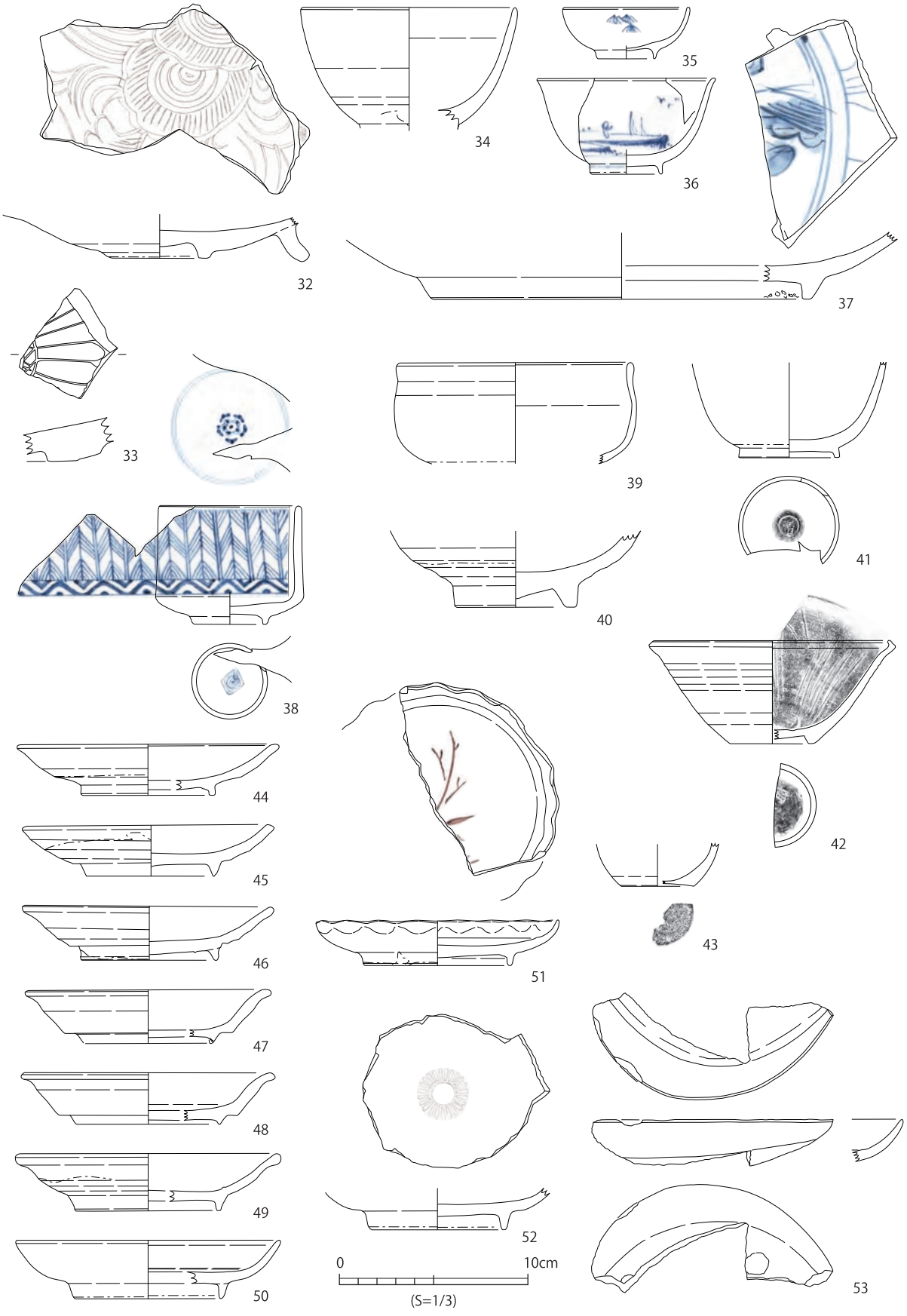


図 27　466SE 出土陶磁器 1（S=1/3）

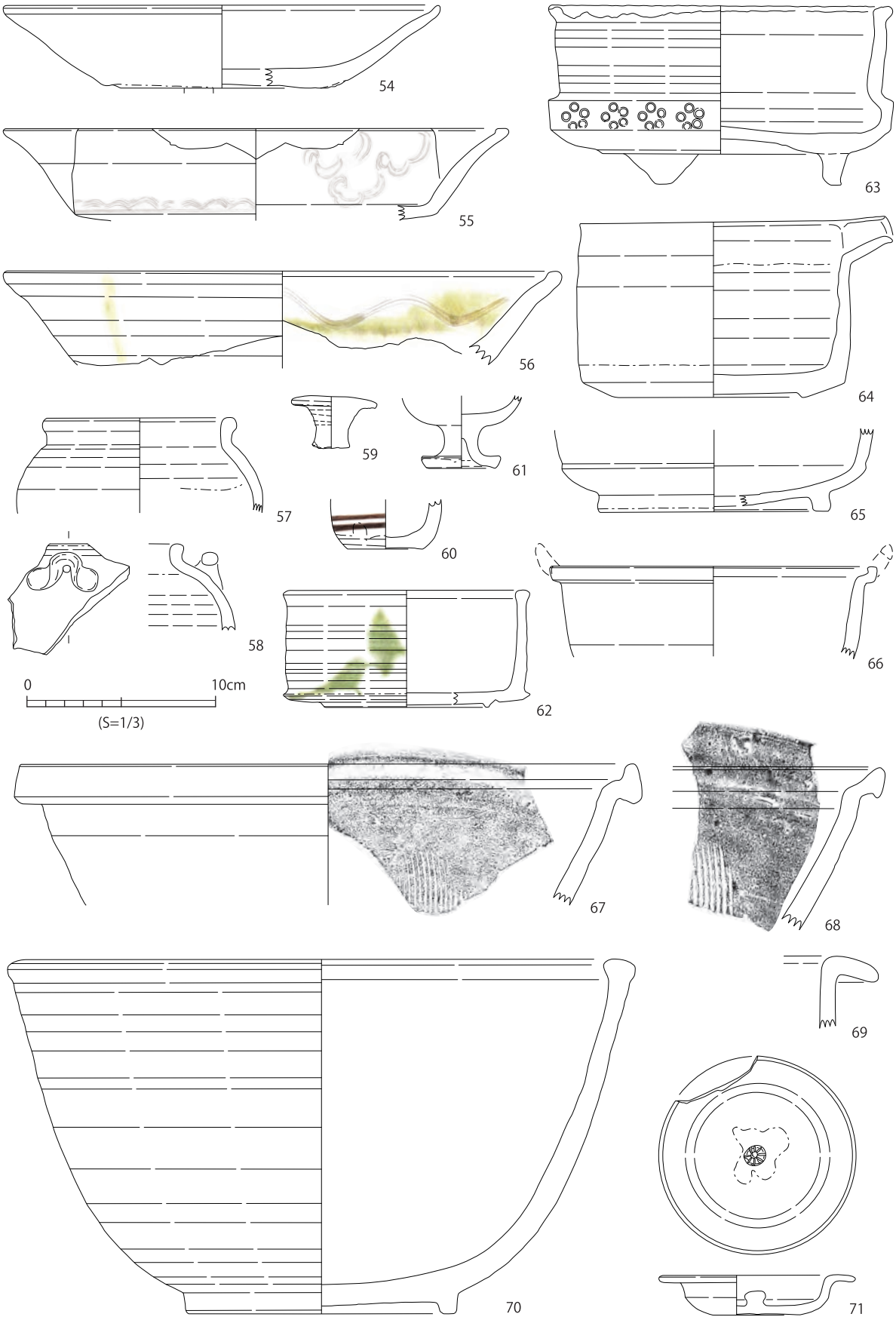


図 28　466SE 出土陶磁器 2（S=1/3）

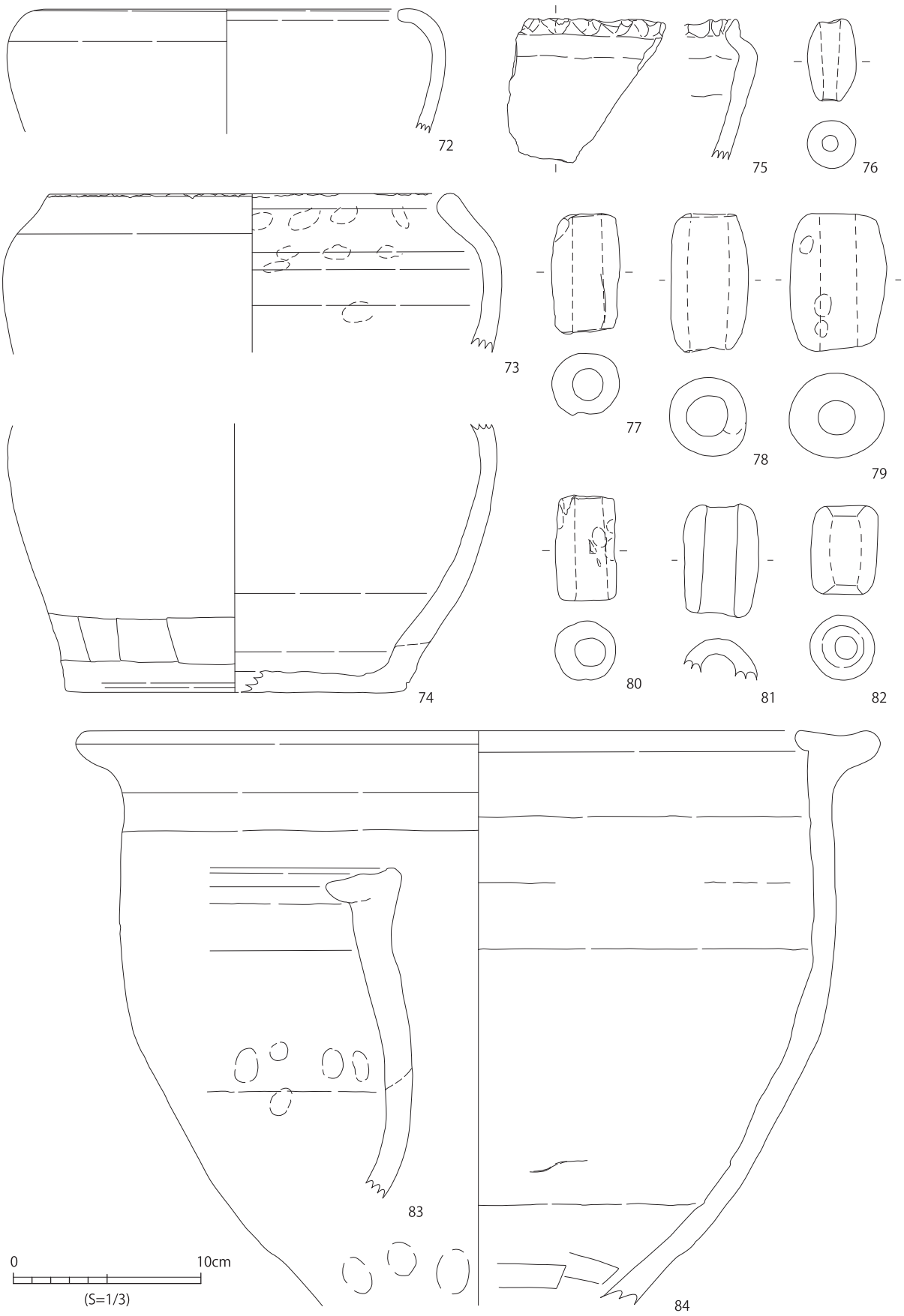


図 29　466SE 出土陶磁器 3（S=1/3）

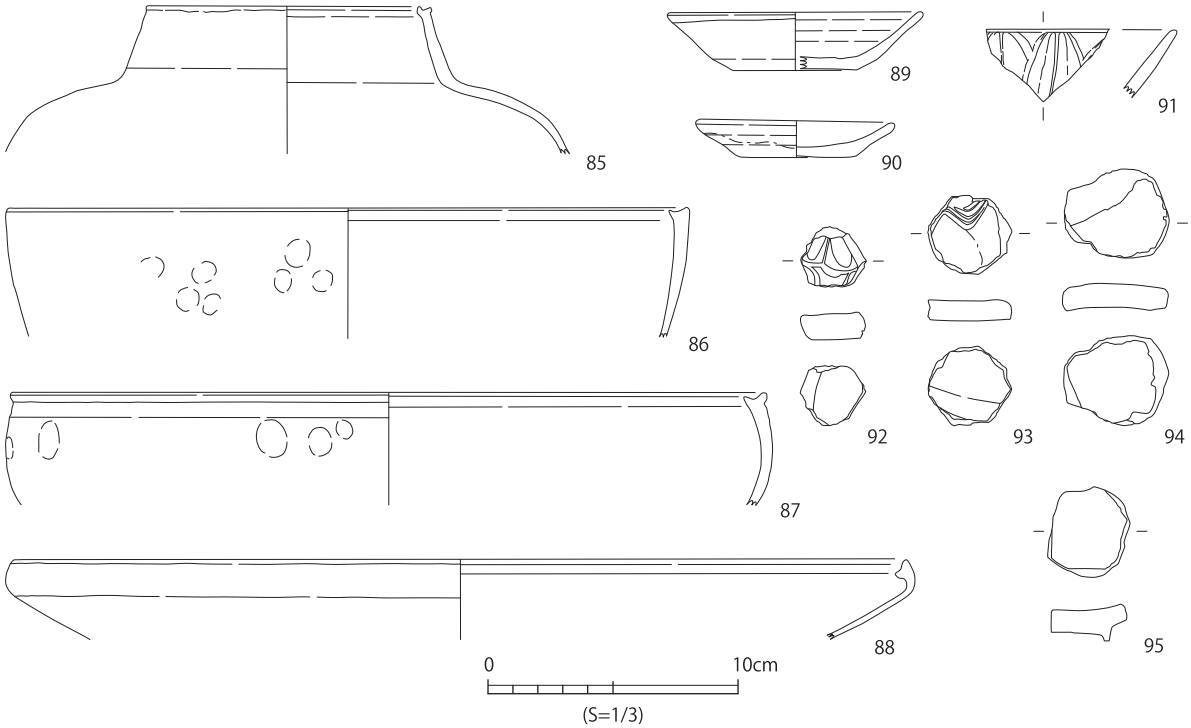


図 30　466SE 出土陶磁器 4（S=1/3）

の土瓶（434）、藻掛急須？と蓋（441,442）、土器二重焜炉（453）など喫茶（煎茶）と関連すると思われる器種が特に多く含まれている。

瀬戸・美濃産陶器類の年代観により、19 世紀前葉の時期の資料と思われる。

413SK（460 ～ 477）

近世陶磁器は主に上層覆土に含まれる。近代陶磁器類は下層の焼土や焼けた砂岩などに混じり大量の瓦類（桟瓦、飾瓦）とともに出土した。染付、クロム青磁釉があり、施文方法は手描のほか摺絵がみられる。行平蓋（475）は黄褐色釉が施され、焼成は軟質、裏面に刻印が認められる。19 世紀後期～ 20 世紀初頭の資料と思われる。

北西部その他土坑（478 ～ 503）・包含層出土資料（504 ～ 529）

以下は特殊なもの、土器製品などを中心に記述する。380SK（478 ～ 481）は 492SK に重複する土坑である。灰釉蓋物（478）、灰釉蓋（479）など 18 世紀後葉の資料と思われる。153SK（485,486）は併せ口の状態で出土した土師器皿２枚である。他にみられないタイプであり、白色でロクロ成形、硬質の焼成であり、１点には外面に墨書が施されている。胞衣埋納の容器かと推測される。焼塩壺では身 C 類（488）、身 D 類（526）、蓋 B 類（525）などがある。521 は瓦質の火消し壺底部である。瓦質の製品は少ない。玩具ではままごと道具（527,528）のほか、鉄釉（柿釉）の施された陶製人形猿（529）などがある。

110SK（530 ～ 585）

屋敷地境界と想定される溝（496SD）の廃絶後に東側から掘削された土坑の資料である。下部は 496SD 存続期間に重なる土坑（070SK）を壊していると考えられる。瀬戸・美濃産陶器類では 18 世

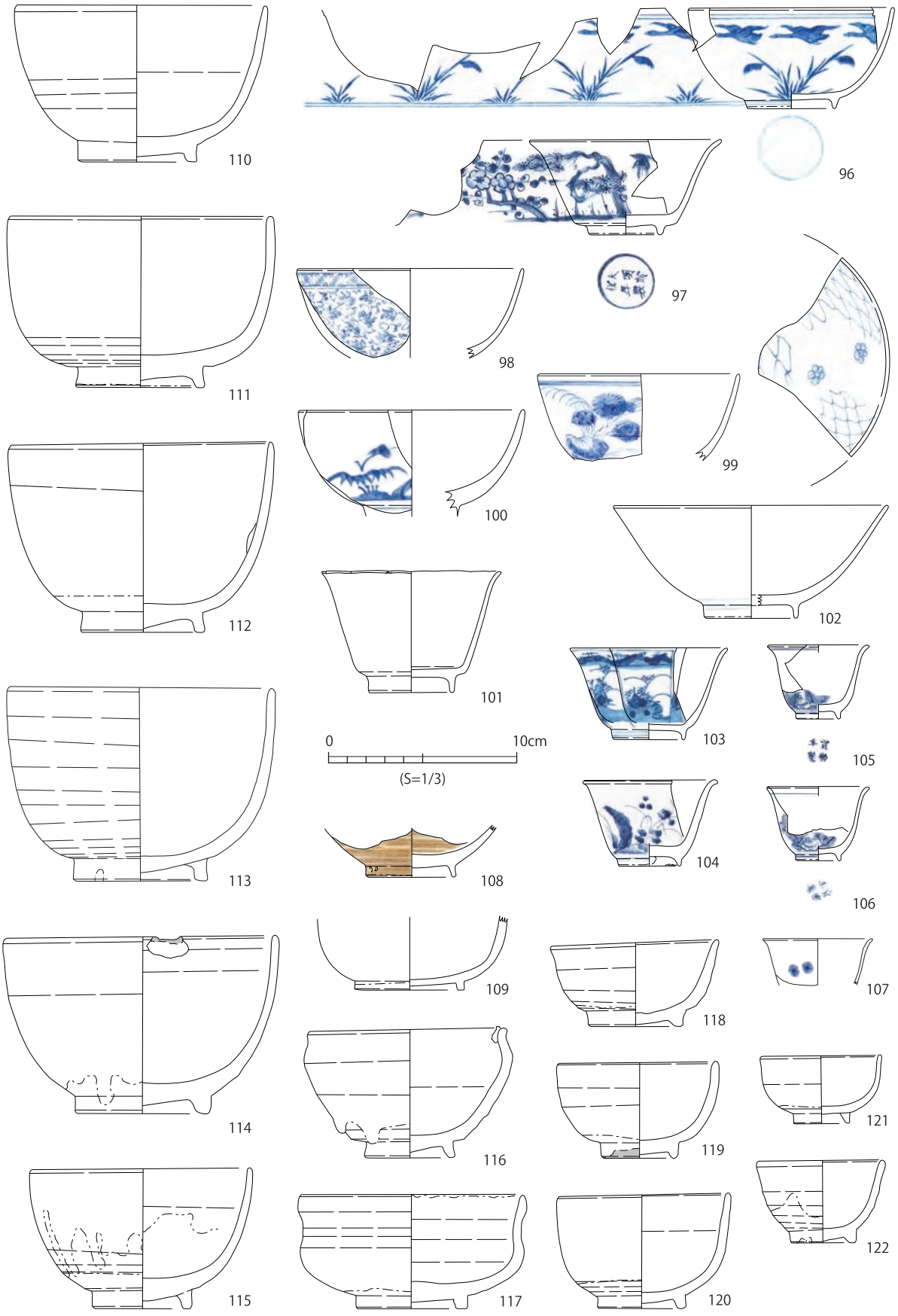


図 31　389SK 出土陶磁器 1（S=1/3）

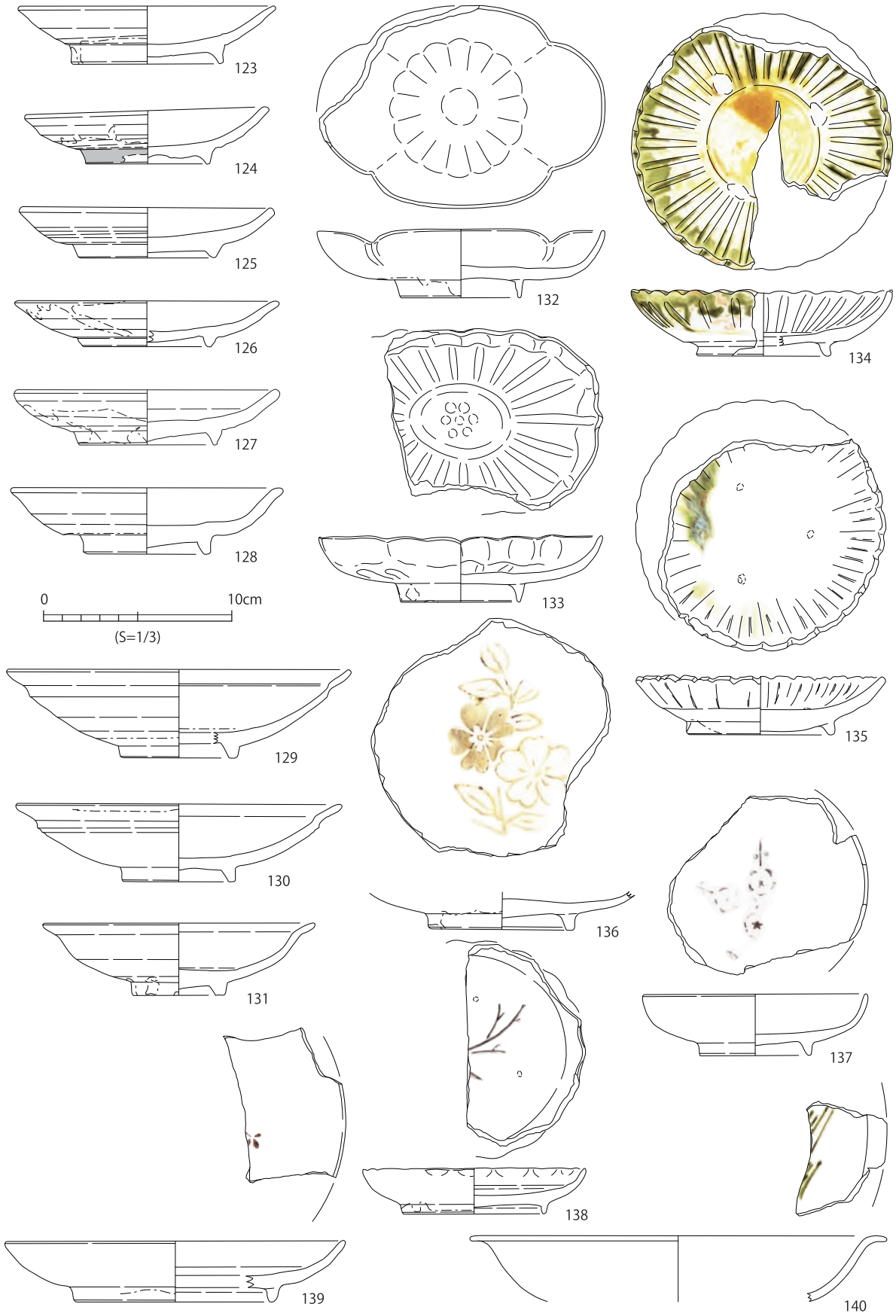


図 32　389SK 出土陶磁器 2（S=1/3）



図 33　389SK 出土陶磁器 3（S=1/3）

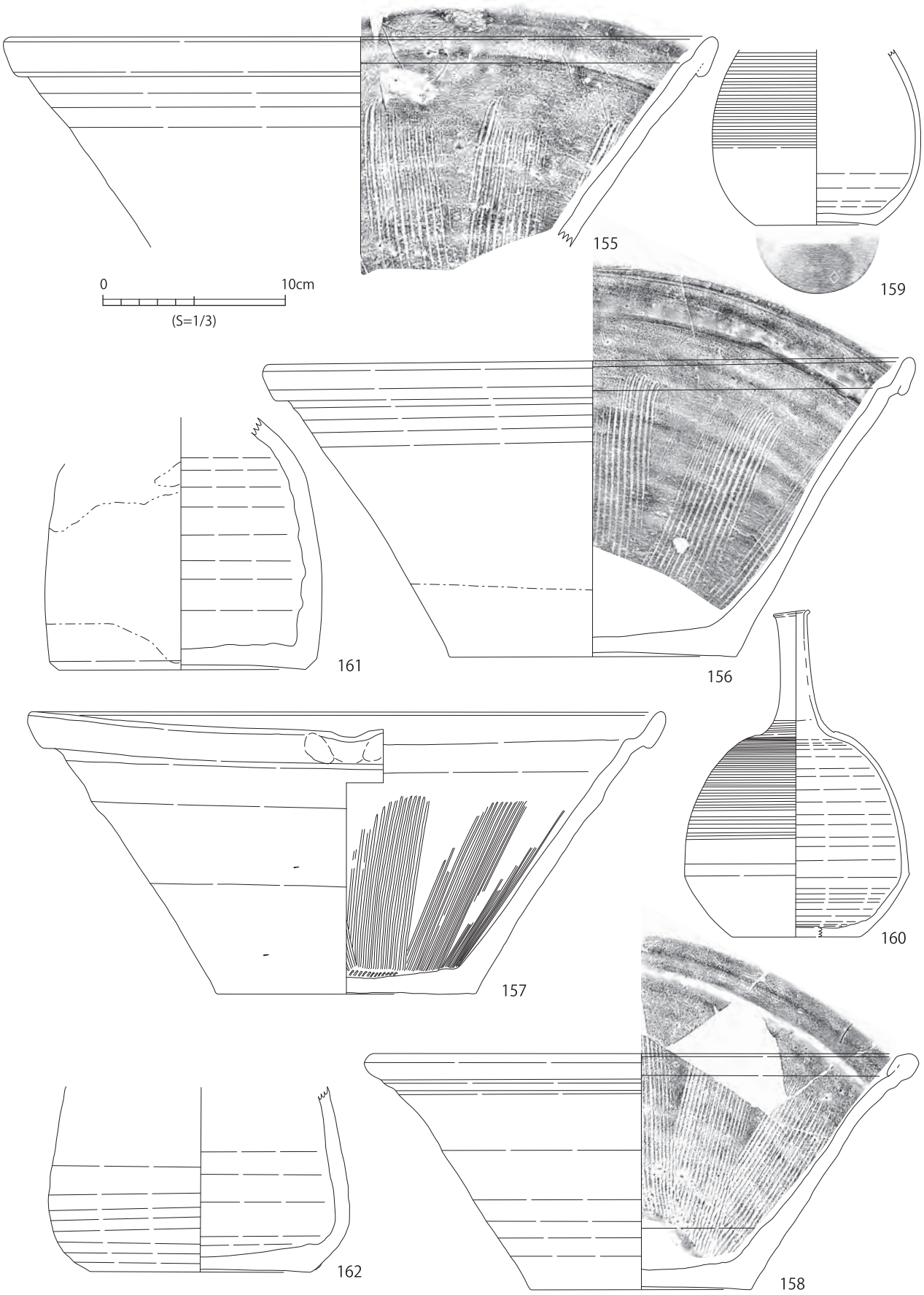


図 34　389SK 出土陶磁器 4（S=1/3）

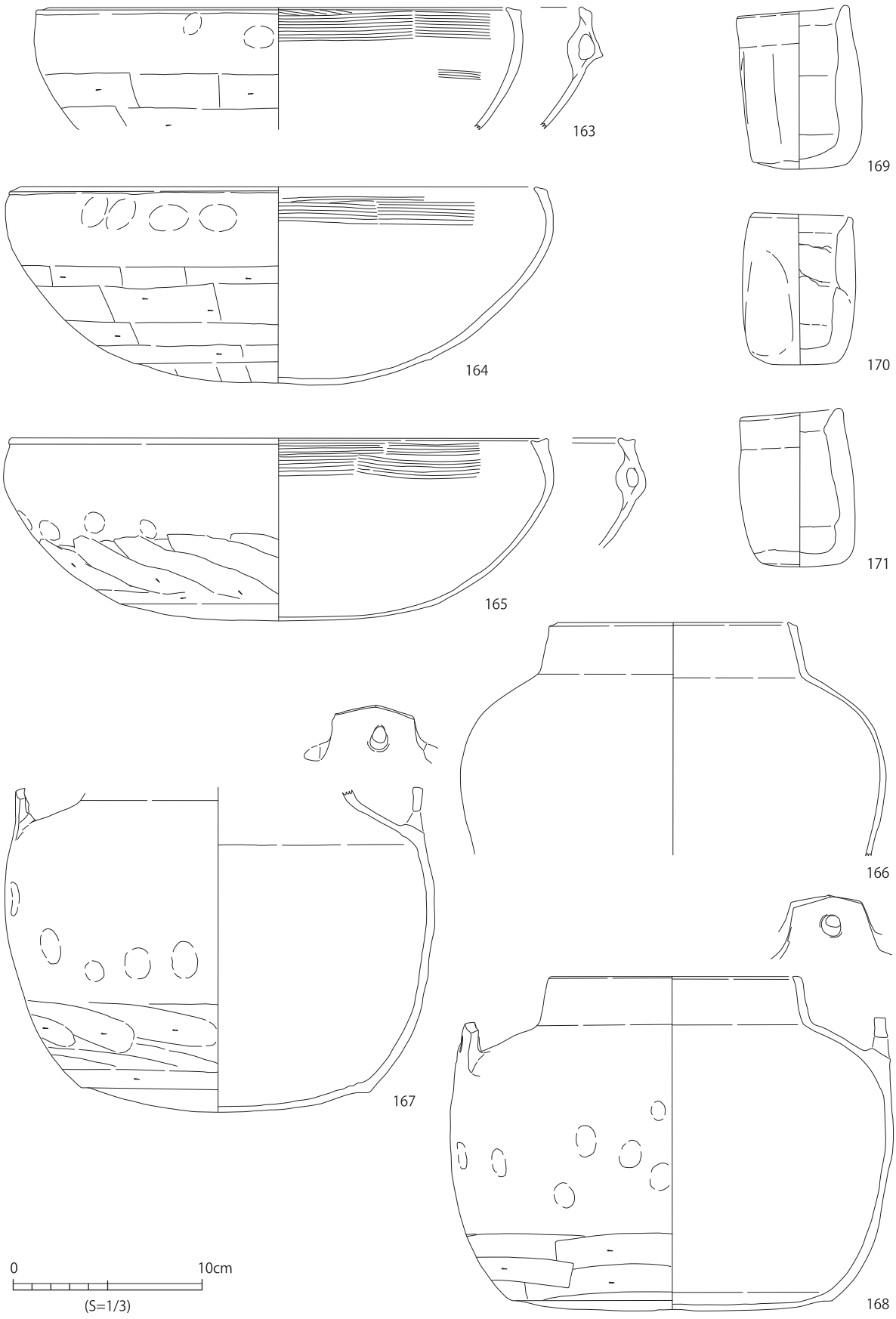


図 35　389SK 出土陶磁器 5（S=1/3）

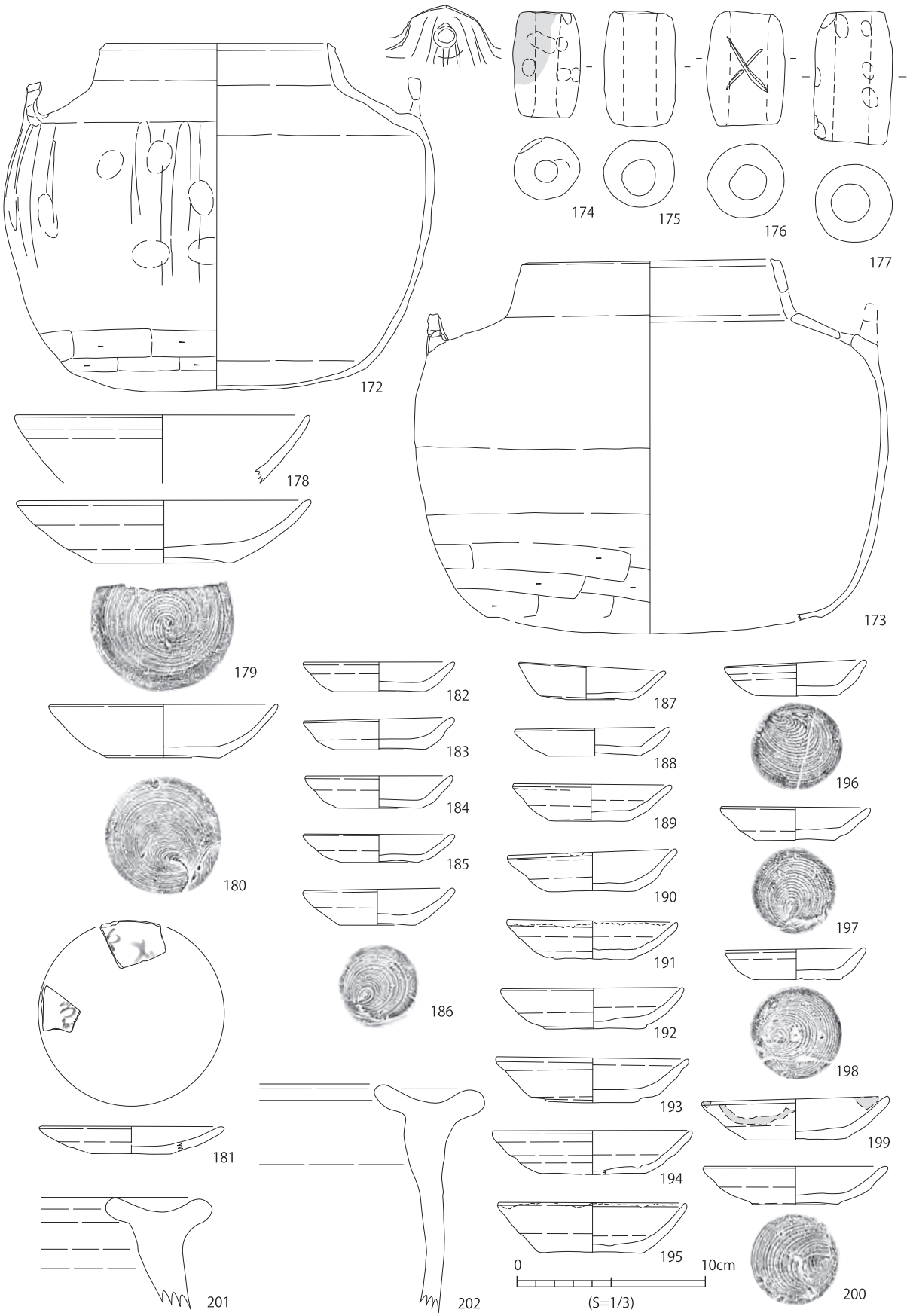


図 36　389SK 出土陶磁器 6（S=1/3）

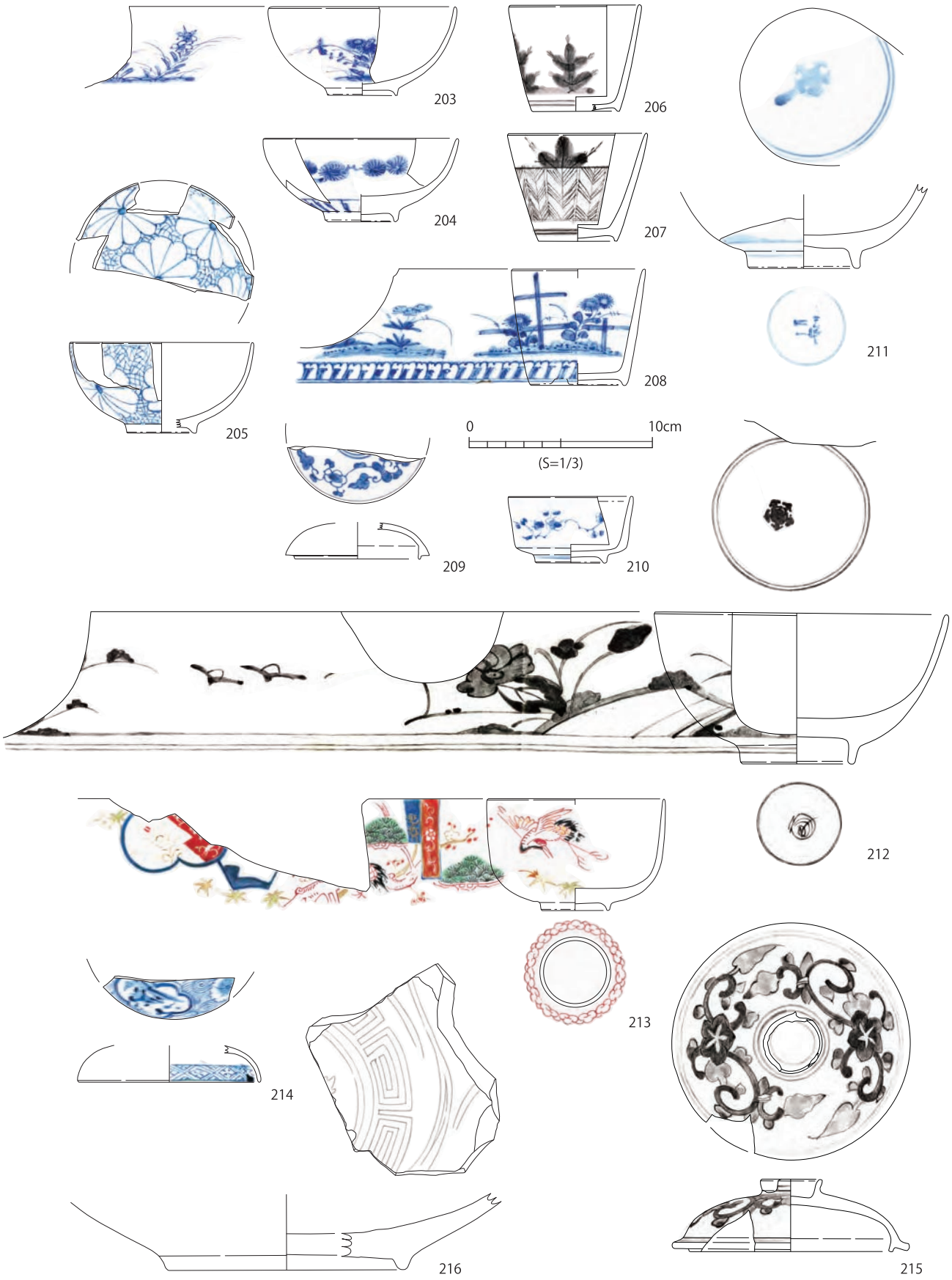


図 37　381SK 出土陶磁器 1（S=1/3）



図 38　381SK 出土陶磁器 2（S=1/3）

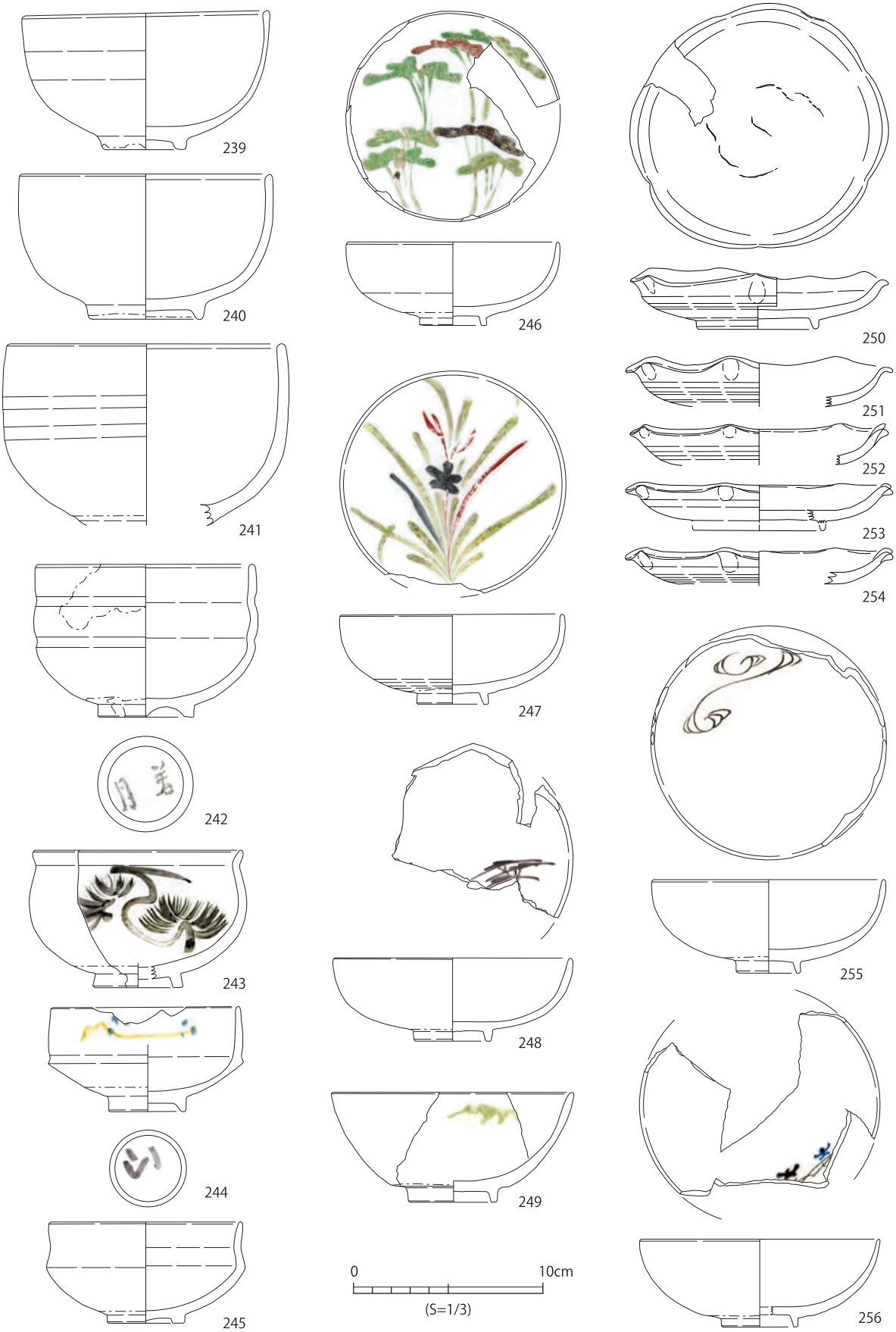


図 39　381SK 出土陶磁器 3（S=1/3）

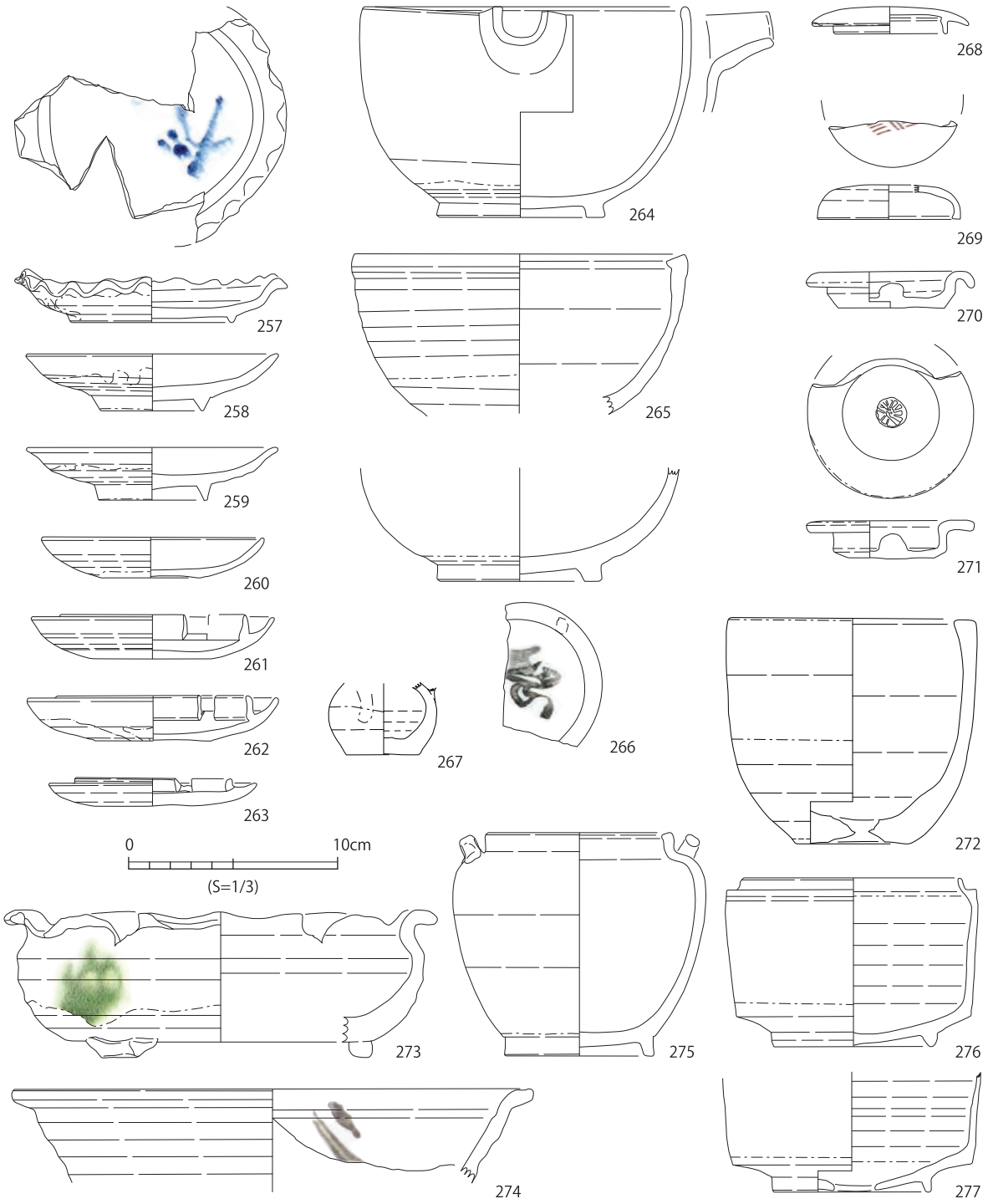


図 40　381SK 出土陶磁器 4（S=1/3）

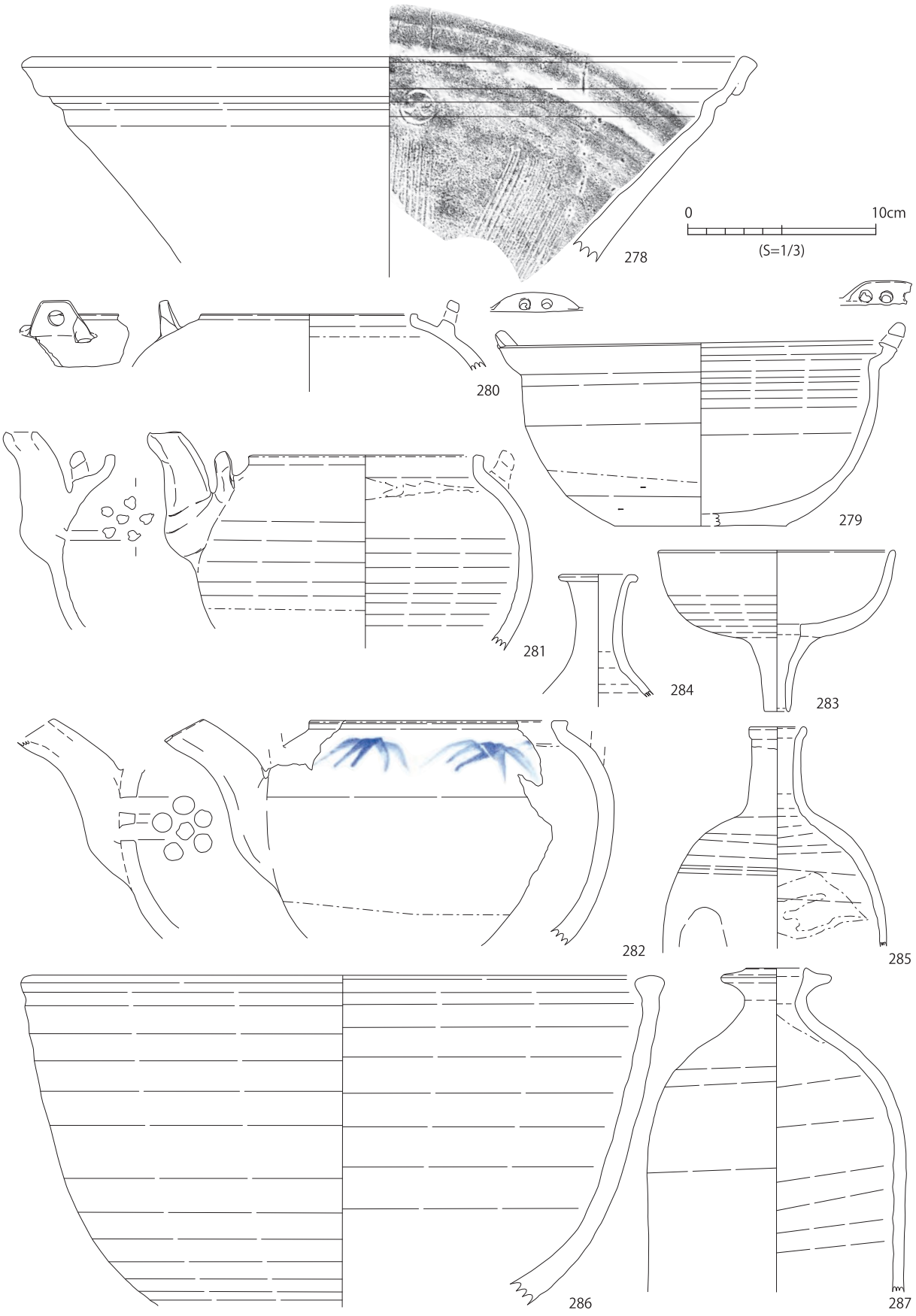


図 41　381SK 出土陶磁器 5（S=1/3）

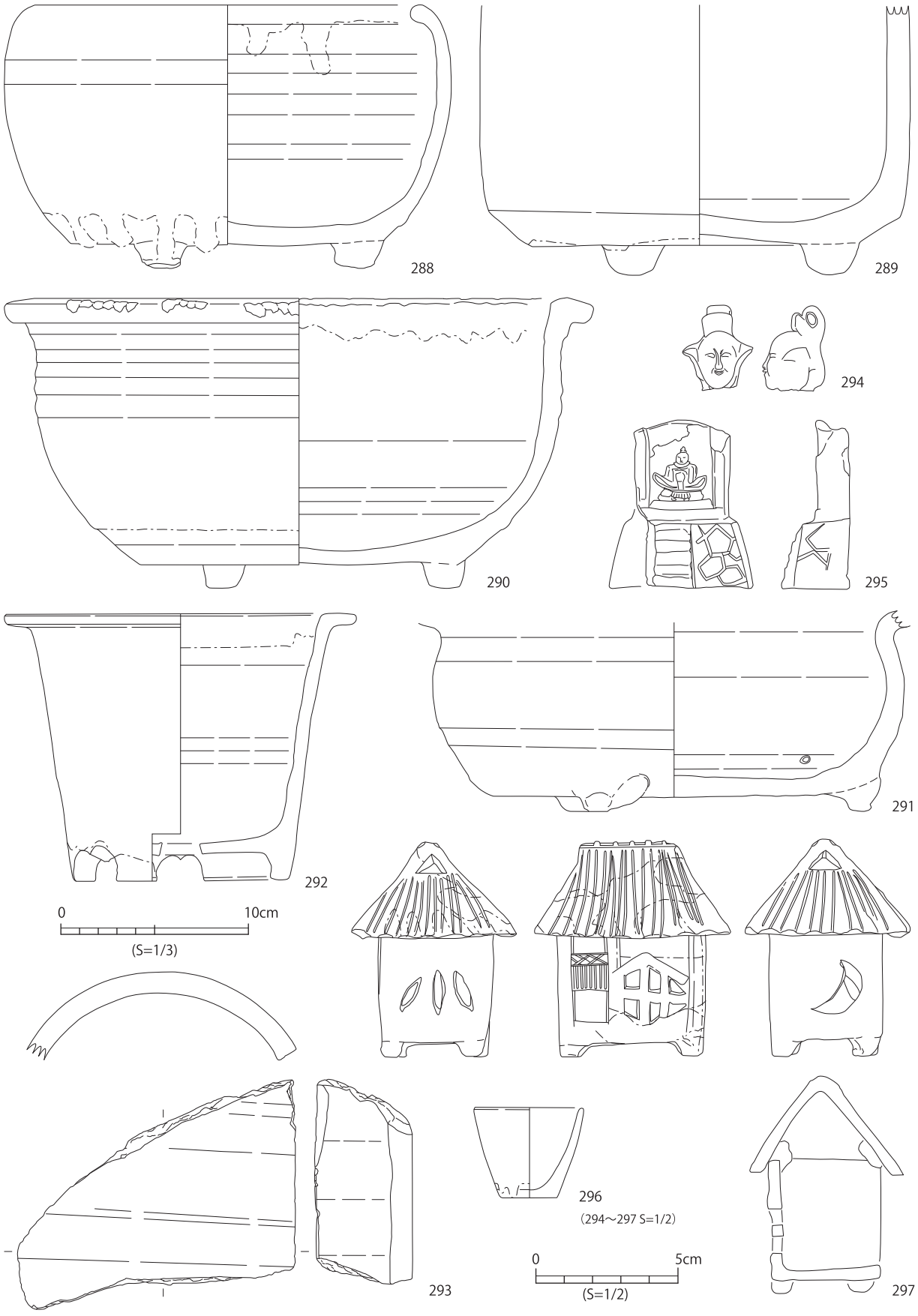


図 42　381SK 出土陶磁器 6（S=1/3）

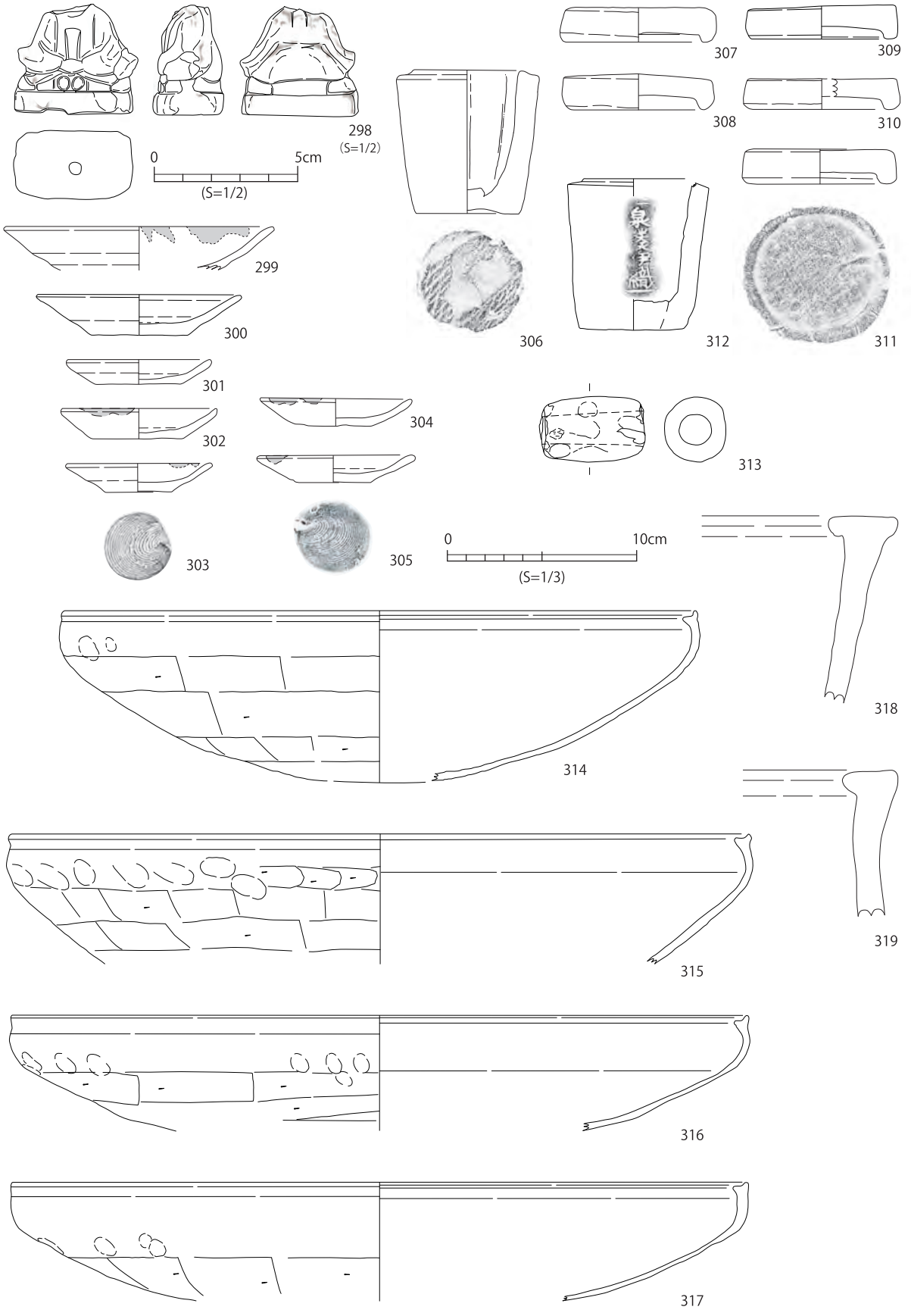


図 43　381SK 出土陶磁器 7（S=1/3）

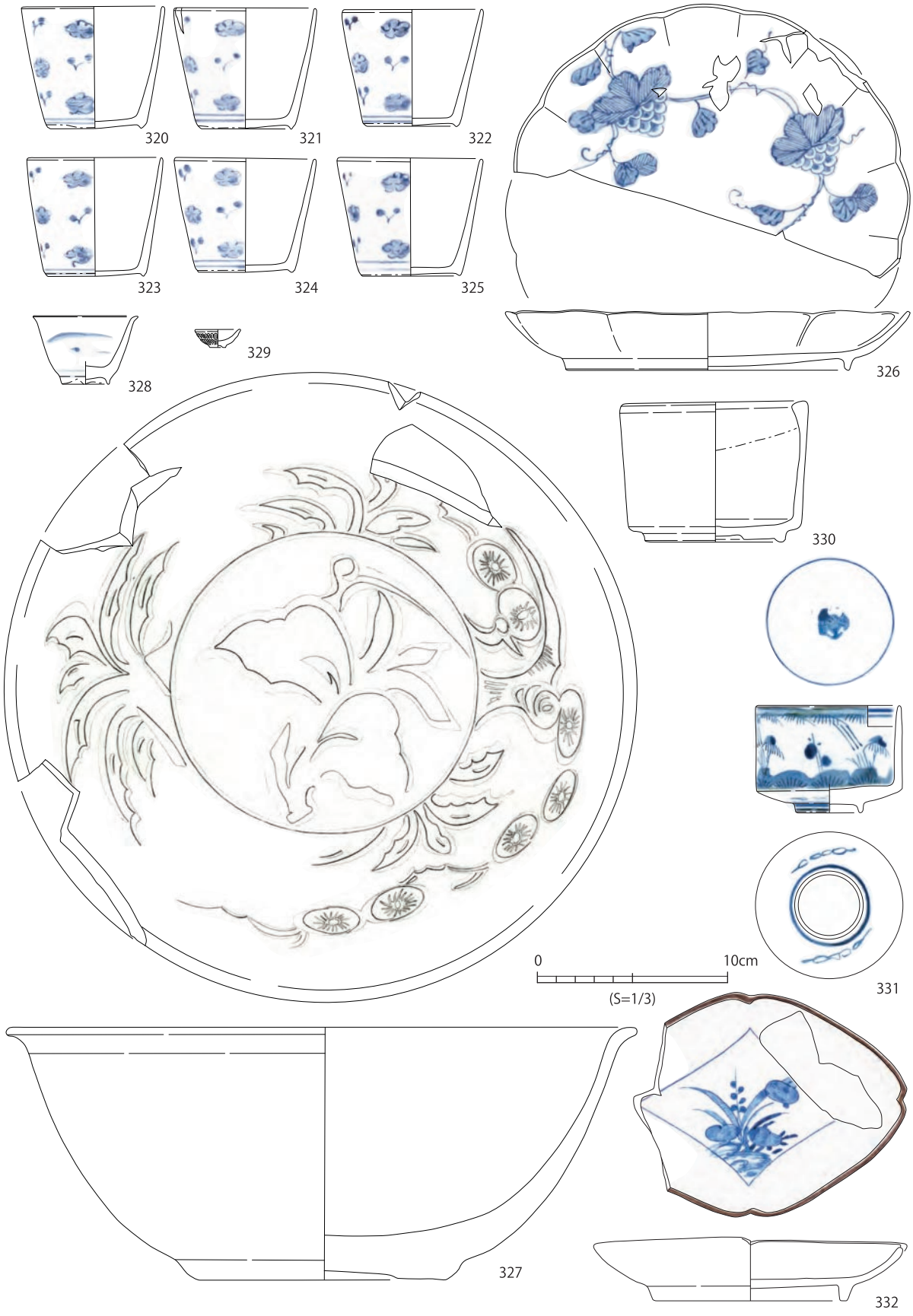


図 44　492SK 出土陶磁器 1（S=1/3）

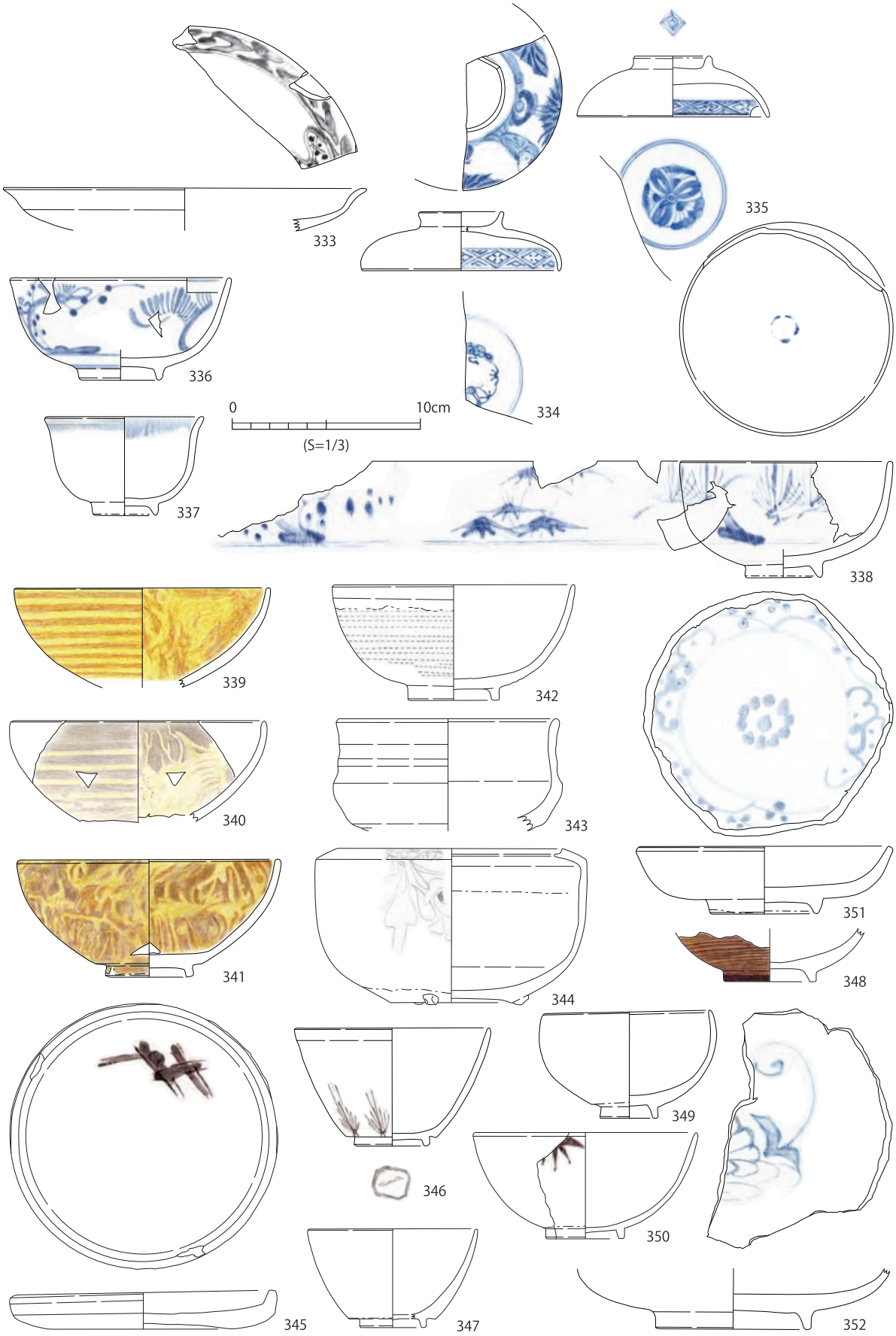


図 45　492SK 出土陶磁器 2（S=1/3）

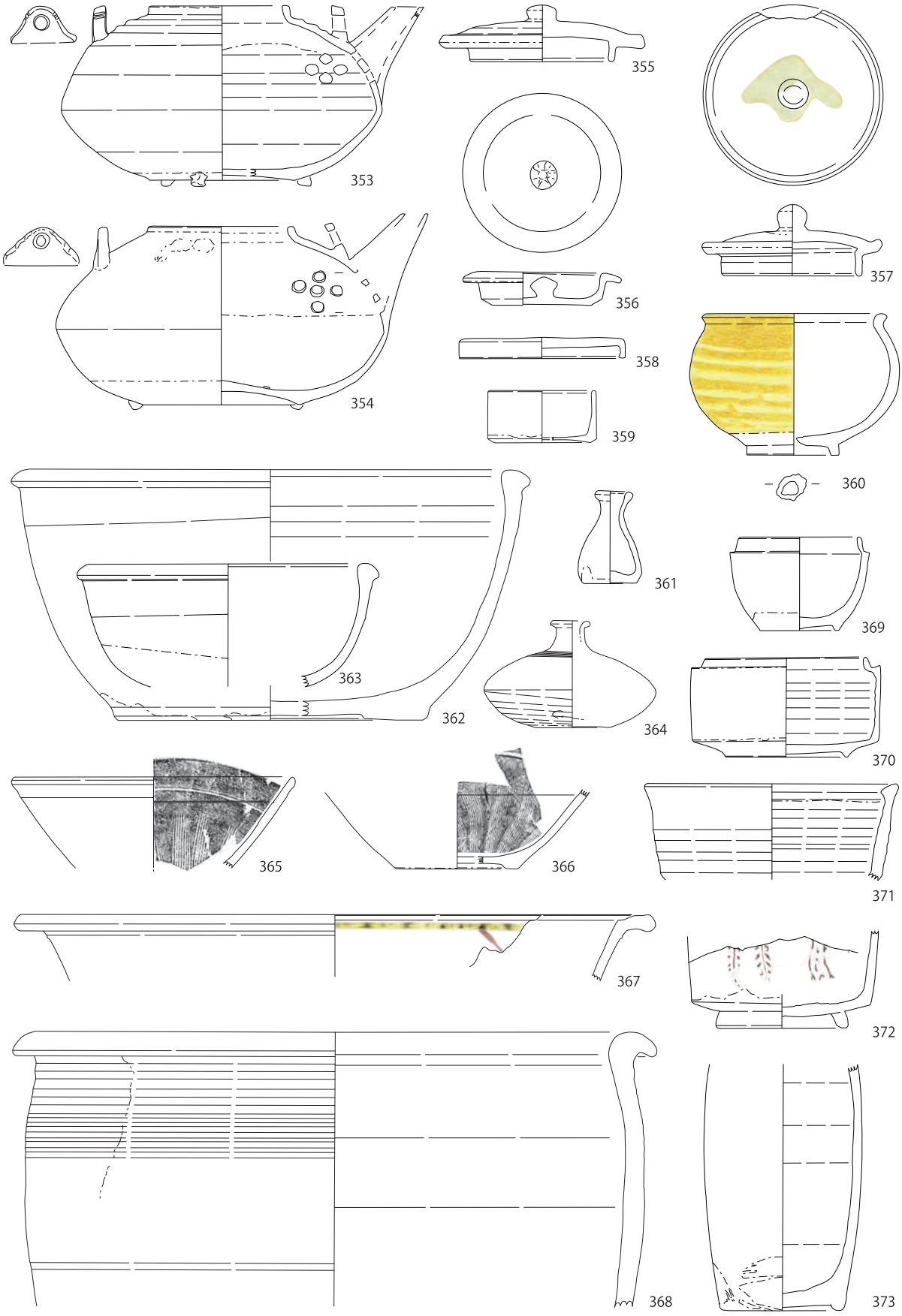


図 46　492SK 出土陶磁器 3（S=1/3）

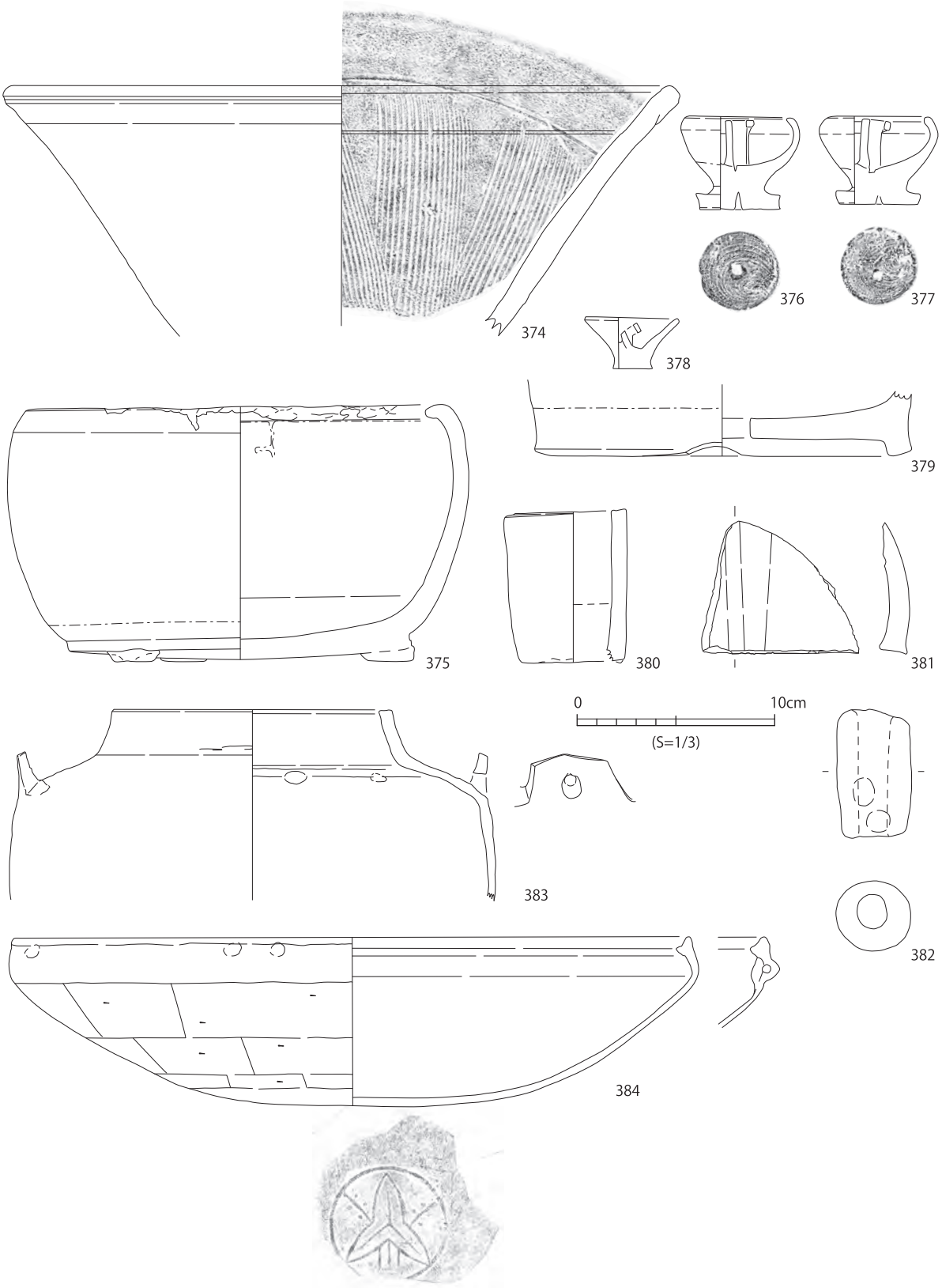


図 47　492SK 出土陶磁器 4（S=1/3）

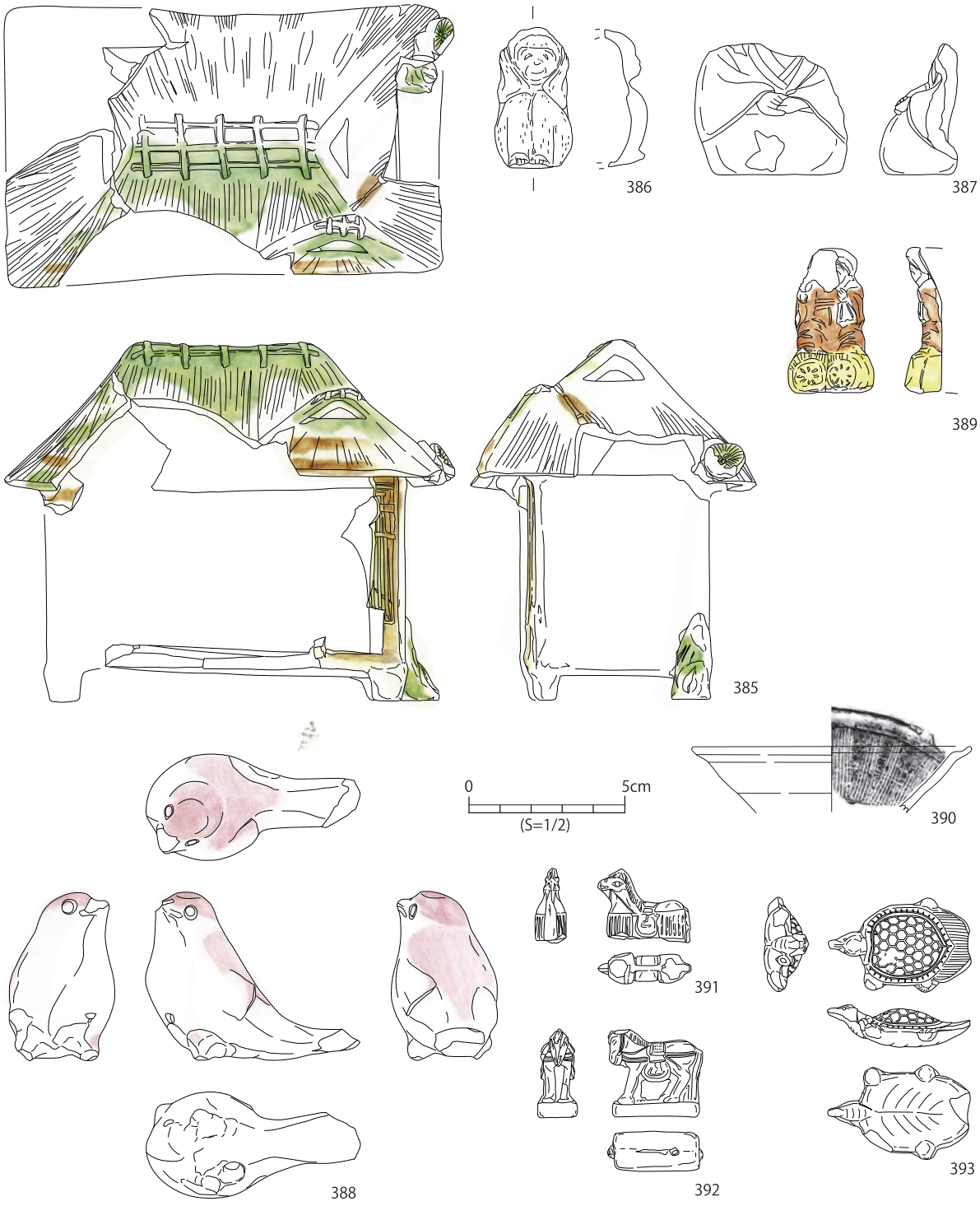


図 48　492SK 出土陶磁器 5（S=1/2）

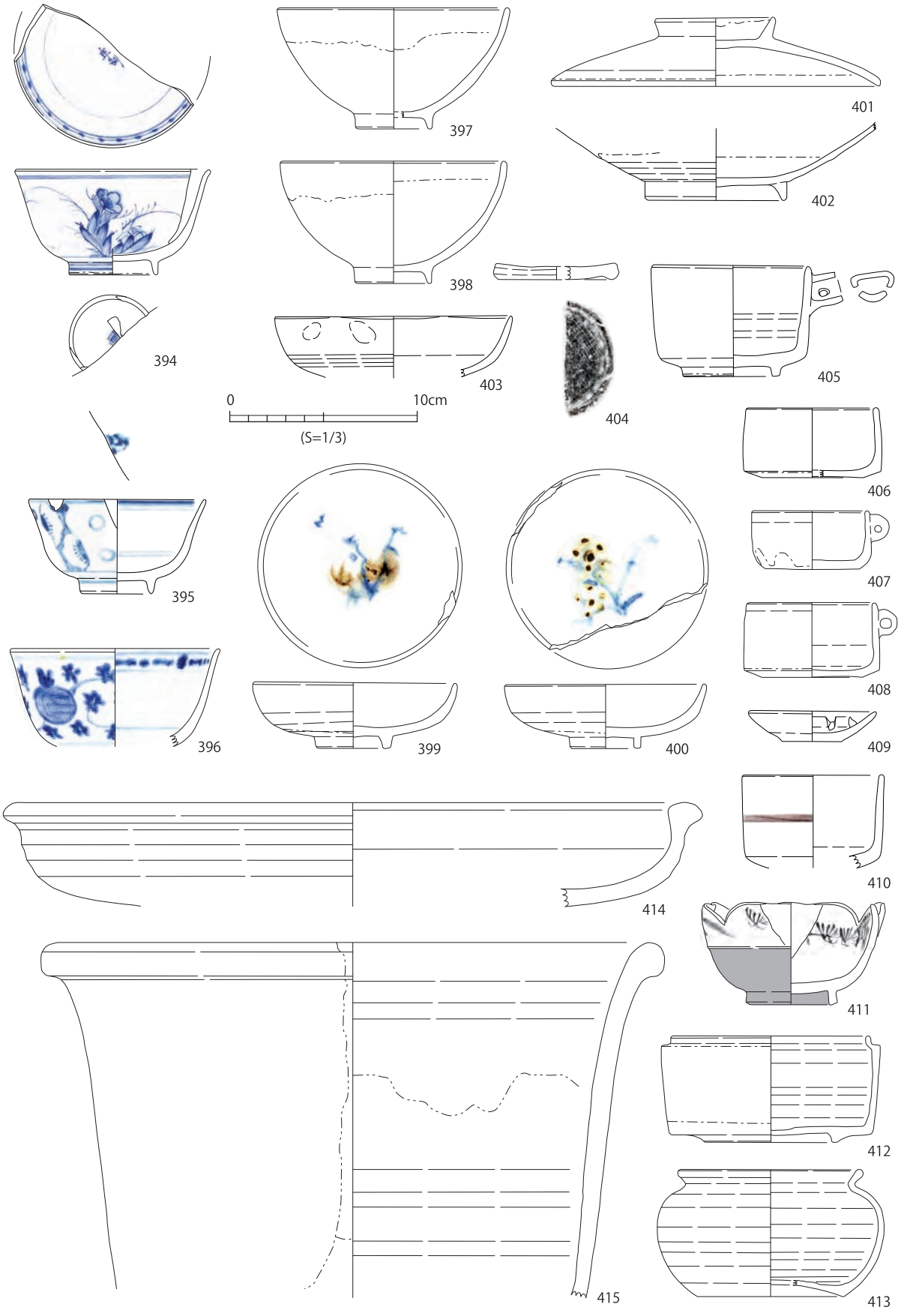


図 49　387SKSK 出土陶磁器 1（S=1/3）

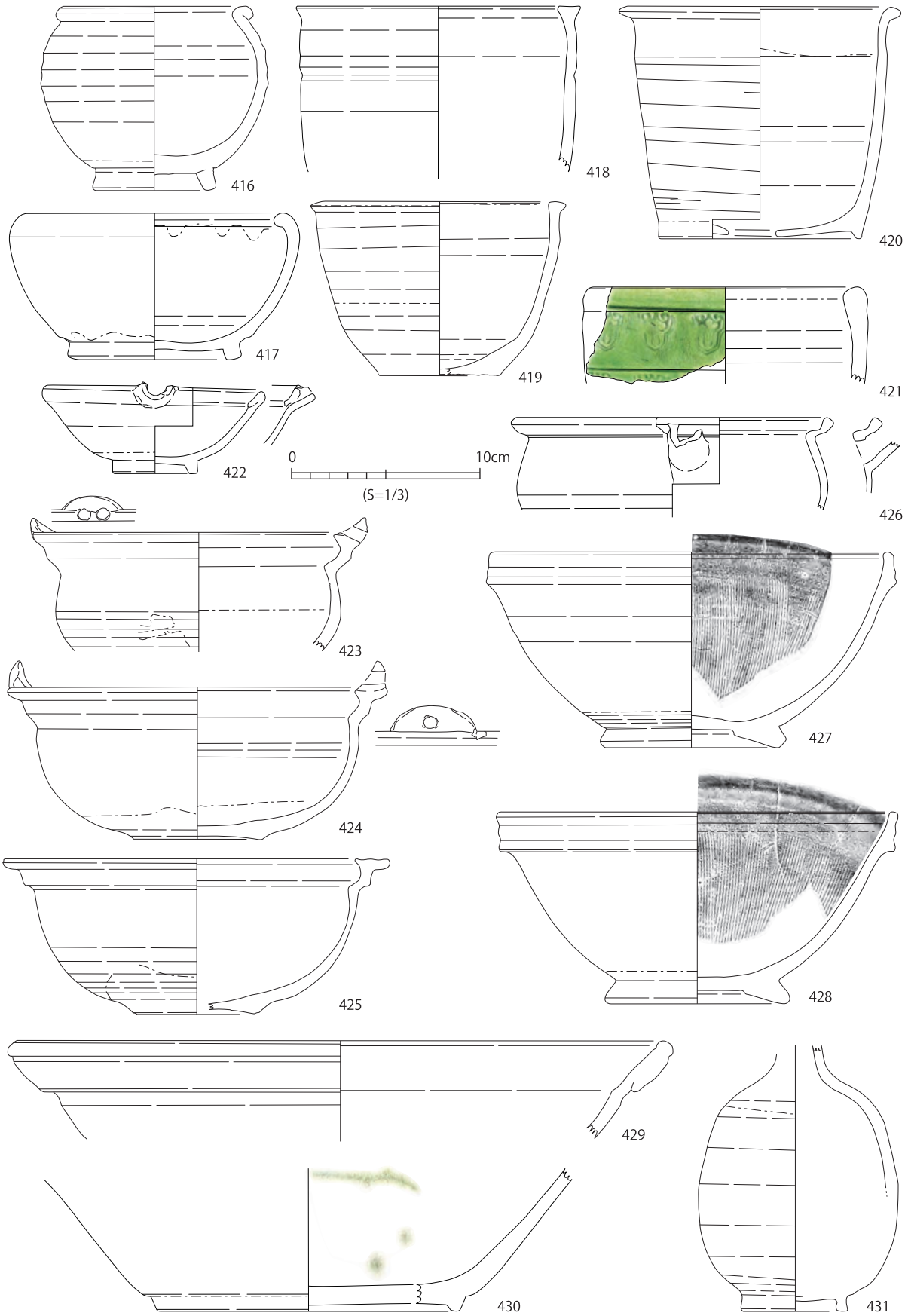


図 50　387SKSK 出土陶磁器 2（S=1/3）

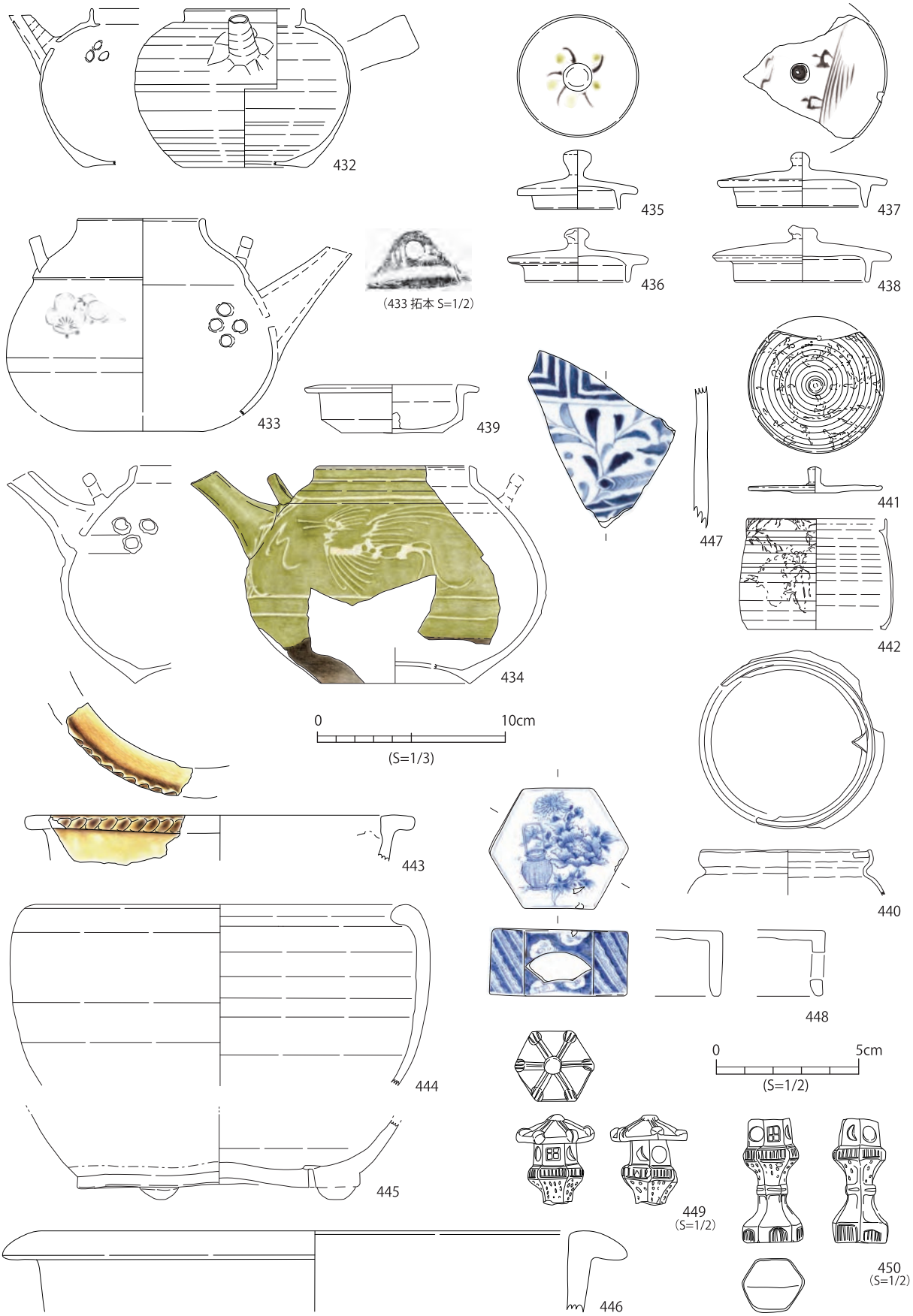


図 51　387SKSK 出土陶磁器 3（S=1/3）

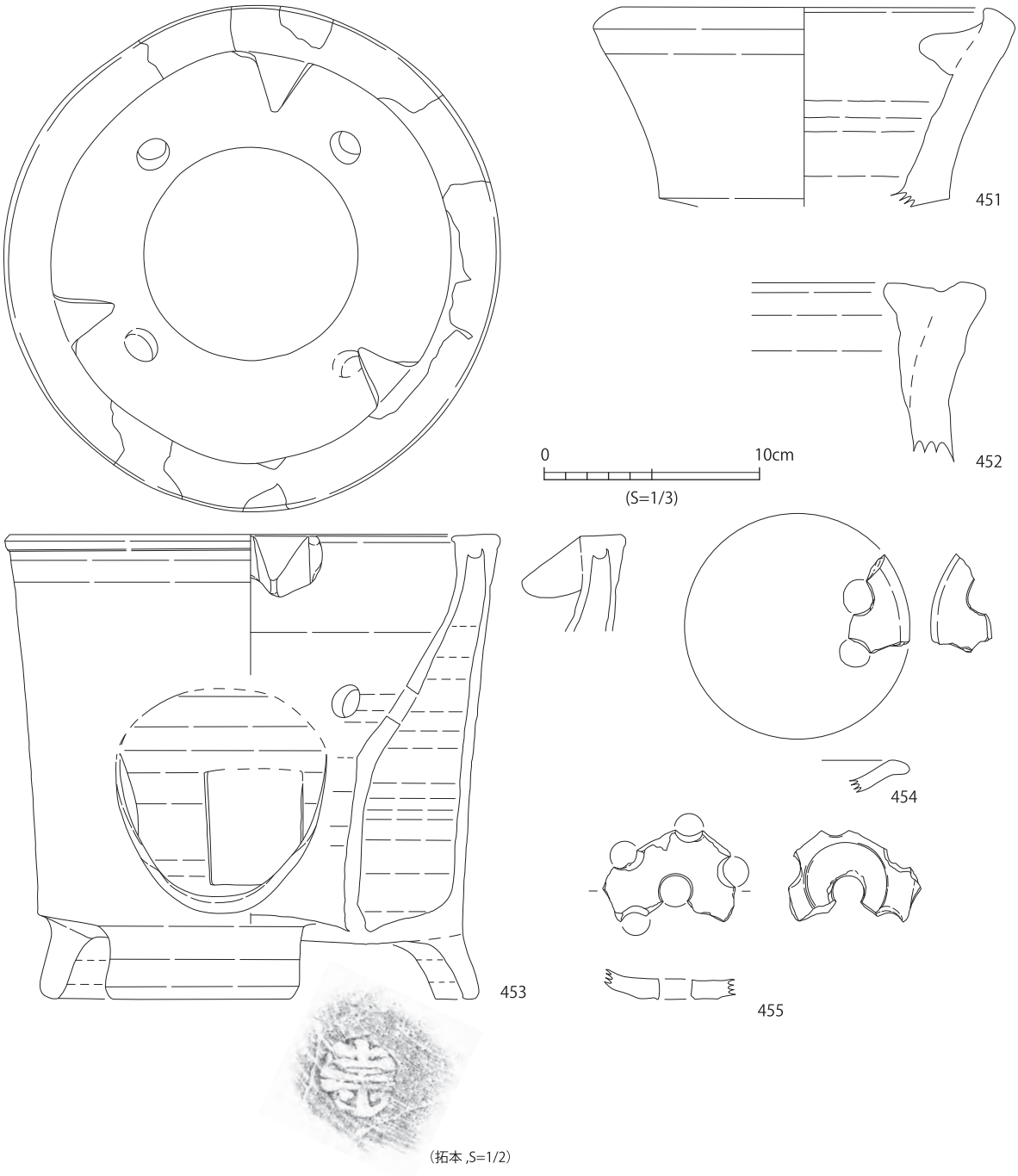


図 52　387SKSK 出土陶磁器 4（S=1/3）

紀後葉～ 19 世紀初頭の時期が主体であり、灰釉碗（538,539）など 17 世紀末～ 18 世紀前葉の資料が混入していると考えられる。

京・信楽系では柳茶碗（541）、小杉碗（542）上絵付筒形湯呑（535）などがある。焼塩壺は「泉湊伊織」刻印のある身 C 類（567,569）身 D 類（568）、蓋 B 類（566）がある。調理具では瓦質鍋（550）のほか、土師質茶釜形鍋（羽無釜）、焙烙（J2 類）がある。玩具類（578 ～ 585）が比較的まとまって出土しており、土製犬（582,583）、磁器製上絵付鶏（585）などがある。

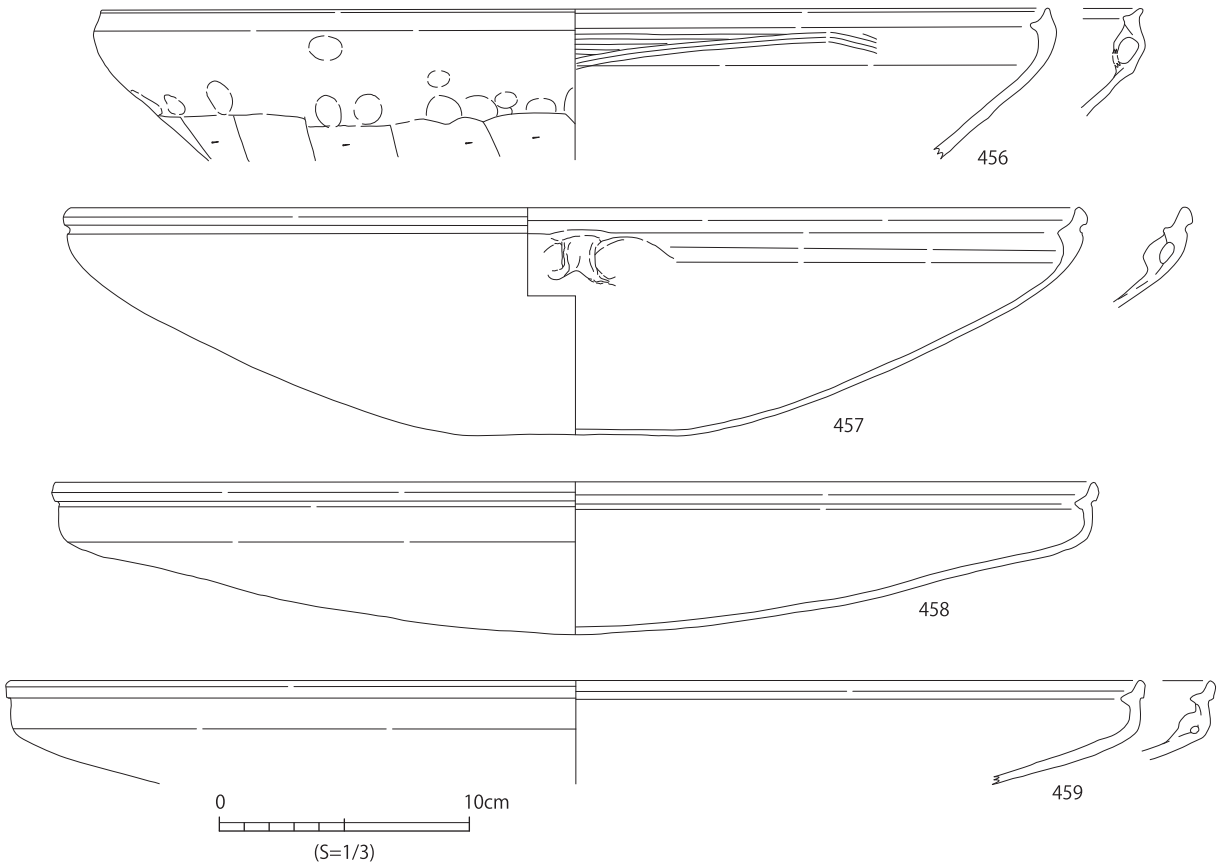


図 53　387SKSK 出土陶磁器 5（S=1/3）

085SK（586 ～ 609）

屋敷地境界と想定される溝（496SD）の 1.2m 西側に位置する土坑の資料である。17 世紀後葉の時期を主体に、19 世紀初頭の資料が混入していると考えられる。志野織部向付（598）1 点がある。

北東部その他土坑（610 ～ 647）・南部の遺構（701 ～ 718）・包含層出土資料（648 ～ 700）

以下は特殊なもの、土器製品などを中心に記述する。焼塩壺（618,686）は身 A 類であり内面の変色が顕著に認められる。687 は身 C 類で「泉湊伊織」刻印があり、内面全体に黒色の付着物がある。717 は身 B 類で、「□伊織」の刻印がある。土師皿のうち 619,620,622,629 などは調整・胎土・色調などが異なり、中世に遡る可能性がある。織部向付（632）は把手、三足が付く。出土遺構は 085SK に比較的近い。639 は磁器染付の大型の鉢のような形状で、内外面に同様の文様が施されている（写真図版 遺物３）。瓦質風炉または火鉢（647）は表面を装飾し、側面に半月形削り込みで把手が作り出されている。上絵付碗（653,654）、小瓶（656）は胎土等より判断して瀬戸窯産と思われる。玩具類（691 ～ 700）では芥子面（696）や土製猿（698）、陶製猿（699）などがある。702 は珉平焼小判型皿、716 染付碗はガラス継の痕跡があり、高台内に朱書が残る。鉄釉火鉢（718）は底部に穿孔があり、内面に墨書が認められる。

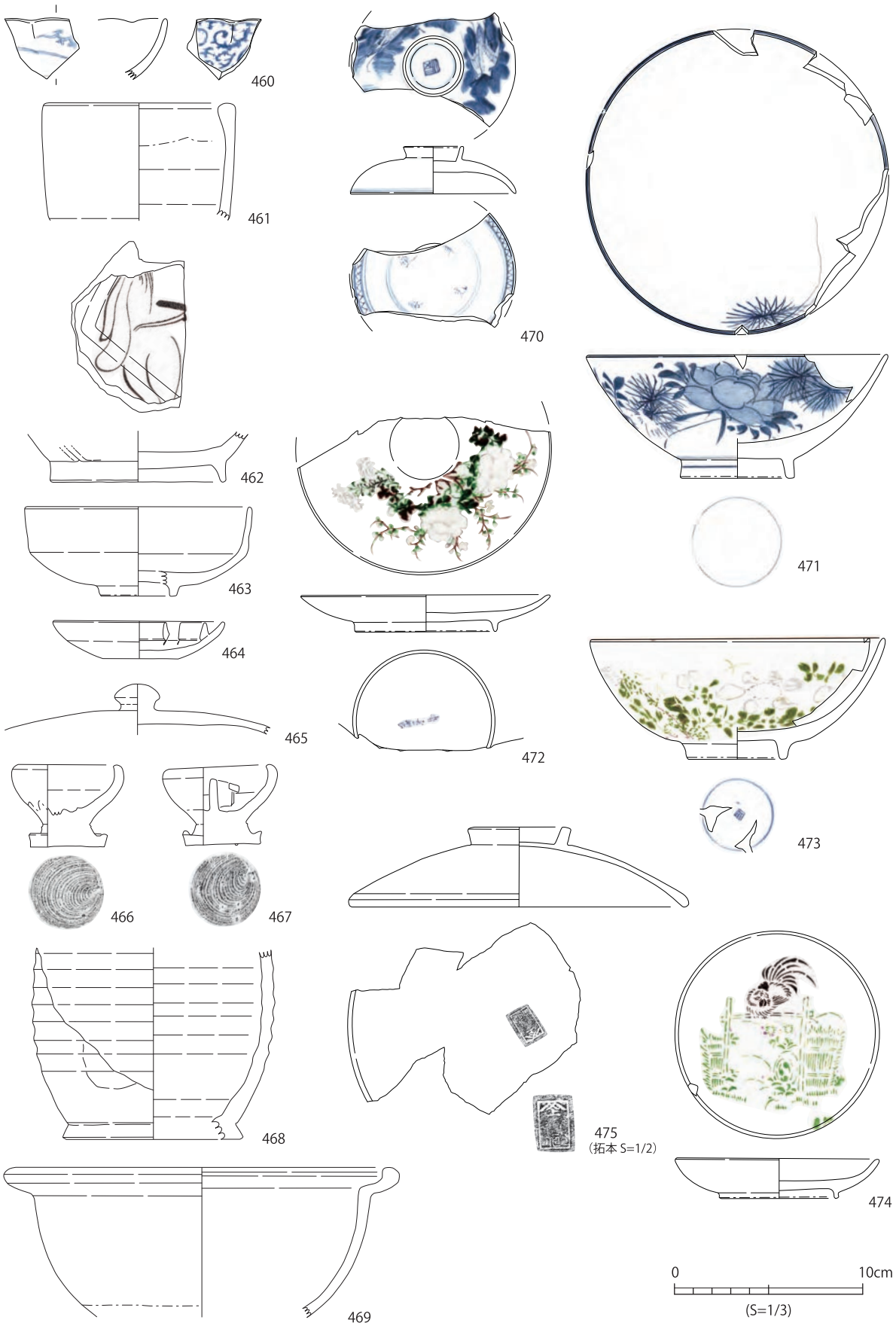


図 54　413SKSK 出土陶磁器 1（S=1/3）

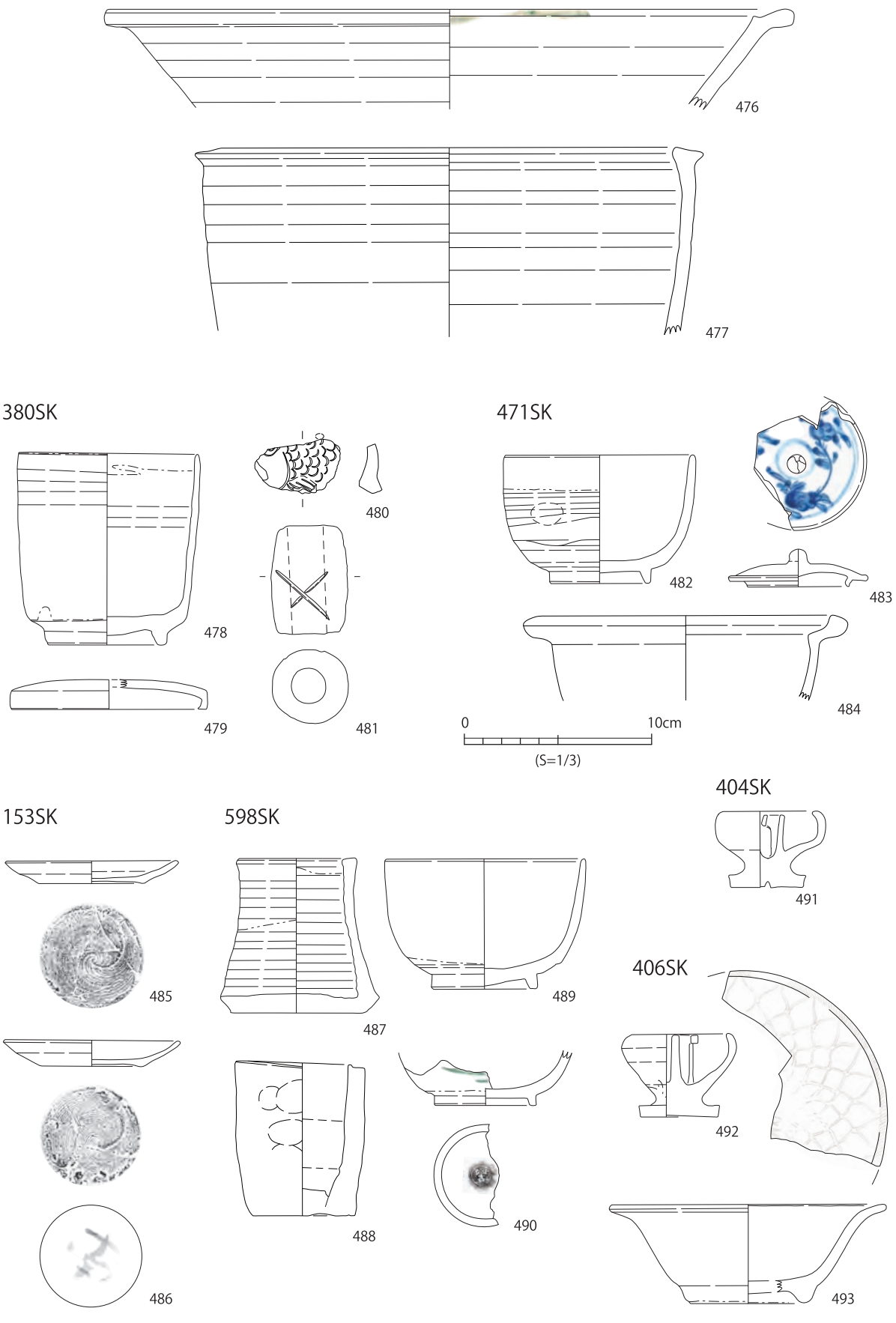


図 55　北西部土坑群 出土陶磁器 1（S=1/3）

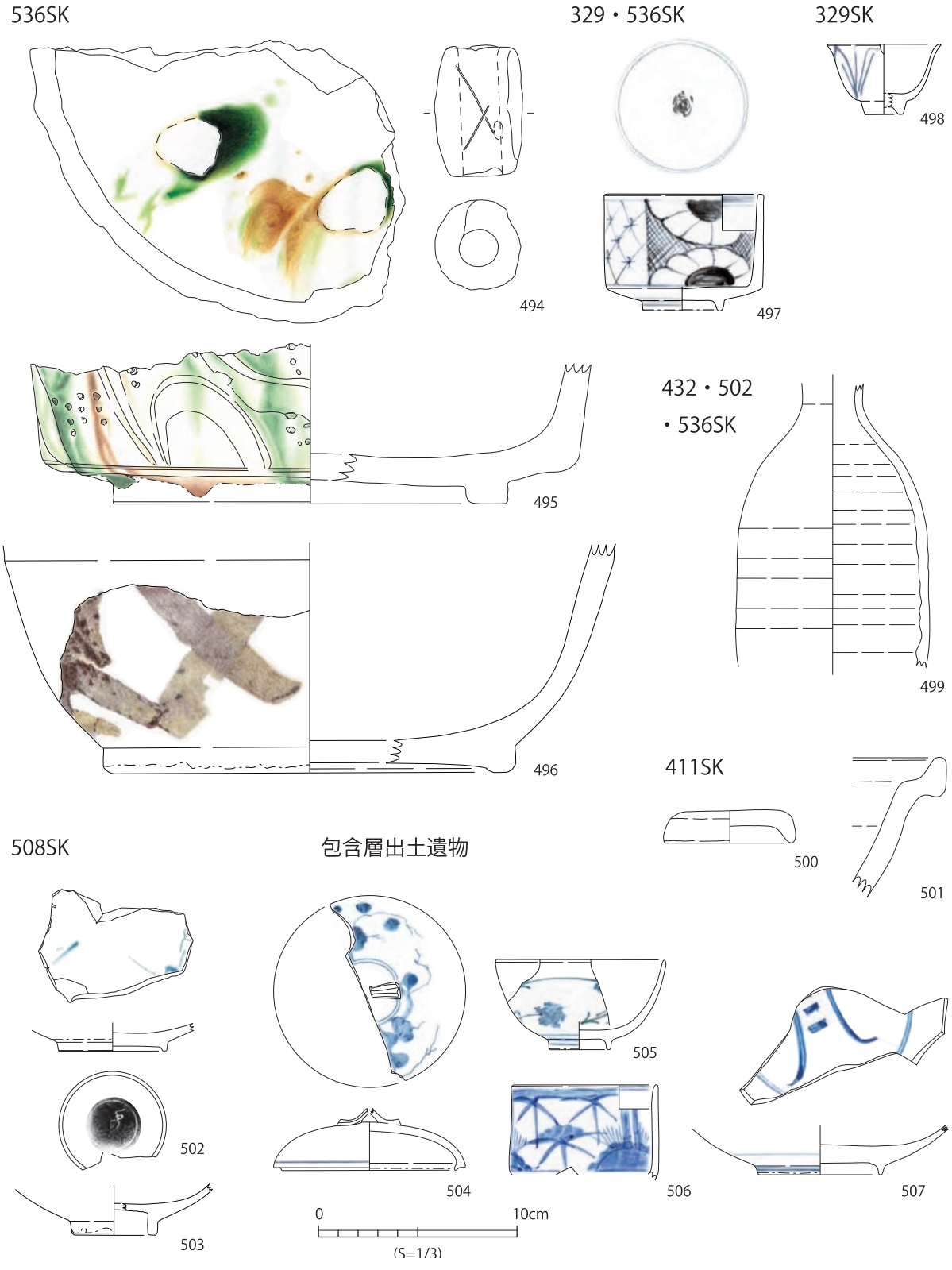


図 56　北西部土坑群 出土陶磁器 2（S=1/3）

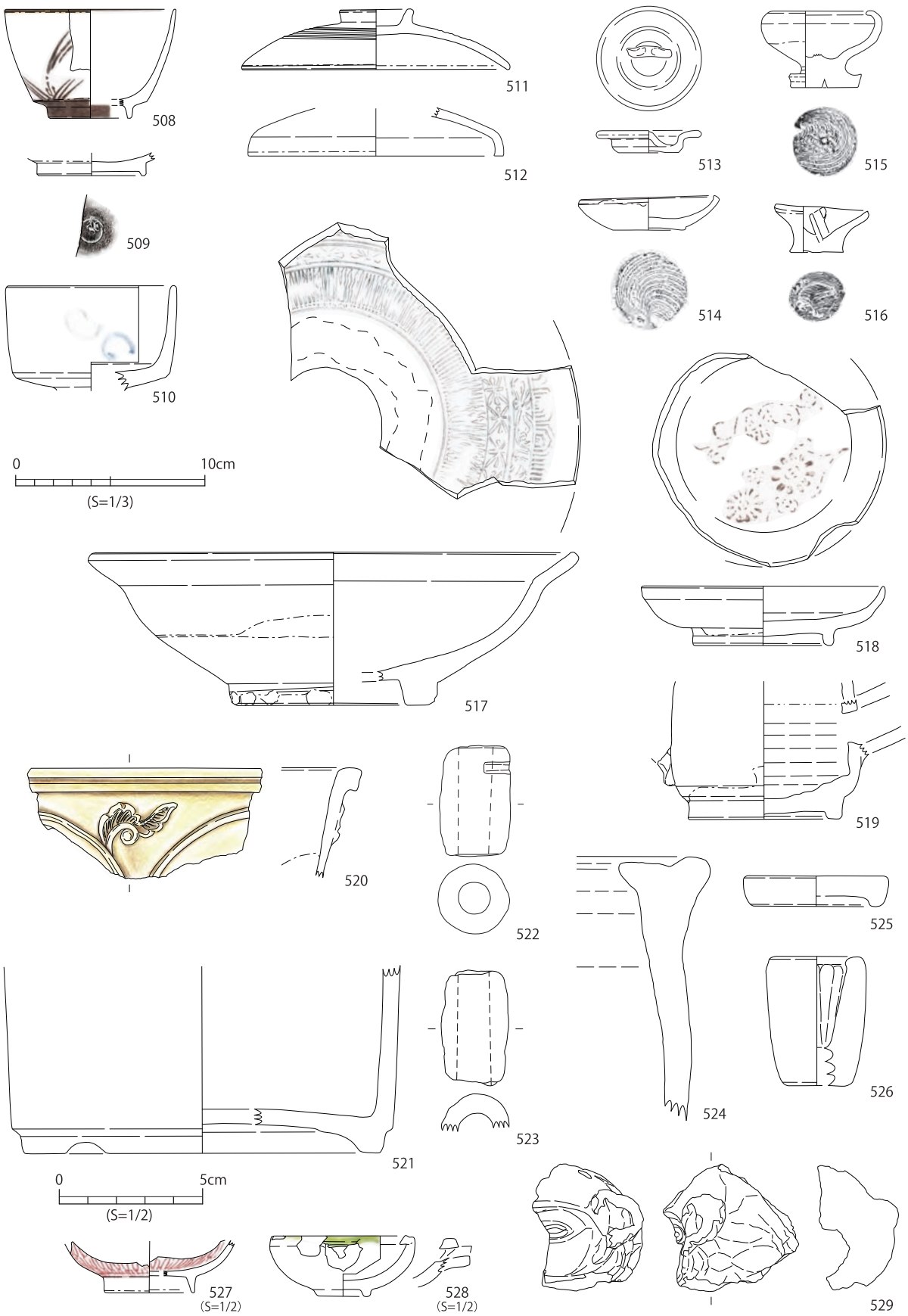


図 57　包含層（北西部土坑群）出土陶磁器（S=1/3）

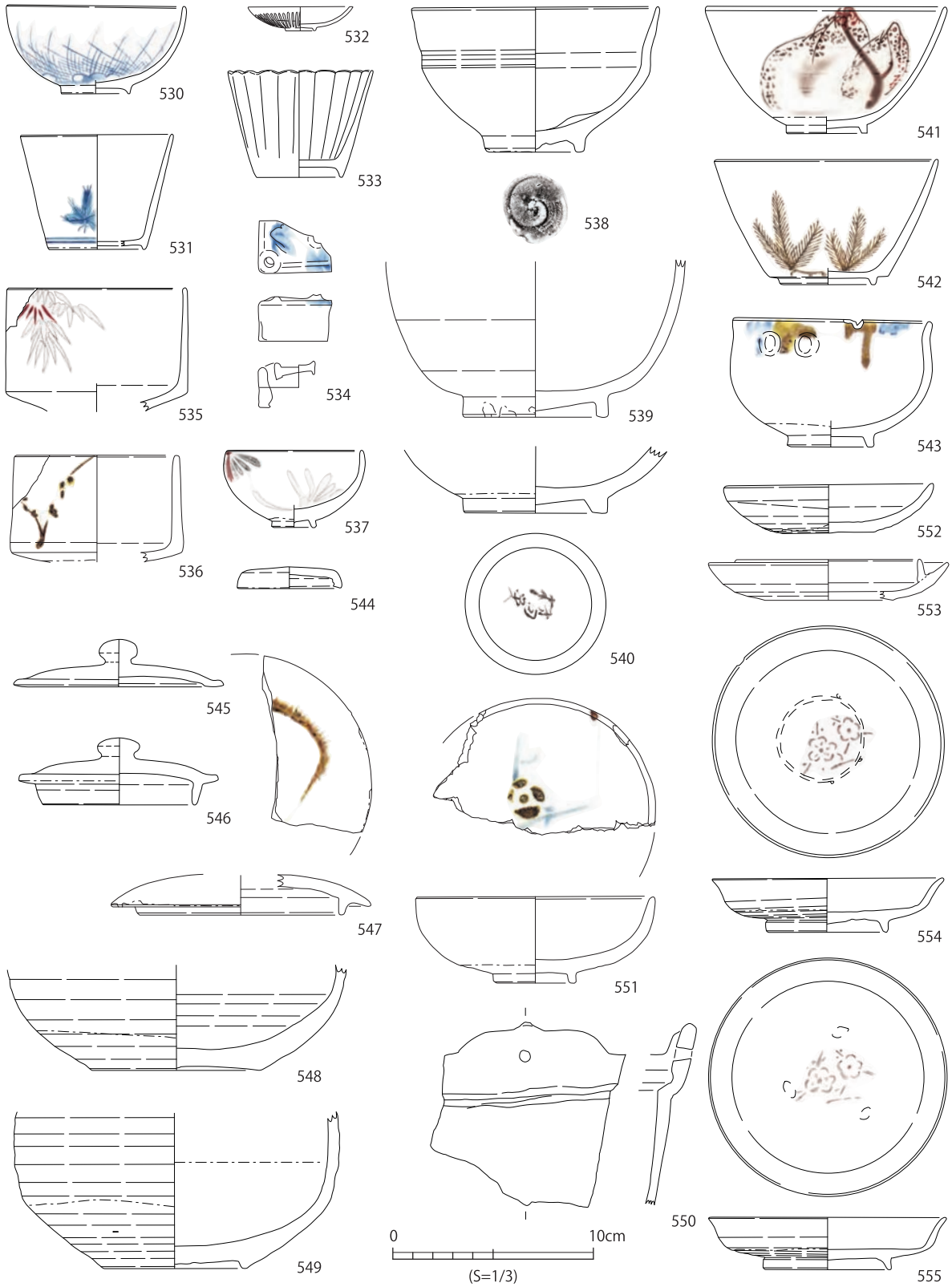


図 58　110SKSK 出土陶磁器 1（S=1/3）

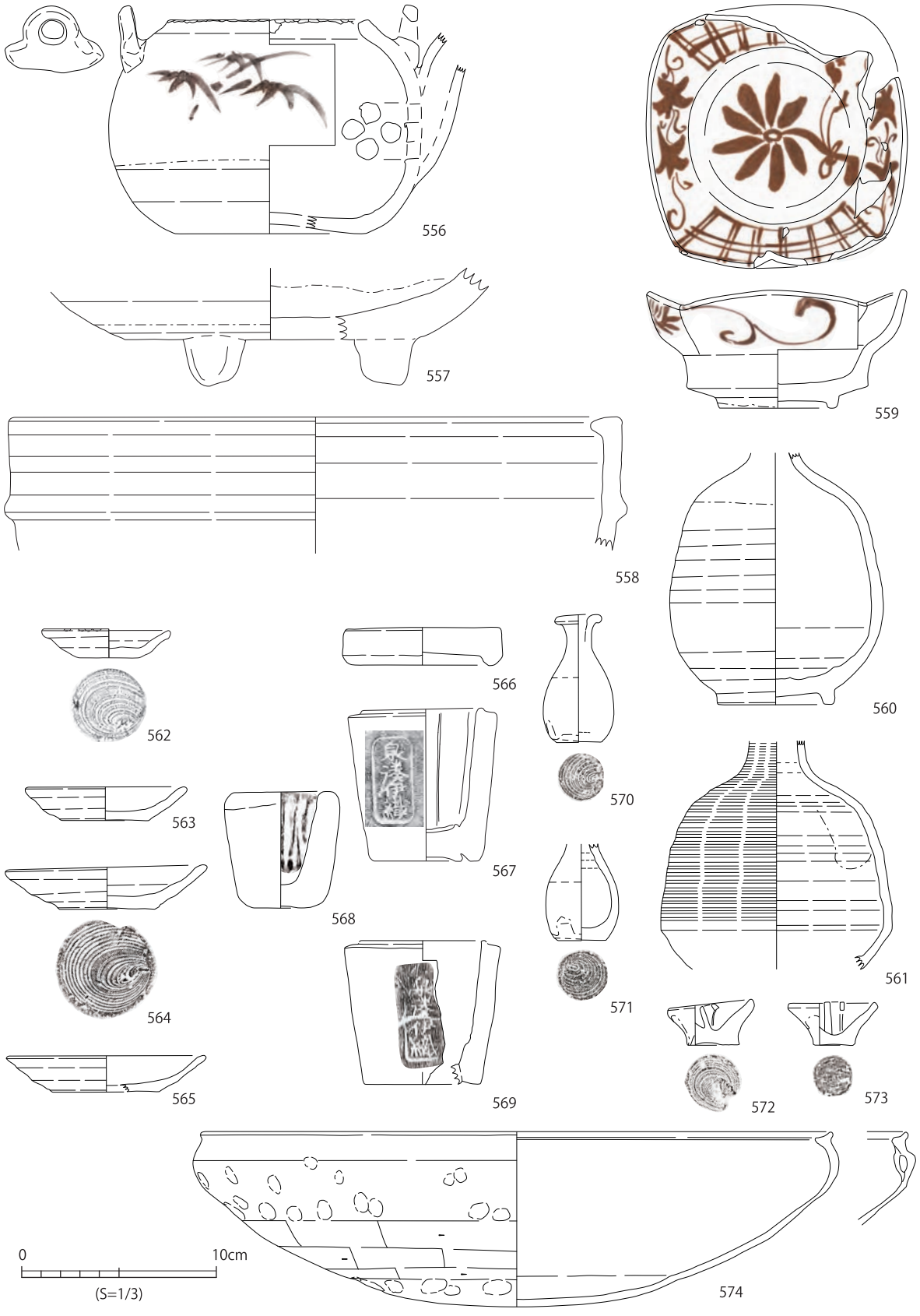


図 59　110SKSK 出土陶磁器 2（S=1/3）

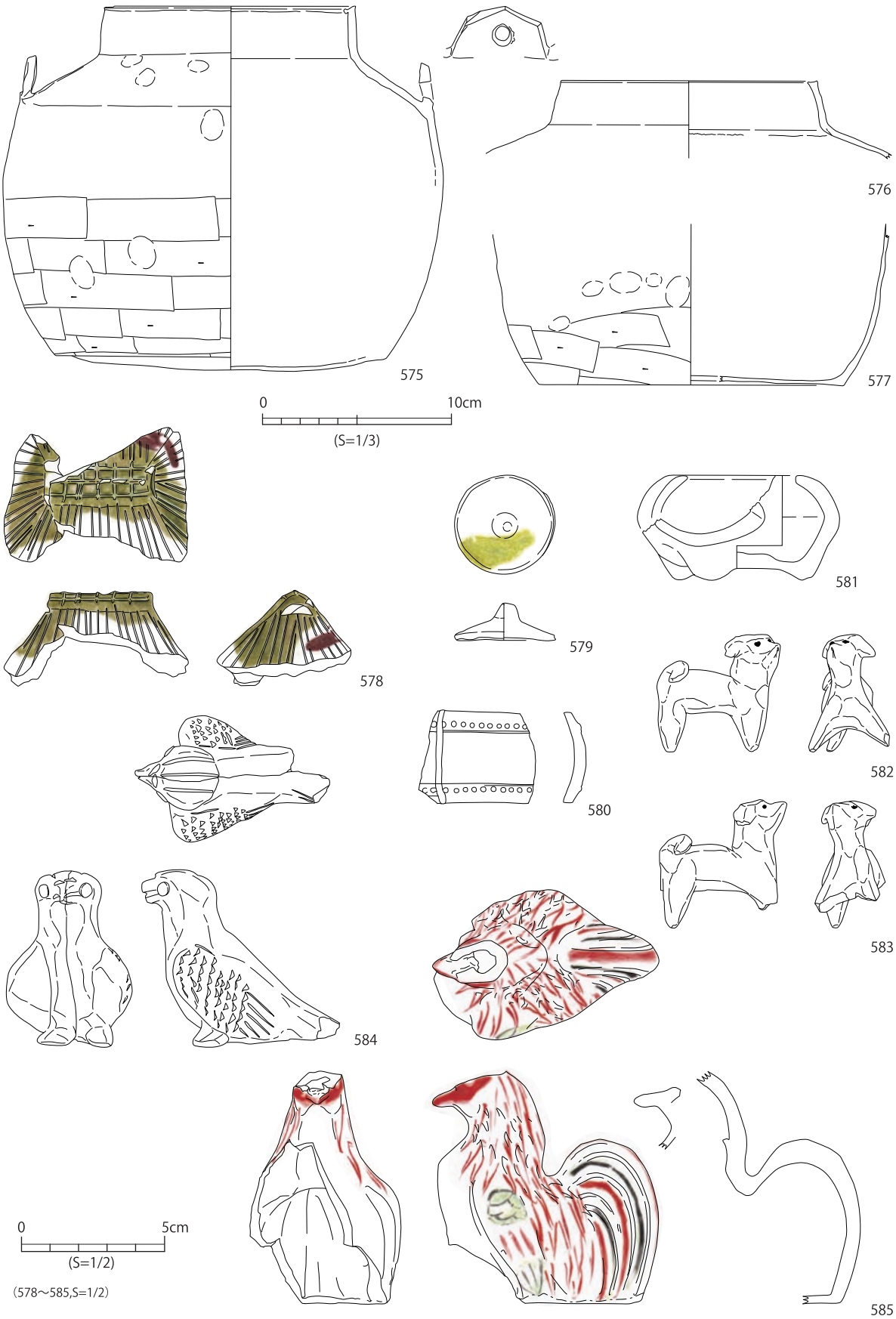


図 60　110SKSK 出土陶磁器 3（S=1/3）

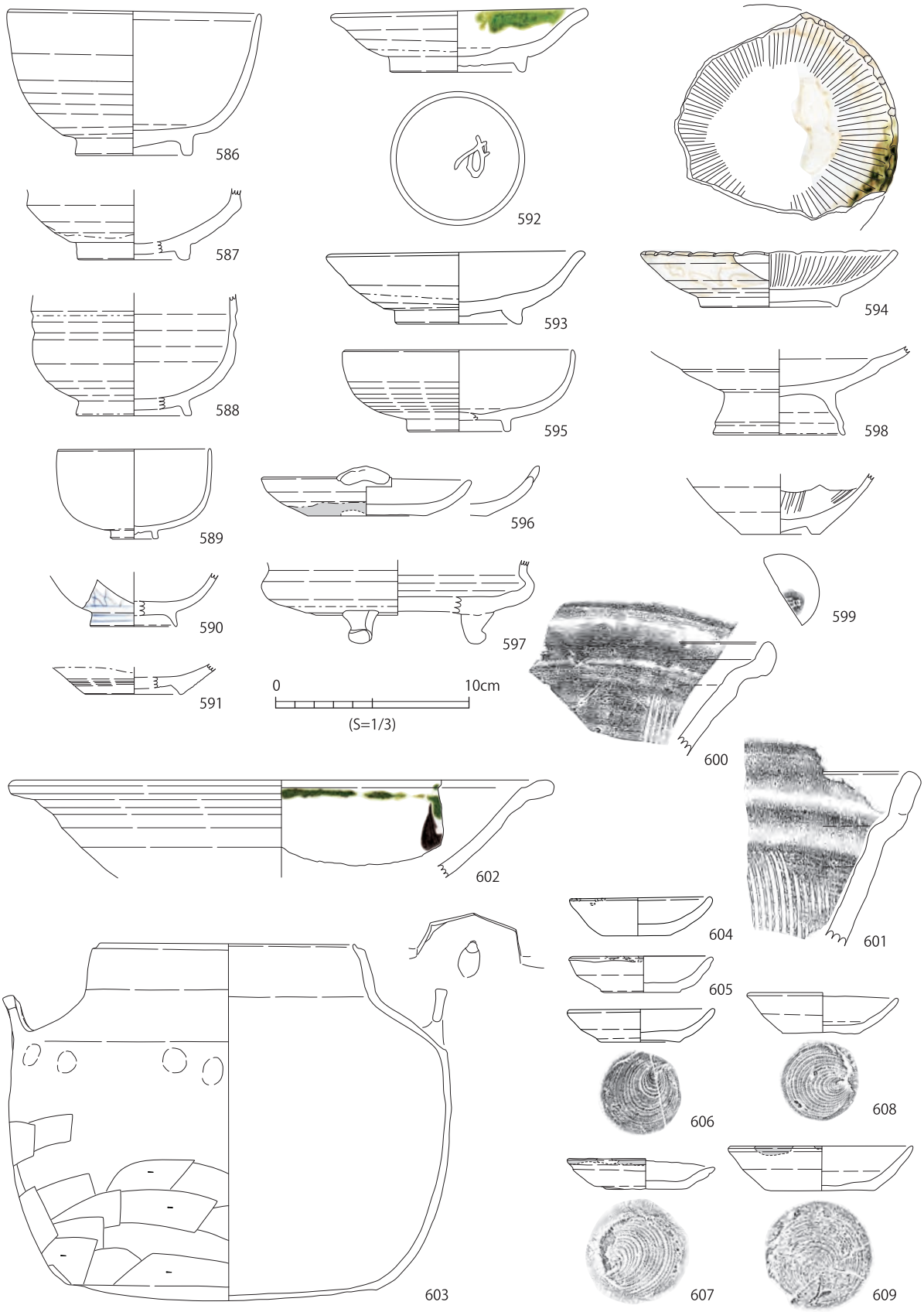


図 61　085SKSK 出土陶磁器（S=1/3）

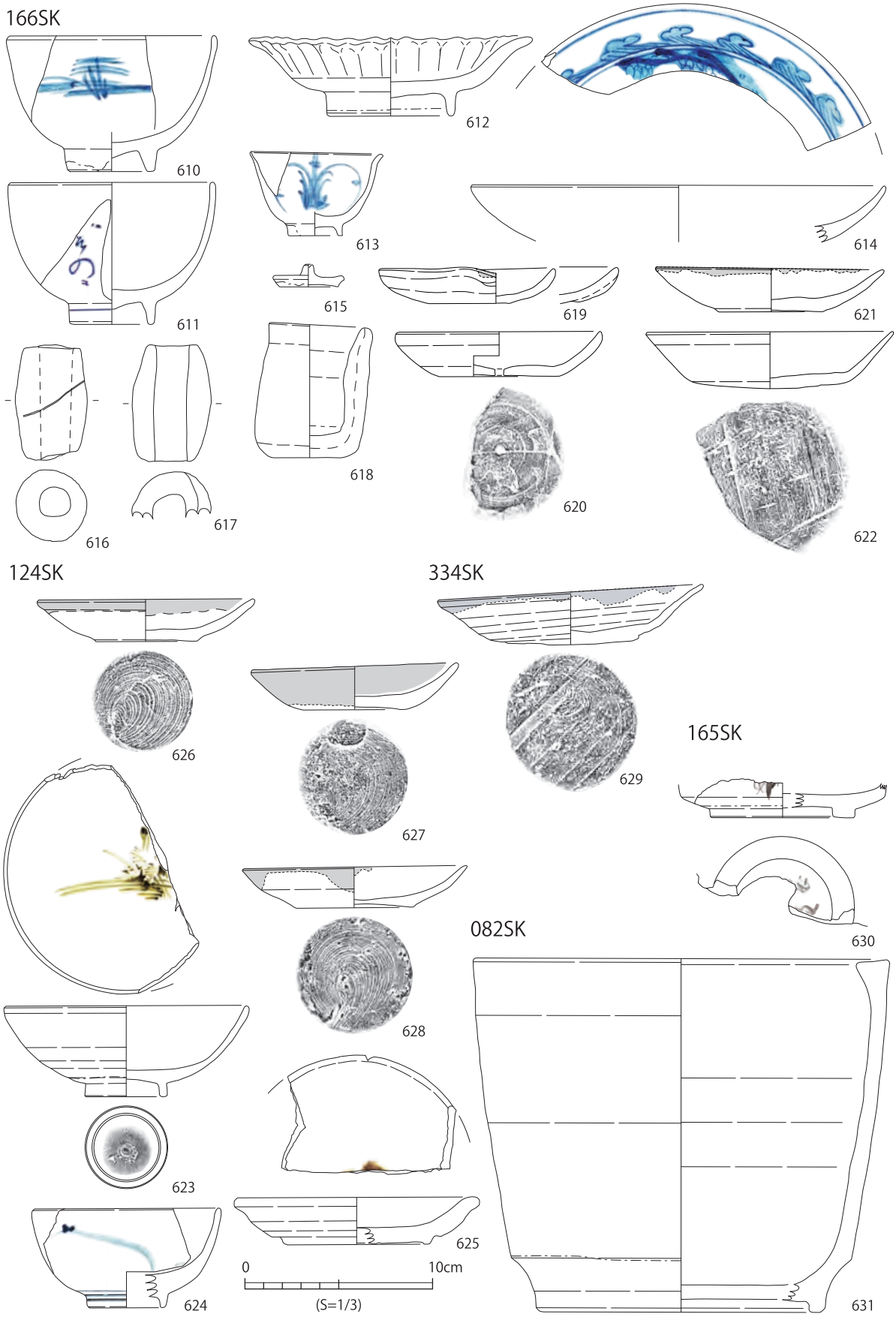


図 62　北東部土坑群 出土陶磁器 1（S=1/3）

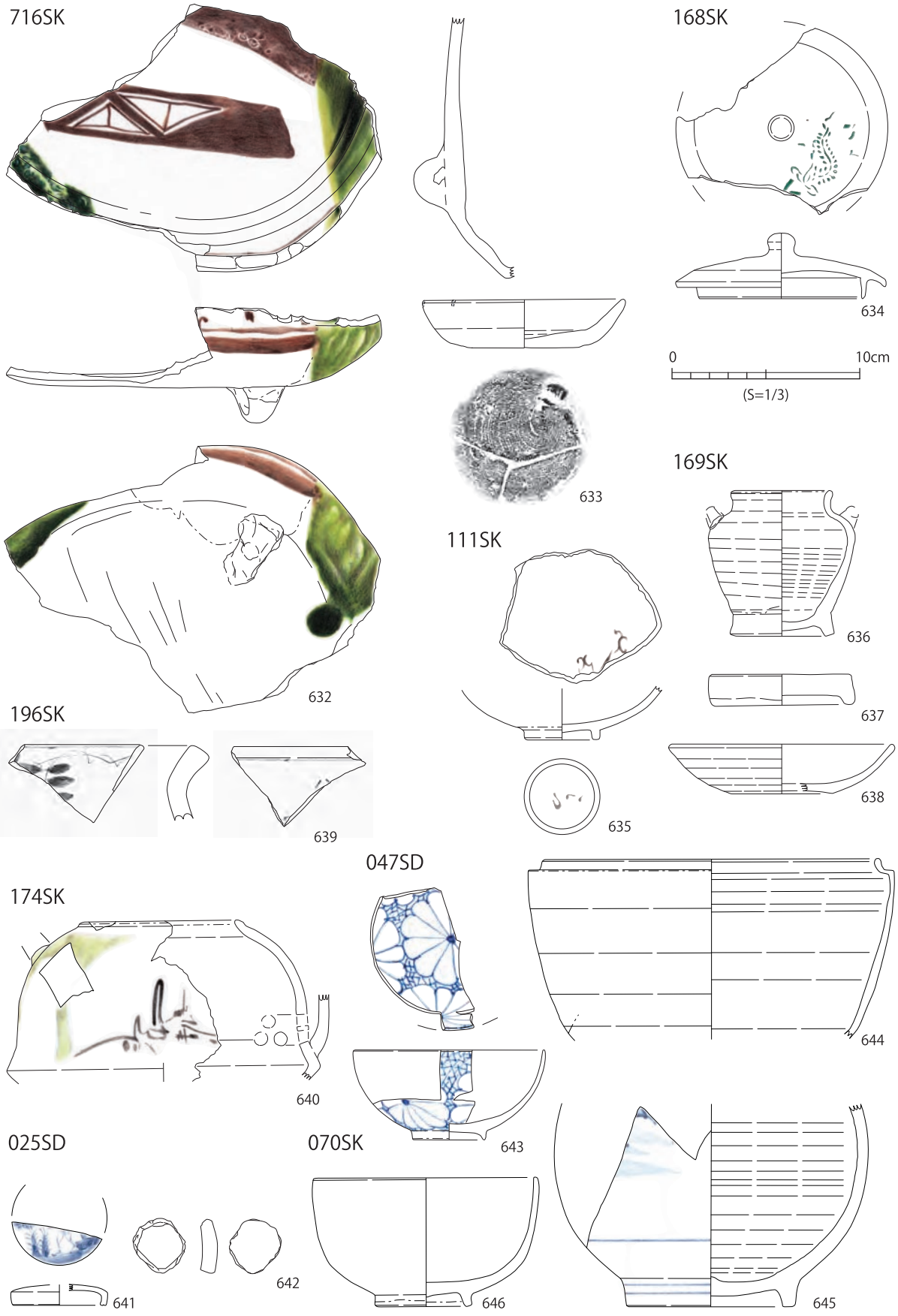
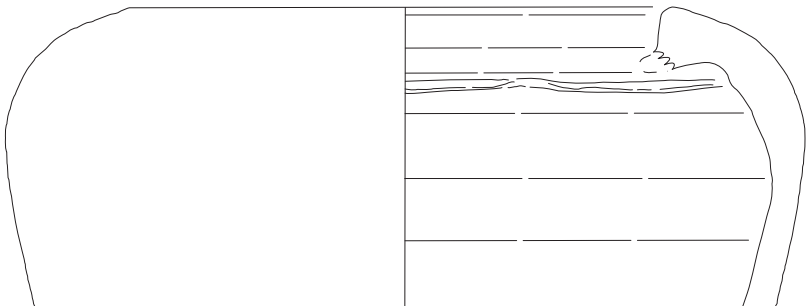


図 63　北東部土坑群 出土陶磁器 2（S=1/3）

158SK





647

0 10cm

(S=1/3)

包含層出土遺物

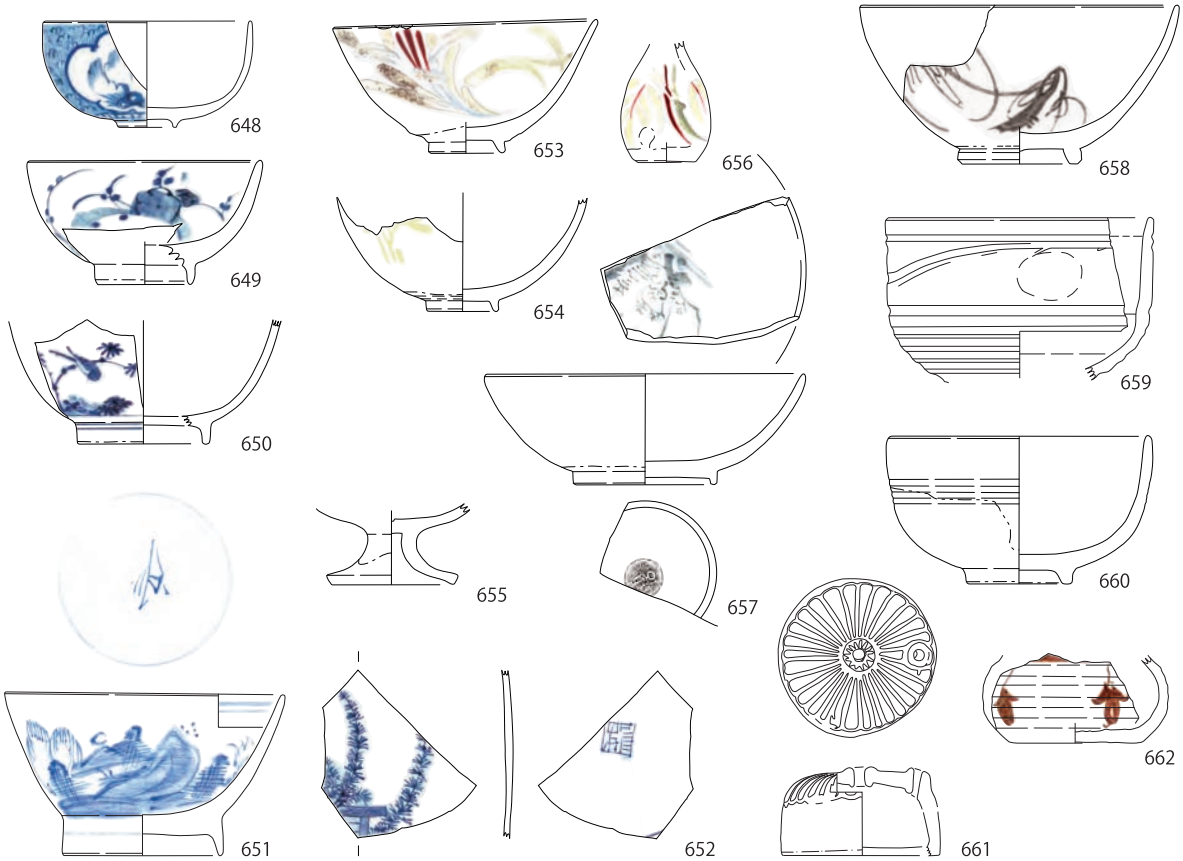


図 64　包含層（北東部土坑群）出土陶磁器 1（S=1/3）

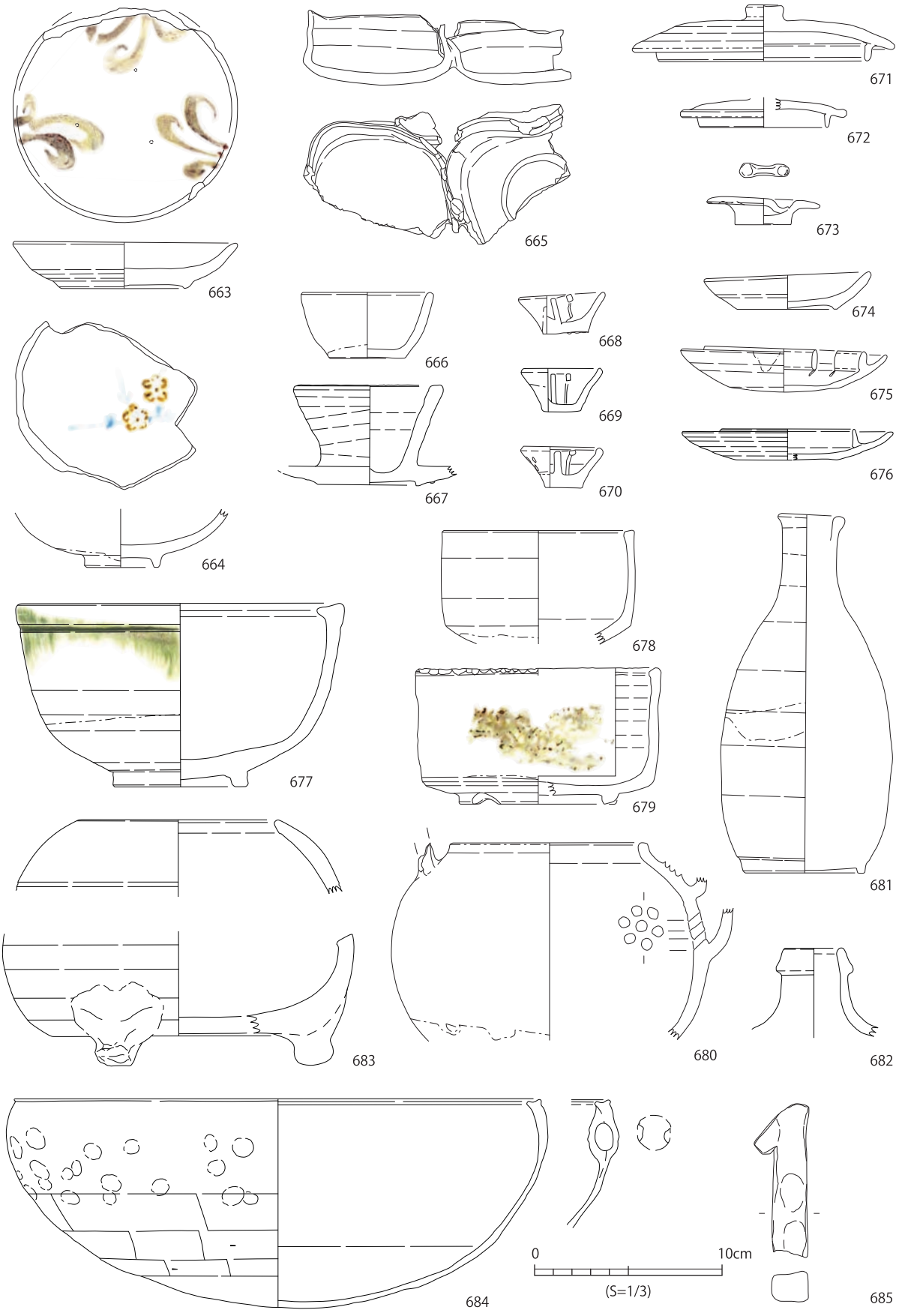


図 65　包含層（北東部土坑群）出土陶磁器 2（S=1/3）



図 66　包含層（北東部土坑群）出土陶磁器 3（S=1/3,1/2）

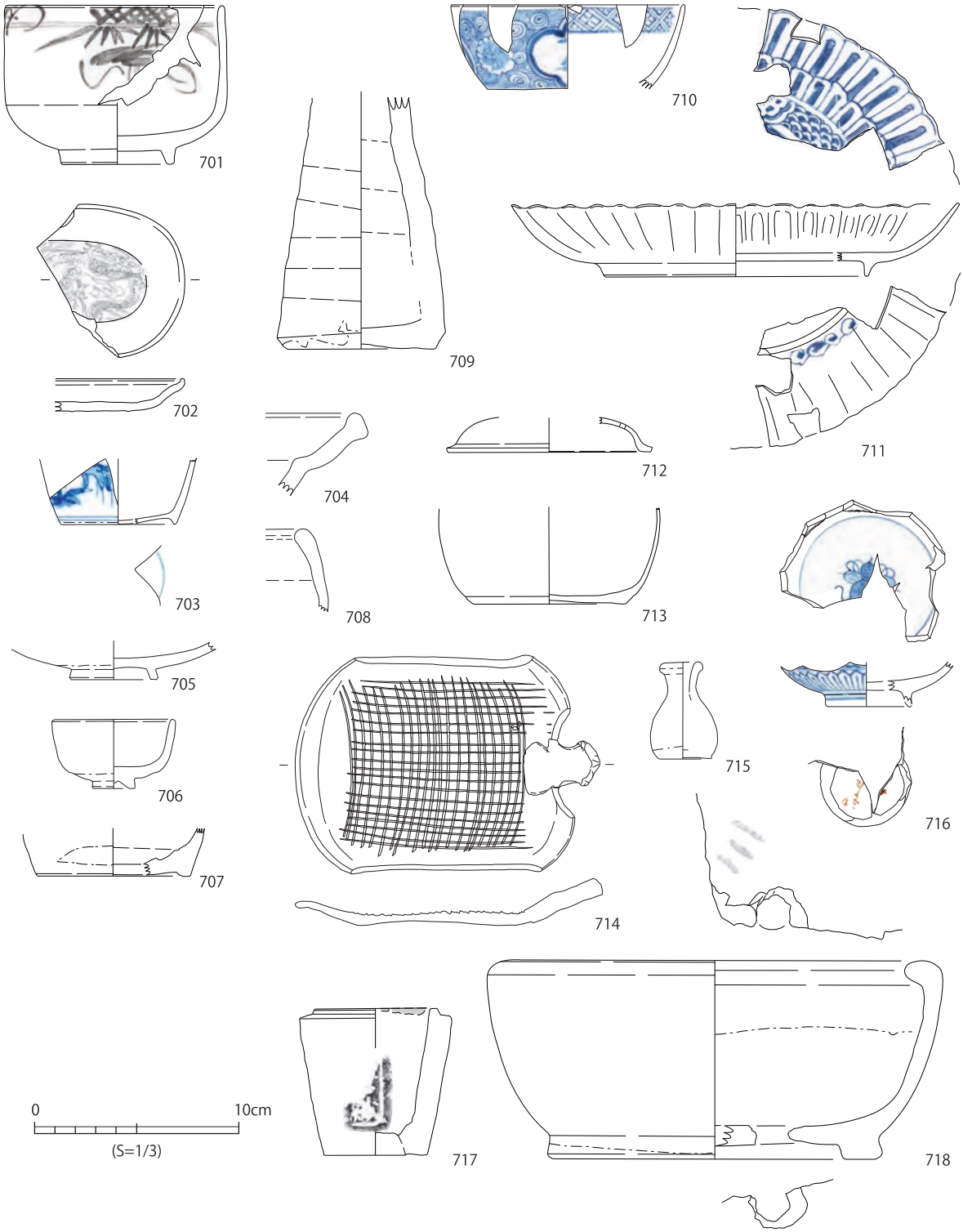


図 67　その他の地点の出土陶磁器（S=1/3）

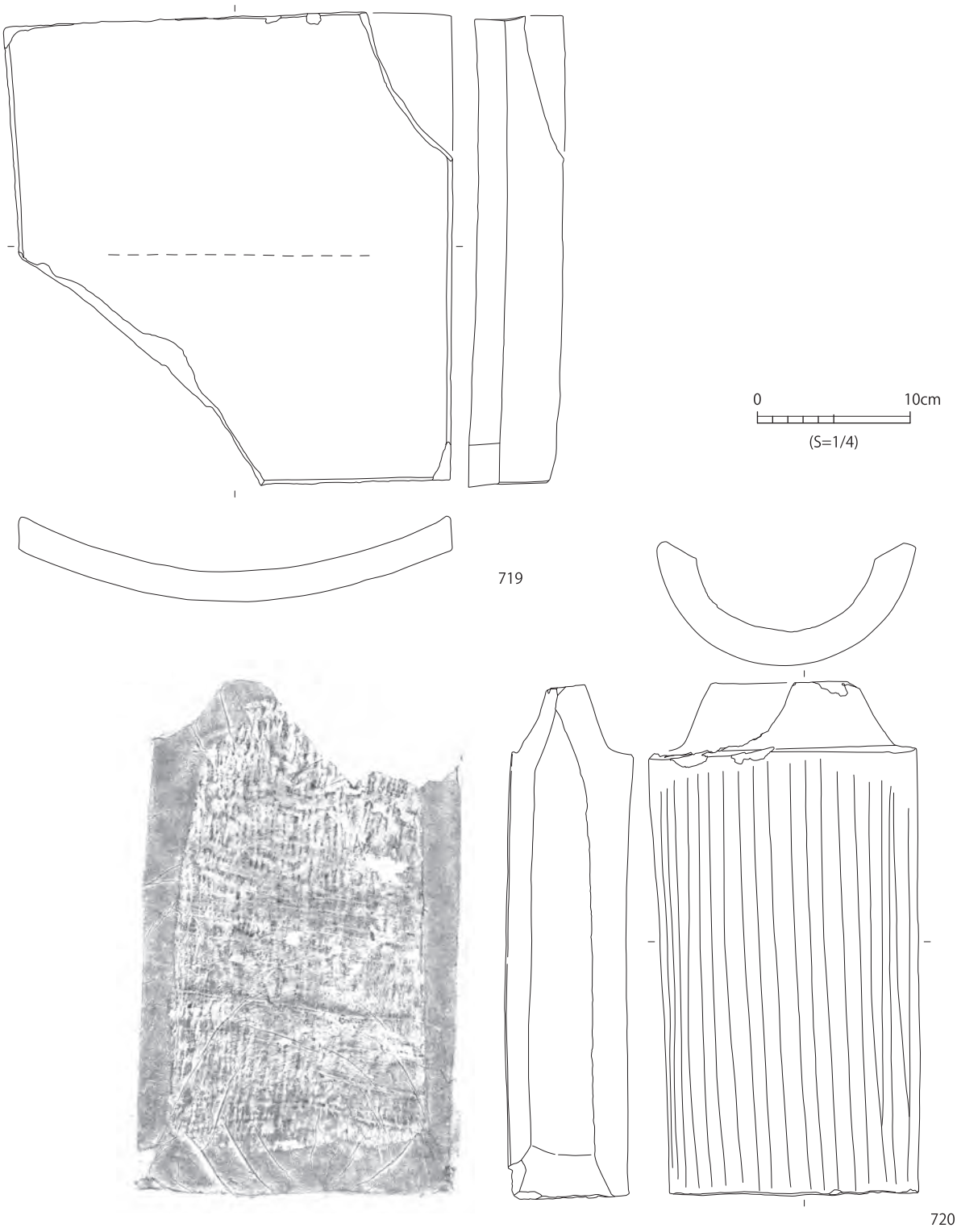


図 68　389SK 出土平瓦・丸瓦（S=1/4）

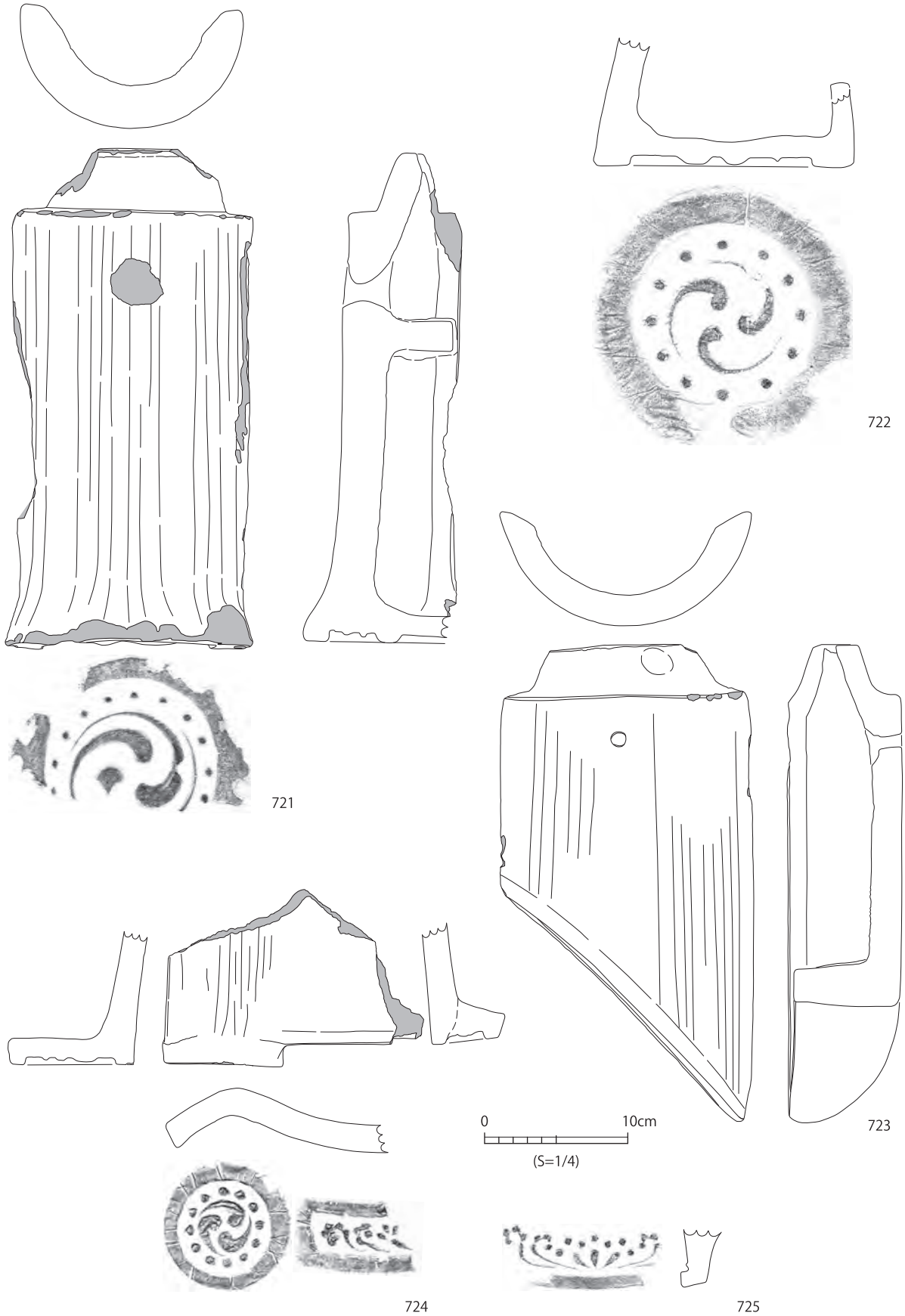


図 69　389SK 出土軒丸瓦・丸瓦・軒桟瓦（S=1/4）

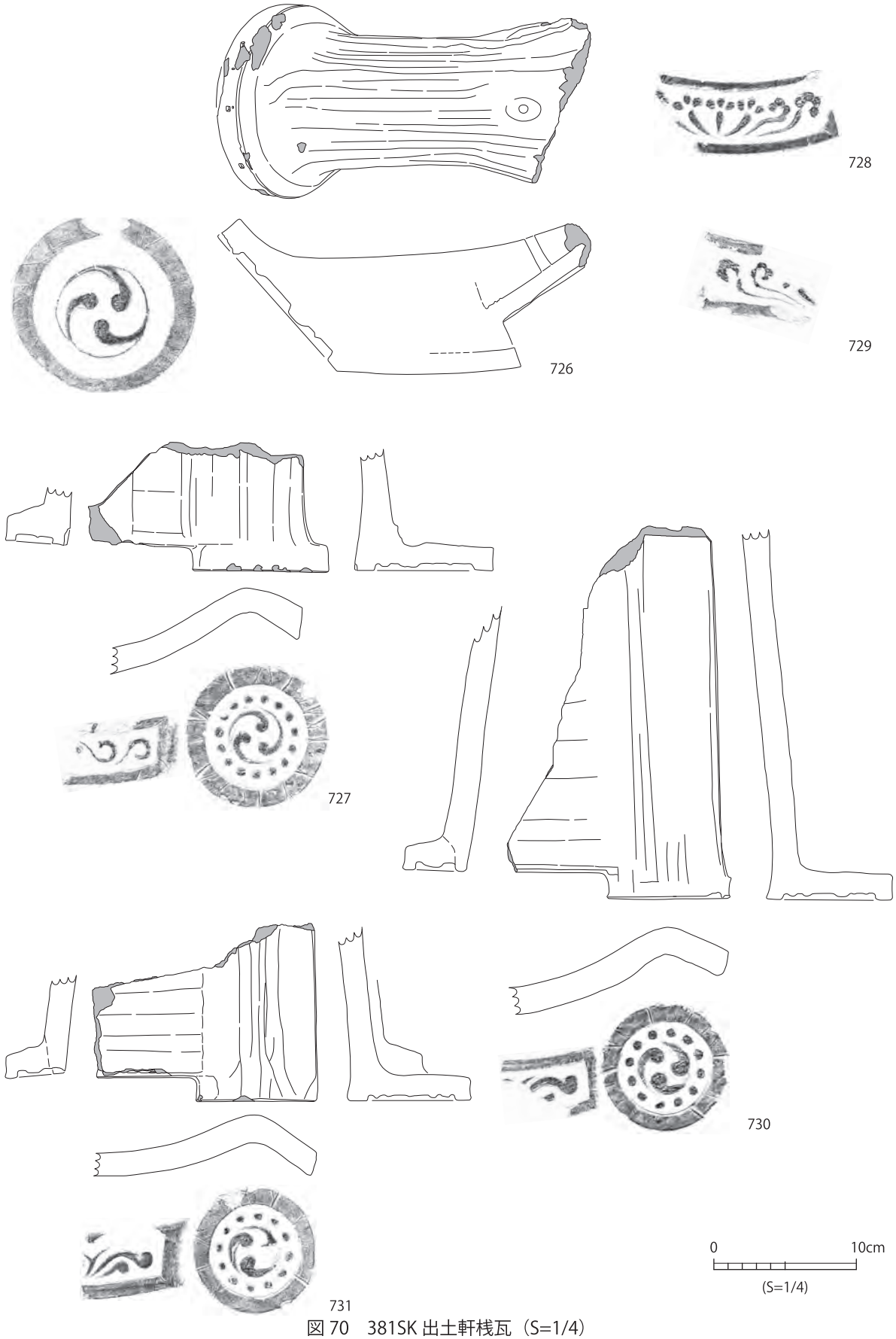


図 70　381SK 出土軒桟瓦（S=1/4）

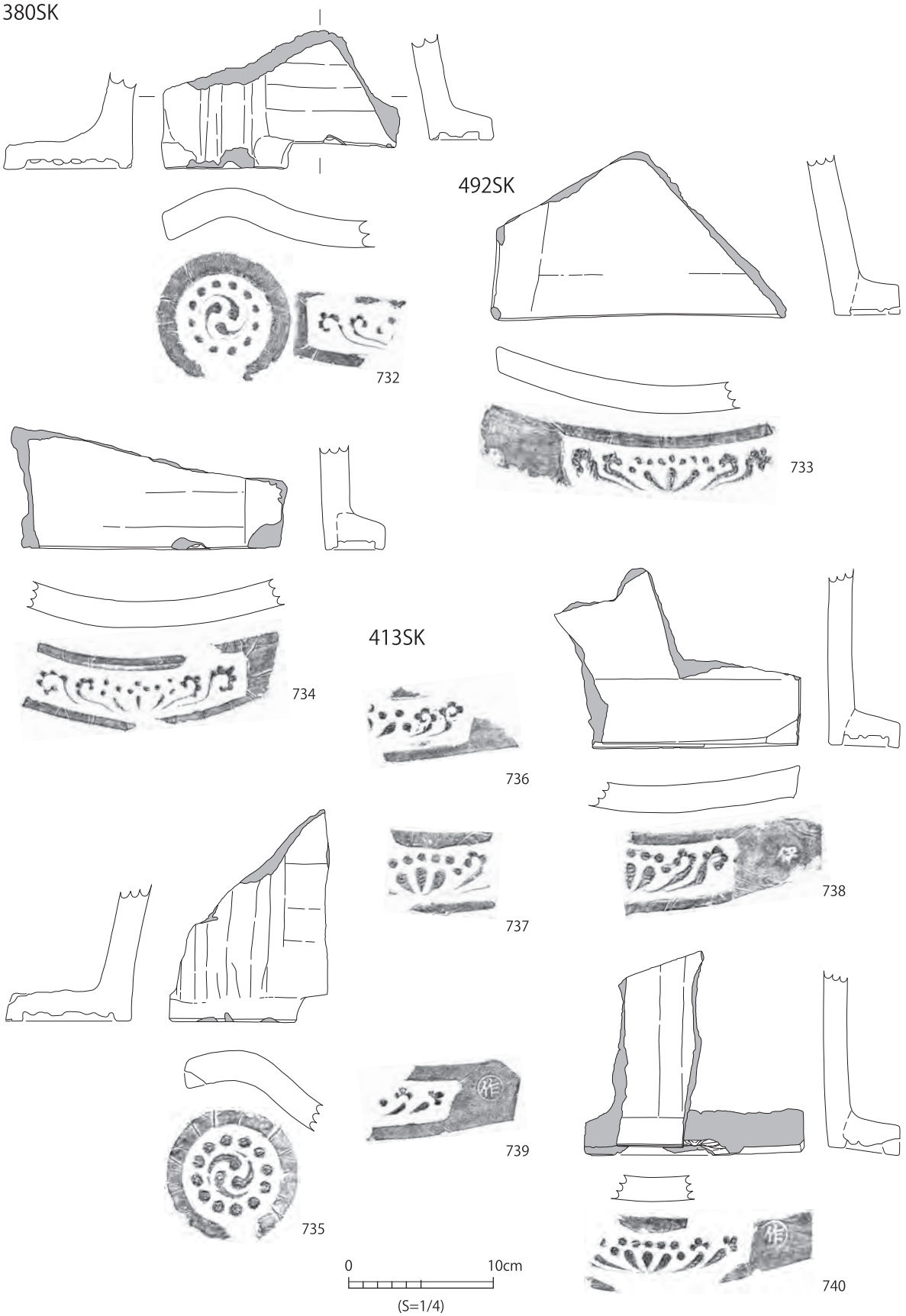

380SK
492SK
413SK
732
733
734
735
736
737
738
739
740
0
10cm
(S=1/4)

図 71　軒桟瓦（S=1/4）

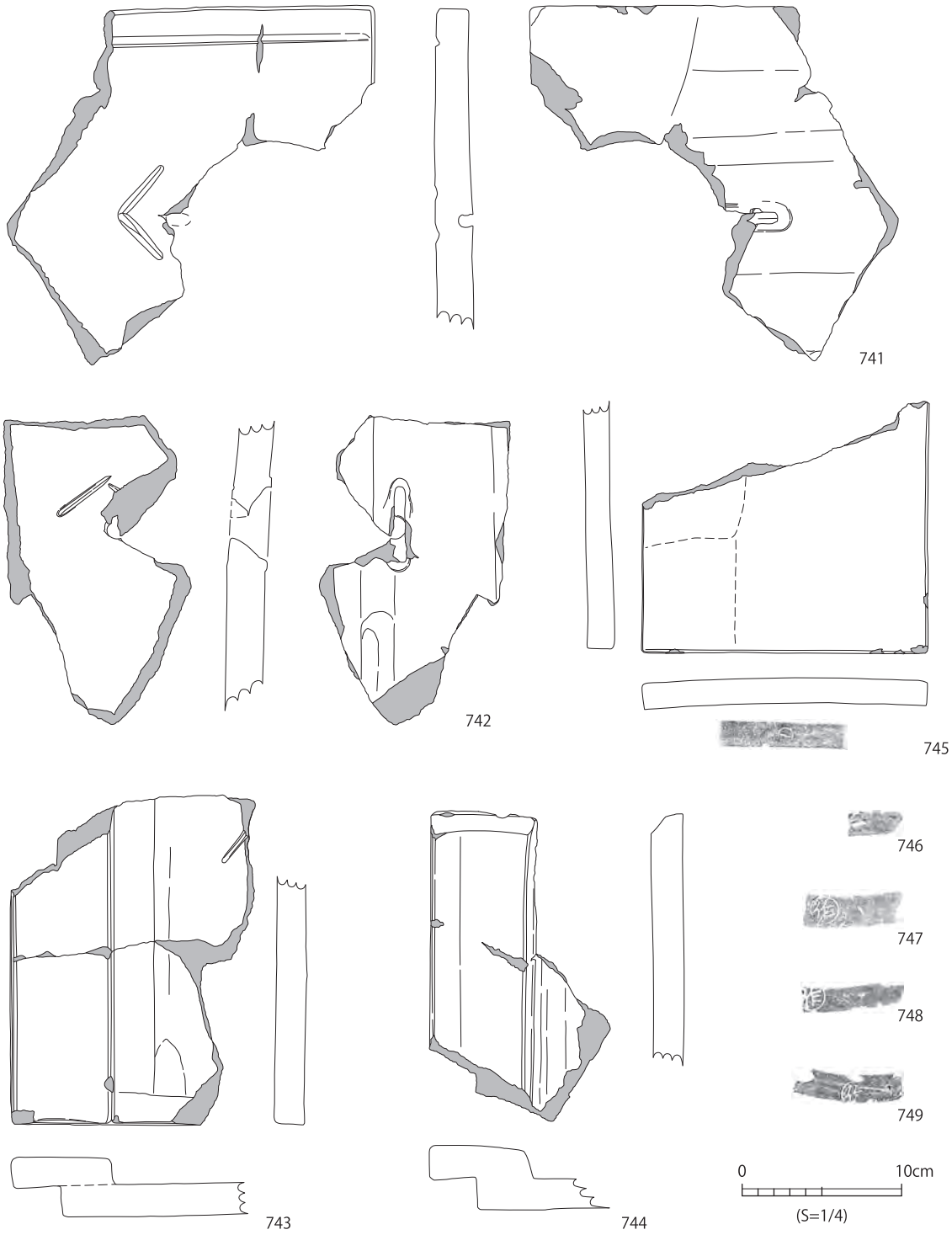


図 72　飾り瓦・刻印（S=1/4）

瓦類（719 ～ 749）

調査において燻し瓦については、瓦当をもつもの、遺存状況の良好なものを選択・採取した。本瓦葺瓦類は少量である。また、今回の調査地点で近世段階の瓦溜りは検出されていない。

389SK は本瓦葺平瓦（719）、丸瓦（720,723）、軒丸瓦（721,722）、軒桟瓦（724,725）がある。381SK は隅巴（726）、未掲載資料に丸瓦が存在する。727 ～ 731 は軒桟瓦である。唐草文から 3 タイプに分けられる。492SK は軒桟瓦（733 ～ 735）がある。413SK は桟瓦類が集中して廃棄されていた土坑であるが、瓦当部分は僅かであり、ほとんどが反りのない平坦な瓦類（741 ～ 749）である。軒桟瓦（736 ～ 740）は唐草文から 2 タイプに分けられ、それぞれ「伊」○に「作」の刻印が認められる。板状の瓦類は貫通する釘穴をもち（741 ～ 743）、側辺に沿って長方形板状粘土を接合した（743,744）形状である。表面の調整に粗密の差異がある。飾り瓦。また、小口の残る小片には、○に「一」（745,746）、○に「作」（747 ～ 749）の刻印が認められる。

桟瓦文様は、丸瓦部分は 12 あるいは 15 珠文と左巻三巴文、平瓦部分は三子葉文を中心に二反転唐草文を基本とする。413SK 資料は唐草文が簡略化され、子葉文的な表現となっている。

＜近代以降＞（750 ～ 838）

明治期から昭和 20 年の終戦前後の時期の資料があり、名古屋・瀬戸・美濃地域で生産されたものが多くを占める。なお、遺構面は広範に撹乱を受けており、必ずしも一括性が高いとはいえないものの、図版では遺構単位のまとまりを優先して配置している。また、掲載資料は遺存状況の良い個体を優先しているため、必ずしも器種のバランスを反映したものでない、。

磁器製品の施文技法では手描、摺絵併用、銅版転写、上絵などがみられる。手描、摺絵・手描併用が主となる時期、摺絵・銅版転写が盛行する時期、いわゆる「軍用食器」が主体となる時期に大別すると、それぞれ 19 世紀後期、19 世紀後期から 20 世紀前期、20 世紀前期から中期に属すると考えられる。

陸軍関連の陶磁器

無地あるいは数条の緑色圏線がめぐる簡単な装飾の磁器、および硬質陶器で、陸軍徽章、部隊名など所属や製造会社を示す社名や記号がプリントされている。仙台城二の丸遺跡報告（註 1）の分類名を参考にすると、硬質陶器では碗、皿、把手付碗、大型碗、鉢、皿があり、名古屋城三の丸遺跡では、蓋付の丼の形状の鉢も一定量認められる。磁器では碗、大型碗、湯呑などがある。整った規格の注文生産品であり、無地のものは少なく、陸軍徽章（星印）のほか星形の枠内に「工三」（工兵第三大隊）、方形枠に「東焼」（761）などいずれかを青色で銅版転写している。緑二重圏線がある資料は「砲三ノ六」（776, 砲兵第三聯隊第六小隊？）、同「砲三ノ二」（786）などは「RC　NORITAKE」（ノリタケ製）とクロム釉スタンプで焼き付けられたもののほか、高台内「日陶製」（785, 日本陶器製）などがある。硬質陶器では高台内に角に「硬陶」（826,827, 日本硬質陶器株式会社）と銅版転写されたものがみられる。磁器湯呑は無地に上絵で文字「酒保」、「工三」、「工三下集」（795）、「将集」（778）と記された痕跡が残る。塗料は完全に剥落しており（註 2）、当時の色彩は不明である。工兵第三大隊は明治 21 年（1888）に創設されてより大正 14 年（1925）浜松移転まで三の丸に駐屯している。出土した「工三」銘食器類はこの間に使用され、移転時に廃棄された可能性が想定される。したがって、これらは硬質陶器が生産された日露戦争以降から大正 14 年頃の資料と思われる。

戦時統制品

昭和 41 年より施行された、いわゆる統制番号が付された一群がある。端反形の湯呑「岐 724」、徳利「岐 765」、丼「瀬」の一部などがある。

陶製の羽付釜（791）は、本体を型作りし、底部に三足となる突起と口縁下 2 箇所に把手状の突起が付く。内面には薄く透明釉が残る。内面にも使用の痕跡があり胴部下半にススが付着する。胎土は常滑の赤物に似て白色砂粒を多く含む。戦時中に金属製品の代用品とされた形態と似ている。88 は陶製の竈と思われる。全面に厚く鉄釉（柿釉）が施された円筒状をなし、一箇所が切れ、上部内側 3 箇所に円錐状の突起が付く。突起の周囲には径約 1cm 程度の空気孔が空けられている。使用痕は特にみられない。

（武部真木）

【註】

（註 1）須藤隆ほか ,1999,「仙台城二の丸遺跡第 12 地点（NM12）の調査」東北大学埋蔵文化財調査年報 11

（註 2）実見した高崎城出土資料では青色塗料が残存していた。

【参考文献】

瀬戸市歴史民俗資料館 ,1993,『明治時代の瀬戸窯業』

瀬戸市歴史民俗資料館 ,1994,『戦争とやきもの』

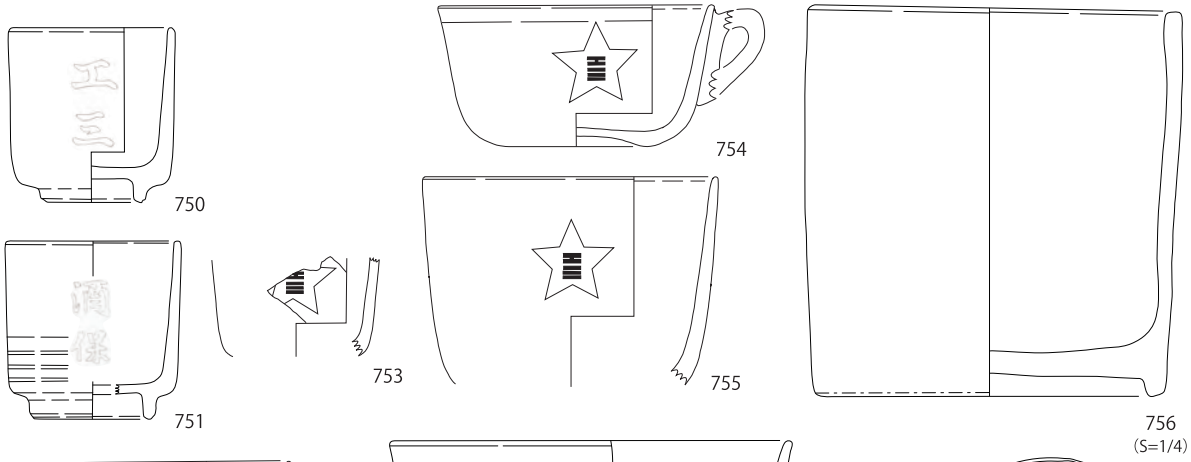
瀬戸市歴史民俗資料館 ,2001,《〈代用品〉としてのやきもの》

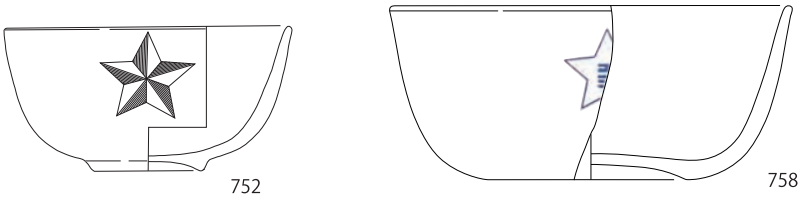
瀬戸市歴史民俗資料館 ,2002,『大正二年のやともの屋』

（財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター ,2007,『窯跡出土の " 近代陶磁 " －瀬戸・美濃窯の近代 1 －』

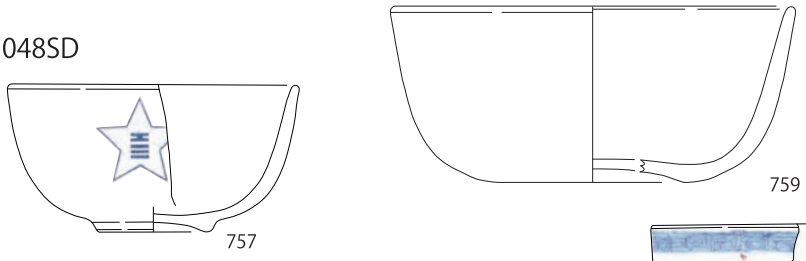
松原隆治 ,1988,『勝川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 3 集

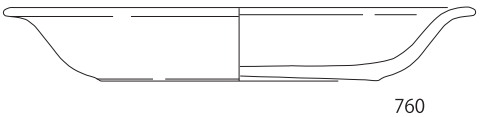
088SD

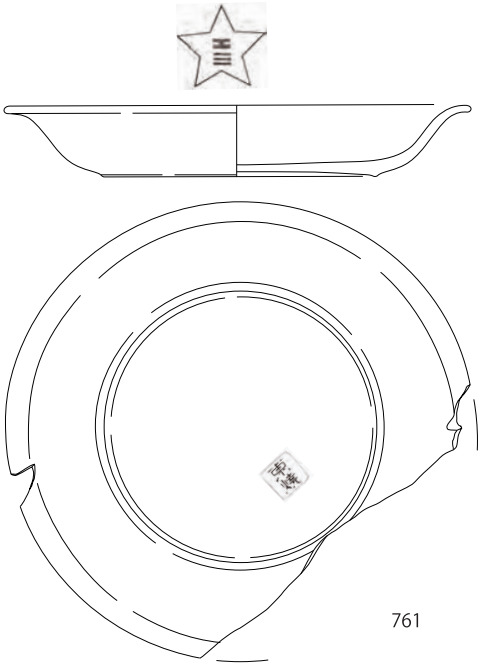




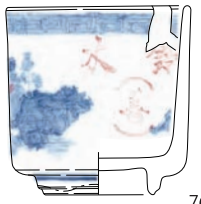
048SD



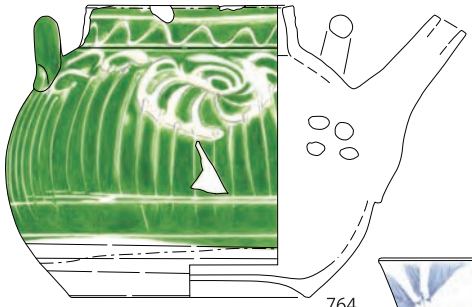


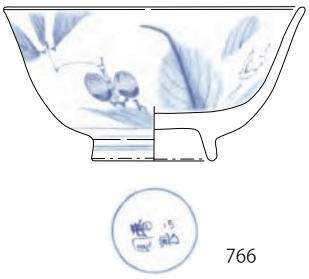






089SD





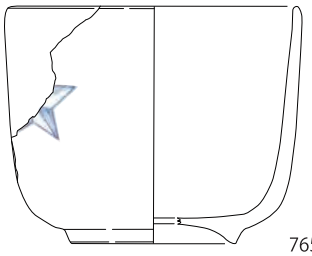


図 73　近代　出土陶磁器 1（S=1/3）

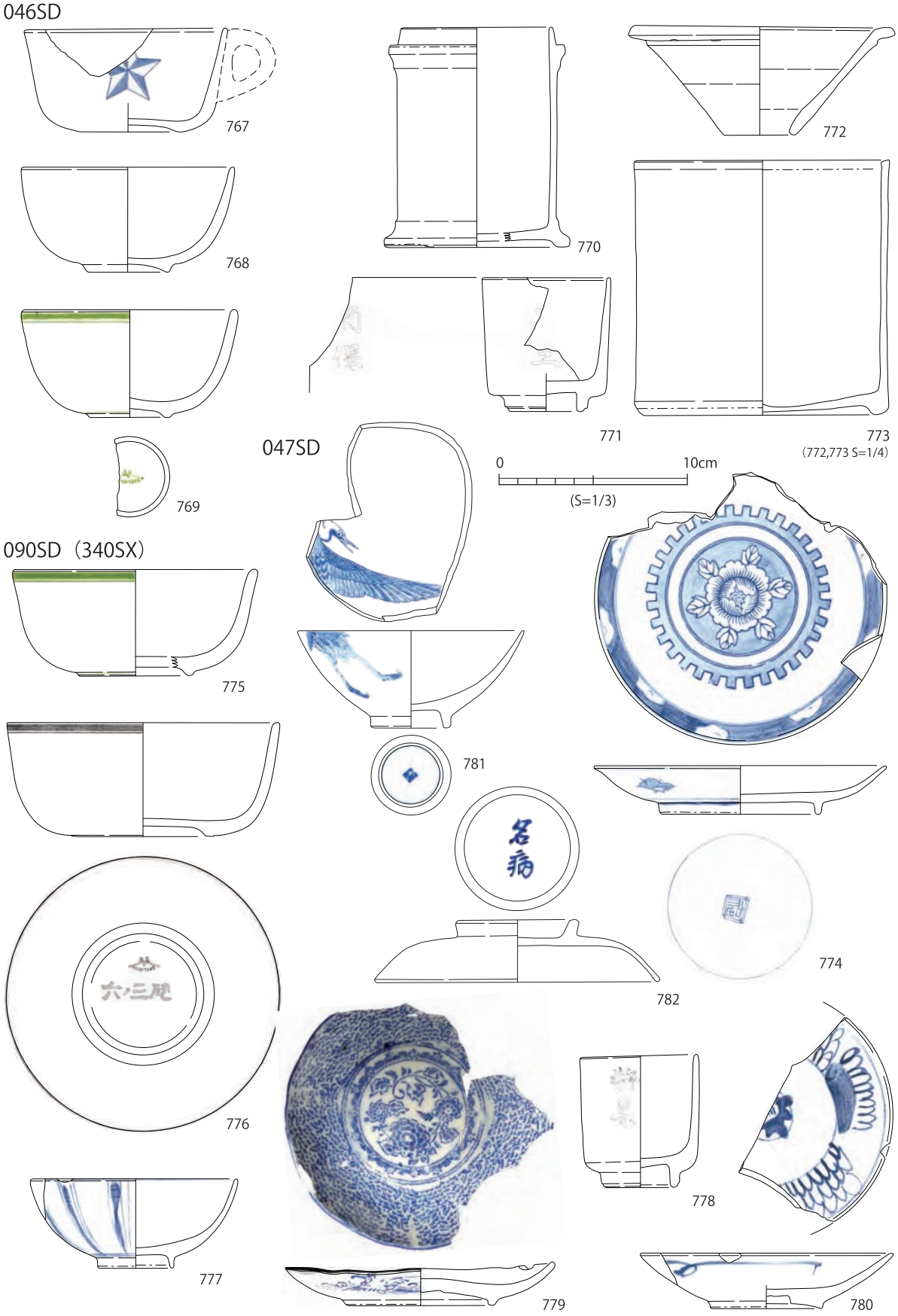


図 74　近代　出土陶磁器 2（S=1/3）

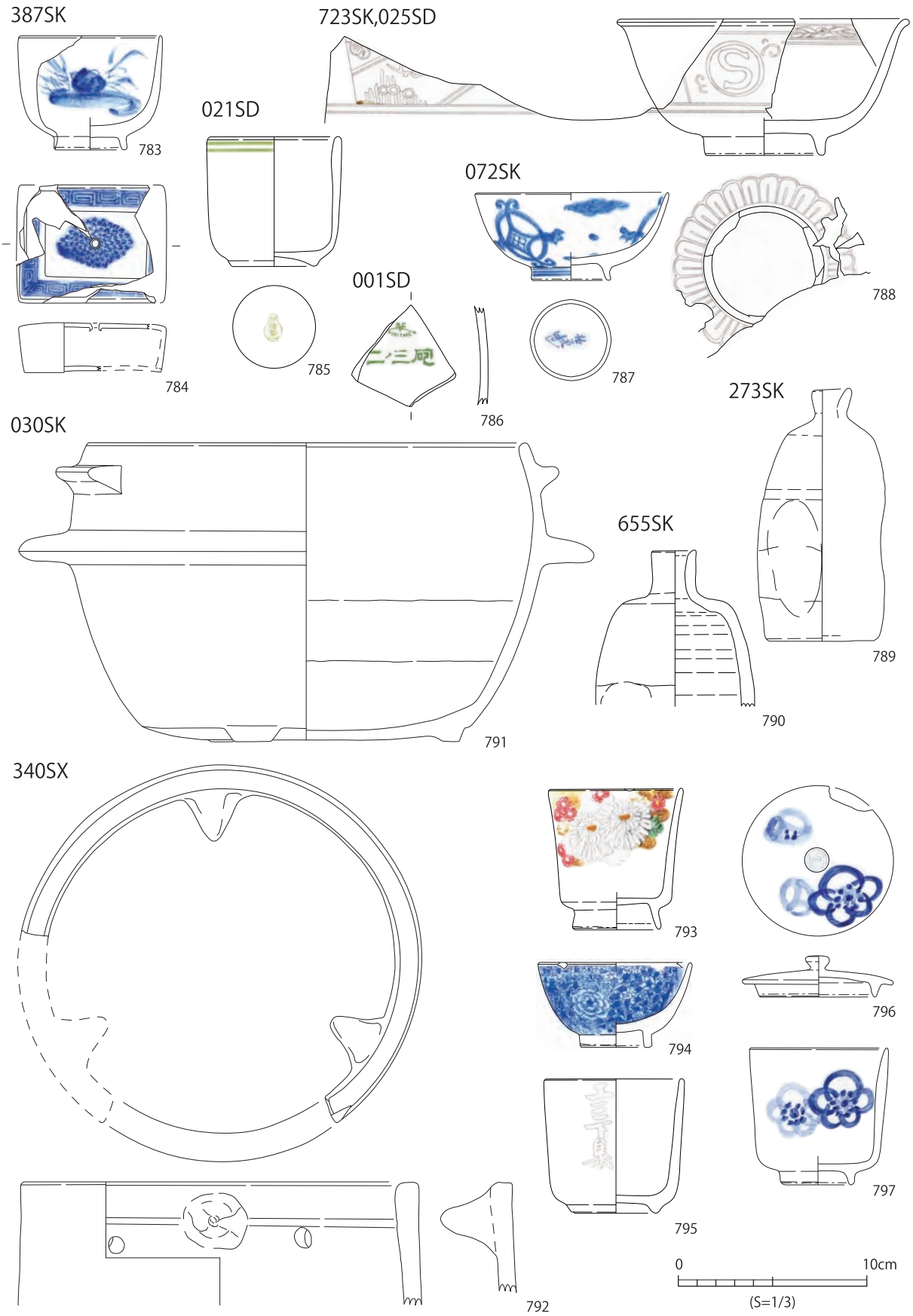


図 75　近代　出土陶磁器 3（S=1/3）

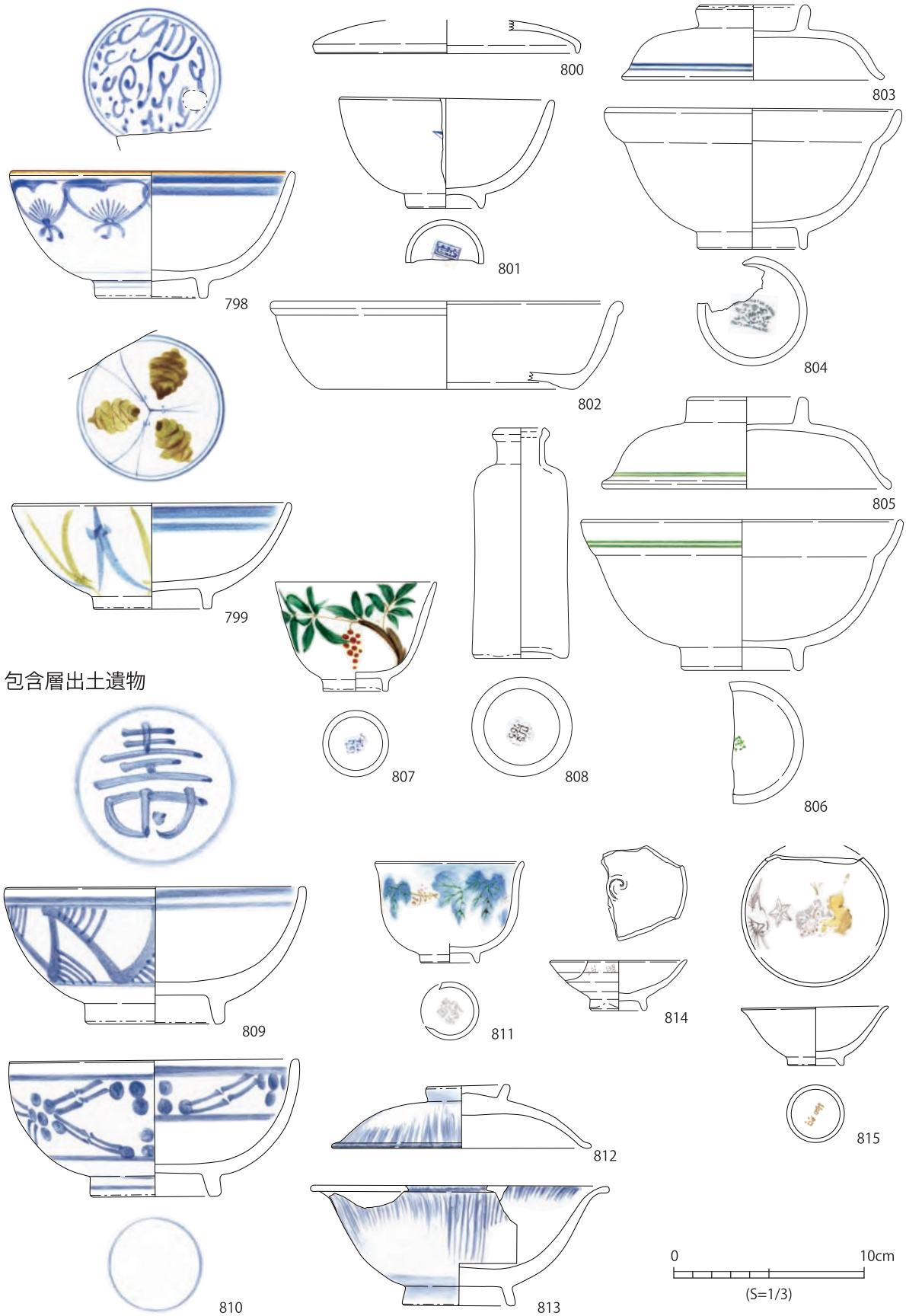


図 76　近代　出土陶磁器 4（S=1/3）



図 77　近代　出土陶磁器 5（S=1/3）

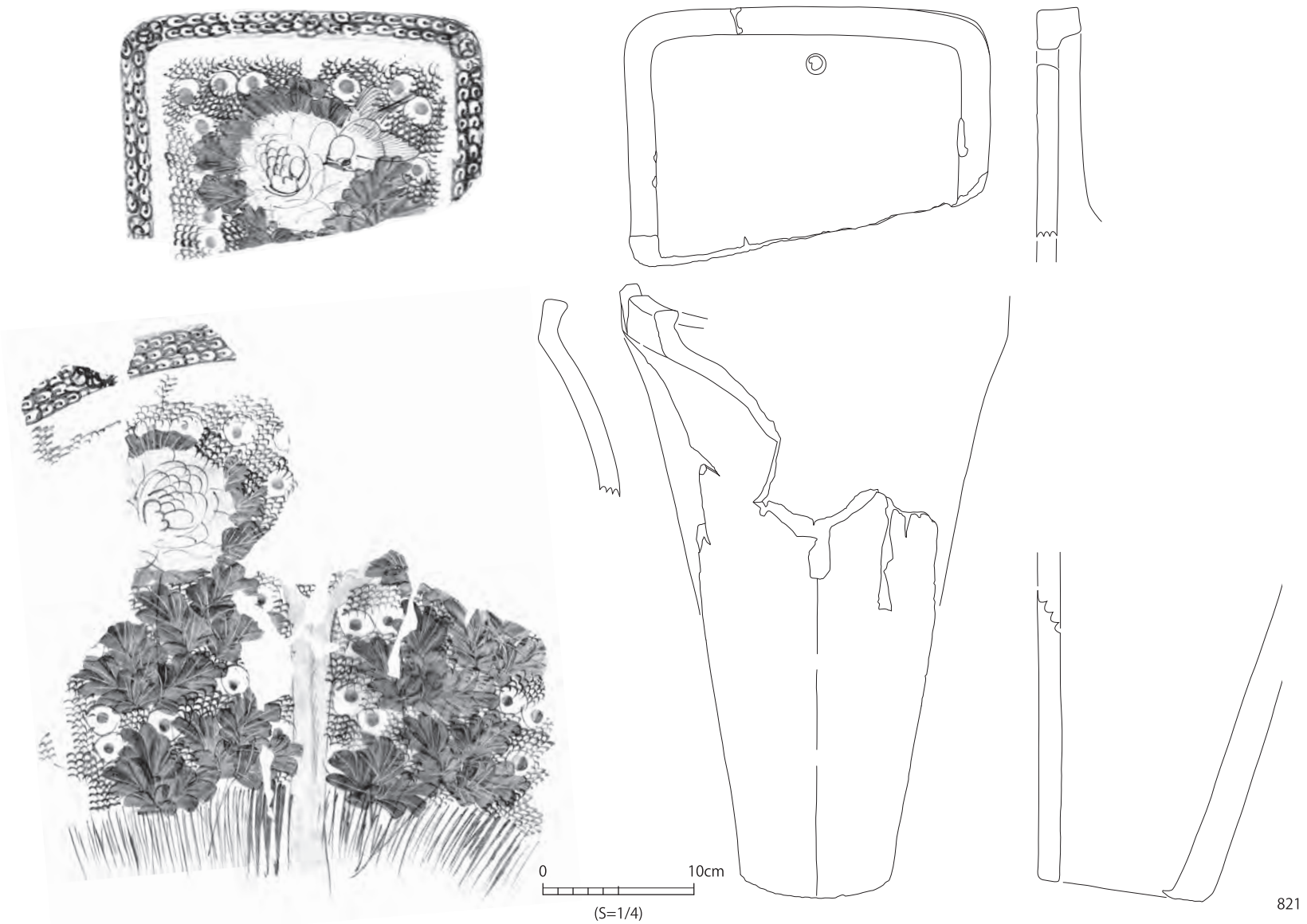


図 78　近代　出土陶磁器 6（S=1/4）

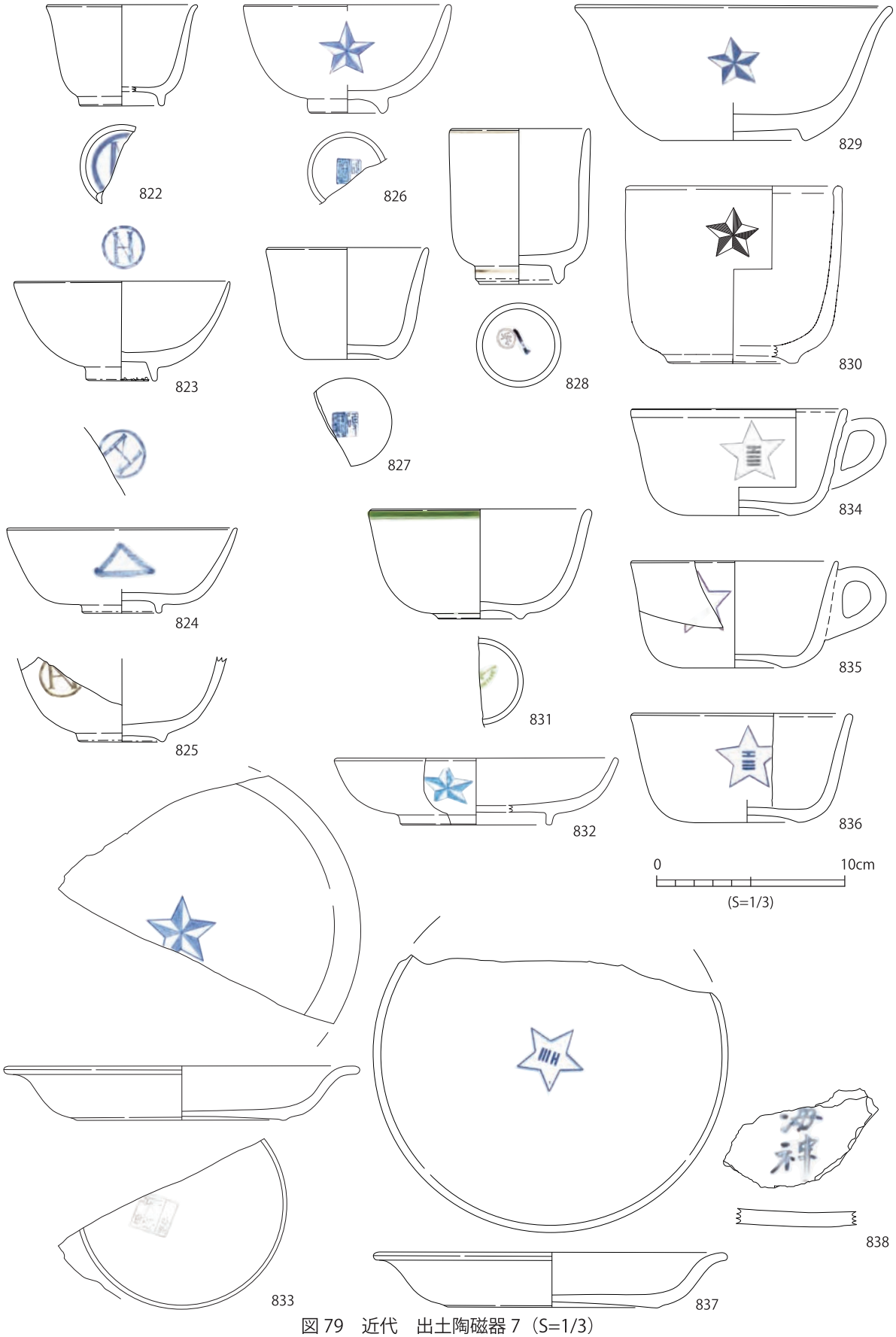


図 79　近代　出土陶磁器 7（S=1/3）

3　ガラス製品・その他

＜ガラス製品＞

今回の調査ではガラス製品が多数出土している。このうち破損が著しい大型瓶などは諸事情のため採取していないが、現在器種などをある程度確認できる資料は全部で 105 点存在する。ここでは、おおむね桜井準也の分類（桜井 2006）に従って、遺構単位で資料を紹介し出土傾向を若干考察したい。

１）046SD 出土遺物（図 81-1 ～ 15）　1 は小型瓶で一般用薬瓶、2,3 は胴部横断面形が方形状で、胴部中央の３面に沈線が巡るインク瓶と推測される。2,3 は口部中位から下部までは対角線上の位置に型成形の合わせ目が存在する。4,5,6 は首部が中心から偏る扁平なインク瓶で、内面に青色系インクが残存する。4 にはコルク栓が共伴し、口部上端まで型成形の合わせ目が存在する。5 は体部と首部を接着した接合部を工具で大きく挟んで造られたものである。6 は桜花紋に「ＳＫ」の文字をデザインした陽刻が存在する。インク瓶は図示したもの以外に 7 点が存在する。7 は横断面形が方形のインク瓶、9 は東京高田の「ヨヂュムエキ」瓶であり、汐留Ⅰ遺跡で類似例がある（一般用薬瓶）。10 は目盛り線のある医療用薬瓶で、背面の体部器壁中に白色の磁器片？が混入している。11,12 は桃谷順天館のにきび薬「美顔水」の瓶である。13,14 は薬品瓶と思われ、13 の内面には白濁した付着物が認められる。14 は底部に星印に Y 字の陽刻がある。15 は手鏡用の板ガラスと思われる。

２）340SX 出土遺物（図 81-16 ～ 25）　16 は口縁部が特徴的な東京尾澤製のたむし薬「全治水」の瓶である。体部下端から口部上端まで型成形の合わせ目が存在し、口の成形は雑である。17 ～ 19 はやや青みがかる透明なスクリュー栓の瓶で、陽刻は存在しないがインク瓶と思われる。18 は口部と体部の型成形の合わせ目がずれている。インク瓶は図示したもの以外に 4 点が存在する。20 は目盛り線のある医療用薬瓶で、内部にコルク栓が落ちている。21 は薬品瓶用と思われるガラス栓で、瓶口に嵌る部分は磨りガラス状に白濁している。22,23 はインク瓶で、22 は胴部有段で断面が円形となるもの、23 は立方体の体部に斜めに円柱状口部が付くものである。24 は彌生商會の「ハナソース」瓶、25 は銘柄や用途が不明であるが、調味料瓶と思われる。

３）089SD 出土遺物（図 81-26 ～ 29）　26 は底部外面に「Ｊ．Ｍ．＆ Ｃ」の陽刻があり、内部に黄黒色沈殿物が残存していた。27 は横断面形が長方形となるもので、１面にのみラベル貼付用の枠が存在する。栓が嵌り込んで外せない状態である。28 は円形の鏡用板ガラスと思われる。29 は「MARUSHIRO SHIYOKAI」と陽刻されたインク瓶で図示したもの以外に 2 点存在する。この他に図示したもの以外には、美顔水の瓶や薬瓶やアンプルが各々 1 点存在する。

４）342SD 出土遺物（図 81-30 ～ 31）　30 は「SANTANEY」と陽刻された化粧クリーム瓶と思われる。化粧クリーム瓶と思われるものは、この他に 1 点認められる。31 は凸レンズである。

５）その他の遺構出土遺物（図 82-32 ～ 44）　34 は「COMBI」の陽刻を持つ瓶で化粧水瓶と想定される。36 は底部に「M」、体部に「実用新案」と「No3218」の陽刻を持つ首部が中心から偏る扁平な丸善のインク瓶と思われる。38 は横断面形が方形となる薬品瓶と思われ、体部下半部が一旦成形した後に板状工具を宛てがい整形したものと考えられる。40 は堀越商会の白色剤「ホーカー液」の

ものである。43 は「登録商標『丸にツ』塚本　愛知　名古屋組合　非賣容器」の陽刻を持つ瓶で牛乳瓶と想定する。44 は横断面形が楕円形の大型瓶で、桜井分類では調味料瓶の酢瓶に類似する。

6）遺構外出土遺物（図 82-45 ～ 55）　46 は「晴光水　小野製」と陽刻された小瓶である。晴光水は目薬のブランドである。47 は内部にコルク栓が残る。48 は下端部の一部がつぶれ変形している。49 は横断面形が長方形の瓶で銀色の金属製スクリュー蓋が冠っている。50 は「TELLME 80cc」と陽刻された横断面形が長方形の瓶である。テルミーは昭和 5 年に創業した大東化学工業所のブランドである。51 は首部が中心から偏る扁平なインク瓶で、底面に直線状の凹みがある。53 は口縁部に型抜きの失敗が認められ、内部に赤色インクが残存しているインク瓶である。54 は円筒形スクリュー栓の瓶で、「ふくのり」と記されたアルミ製蓋が共伴する。食用の海苔瓶の可能性もあるが、ここでは文具瓶の糊瓶と推定する。55 は口縁部に青色付着物が確認された。

7）小結

桜井準也はガラス瓶について機能を重視して 9 類に大別し、さらに細分している（桜井 2006）。ここではこの分類に依拠し、今回の調査と 2002 年度に実施した旧国立名古屋病院地点の出土傾向をまとめておきたい。

今回の調査ではガラス瓶は、酒瓶 1 点、乳製品瓶 1 点、調味料瓶 4 点、薬瓶 34 点、化粧瓶 18 点、文具瓶 38 点という組成となった。なお、この資料はブランド名が不明な小型瓶が多く、上記の組成はこれらを薬瓶に分類して算定したものである。この結果、薬瓶とインク瓶が突出して多いことが分かる。一方、2002 旧国立名古屋病院地点では、酒瓶 4 点、清涼飲料瓶 2 点、乳製品瓶 2 点、調味料瓶 2 点、食品瓶 17 点、薬瓶 14 点、化粧瓶 9 点、文具瓶 2 点という組成となった。このうち食品瓶

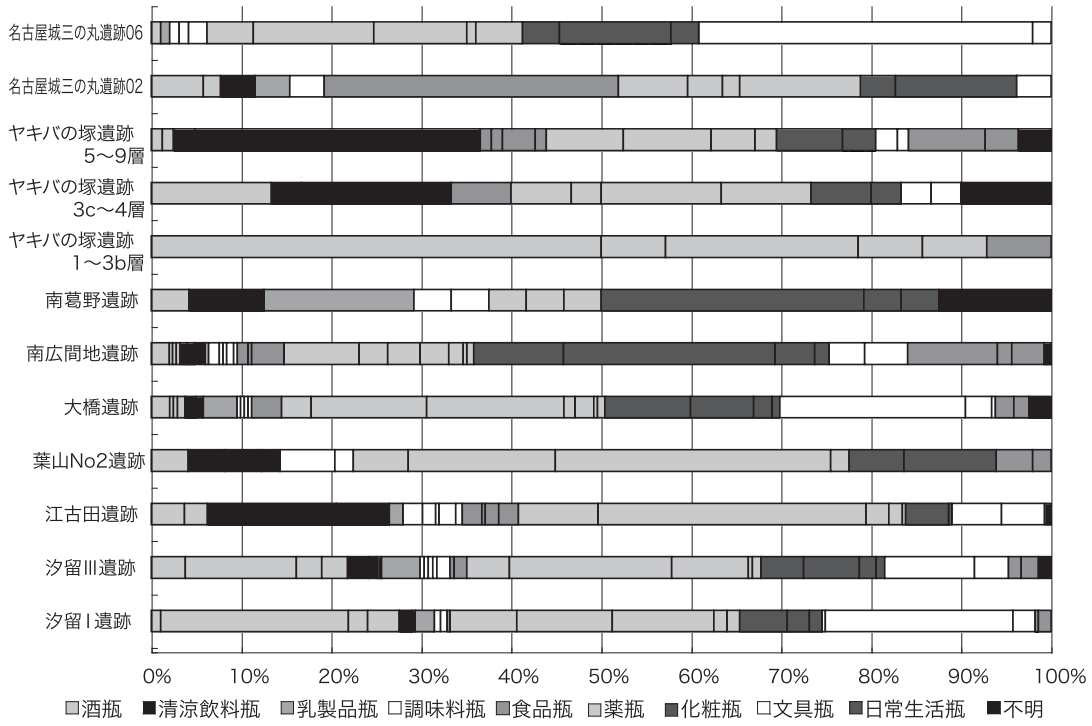


図 80　各遺跡ガラス瓶組成（桜井 2006 のデータを元に作成した）

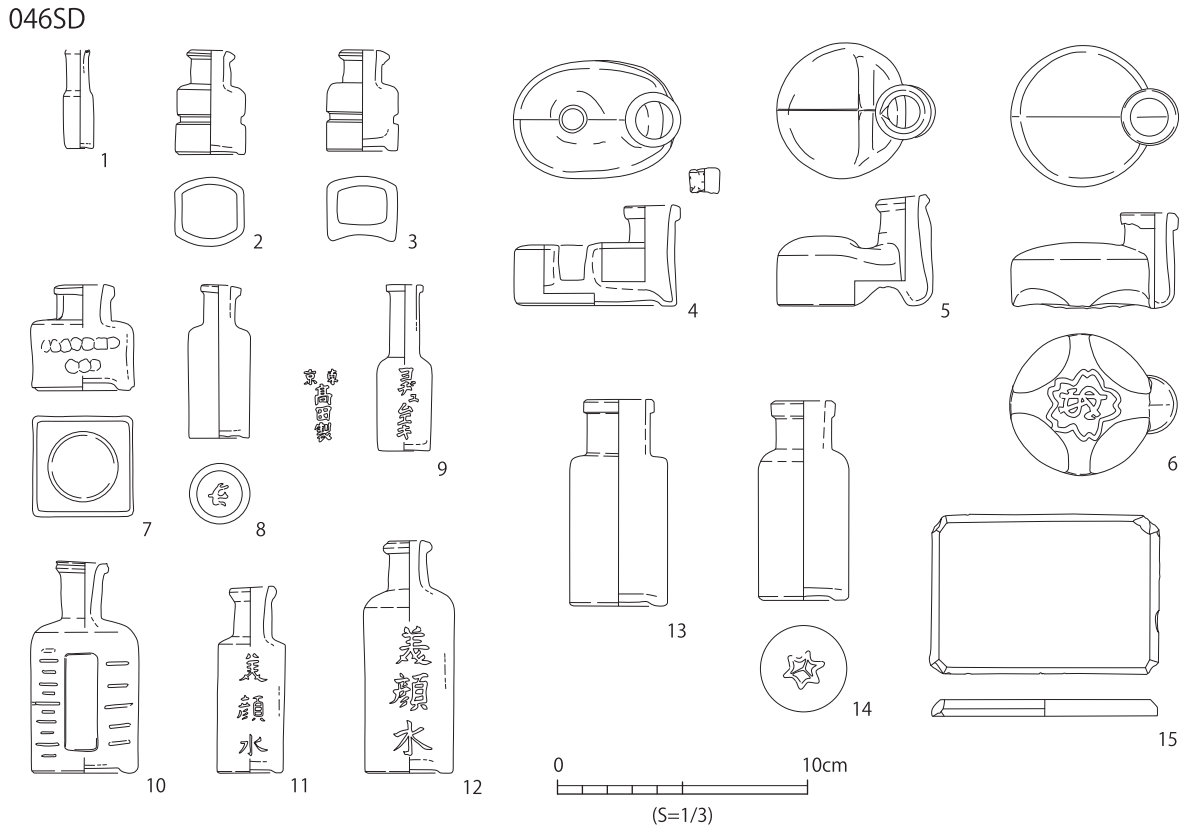


図 81　ガラス製品 1（S=1/3）

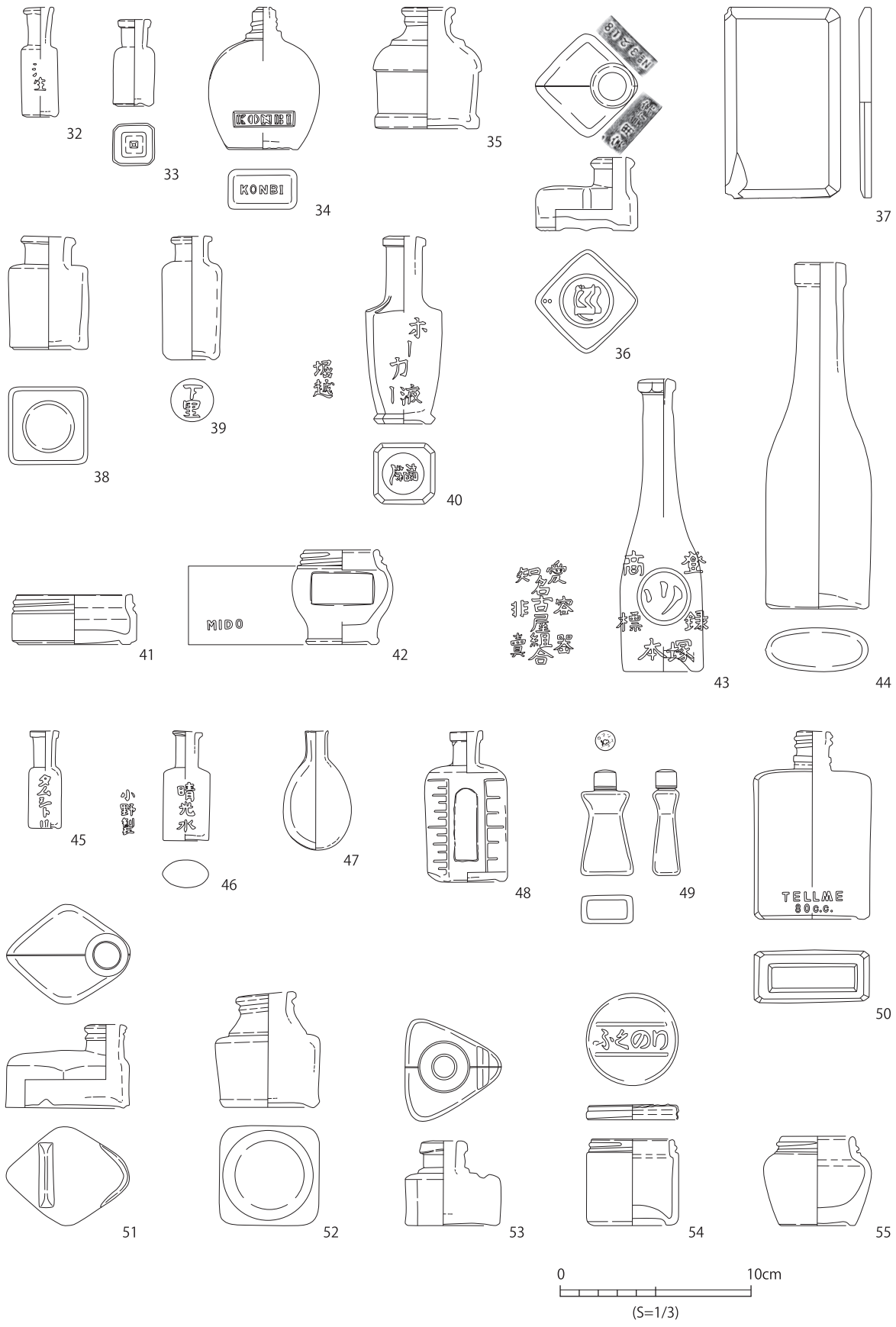


図 82　ガラス製品 2（S=1/3）

としたものは口縁部が括れたコップ形の小型瓶が大半で、桜井はこれに類似した瓶を食品瓶の項目に掲載していたが、実際の機能は特定が難しいように思われる資料である。終戦直前に陸軍名古屋病院第二分院が建設されたこの地点では、意外と薬瓶の割合は少ないが、試験管など特殊な製品の存在が病院としての特徴を示しているといえよう。

今回の調査区は近代では陸軍第三師団のうち工兵第三大隊・輜重兵第三大隊が配され、倉庫群が置かれた場所と推定される。ここで確認されたガラス瓶は文具瓶が最も多く、薬瓶と化粧瓶がこれに次ぎ、酒瓶や食品瓶がほとんど見られないという特徴がある。こういった組成のあり方は、桜井が分析した結果をみても他に確認できない偏ったものである（図80）。インク瓶が多いという特徴から事務用品の保管場所であった可能性を指摘することもでき、この点からも場の特異性を物語る資料群と評価できるだろう。

（鈴木　正貴）

＜その他＞（図 83 － 56 ～ 63）

その他の材質の出土遺物として、歯ブラシ、ボタンなどがある。遺存状況が悪く、採取されたものは僅かである。動物骨角を利用したと思われるもの、セルロイド製（61,62）がある。骨製歯ブラシ（56 ～ 60）の乳白色の表面は滑らかに加工され、光沢がある。柄の先端の孔には環状に針金が通され、孔の周辺には緑色の変色部分が認められる。倉庫に保管されていた物資の一部とも考えられるが、使用・未使用の区分は不明である。

表 12　名古屋城三の丸遺跡のガラス製品組成表

大分類	小分類	02年度	06年度
酒瓶	ビール瓶	3	1
	洋酒瓶	1	
	小計	4	1
清涼飲料瓶	ラムネ瓶	2	
	小計	2	
乳製品瓶	牛乳瓶	2	1
	小計	2	1
調味料瓶	ソース瓶		1
	酢瓶		1
	その他の調味料瓶	1	
	不明調味料瓶	1	2
	小計	2	4
食品瓶	不明食品瓶	17	
	小計	17	
薬瓶	医療用薬瓶	4	5
	薬品瓶	2	13
	一般用薬瓶		10
	目薬瓶		1
	アンプル	1	5
	試験管	7	
	小計	14	34
化粧瓶	化粧水瓶	2	4
	化粧クリーム瓶	7	12
	不明		3
	小計	9	19
文具瓶	インク瓶	2	36
	糊瓶		2
	小計	2	38
ガラス瓶総計		52	97
板ガラス	スライドガラス	6	
	鏡		3
	凸レンズ		1
	板ガラス	3	1
その他	薬品瓶の栓?		1
	電球傘		1
	ロート		1
	コップ	2	
総計		63	105

動物骨の細工利用のうち、牛馬骨の利用は近世以降に増加する傾向がみられ、近世では「小道具」「小間物」などと称され、多くが大坂に集められたという。第一次大戦期にセルロイド製品の国内生産が本格化するまで、ブラシ類の柄などの主な材質であった。ただ衰退したとはいえ、1950 年代頃まで細工用に牛四肢骨が出荷されていた記録（四日市の場合）もあり、こうした骨の利用は継続していたかもしれない。

（武部　真木）

【参考文献】

桜井準也 ,2006,『ガラス瓶の考古学』六一書房

久保和士 ,1999,『動物と人間の考古学』真陽社

中島久恵 ,2005,『モノになる動物のからだ－骨・血・筋・臓器の利用史－』批評社

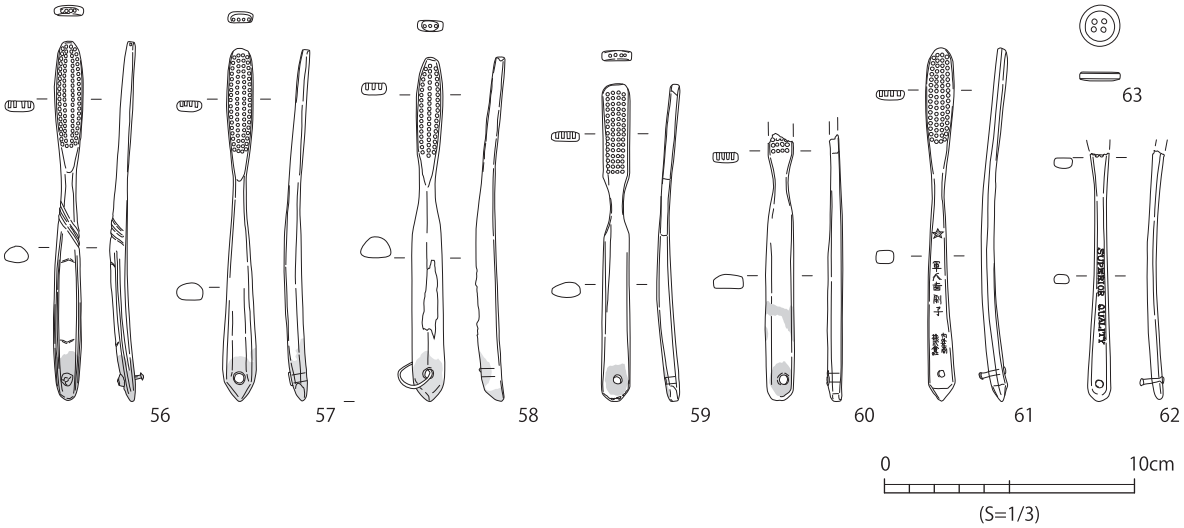


図 83　その他の素材の製品（S=1/3）

4　金属関連資料

今回の調査において、確認された金属製品は 16 世紀初頭頃から昭和 20 年前後までのものがあり、出土した金属製品は明治時代から昭和 20 年まで調査地を含む名古屋城跡におかれた陸軍第 3 師団に関連する資料と思われるものが大半である。近代以後の新しい掘削や整地から外れた戦国時代の溝・土坑からは、鉄製品 2 点、鍛冶関連資料 1 点と江戸時代の土坑・井戸からは銅製品 13 点（他にキセルと銭 34 点）、鉄製品 59 点、鍛冶関連資料 4 点が出土した。よって今回の調査により出土した江戸時代以前の資料の大半について実測・拓本を行ない、近代以後の資料については陸軍関係と思われる、容器、服飾具、馬具など用途が特定でき、形態的特徴があるものを中心に実測と写真による資料化を行なった。

＜1　戦国期＞

戦国時代 1 期（古瀬戸後期～大窯 2 段階）の 606SD から鉄製鏃 1 点（1）、戦国時代 2 期（大窯 3 階段）603SD から鉄鏃の基部 1 点（2）があり、鏃は幅 1.0cm 程の断面方形、長さ 16.0cm の中型品である。

＜2　江戸時代＞

金属製品と鍛冶関連資料は 17 世紀～ 18 世紀初頭の 389SK・466SE、18 世紀中頃の 110SK、18 世紀後半～ 19 世紀初頭の 381SK・492SK、18 世紀末～ 19 世紀初頭の 387SK などから出土した。江戸時代を通じてみられる出土遺物は銅製キセル（全部で 26 点）、銅銭（全部で 17 点）、鉄製釘であり、その他には銅製の釘隠し用飾り金具がある。

389SK（3 ～ 11）：銅製品 5 点、鉄製品 13 点がある。3 は長さ 9.5cm、幅 1.4cm、厚さ 0.3cm の断面やや二等辺三角形状の扁平な細板で、腐植物が表面に付着した痕跡が見られる。4 は四葉文？の凹みがある飾り金具で、左右に小さな切り込みがある。5 は口付部が欠損しているがキセルの吸口、6 と 7 はキセルの雁首で首の火皿下部に炭化物が、小口部に木質物が残る。6 の首の脂反し部の幅が 0.75cm、7 は 0.7cm を測る。鉄製品は M8 が不明の板状品であるが、木材の付着痕がある。9 ～ 11

は鉄釘で比較的頭部が明瞭にあり、長さ 5cm を超えるものが主体である。江戸時代の釘は頭部が「T」字状、鍵状に造り出されるもので、断面方形のものである。

466SE（12 ～ 15）：鉄製品 5 点あり、全て釘である。長さ 9cm を超える 12・13 と長さ 5.5cm 前後の 14・15 に分かれる。

110SK（16 ～ 21）：銅製品 1 点、鉄製品 5 点がある。16 は銅製キセルの雁首で長さ 3.2cm と短いもので、首の脂反し部の幅は 0.55cm で、細身である。17 は鉄製の板で、厚さ 0.9cm、長さ 7.0cm、幅広部が 4.2cm と平面撥形をしたものである、刃部は確認できていない。18 ～ 21 は鉄釘で 18 が長さ 6.7cm でやや長いが 19・20 は長さ 4.0cm 程で短いもので、頭部の造り出しも不明瞭である。19 には木材の付着痕が残る。21 は釘の先端部か。

381SK（22・106）：22 は鉄製の断面長方形状の棒状品である。106 は寛永通宝で 1 点出土している。
492SK（23 ～ 40）：銅製品 4 点、鉄製品 14 点がある。銅製品は 23 がキセルの雁首の火皿冠部で残りが悪い、24 はキセルの吸口で、今回の調査では 24 のように肩部の無いタイプのものばかりが出土した。25・26 は銅銭と思われるもので、鉄錆による土の固着が厚くみられる。鉄製品では 27 の形態が不明なものを除いて、他は全て鉄釘であり、28・29 が長さ 6cm を超える比較的長いもの、その他全体が明らかなものでは長さが 5.0cm 以下の短いものが多い。全体に頭部の造り出しが不明瞭である。今回の調査で出土した鉄釘では江戸時代の新しい時期の鉄釘の方が短いものが主体で、頭部の造り出しが不明瞭になる傾向が認められる。36 には木材の付着痕が見られる。

その他：整地層などからの出土遺物で、41 ～ 43 は銅製品のキセルで、41 は全体の長さ 11.4cm で、雁首が長さ 4.2cm、吸口が長さ 7.1cm、吸管の接続部が長さ 0.2cm と短いもので、雁首の脂反し部の幅は 0.7cm で、今回の出土資料の中では幅広のものである。42 は雁首で径 3.2cm 程の環状に曲げられて出土した。43 は吸口で、小口部に 3 条の線が廻る。

銅銭では寛永通宝（101 ～ 107）がある。近世の遺構からの出土のものは先に述べた 381SK 出土の 106 と 149SK 出土の 102、329SK 出土の 104 がある。他のものは近代の土坑からの出土である。

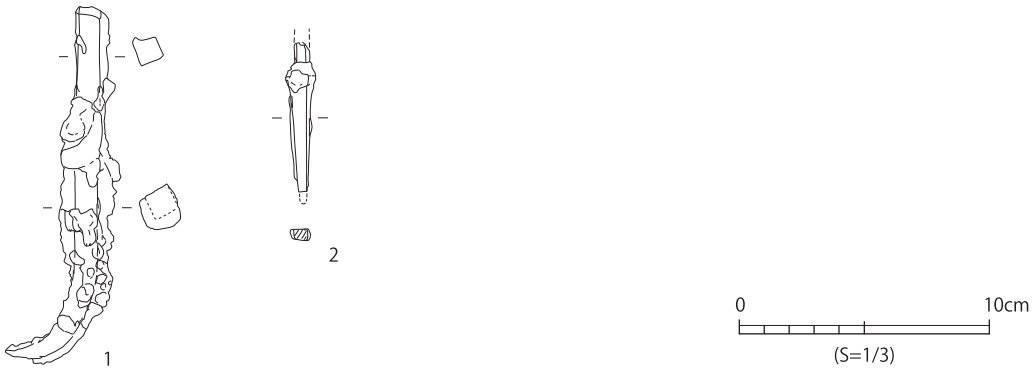
＜3　鍛冶関連資料＞

今回の調査ではフイゴの羽口 1 点（44）、椀型鉄滓 4 点（46 ～ 48）が出土した。44 は外径 7.3cm、送風孔径 2.9cm、炉壁部厚さ 2.0cm、送風角度 24 度の羽口先端部で、炉内の部分には流動鉄滓が付着している。椀型滓は 45 と 46、48 が重複椀型滓の完形品で、45 が 2 つ、48 が 3 つ、46 が 4 つ～ 7 つ重複しており、重複した椀型滓の 1 つは 47 のような径 4 cm ～ 6 cm 前後、厚さ 1.0cm ～ 1.5cm 前後のものである。これらの資料は 45 が戦国時代の可能性がある 604SD 出土、46 が 18 世紀後半～ 19 世紀初頭の 492SK 出土、47 が 17 世紀～ 18 世紀初頭の 466SE 出土、48 が 18 世紀後半の 110SK からの出土で、時期的な偏りはみられず、鍛冶が各時期において散在的に行なわれたことを示すのであろうか。

＜4　近代以降＞

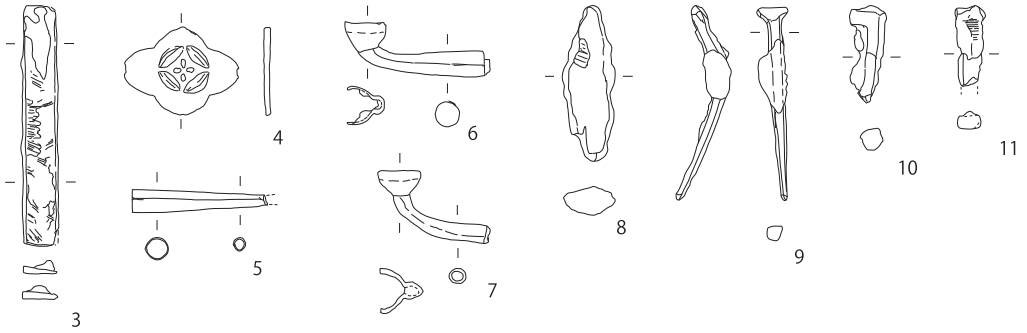
明治時代～昭和時代 20 年まで存在した近代の陸軍に関連する防空壕跡や用排水溝、および表土直

＜戦国期＞

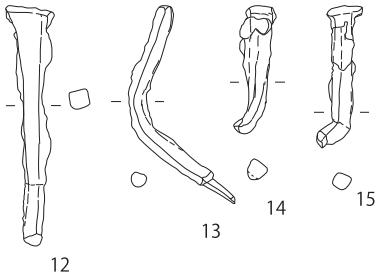


＜江戸時代＞

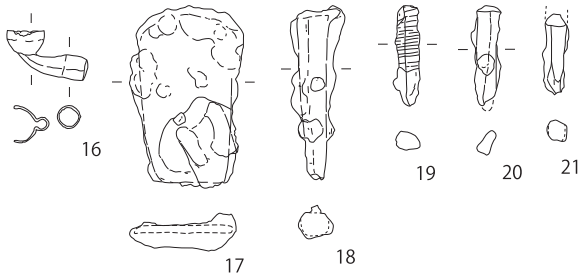
389SK



466SE



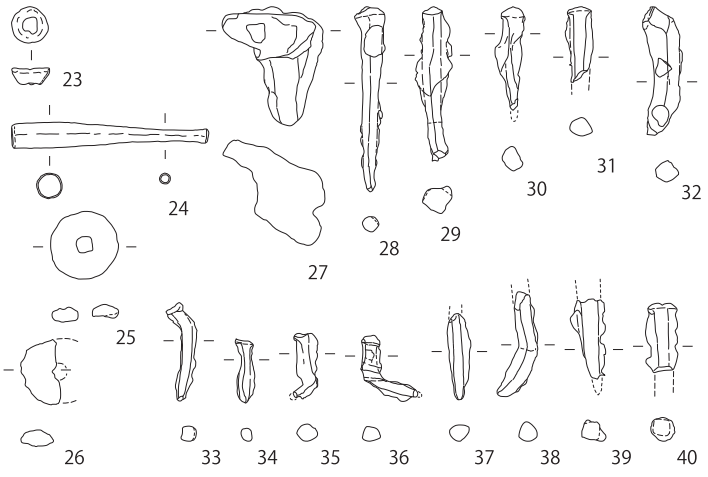
110SK



381SK



492SK



その他

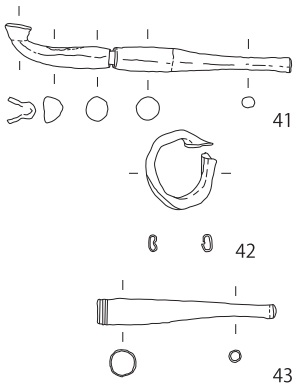
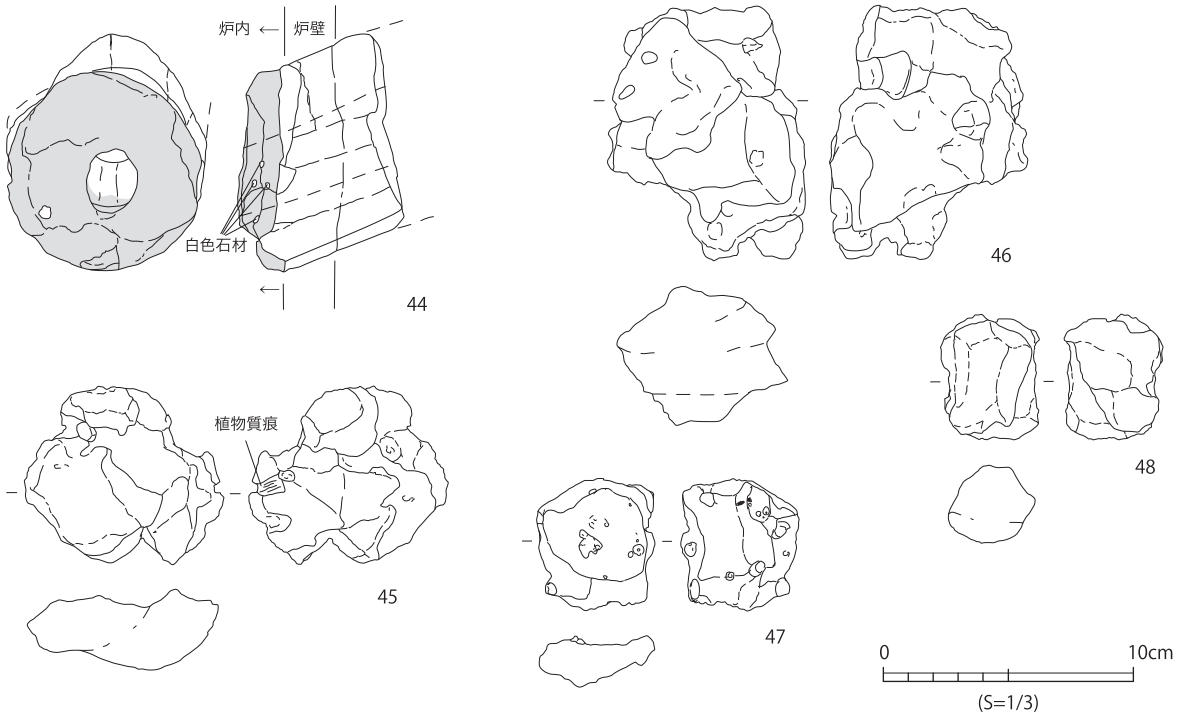


図 84　金属製品 1（S=1/3）

鍛冶関連資料



近代以降

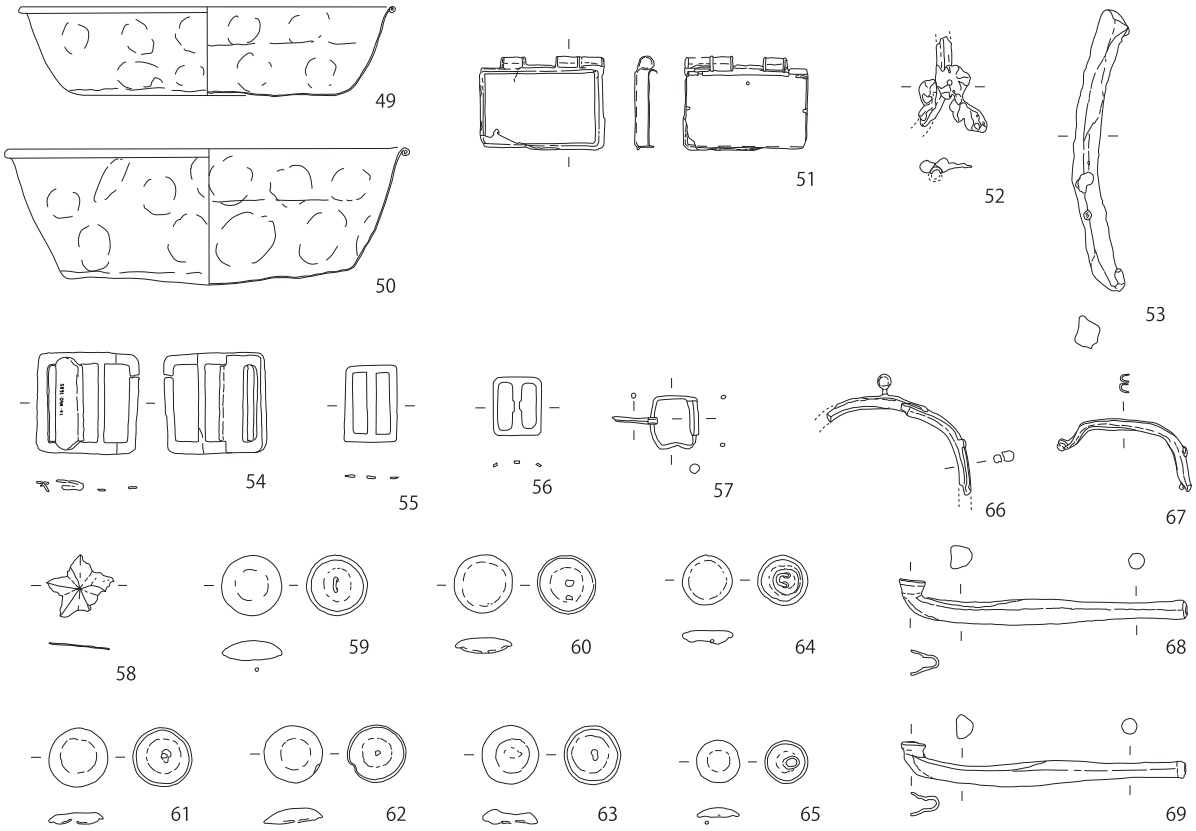


図 85　金属製品 2（S=1/3）

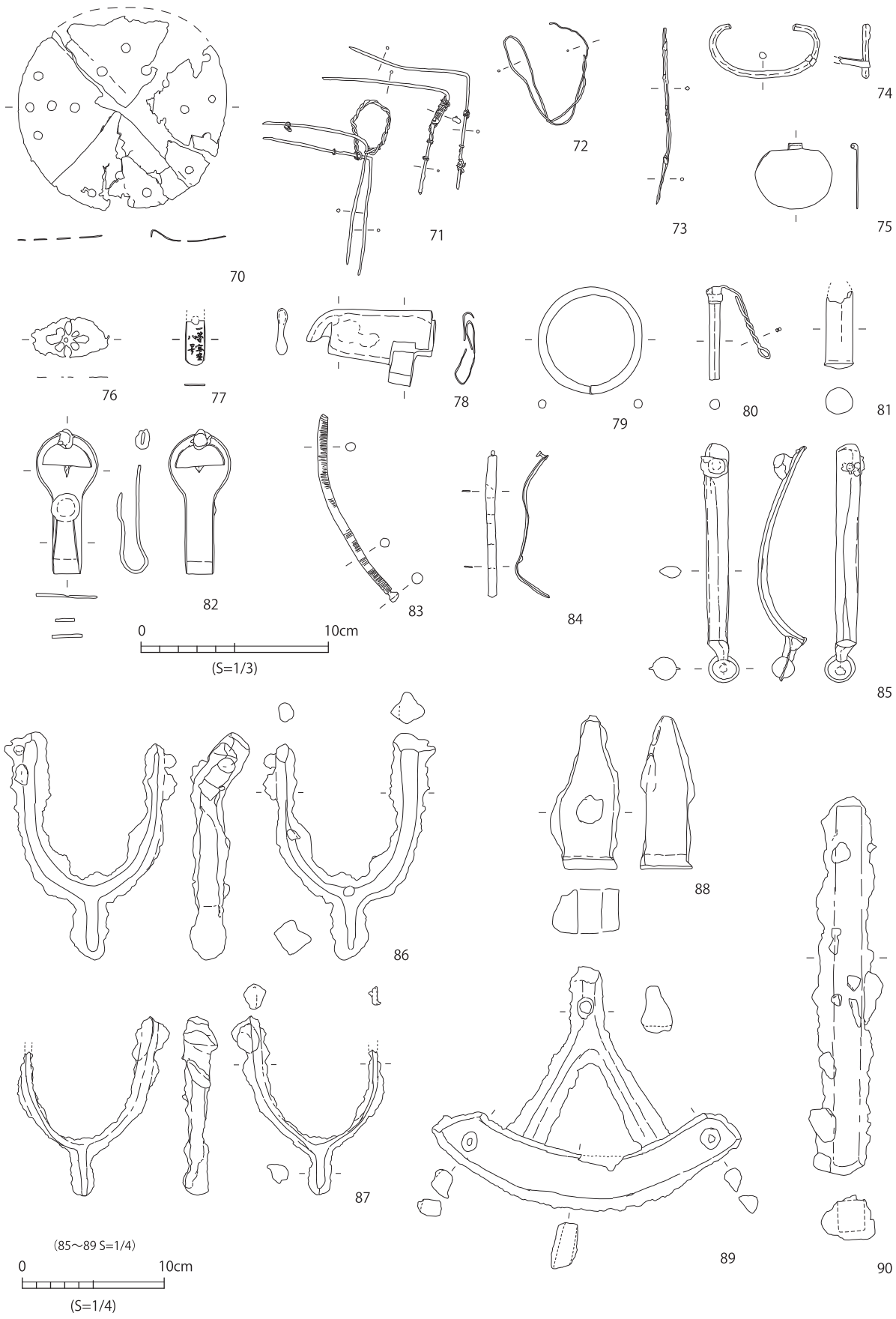


図 86　金属製品 3（S=1/3,1/4）

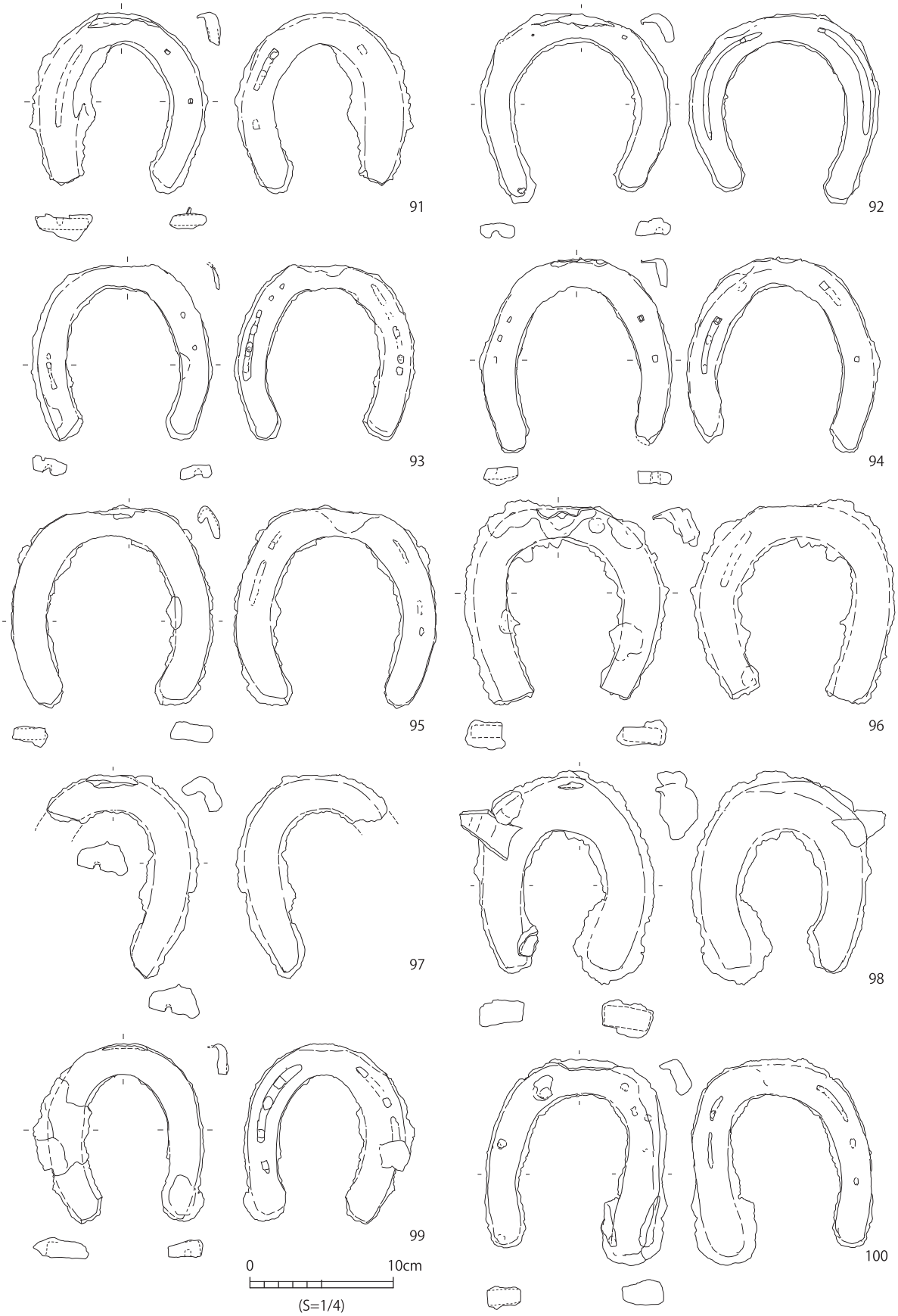


図 87　金属製品 4（S=1/4）

下の整地層から出土したものである。今回は陸軍に関連するアルミ製品、鉛製品、銅製品、銅合金製品、鉄製品の主要なものを図化した。なお、鉄製品は総数 643 点、銅製品は総数 86 点、アルミ製品は総数 6 点が出土した。

アルミ製品（49 ～ 51）：49 は口径 15.0cm、器高 3.5cm、底径 8.0cm の深皿で、50 は口径 16.0cm、器高 5.0cm、底径 9.0cm の碗で、どちらも口縁端部が外側に折り返して補強される形態をしている。肩から外した跡の研磨痕が横方向にみられる。51 は長さ 5.0cm、幅 3.7cm、厚さ 0.6cm の開閉式のケースで蓋の軸部側に小さい穴が空けられている。蓋外面に 2mm に 4 個の点々がある。

鉛製品（52・53）：52 は配線の管状圧痕がみられ、配線の留め金具の可能性があるもの、53 は長さ 11.2cm の弧状で、幅 1.0cm の断面方形をした不明品、先端部がやや撚られている。

銅製品（54 ～ 84）：陸軍の服飾に関連するもの（54 ～ 69）、生活用具などの雑具に関連するもの（70 ～ 84）を中心に取り上げた。

54 ～ 57 はベルトの金具と思われるもので、54 は幅 4.0cm、55 は幅 3.0cm、56 は幅 2.3cm、57 は幅 2.1cm で、54 は人間の着用するベルト金具の可能性があるが、他は馬具のベルトの留め金具の可能性がある。製品番号の「16 □ NO.1685」が刻まれている。58 は陸軍徽章で、つぶれて、残存状態は悪い。59 ～ 65 は陸軍の制服に伴うボタンで、径 2.4cm 前後のもの（59 ～ 63）、径 2.0cm 前後のもの（64）、径 1.4cm 前後のもの（65）の 3 タイプのボタンが確認できた。66・67 は蝦蟇口金具で、66 は左右対称のタイプのもの、67 は左右非対称の形態のようである。68・69 は一体型のキセルで、幅と厚さは 0.9cm ～ 1.0cm で同じであるが、長さは 68 が 11.5cm、69 が 9.3cm と異なる。脂反し部の幅はどちらも 0.6cm 前後である。

70 は甑の目皿状のもので、復元怪 11.0cm の円形の薄板で、径 0.5cm 程の穴が 20 個確認できる。穴の配置にパターンがありそうであるが、接合する部分では左右対称にならない。71 ～ 73 は径 0.1cm 程の銅線で、71 は銅線が巻き付けられている、急須の把手にかける銅線などの可能性がある。74 は環状の吊り輪のような形のもの、用途不明である。75 は楕円形の薄板が、紐通しのような環状部分によって固定される部品である。76 は釘隠しと思われる菊菱文が抜いてある金具、77 は第 3 師団司令部に関係する「一等客室八号」の彫刻のある鍵ホルダーの板と思われるもの、78 は用途不明であるが、何らかの留め金具、79 は径 5.6cm にめぐる環、同一規格品がもう 2 点出土している。80 は何かの栓のような断面円形の棒状金具、81 は径 1.5cm の薬莢と思われるもの、先端部が欠けている。82 はやや装飾性があるベルトの留め金具と思われるもので、図の上部に鉄製品の一部が付着していたと思われる金具が固着している。83 は全体に線状痕がみられる長さ 10cm 程の断面円形の棒で、頭部が丸く造り出されている。84 は幅 0.5cm、厚さ 0.1cm の薄板で、2 ヶ所で曲げられている、先端に鋲状の金具が付けられている。

銅合金製品（85）：拍車の左側で、幅 9 cm の「U」字形に沓を挟むものである。後部には径 1.7cm の球形の拍車部がある。「U」字部の先端に鉄製のネジが付けられており、沓とつながれたものと思われる。後に述べる鉄製拍車と 85 のような銅合金製品との違いは、銅合金製拍車が第 3 師団司令部の他の士官と高官用のものに区別されていた可能性がある。

鉄製品（86 ～ 100）：馬具に関連するものと、形態が明瞭なものを図化した。86・87 は拍車の鉄製品で、幅 9cm 前後の「U」字型に沓を挟む部分があり、その先端が上に曲げられている。銅合金製品の拍車のような留め金具状鋲は確認できなかった。88 は長さ 8.1cm、幅 2.7cm．厚さ 2.3cm の金槌の頭部で、径 1.3cm 程の臍により柄が差し込まれていたものである。89 は三角形状の秤の釣り金具と思われるもので、上部と弧状になる部分の左右に穴がある。目盛りは確認できていない。90 は長さ 26.8cm、一辺 2.0cm 前後の角棒で、用途は不明である。

91 ～ 100 は馬具の蹄鉄で、全て蹄鉄の鉄頭に鉄唇がたち蹄を固定化するタイプのもので、蹄側に沿った左右の鉄板に幅 0.5cm の釘溝があり、その中に蹄鉄を取り付ける釘を打ち込む釘眼とよばれる長方形の穴がみられる。91 ～ 96 は前後と左右の幅がほぼ同じである円形状の前足の蹄鉄、97 ～ 100 は前後が左右の幅より長い楕円形状になる後ろ足の蹄鉄である。前足の蹄鉄は前後の長さと左右の長さから 2 タイプから 4 タイプに分かれる可能性があり、前後の長さ 12.0cm ～ 12.5cm、左右の長さ 12.5cm 前後の 91・93、前後の長さ 13.1cm 前後、左右の長さ 13.1cm の 92、前後の長さ 13.5cm、左右の長さ 13.4cm の 94、前後の長さ 14.0cm 前後、左右の長さ 14.0cm 前後の 95・96 がみられる。後ろ足の蹄鉄は前後の長さからやや小型の 97・99 とやや大型の 98・100 に分かれる可能性がある。明治 32 年 6 月発行の陸軍省『陸軍蹄鐵術教範』には蹄鉄の前足と後ろ足について 4 号の大きさによる規定がある。これによると前足の 91・93 は前後の長さ 12.0cm、左右の長さ 9.8cm の第一號蹄鐵、92 は前後の長さ 13.0cm、左右の長さ 10.5cm の第二號蹄鐵、94・95 は前後の長さ 13.8cm、左右の長さ 11.4cm の第三號蹄鐵、96 は前後の長さ 14.5cm、左右の長さ 12.0cm

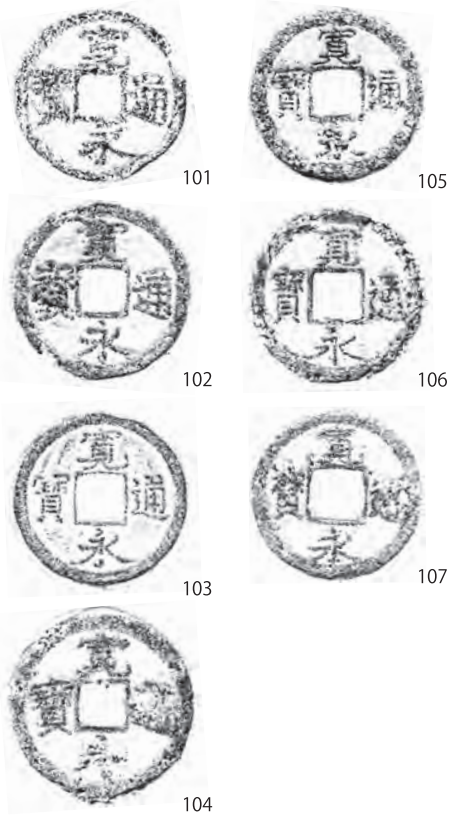


図 88　寛永通宝拓本（S=1/1）

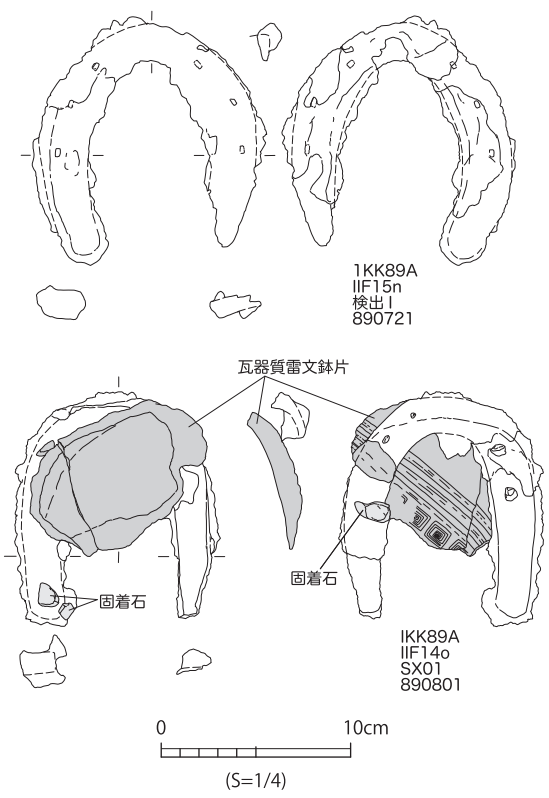


図 89　勝川遺跡出土蹄鉄（S=1/4）

の第四號蹄鐵に対応する可能性がある。しかしいずれも左右の長さでは 2.0cm 程幅広になっており、錆び膨れの分を引いても、修正が施されている可能性が高い。後ろ足についても、99 は前後の長さ 12.4cm、左右の長さ 10.0cm の第一號蹄鐵、98 は前後の長さ 13.4cm、左右の長さ 10.7cm の第二號蹄鐵、100 は前後の長さ 14.4cm、左右の長さ 11.6cm の第三號蹄鐵に対応する可能性があるが、左右の長さが前足と同様に 1.0cm ～ 2.0cm 幅広になっている。

また図 89 の勝川遺跡の 89A 区出土蹄鉄は幕末から明治時代の遺構とされる SX01 と遺物包含層から出土しており、勝川遺跡の蹄鉄が、鉄側に沿った釘溝が切られていないタイプのものである点が、陸軍と愛知県春日井市にある勝川宿の民間用馬の蹄鉄の違いを示していて興味深い。

（蔭山　誠一）

5　石器・石製品

1 は凹基無茎の石鏃で、脚部の一端が欠失している。断面形状は対称的で扁平な菱形を呈するもので、平面中央部にも瘤状残存部が認められないものである。下呂石製。2 は短冊形の打製石斧で、完形である。片面は原石の礫面を一部に残しており、もう片面は全面に剥離が行なわれている。いずれも図示した右側側辺に調整時の細かい剥離が認められる。使用によると考えられる磨滅が表面に著しく認められるが、特に礫面を残している平面において、図示した上半分と下半分とでは痕跡の様相の異なりが指摘できる。石材はホルンフェルス。

（川添　和暁）

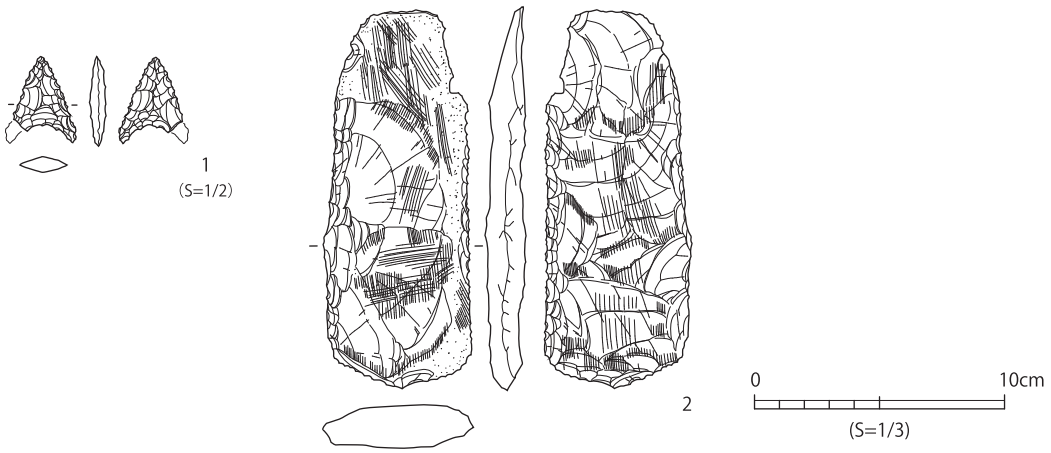


図 90　石器（S=1/2，1/3）

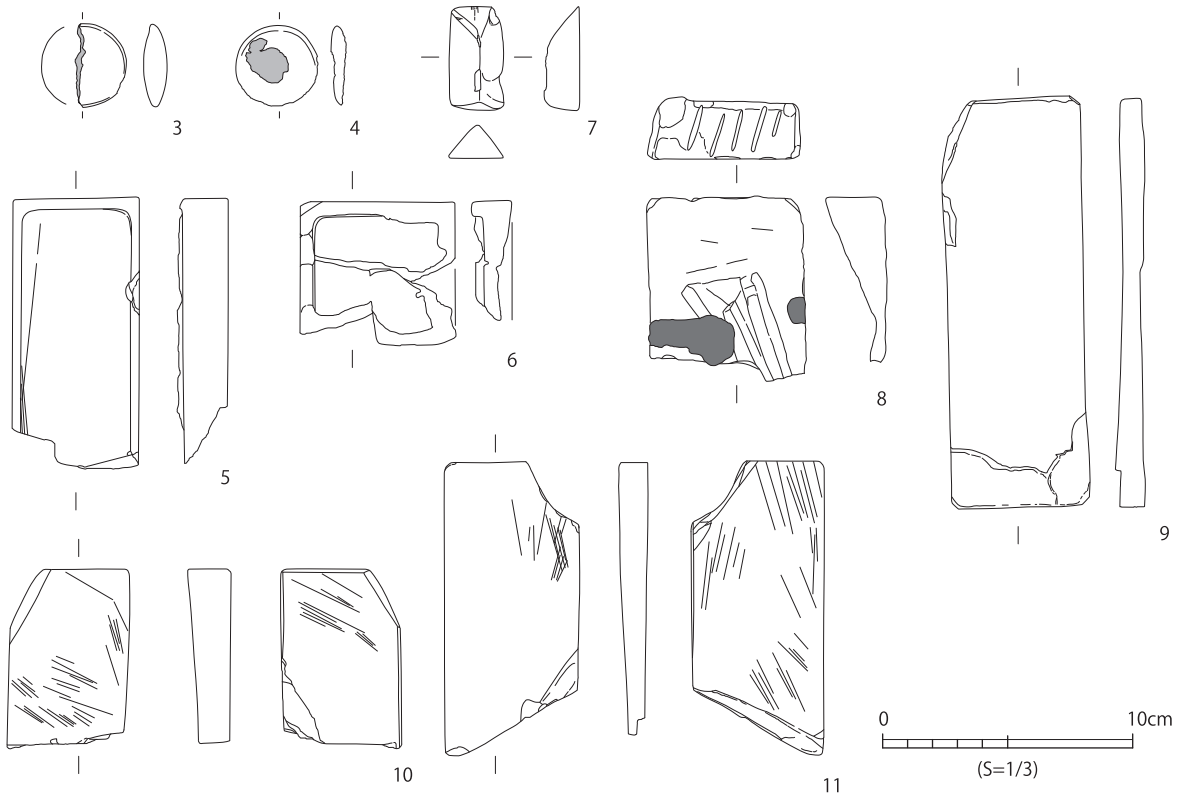


図 89　石製品（S=1/3）

3，4 は径 2.2cm の白色の碁石である。4 は凝灰質泥岩製、3 は磁器製であり布目のような痕跡がみえる。

5，6 は硯である。5 は頁岩、6 は泥質凝灰岩製であり硯にしてはやや軟質である。

7 ～ 11 は砥石である。7 は長さ 4.1cm、幅 2.2cm 程度の小型の三角柱状をなし、一端を斜めにカットして三角形の研磨面を形成している。石材は凝灰質泥岩。8 は肌理の粗い凝灰質砂岩製であり、中央は大きく凹み、さらに V 字状の凹みが数条みられる。鉄錆が付着しており、近代以降のものと思われる。9,10,11 は近世の土坑から出土したものであり、幅がほぼ揃っている。幅 5.0 ～ 5.4cm、厚み 1.1cm ～ 1.7cm 程度、ほぼ完存する 9 は長さ 16cm の長方形の形状である。9 は泥質凝灰岩、10,11 は凝灰質泥岩である。

（武部　真木）

第４章　自然科学分析

1　土師質鍋付着物の放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定
パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薫
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani

1.　はじめに

名古屋城三の丸遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2.　試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 13 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 13　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-8567	位置：ⅡNS06, IF17r 遺構：605SD 層位：下層（最下層直上） その他：070205	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：胴部外面（煤類） 状態：dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.01N, 塩酸:1.2N)
PLD-8568	位置：ⅡNS06, IF17r 遺構：605SD 層位：下層 その他：070216	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：口縁部外面（煤類） 状態：dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.01N, 塩酸:1.2N)

3.　結果

表 14 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta\ ^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図 92 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

＜暦年較正＞

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表 14　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-8567	-19.29±0.19	325±18	325±20	1510AD(55.0%)1600AD 1610AD(13.2%)1640AD	1490AD(95.4%)1650AD
PLD-8568	-19.71±0.18	280±18	280±20	1520AD(24.9%)1550AD 1630AD(43.3%)1650AD	1520AD(45.7%)1580AD 1620AD(49.7%)1670AD

4.　考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

＜参考文献＞

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の ^{14}C 年代 . 3-20.

Ramsey, C.B. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

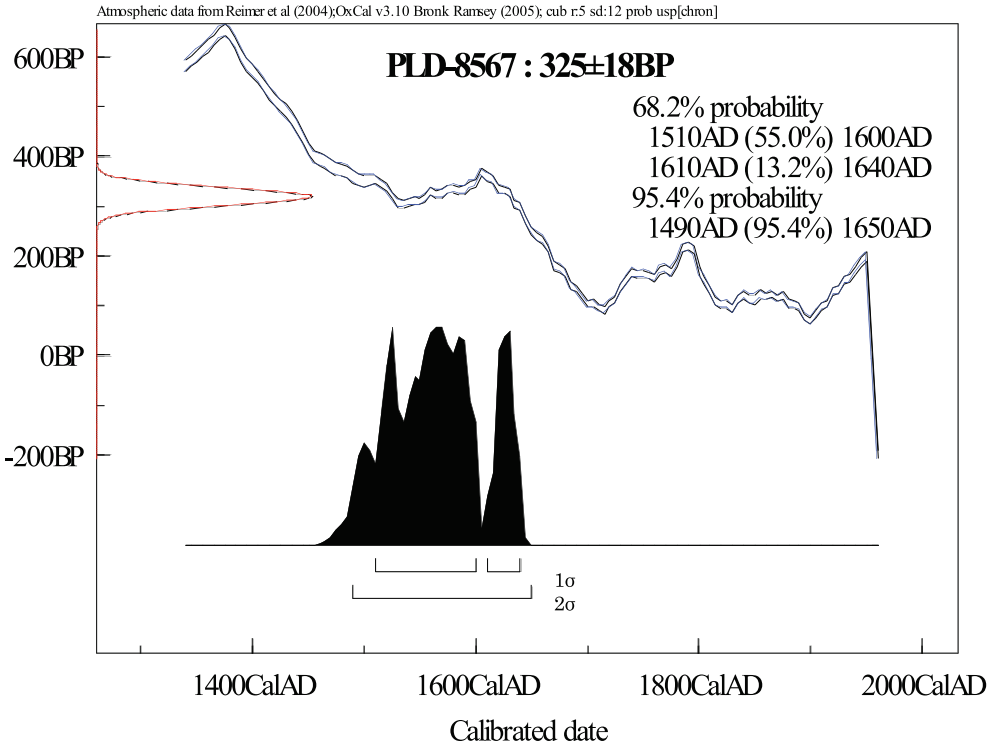
Ramsey, C.B. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hoog, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

＜補足＞

なお、分析後に試料２点は同一個体であることが判明した。土師質内耳鍋（E-3）は形状等により時期は戦国時代に比定されるものである。測定番号 PLD-8568 で得られた２つのピークのうち戦国時代の範囲内に収まる 1520 ～ 1550 年という年代が、この場合最も蓋然性の高い数値としてあげられよう。

（整理担当　武部）


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-8567 : 325±18BP
68.2% probability
1510AD (55.0%) 1600AD
1610AD (13.2%) 1640AD
95.4% probability
1490AD (95.4%) 1650AD
600BP
400BP
200BP
0BP
-200BP
1σ
2σ
1400CalAD
1600CalAD
1800CalAD
2000CalAD
Calibrated date

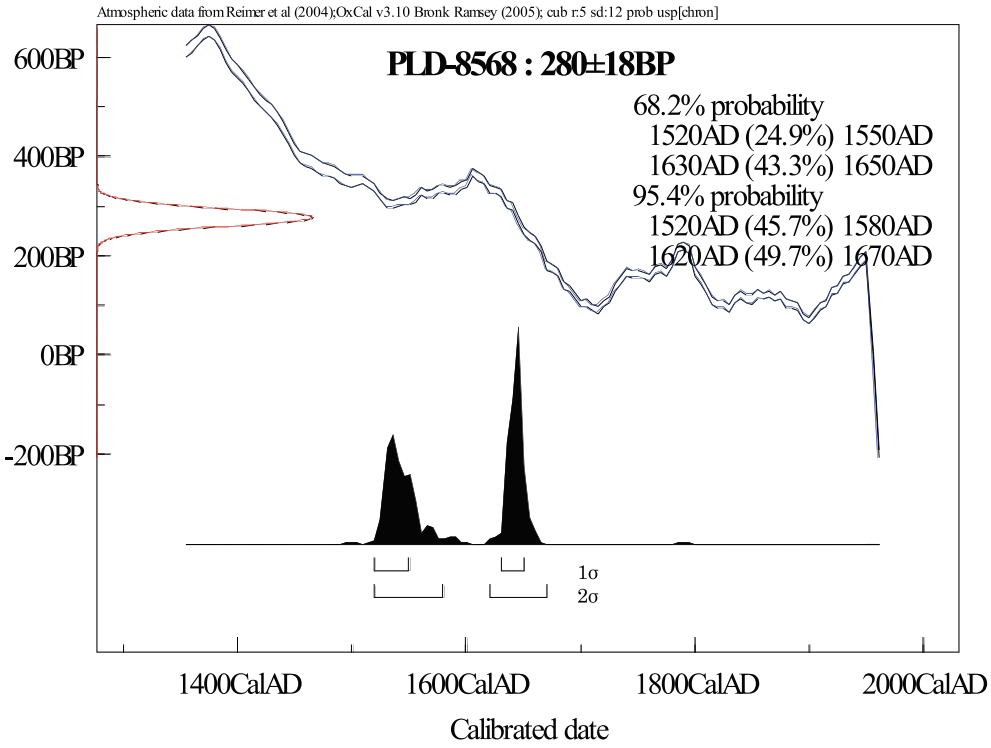

Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-8568 : 280±18BP
68.2% probability
1520AD (24.9%) 1550AD
1630AD (43.3%) 1650AD
95.4% probability
1520AD (45.7%) 1580AD
1620AD (49.7%) 1670AD
600BP
400BP
200BP
0BP
-200BP
1σ
2σ
1400CalAD
1600CalAD
1800CalAD
2000CalAD
Calibrated date

図 92　暦年較正結果

2　動物遺体の同定（戦国期・近世・近代）

中村賢太郎・山形秀樹（パレオ・ラボ）
樋泉岳二（早稲田大学）

1. はじめに

愛知県名古屋市の名古屋城三の丸遺跡において、近世から近代にかけての時期とされる動物遺体が検出された。ここでは、動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、381SK、605SD、387SK、110SK、413SK、492SK、603SD、遺構不明より検出された動物遺体である。381SK の試料は、土ごと取り上げられた動物遺体である。605SD、387SK、110SK、413SK、492SK、603SD の試料は、発掘調査時に動物遺体として取り上げられた未洗浄の試料である。遺構不明の試料は、獣骨がまとまって出土し、周囲の土と共に塊状で取り上げられたものである。

試料は、1mm メッシュの篩上で水洗し土を除去した。得られた残渣から 5mm メッシュの篩により動物遺体を抽出した。なお、381SK と 387SK の試料は、微小な動物遺体が確認されたため、1mm メッシュで得られた残渣からも動物遺体を抽出した。

抽出した動物遺体の同定と各部位の計数を行った。なお、貝の計数にあたって、巻貝（腹足綱）は殻頂、殻軸（1/2 以上残存）、殻口部、蓋の数をカウントした。二枚貝（斧足綱）は殻頂が残っているものを対象に左殻右殻に分けてカウントした。ただし、ナミマガシワは左右の区別をしていない。

表 1 に同定された動物遺体の一覧を示す。以下、動物遺体を貝類、魚類、爬虫類、哺乳類に区分して記載する。

3. 貝類（表 16）

腹足綱はアカニシ、サザエ、キセルガイ類の 3 分類群、斧足綱はヤマトシジミ、ハマグリ、サルボウまたはアカガイ、マガキ、アサリ、ナミマガシワの 6 分類群が検出された。表 16 に分類群、部位ごとの点数を遺構別に示した。文中の最小個体数は、巻貝は殻頂、殻軸、殻口部、蓋のうち最も大きい数、二枚貝は左右殻のうちでより大きい数である。ただし、ナミマガシワは殻頂数の半数をもって最小個体数とした。

・381SK

アカニシ（殻口部のみ欠損）、サザエ、キセルガイ類、ヤマトシジミ、ハマグリ、サルボウまたはアカガイ（破片）、マガキ、アサリが検出された。最小個体数はアカニシ 1、サザエ 1、キセルガイ類 1、ヤマトシジミ 2、ハマグリ 8、マガキ 4、アサリ 2 である。ハマグリが多く、次いでマガキが多い。

・387SK

サザエが検出され、最小個体数は 3 である。

・110SK

ヤマトシジミ、マガキ、ナミマガシワが検出された。最小個体数は、ヤマトシジミ 1、マガキ 8、ナミマガシワ 1 である。マガキが多い。

・413SK

表 15　動物遺体種名表

貝類	
腹足綱　Class Gastropoda	
アカニシ	*Rapana thomasiana*
サザエ	*Batillus cornutus*
キセルガイ類	Clausiliidae sp.
斧足綱　Class Bivalvia	
ヤマトシジミ	*Corbicula japonica*
ハマグリ	*Meretrix lusoria*
サルボウまたはアカガイ	*Scapharca subcrenata* or *Scapharca boughtomii*
マガキ	*Crassostrea gigas*
アサリ	*Ruditapes philippinarum*
ナミマガシワ	*Anomia chinensis*
硬骨魚綱　Class Osteichthyes	
ウナギ属	*Anguilla* sp.
ニシン科	Clupeidae sp.
マイワシ	*Sardinops melanostictus*
コイ科	Cyprinidae sp.
タラ科	Gadiae sp.
ボラ科	Mugilidae sp.
サンマ	*Cololabis saira*
サヨリ属	*Hyporhamphus* sp.
フサカサゴ科	Scorpaenidae sp.
コチ科	Platycephalidae sp.
アイナメ属	*Hexagrammos* sp.
アジ科	Carangidae sp.
タイ科	Sparidae sp.
タイ科？	Sparidae sp. ?
サバ属	*Scomber* sp.
カレイ科	Pleuronectidae sp.
フグ科	Tetraodontidae sp.
真骨類	Teleostei sp.
爬虫綱　Class Reptilia	
スッポン	*Pelodiscus sinensis*
哺乳綱　Class Mammalia	
ウシ	*Bos taurus*
ウシまたはウマ？	*Bos taurus* or *Equus caballus* ?
ウマ	*Equus caballus*
ヤギまたはヒツジ	*Capra hircus* or *Ovis aries*
哺乳綱	Mammalia sp.

サザエ、サルボウまたはアカガイ（破片）が検出された。最小個体数はサザエ 1 である。

・492SK

サザエが検出され、最小個体数は 1 である。

表 16　貝類数量表

	アカニシ	サザエ			キセルガイ類	ヤマトシジミ		ハマグリ		サルボウまたはアカガイ	マガキ		アサリ		ナミマガシワ
		殻軸	殻口部	蓋	殻頂	殻頂		殻頂		破片	殻頂		殻頂		殻頂
	—	—	—	—	—	L	R	L	R	—	L	R	L	R	—
381SX	1	1		1	1	1	2	8	8	＋	3	4	2	2	
387SK		3													
110SK							1				8	8			2
413SK		1								＋					
492SK			1												

＋：あり

4. 魚類（表 17）

硬骨魚綱はウナギ属、ニシン科、マイワシ、コイ科、タラ科、ボラ科、サンマ、サヨリ属、フサカサゴ科、コチ科、アイナメ属、アジ科、タイ科、タイ科？、サバ属、カレイ科、フグ科、真骨類の 18 分類群が検出された。表 17 に分類群、部位ごとの点数を遺構別に示した。文中の最小個体数は、特定部位の数のうち最も大きい数である。ただし、腹椎と尾椎は複数あっても 1 とカウントした。

・381SK

ウナギ属、ニシン科、マイワシ、コイ科、タラ科、ボラ科、サンマ、サヨリ属、フサカサゴ科、コチ科、アイナメ属、アジ科、タイ科、タイ科？、サバ属、カレイ科、フグ科、真骨類が検出された。

タイ科の前上顎骨、歯骨、角骨は、マダイ亜科の別種かと思われるが、種を特定するに至っていない。前上顎骨の概形はマダイ亜科（マダイ･チダイ）と同様だが、歯列形状が異なる。すなわち、マダイ･チダイの主歯列は 2 列の大型歯列とその舌側のわずかな小型歯帯からなるが、本例は頬側にやや大型の歯列が 1 列ありその舌側に中～小型歯による幅広い歯帯が伴う。歯骨の概形や歯列は基本的にマダイ亜科（マダイ・チダイ）と同様だが、主歯列舌側の小型歯帯がやや広い点で明確に異なる。歯骨も前上顎骨と同一種と思われる。

真骨類の鱗は、主にタイ科とボラ科だと考えられる。

最小個体数はウナギ属 1、ニシン科 1、マイワシ 1、コイ科 1、タラ科 1、ボラ科 1、サンマ 1、サヨリ属 1、フサカサゴ科 1、コチ科 1、アイナメ属 1、アジ科 1、タイ科 1、サバ属 1、カレイ科 1、フグ科 1 である。

椎骨のみが検出された分類群が多い。また、タラ科腹椎、ボラ科尾椎、タイ科？第 1 椎骨の各 1 点に切断の痕跡が見られる。

・387SK

タイ科？が検出された。

5. 爬虫類（表 18）

爬虫類はスッポンの 1 分類群が検出された。表 18 に点数を示した。

381SK よりスッポンの右中腹板＋下腹板 1 点、剣状腹板左右各 1 点、甲骨板破片 2 点が検出された。すべて同一個体だと考えられる。

6. 哺乳類（表 18）

哺乳類はウシ、ウシまたはウマ？、ウマ、ヤギまたはヒツジ、哺乳綱の 5 分類群が検出された。表 18 に爬虫類と共に、分類群、部位ごとの点数を遺構別に示した。文中の最小個体数は、特定部位の数のうち最も大きい数である。

・605SD

ウシ、ウシまたはウマ？、ウマ、哺乳綱の 4 分類群が検出された。IF15r よりウシ下顎骨破片 1 点、ウマ左下顎臼歯 2 点、IF16r より哺乳綱部位不明破片、IF17r よりウシまたはウマ？の長骨破片、歯を含む哺乳綱の骨片、IF18r よりウシまたはウマ？の長骨破片、ウマ上顎臼歯破片 1 点、哺乳綱部位不明破片が検出された。最小個体数はウシ 1、ウマ 1 である。ウマは左下顎臼歯 2 点が検出されたが、部位の特定はできていないため、最小個体数を 1 とした。

・603SD

ウマ、ウシまたはウマ？の 2 分類群が検出された。IF17s よりウマ左上顎第 2 前臼歯 1 点、IF18g よりウシまたはウマ？の長骨破片が検出された。ウマの最小個体数は 1 である。

・遺構不明

小型のウシ科の 1 分類群が検出された。カモシカより小さく、ヤギ・ヒツジ現生標本とほぼ同大であることから、ここではヤギまたはヒツジと同定した。ただし、四肢骨はかなり長く、また脛骨の骨幹形状がヤギ・ヒツジ現生標本とかなり異なるなど、相違点もあり、さらに検討を要する。検出された部位は、前肢と後肢および頭蓋骨の一部である。いずれも保存状態が悪く、破損が著しい。骨端のほとんどは欠損している。大腿骨骨幹に切創が見られる。すべて同一個体である。

また、哺乳綱の部位不明破片多数が検出されたが、ヤギまたはヒツジと同じ個体だと考えられる。

7. おわりに

遺構ごとの動物遺体出土傾向の整理と遺構間の比較を行い、まとめとしたい。

381SK は、貝類、魚類、爬虫類が検出された。貝類はハマグリ、マガキをはじめとする 8 分類群からなり、多様である。魚類も種類が多く、淡水魚と海水魚を合わせて 18 分類群が検出された。最小個体数で見ると各分類群とも同数である。魚類は、椎骨のみが見られた分類群が多く、複数の椎骨で切断の痕跡が観察された。また、他の遺構では見られないスッポンが検出された。

387SK は、貝類と魚類が検出された。貝類はサザエのみ、魚類はタイ科？と真骨類が見られた。

110SK は、貝類のみが検出され、マガキが多く、その他にヤマトシジミとナミマガシワが見られた。

413SK は、貝類のみが検出され、サザエとサルボウまたはアカガイが見られた。

492SK は、貝類のみが検出され、サザエが見られた。

605SD や 603SD の溝状遺構は、哺乳類のみが検出され、ウシ、ウマが見られた。387SK などの土坑とは異なり貝類は検出されず、廃棄される動物の種類が土坑とは異なっていたと考えられる。

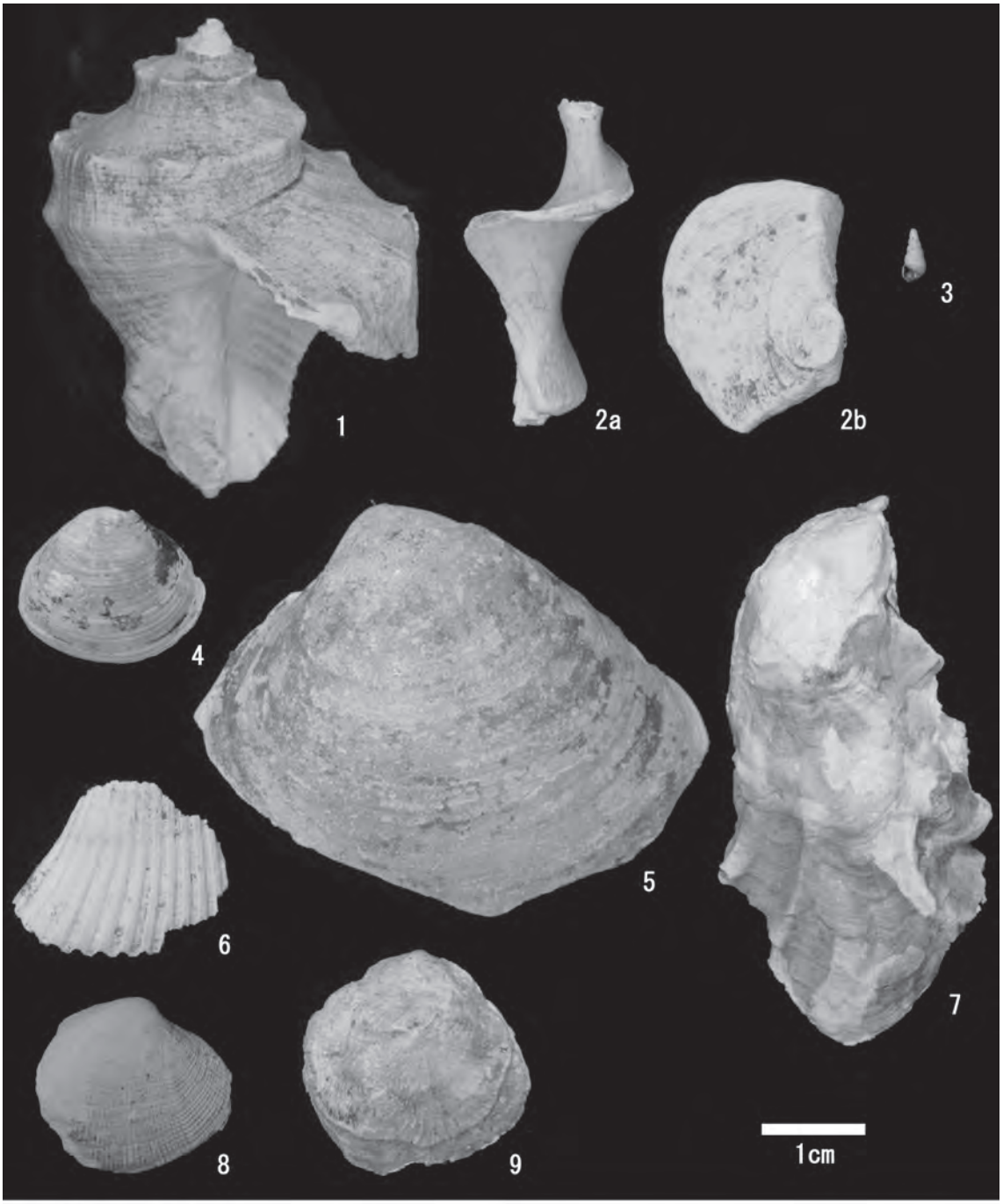
遺構不明は、ヤギまたはヒツジと同定された小型のウシ科のみが検出された。前肢、後肢、頭蓋が検出され胴部が見られないことと、大腿骨に切創が見られたことから、ヤギまたはヒツジ（小型のウシ科）が解体された痕跡だと考えられる。

遺構間を比較すると、動物遺体の種類に差がある。このうち、魚類については試料採取方法による見落としの問題を考えなければならないため、遺構間での出土傾向の差を過去の廃棄行動を十分に反映したものだと考えることは難しい。一方、溝と土坑で見られた哺乳類と貝類の有無の差は、溝と土坑で廃棄される動物の種類が異なっていたことを示すと考えられる。

＜補足＞

動物遺体を含む遺構の年代について、溝 605SD,603SD は戦国期那古野城の時期、土坑 110SK は 17 世紀後葉と 18 世紀後葉、381SK,492SK,387SK は 18 世紀後半から 19 世紀前葉、土坑 413SK は明治期が最終の廃棄時期と考えられる。試料はいずれも貝あるいは骨が目視で確認できた堆積層から採取している。

（調査担当　武部）



貝類
1．アカニシ　2．サザエ（a：殻軸，b：蓋）　3．キセルガイ類
4．ヤマトシジミ　5．ハマグリ　6．サルボウまたはアカガイ
7．マガキ　8．アサリ　9．ナミマガシワ

図 93　検出された貝類

表 17　魚類数量表

	ウナギ属		ニシン科			マイワシ		コイ科	タラ科	ボラ科		サンマ	サヨリ属	フサカサゴ科				コチ科	アイナメ属		アジ科	タイ科			タイ科？				サバ属	カレイ科	フグ科		真骨類		
	腹椎	尾椎	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	第1椎骨	第2椎骨	腹椎	腹椎	腹椎	尾椎	尾椎	腹椎	歯骨		方骨		尾椎	腹椎	角骨		稜鱗	前上顎骨	歯骨		角骨		主鰓蓋骨	第1椎骨	腹椎	尾椎	尾椎	尾椎	前鰓蓋骨	鱗	椎骨	不明破片
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	L	R	L	R	—	—	L	R	—	L	R	L	R	L	R	—	—	—	—	L	R	—	—	—
381SX	7	6	8	10	1	1	1	1	1	2	4	1	1	1	1	1		1	2		1	1		1	1		1	1			1	2		1	++	4	++
387SK																																				+

＋：あり
＋＋：多数あり

表 18　爬虫類および哺乳類数量表

| | | 爬虫綱 | | | | 哺乳綱 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |



爬虫類と哺乳類
1．スッポン（a：中腹板+下腹板R，b：剣状腹板R，c：剣状腹板L）
2．ウシ下顎骨
3．ウマ上顎L第2前臼歯
4．ヤギまたはヒツジ-小型のウシ科-（a：側頭骨岩様部L，
b：上腕骨L骨幹，c：橈骨L近位端，d：中手骨L近位端，
e：上腕骨骨幹，f：脛骨L骨幹，g：距骨L）

図 95　検出された爬虫類と哺乳類骨

第５章　総　括

1　戦国期の区画施設

今回調査地点での主な成果は、以下のようにまとめられる。

（１）断面Ｖ字状で土塁をもつ大型の堀（605SD）と同じく大型の堀（606SD-e,f）が成立し、両者は区画の開口部を形成している。

（２）堀（605SD）の廃絶後に規模の小さい溝（603SD,606SD-a,b）による方形区画が形成される。

（３）堀には大窯３段階の時期の遺物は含まれておらず、区画溝への変更は 16 世紀半ば前後の時期と考えられる。

三の丸遺跡の中世・戦国期の溝の方位を基にした分類（註１）に従えば、すべて「正方位」溝群に含まれるものであり、期間を通して区画の基本的な方位は変更はみられない。土塁を伴うとみられる大型の堀を廃棄し、方位を継承しつつ新たな区画を設定するという大規模な改変が行われており、溝の形状からは「防御」から「区画」への変化を読み取ることが可能である。調査区北側に近接する簡易・家庭裁判所地点（報 III）では、大窯３段階以降の時期に更に大規模な堀が設定されており、これとの関連が注目される。三の丸遺跡の広い範囲で行われた区画再編の一事例を加えることとなった。

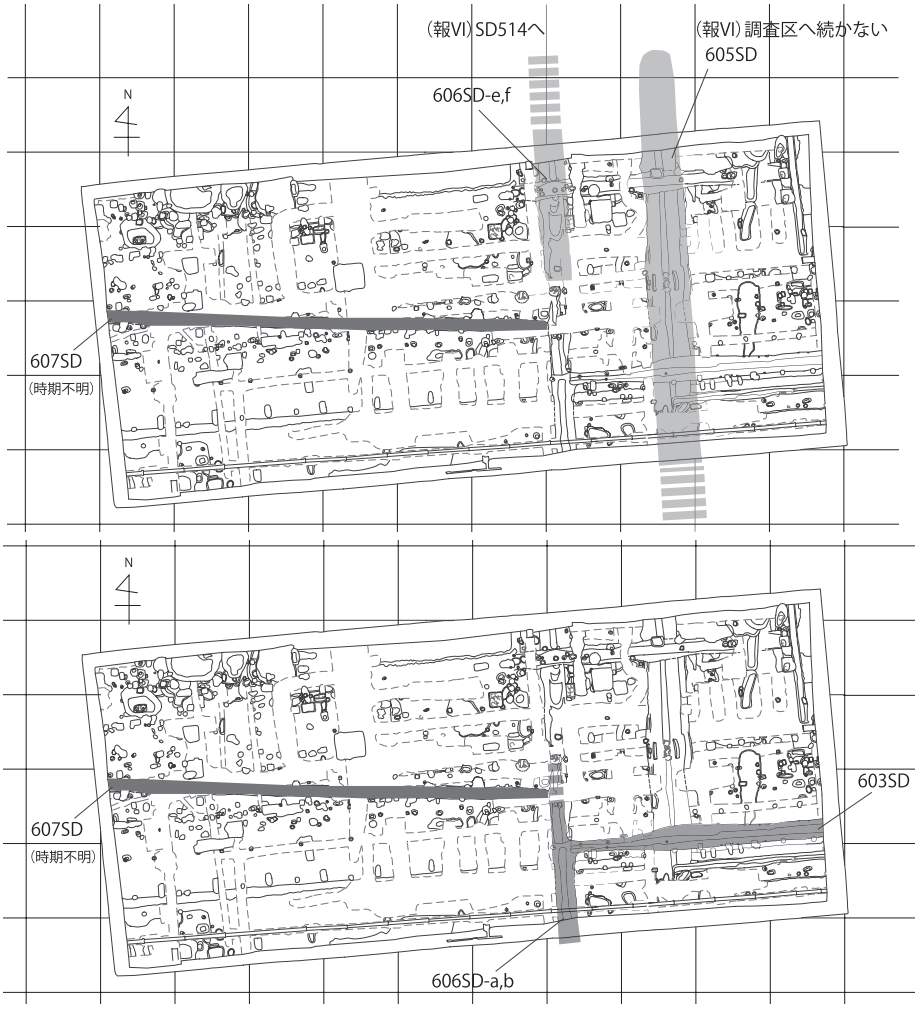


図 96　中世・戦国期　主要遺構の変遷

2　近世武家屋敷の空間利用

今回の調査により、ある武家屋敷地の１区画について、大凡の範囲の推定が可能となった。近世武家屋敷の内部構造の実態を考古学的に検証するための貴重な事例を加えることができた。これまでの調査成果と併せて、（１）近世武家屋敷の境界、（２）内部空間の利用方法（主にゴミの廃棄）についてまとめておきたい。

（１）近世武家屋敷の境界

関連する隣接調査地点との位置を図 97 に示す。今回の調査地点から南辺土塁に沿って西側約 195m の距離に県図書館地点（報告書 I）があり、北側は約 10m 幅の未調査部分を挟んで裁判所庁舎地点（報 VI）その更に北側に簡易・家庭裁判所地点（報 III）という位置関係にある。名古屋城内の拝領武家屋敷地―境界の変更が厳しく制限される―という特殊事情を前提として、時期幅をもつ複数の遺構群の関係性を検討した結果、今回の調査により一つの屋敷地をめぐる境界線を結ぶことが可能となった。

まず、（報 I）は御薗御門内北側に設けられた広場「内片端」と西御土居筋が交わる範囲を含む地点である。調査では柱穴列と布掘の溝が鋭角に屈曲するコーナー部分が検出され、上部構造として塀が推定されている。土塁基部の位置も確認されており、土塁と塀の間、道路幅は約 30m（15 間）と推定されている。道路そのものの構造については明確な情報を得られていないが、道路側溝は存在しないことが確認された。

（報 III）地点で検出された規模の大きい一群の溝の配置は、近世を通じて強い規制力をもった区画の存在を示している。このうち東西方向の溝群は隣接する屋敷の裏手の「背割」の境界線を構成するものと推定される。またその周辺に土坑群が密集して展開することから、どの屋敷でもほぼ同様に屋敷裏をゴミの処理の空間に当てていたと考えることができる。さらに東西溝に直交して北側、南側にそれぞれ接続する溝も規模や形状など類似する点も多く、それぞれ屋敷地の側面を画する境界を構成していたと考えられる。

以上の調査地点の成果からまず（報 I）の情報と今回調査地点の 196SK、東壁際の 832SK（どちらも版築状堆積層をもつ）を結んだラインを南御土居筋と屋敷地との境界線として提示しておく（図 97）。扱った遺構の形態は一定しておらず地点により異なっている（註２）ことなど、共通する上部構造を復元するとすれば問題点も多く残されているが、ここでは遺構の密集度を大きく区分する境界という性格を強調しておきたい。

次に図５で設定した屋敷地１・２の範囲は、（報 III）で検出された背割の境界線を参考にすると、図 98 のように推定することができる。南御土居筋から屋敷の背割までの距離は約 85m である。屋敷１・２が接する側面の境は、形状や遺物を含まず短期間に埋積している点など廃絶の様相なども一致する（報 III）SD10 と今回調査の 496SD を結んだラインを推定している。496SD 廃絶後に成立する SA001 に土塀あるいは板塀が想定されるが、（報 VI）SD001 はこれに付随する施設である可能性が考えられる。なお『坪間路顕帳』（註３）によれば屋敷地１は間口二十九間半、奥行四十三間半であり、屋敷地２は間口三十間四尺五寸、奥行四十五間三尺五寸である。

屋敷地１の間口を約 53m と仮定すれば、東西幅でも大半の部分が今回の調査範囲内に含まれると考えられる。今回の調査では南面する屋敷の出入口となる門の跡は確認されていないが、調査区の中央に近い 381SK より西側にはピット・土坑の分布が特に集中するため、正面の門はそれより東側に

存在したものと思われる。

（２）内部空間の利用方法

屋敷地１の内部について遺構の分布状況をみると、17 世紀前半～ 18 世紀初頭に機能していた背割の溝（SD08）の南側において、廃棄土坑は北西端（a）・北東端（b）の両コーナー付近、南部東側屋敷境付近（c）、南部西側（d）の大きく４カ所の範囲が判明している。（a,b）の範囲は屋敷境のすぐ際にまで達しており、遺物量は格段に多い。（a）は 17 世紀中葉段階を含む溝状土坑群が L 字状溝（SD19）の北・西側に掘削されていたものが、SD19 廃絶後に 18 世紀中葉には重複して大型の土坑が掘削されている。（b）は平面形が方形となるものが多く、側面の境（SD10）廃絶後に重複して 18 世紀末～ 19 世紀初頭の遺物を含む土坑が掘削されている。（c）は東側屋敷境に沿って細長くのび、しかも南辺ラインからやや距離をおく（４m 程度）範囲を想定しているが、17 世紀後半、18 世紀中葉～ 19 世紀前半の遺物の廃棄が認められる。井戸は 17 世紀後半～ 18 世紀前半の遺物を含む１基（SE003）がすぐ近くにあり、若干距離をおいて 18 世紀後半～ 19 世紀半ばの遺物を含む（SE201）が検出されている。今回調査の範囲では遺物量は少ない。（d）は南辺ラインから７～８m 距離をおいて横並びに分布する。17 世紀後半の遺物を含む井戸・土坑各１基、18 世紀後葉～ 19 世紀前半の土坑・地下室である。

名古屋城三の丸の武家屋敷内部の様相を伝える資料として、西面する屋敷地である野崎一学邸（註４）がある。屋敷は大名小路と中小路にの交点東南角に位置する。街路に沿う西側・北側部分に「長屋」が配置され、隣あう屋敷との境は塀である。西側が「門番所」、「中間部屋」のつく「長屋門」であり、北側長屋には物置のほか「馬屋」、「薪部屋」「炭部屋」が入る。門から入ると母屋正面に玄関があり、玄関右手（敷地南側）は「書院」「中の間」など表向の空間、玄関奥が「侍詰所」「侍部屋」「広間」など中奥の空間、そして玄関左手（敷地北側）が「台所板間」「茶ノ間」「女中部屋」奥向の空間となっている。この母屋とは別に「土蔵」（敷地南東隅）、「穀蔵」（同南西隅）がある。母屋の建物南側には縁がめぐり、敷地南側に広く開いた空間（庭）が存在する。中奥と奥向の間（敷地中央東側）にも空

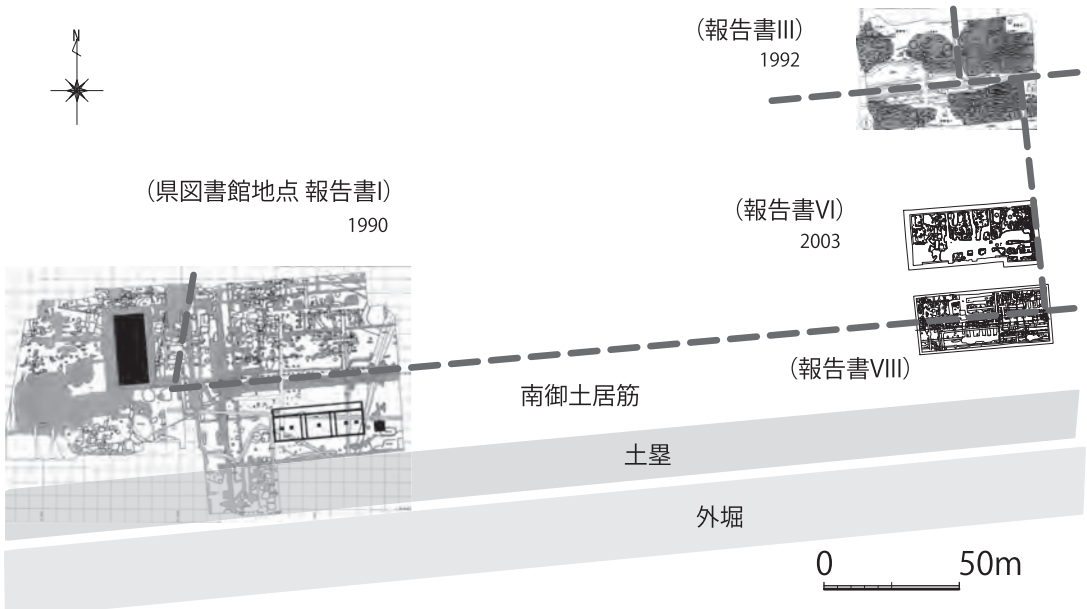


図 97　武家屋敷　南辺境界の推定図

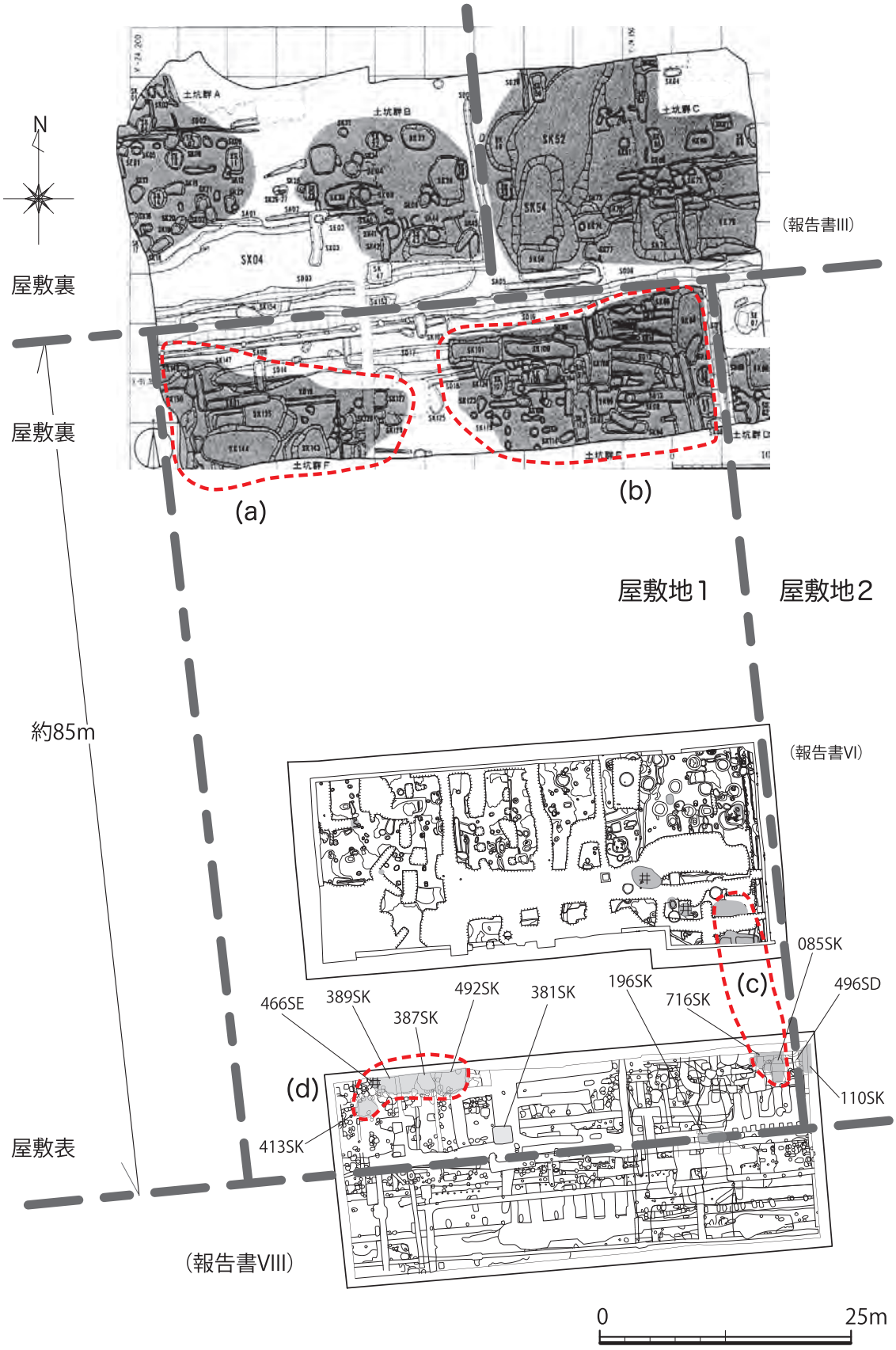


図 98　屋敷地 1 ・ 2　境界の推定図

間（庭）が存在する。また、母屋建物と長屋との間に、「カマド」（台所）に接する「内庭」が設けられ、井戸が設置されている。厠は母屋の北西端にある。敷地周縁には「路地」がめぐり、「カコイ」が多用されで細かく区切られている。

以上を参考にして再び屋敷地１の遺構の配置を眺めると、南御土居筋に面する敷地境界付近に一定の一定幅で遺構の希薄な範囲があり、何らかの建物が存在していたと考えられる。（報 VI）地点は全体に遺構・遺物ともに希薄であり、母屋建物が存在した空間である可能性は高い。ただし、調査区北東部には、植栽痕と思われる土坑数基が検出されており、これらが「表庭」に含まれるとすれば母屋建物は敷地内のやや西寄りに配置されていたと考えられる。井戸は（c）付近で２基、（d）で１基が確認されているが、これらの付近に台所の存在が想定される。（報 III）の範囲には建物は及ばず、すべて「裏庭」の空間に含まれると考えられる。

「屋敷表」「屋敷裏」という空間的特質の違いは、遺構（主に廃棄土坑）の分布状況などからこれまでにも指摘されており、屋敷表である今回の調査範囲には大規模な廃棄土坑は存在しないものと予想されていた。調査の結果では屋敷裏と比較して土坑の規模・密度・遺物量のいずれも「表」と「裏」の差異は明瞭であった。しかし屋敷表の範囲も全くの空白地ではなく、少なくとも 18 世紀後半頃には、建物、塀などで目隠しとなればどこも廃棄場所となった可能性がある。因に、屋敷地２の廃棄土坑（110SK）は、境界を隔てた屋敷地１のものより大規模であることが予想され、範囲としては当初の境界線（496SD）上まで拡張されている。屋敷地２側ではより本格的な廃棄場所とされていたかもしれない。このようないわゆる「ゴミ処理」の行為は、日常的、あるいは屋敷替やその他事情による後片付け的廃棄（一時的）であるのか、性格の違いにより場所が選択されたと予想される。廃棄状況や遺物内容と居住者の屋敷替時期との関連性の検討が課題である。

3　軍用 防空壕の構造

第１章 - ３節にあるように、名古屋城三の丸遺跡は明治６年以降終戦まで陸軍第三師団が駐屯しており、調査では旧陸軍に関連する遺物も陶磁器類をはじめ金属製品、ガラス製品など多数出土している。当該時期の遺構は調査区全体に分布し、これらは近世の基本的な軸線方向をほぼ踏襲していることがわかった。写真・記録資料の援用も試みたが、図 6,7,8 にみられるような建物（兵舎、倉庫、厩等）をそれぞれ特定するには至っていない。

今回の調査では、その他に「防空壕」跡５基を確認した。防空壕の多くは終戦間際の混乱期に急造されており（註５）、これらの詳細な記録は残されていない可能性がある。記録が多く残る民間用防空

表 19　防空壕の構造と規模

	家庭用*待避所（記録）	備考
構成	出入口・非常口・収容室	出入口は収容室に対して屈曲
出入口	2箇所・「斜路」を推奨	発掘調査事例では「階段」が多い
規模	収容室幅 （小型）70／100cm （大型）80／120cm	それぞれ片側席/両側席タイプがある
	収容室高さ（小型）140cm （大型）150cm	
その他		

*公共、学校、家庭、工場別に待避所の規定がある

	検出遺構				
	340SX	341SX	342SX	343SX	344SX
出入口数	1～2	1	2	1	2
収容室数	2	4	3～4	単室	5～6
出入口床面が平坦斜面		○	○２カ所	○	○２カ所
出入口床面がU字状斜面	○１カ所？				
収容室幅	80cm	80cm	120cm	-	70～120cm
収容室（残存）高	160cm	85cm	160cm	80cm	90cm
通路幅	250cm	80cm	150cm	150～200cm	180cm
その他	一部天井蓋受付		築造途中	築造途中	一部増築途中

壕と今回検出された遺構群を比較すると表 19 のようになる。

検出された防空壕の特徴には、複数の収容室をもつこと、出入口が平坦な斜面であること、などが指摘できる。また複数の収容室を結ぶことから必然的に通路が長くなり、全体に規模が大きくなっている。防空壕は同時に存在したとみられ、計画的であるが密度の高い配置状況である。おそらく上部から掘削可能な（建物のない？）空間が限定されていたためであろう。一部に掘削途中とみられる箇所を確認したが、344SX 西側などは通路側面から水平方向に掘削を行っている。建物の床下に拡張を試みたものであろうか。

昭和 20 年における調査地点は、「第三師団経理部第一倉庫」となっている（図８）。防空壕出入口が階段ではなく平坦なスロープが多く採用されている点は、人員の収容だけでなく物品等の運搬を目的とした構造であった可能性が考えられる。複数の収容室と通路をもつ比較的大規模な構造であることも含め「軍用」の施設としての特徴と考えられよう。

【註】

（註１）松田訓 ,2002,「遺構からみた那古野城の残影」研究紀要３, 愛知県埋蔵文化財センター

（註２）南御土居筋の東端と東御土居筋が接する地点の調査では、屋敷を区画する遺構として石組と柱穴列（２タイプ）から塀跡が復元されている。名古屋市教育委員会 ,1989,「名古屋城三の丸　1・2・3 次調査の概要」

（註３）名古屋市博物館所蔵、宝暦３年（1753 年）

（註４）幕末期 1200 石取。水野耕嗣 ,1985,「武家地とその建築」『名古屋城』

（註５）「防空待避施設指導要領」内務省防空局制定、昭和 17 年７月。

【参考文献】

大岡敏昭 ,1999,『日本の風土文化とすまい―すまいの近世と近代』相模書房

四国城下町研究会 ,2006,『近世の屋敷境とその周辺』第７回四国城下町研究会発表要旨・資料集

町田　保 ,1943,『都市計画編　５』土木防空

服部弥二郎 ,1942,『空爆と防空壕　待避所の造りかた』東晃社

財団法人大日本防空協会 ,1941,『防空壕　用途と配置　構造と施工』

十菱駿武・菊池　実 ,2002,『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房

十菱駿武・菊池　実 ,2003,『続　しらべる戦争遺跡の事典』柏書房

名古屋市教育委員会 ,1989,『名古屋城三の丸遺跡― １・２・３次調査の概要―』

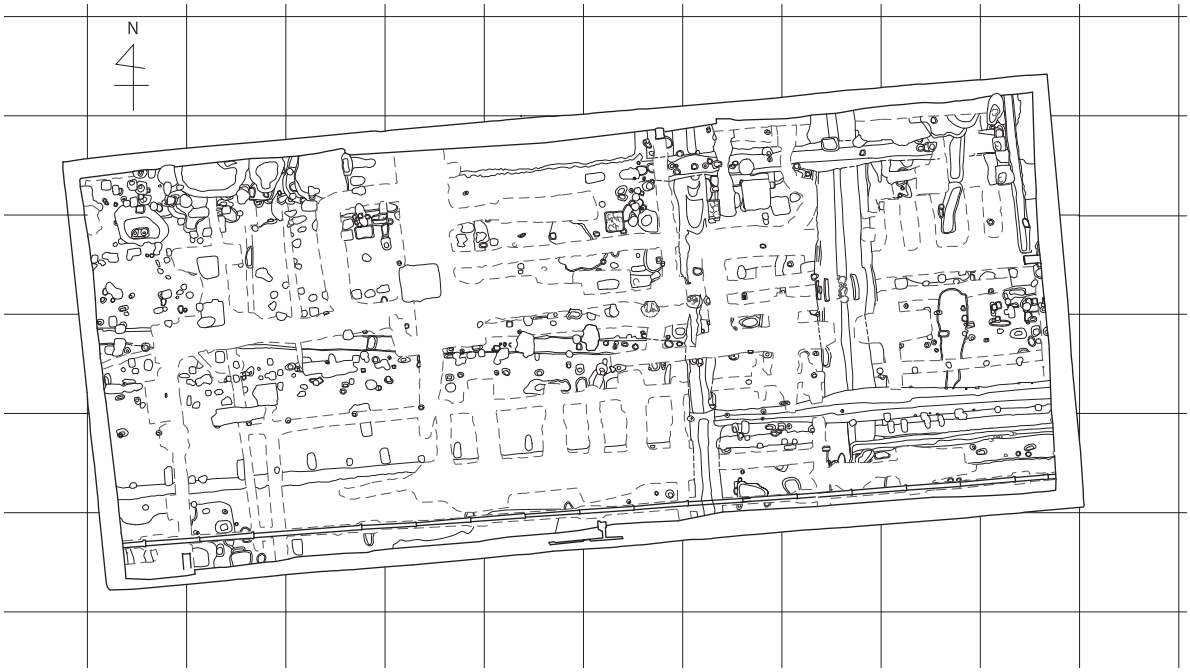
名古屋市教育委員会 ,1997,『名古屋城三の丸遺跡第８・９次発掘調査概要報告書』

梅本博志 ,1990,『名古屋城三の丸遺跡（１）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 15 集

金子健一 ,1992,『名古屋城三の丸遺跡（III）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 37 集

松田　訓 ,2003,『名古屋城三の丸遺跡（VI）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集

全体図（下面）



全体図（上面）

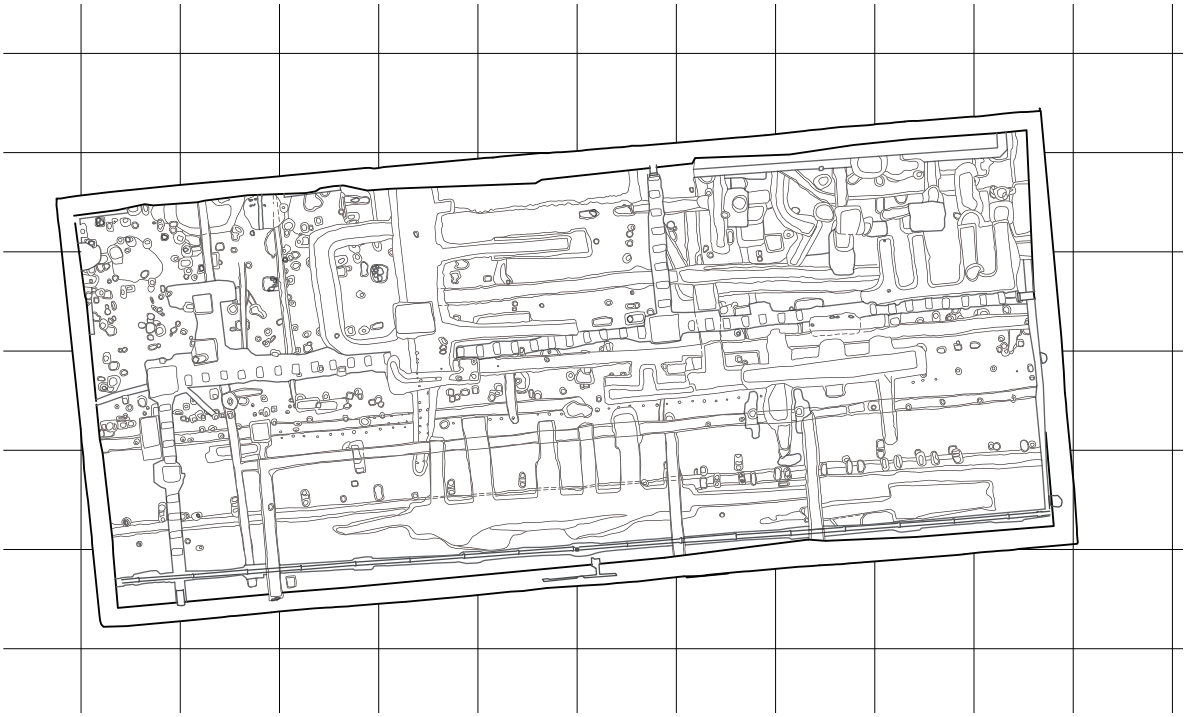


図　版

＜基本平面図＞
（S=1/100）

（１）上面西部　（２）上面中央　（３）上面東部
（４）下面西部　（５）下面中央　（６）下面東部

＜登録遺物一覧表＞

・土器・陶磁器（１～ 14）
・ガラス製品
・その他（骨製品）
・金属製品（１～２）
・石製品

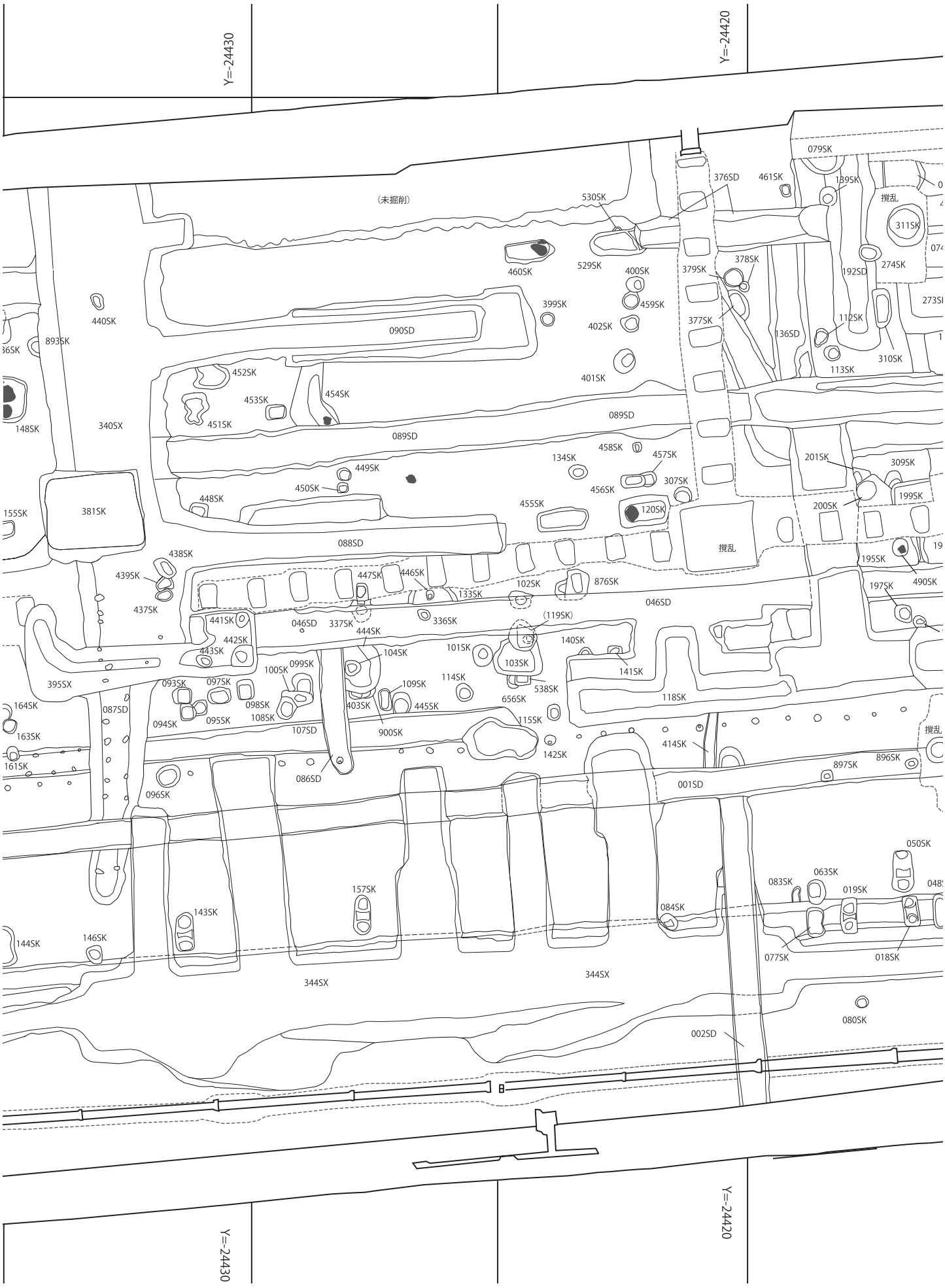
＜写真図版＞

遺構１～ 13
遺物１～ 18

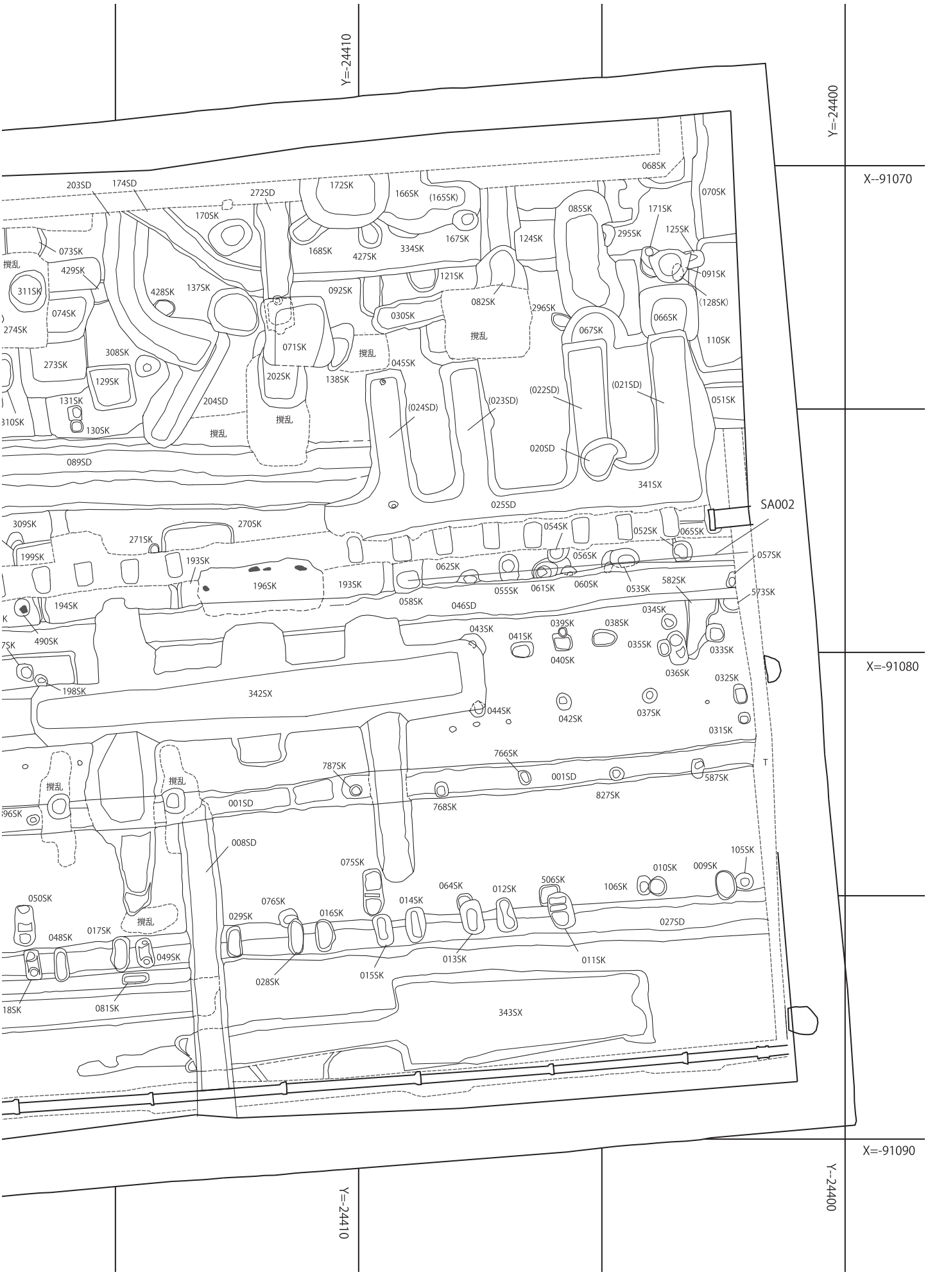
基本平面図1　上面西部


X=-91070
Y=-24450
Y=-24440
X=-91080
Y=-24450
X=-91090
Y=-24440
搅乱
搅乱
搅乱

基本平面図2　上面中央


Y=-24430
Y=-24420
(未掘削)
090SD
088SD
089SD
046SD
001SD
002SD
086SD
087SD
搅乱
340SX
344SX
381SK
395SX
893SK
900SK
(119SK)
376SD
461SK
530SK
460SK
529SK
400SK
399SK
459SK
402SK
401SK
379SK
378SK
377SK
136SD
079SK
189SK
311SK
192SD
274SK
112SK
310SK
113SK
440SK
452SK
453SK
454SK
451SK
148SK
449SK
450SK
448SK
134SK
458SK
457SK
307SK
456SK
455SK
120SK
201SK
309SK
199SK
200SK
438SK
439SK
437SK
447SK
446SK
133SK
102SK
876SK
336SK
337SK
444SK
441SK
442SK
443SK
104SK
101SK
103SK
140SK
141SK
538SK
656SK
114SK
109SK
403SK
445SK
115SK
142SK
118SK
414SK
897SK
896SK
195SK
490SK
197SK
099SK
100SK
093SK
097SK
098SK
095SK
108SK
107SK
094SK
096SK
164SK
163SK
161SK
155SK
157SK
143SK
144SK
146SK
050SK
063SK
083SK
019SK
084SK
077SK
018SK
080SK

基本平面図3 上面東部


Y=-24410
Y=-24400
X=-91070
X=-91080
X=-91090
SA002
203SD
174SD
272SD
172SK
166SK
(165SK)
170SK
068SK
070SK
085SK
171SK
295SK
125SK
124SK
167SK
168SK
427SK
334SK
073SK
429SK
311SK
428SK
137SK
121SK
091SK
(128SK)
092SK
082SK
296SK
074SK
030SK
066SK
274SK
067SK
110SK
308SK
071SK
045SK
273SK
202SK
138SK
129SK
(022SD)
(021SD)
131SK
204SD
(024SD)
(023SD)
051SK
310SK
130SK
020SD
089SD
341SX
025SD
309SK
270SK
271SK
054SK
052SK
065SK
199SK
193SK
056SK
057SK
062SK
196SK
193SK
055SK
061SK
060SK
053SK
582SK
573SK
194SK
058SK
046SD
034SK
490SK
043SK
041SK
039SK
038SK
035SK
033SK
040SK
036SK
198SK
342SX
032SK
044SK
042SK
037SK
031SK
766SK
787SK
001SD
587SK
827SK
768SK
001SD
008SD
075SK
105SK
010SK
009SK
050SK
064SK
012SK
506SK
106SK
076SK
014SK
029SK
016SK
027SD
048SK
017SK
013SK
011SK
049SK
028SK
015SK
018SK
081SK
343SX

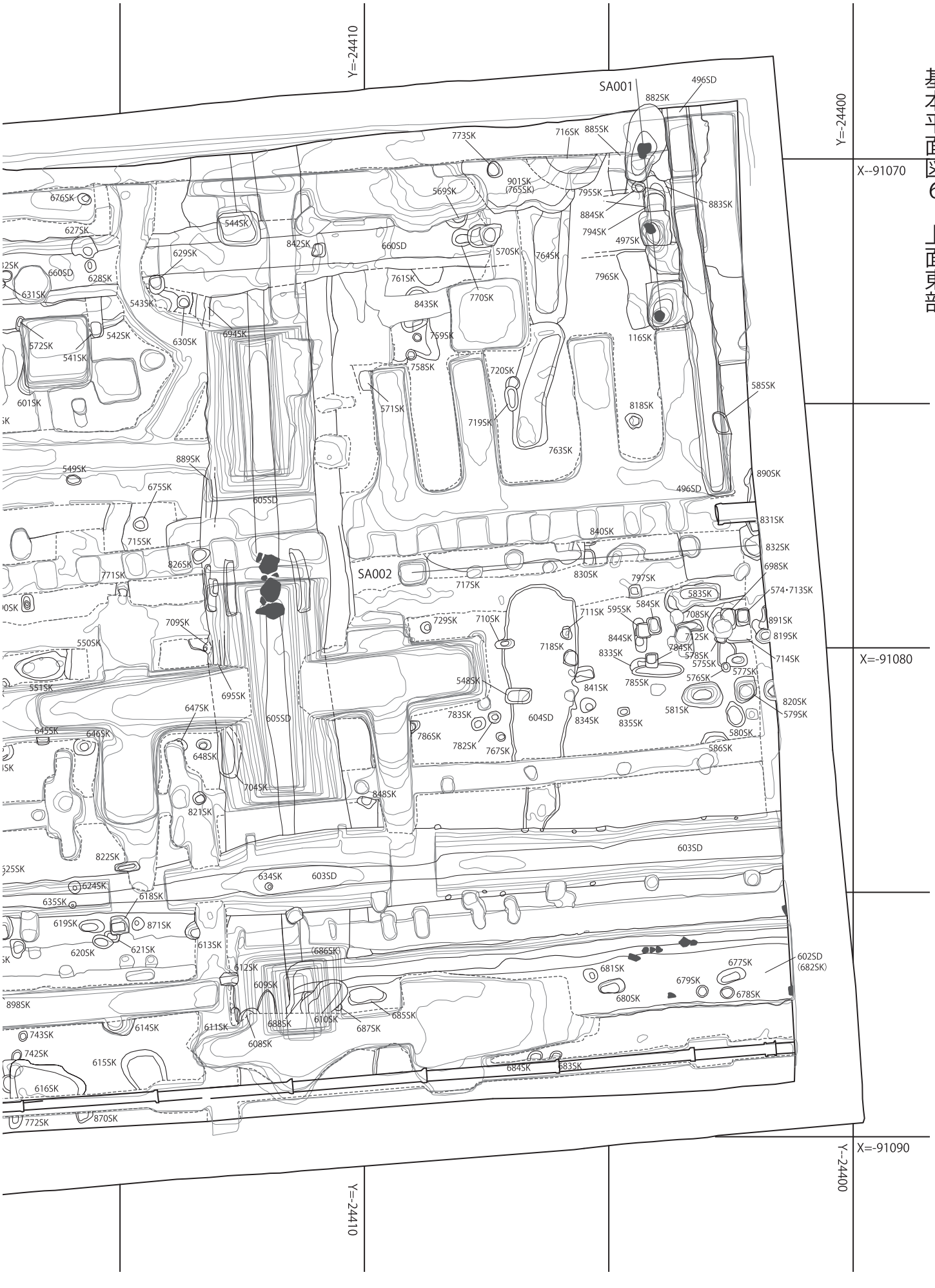
基本平面図4　下面西部


X=-91070
X=-91080
X=-91090
Y=-24450
Y=-24440
762SK
598SK
880SK
466SE
389SK
596SK
387SK
492SK
391SK
809SK
503SK
504SK
810SK
522SK
756SK
599SK
513SK
512SK
523SK
877SK
502SK
524SK
878SK
500SK
757SK
552SK
511SK
508SK
507SK
510SK
516SK
792SK
777SK
778SK
491SK
520SK
521SK
498SK
808SK
515SK
802SK
755SK
781SK
779SK
780SK
519SK
525SK
413SK
536SK
801SK
805SK
509SK
499SK
537SK
518SK
425SK
426SK
517SK
881SK
396SK
858SK
859SK
791SK
514SK
854SK
754SK
806SK
856SK
855SK
807SK
860SK
501SK
861SK
788SK
731SK
790SK
811SK
732SK
812SK
607SD
545SK
747SK
546SK
746SK
862SK
721SK
872SK
873SK
547SK
745SK
722SK
863SK
867SK
865SK
868SK
874SK
864SK
851SK
723SK
869SK
744SK
813SK
875SK
892SK
724SK
776SK
750SK
748SK
753SK
775SK
749SK
850SK
814SK
816SK
760SX
769SK
815SK
739SK
730SK
824SK
725SK
849SK
852SK
726SK
727SK
853SK

基本平面図5　上面中央


Y=-24430
Y=-24420
606SD-f
887SK
888SK
879SK
676SK
674SK
531SK
699SK
633SK
528SK
838SK
669SK
836SK
632SK
660SD
839SK
670SK
671SK
700SK
631SK
527SK
696SK
526SK
533SK
540SK
639SK
673SK
672SK
800SK
507SK
532SK
539SK
572SK
638SK
828SK
706SK
793SK
(829SK)
707SK
637SK
553SK
799SK
606SD-e
601SK
535SK
509SK
804SK
558SK
554SK
705SK
636SK
426SK
691SK
886SK
798SK
690SK
549S
702SK
703SK
555SK
556SK
(689SK)
701SK
557SK
823SK
14SK
269SK
697SK
490SK
495SK
559SK
811SK
560SK
751SK
752SK
593SK
606SD
534SK
662SK
658SK
663SK
666SK
667SK
817SK
594SK
551SK
653SK
650SK
651SK
693SK
654SK
649SK
607SD
655SK
657SK
664SK
659SK
641SK
640SK
(845SK)
645SK
563SK
668SK
803SK
665SK
642SK
661SK
644SK
561SK
652SK
(692SK)
591SK
592SK
873SK
564SK
589SK
789SK
547SK
567SK
588SK
643SK
899SK
565SK
562SK
566SK
868SK
728SK
847SK
568SK
825SK
846SK
590SK
625SK
892SK
626SK
635SK
619SK
622SK
623SK
898SK
606SD
743SK
741SK
742SK
737SK
738SK
617SK
616SK
736SK
735SK
772SK
733SK
734SX

基本平面図6 上面東部


Y=-24410
Y=-24400
X=-91070
X=-91080
X=-91090
SA001
SA002
496SD
882SK
773SK
716SK
885SK
901SK
(765SK)
795SK
883SK
884SK
794SK
497SK
569SK
544SK
842SK
660SD
570SK
764SK
796SK
629SK
761SK
770SK
660SD
628SK
631SK
543SK
843SK
542SK
630SK
694SK
759SK
116SK
572SK
541SK
758SK
720SK
585SK
601SK
571SK
818SK
719SK
763SK
889SK
549SK
890SK
675SK
605SD
496SD
831SK
715SK
840SK
832SK
826SK
771SK
830SK
698SK
717SK
797SK
574・713SK
583SK
584SK
595SK
711SK
729SK
710SK
708SK
891SK
709SK
844SK
712SK
819SK
550SK
718SK
833SK
784SK
578SK
714SK
575SK
577SK
576SK
548SK
785SK
841SK
695SK
820SK
647SK
605SD
783SK
604SD
581SK
579SK
645SK
646SK
786SK
834SK
835SK
580SK
782SK
767SK
586SK
648SK
704SK
848SK
821SK
603SD
822SK
634SK
603SD
624SK
635SK
618SK
619SK
871SK
620SK
621SK
613SK
(686SK)
602SD
(682SK)
677SK
681SK
679SK
680SK
678SK
612SK
609SK
898SK
610SK
685SK
743SK
614SK
611SK
688SK
687SK
608SK
742SK
615SK
684SK
583SK
616SK
772SK
870SK

土器・陶磁器（1）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率口／12	残存率底／12	備考	産地
1	土師器皿	土	605SD最下層	lF16,17r	4.8	1.1	3.9	2	3	土師質,非ロクロ	
2	灯明皿	陶	605SD（褐色斑土下層）	lF15r	10.6	2.2	5.0	1	6	焼締,（大窯１か２）	瀬
3	内耳鍋	土	605SD最下層	lF16,17r	24.2	*7.7	-	2	-	外面スス（年代測定）	
4	山茶碗	陶	605SD（褐色斑土下層）	lF16r	-	*1.7	5.4	-	4	東濃型（大畑大洞古）,14c前半	東濃
5	土瓶蓋	陶	605SD（黒褐色土上層）	lF16r	8.8	*1.6	最大径11.0	3	2	錆釉,（大窯１か２）	瀬
6	縁釉小皿	陶	605SD（暗褐色土上層）	lF16r	11.6	*2.0	-	1	-	鉄釉,（古瀬戸後lll）,15c第2四半期	瀬
7	擂鉢	陶	605SD（褐色斑土下層）	lF16r	-	*4.2	-	1	-	鉄釉,（大窯２）,16c前葉	瀬
8	擂鉢	陶	605SD（黒褐色土上層）	lF16,17r	-	*2.9	-	1	-	鉄釉,（古瀬戸後lV新）,15c末	瀬
9	擂鉢	陶	605SD最下層	lF18r	-	*3.6	10.6	-	4	鉄釉,（古瀬戸後lV）,15c末	瀬
10	山茶碗	陶	606SD-D	lF17q	10.0	*2.3	-	1	-	東濃型（大洞東か脇之島）,15c前半	
11	山茶碗	陶	606SD-E（最下層）	lF16q	-	*2.6	-	-	2	東濃型（大洞東）,15c前半	
12	縁釉小皿	陶	606SD-F（上層、黒褐色土）	lF15p,q	9.6	2.0	5.0	1	5	灰釉,（古瀬戸後lV古）,15c半ば	瀬
13	折縁中皿	陶	606SD-F（最下層、褐色斑土）	lF15p,q	14.0	*2.4	-	2	-	灰釉,（古瀬戸後lll）,15c第2四半期	瀬
14	縁釉小皿	陶	606SD-F（上層、黒色土）	lF15q	-	*2.4	-	1	-	灰釉,（古瀬戸後lll）,15c第2四半期	瀬
15	直縁大皿	陶	606SD-F（上層、黒色土）	lF15q	-	*1.5	-	1	-	灰釉,（古瀬戸後lll）,15c第2四半期	瀬
16	卸目付大皿	陶	606SD-D	lF17q	-	*6.7	-	1	-	灰釉,（古瀬戸後lV古）,15c半ば	瀬
17	縁釉小皿	陶	607SD	lF17m	-	*1.6	-	1	-	鉄釉,15c第３四半期	瀬
18	灰釉丸皿	陶	607SD（黒褐色土上層）	lF17o	-	*2.3	-	1	-	灰釉,17c後半(混入)	瀬
19	小天目	陶	606SD-B（黒褐色土）	lF18q	7.2	*3.1	-	4	-	鉄釉,（大窯３前）,16c第3四半期	瀬
20	香炉	陶	606SD-B（褐色土下層）	lF18q	9.0	*2.3	-	1	-	鉄釉,（古瀬戸後lll）,15c第2四半期	瀬
21	灰釉皿	陶	606SD-B（黒褐色土）	lF18q	-	*0.8	5.6	-	2	灰釉,印花文,（大窯１か２）,15c末～16c初頭	瀬
22	擂鉢	陶	606SD-B（暗褐色斑土上層）	lF18q	-	*1.9	-	1	-	鉄釉,（大窯３前）,16c第3四半期	瀬
23	平碗	陶	603SD（褐色斑土上層）	lF17,18q	15.8	*3.6	-	2	-	灰釉,（古瀬戸後lV古）,15c半ば	瀬
24	平碗	陶	603SD（暗褐色土上層）	lF18q	-	*2.2	5.8	-	5	灰釉,（古瀬戸後lll）,15c第2四半期	瀬
25	壺か瓶	陶	603SD（褐色斑土上層）	lF17s	-	*2.8	11.0	-	2	鉄釉,16c代	瀬
26	稜皿	陶	603SD（褐色斑土上層）	lF17s	10.0	*2.1	-	2	-	鉄釉,（大窯３）,16c後半	瀬
27	灯明皿	陶	603SD（褐色斑土上層）	lF17,18q	10.0	*2.0	-	2	-	焼締,(大窯１）,15c末	東濃
28	擂鉢	陶	603SD	lF18r	-	*2.0	-	1	-	鉄釉,（大窯３前）,16c第3四半期	瀬
29	擂鉢	陶	603SD	lF17r	-	*4.7	-	2	-	鉄釉,（大窯３前）,16c第3四半期	瀬
30	擂鉢	陶	603SD（褐色斑土上層）	lF17,18r	-	*3.4	-	1	-	鉄釉,（大窯３前）,16c第3四半期	瀬
31	土師器皿	土	603SD（褐色砂質シルト中層）	lF17,18r	12.0	2.4	7.0	4	5	ロクロ,淡褐色,軟質	
32	青磁鉢	磁	466SE	lF15k	-	*2.5	5.4	-	7	片切り彫り,線彫り,輪高台と三足	波佐見
33	青磁鉢か	磁	466SE	lF15k	-	*2.5		-	2	線彫り	肥
34	青磁碗	磁	466SE	lF15k	11.2	*6.4	-	2	-		肥
35	染付小碗	磁	466SE	lF15k	6.5	2.7	3.1	6	8	染付,笹文	肥
36	染付碗	磁	466SE	lF15k	9.2	5.1	3.8	3	6	染付,端反形	？
37	青花皿	磁	466SE	lF15k	-	*3.5	20.0	-	3	畳付砂付着	中国
38	箱形湯呑	磁	466SE	lF15k	7.3	6.3	4.0	3	11	染付,矢羽根文,五弁花,方形枠に渦福	肥
39	鉄釉碗	陶	466SE	lF15k	12.2	*5.3	-	4	-	鉄釉,17c末～18c初	瀬
40	灰釉碗	陶	466SE	lF15k	-	*4.0	6.4	-	3	灰釉,削出高台,17c後半	瀬
41	京焼風碗	陶	466SE	lF15k	-	*5.0	5.3	2	9	高台内「雲」印	肥
42	擂鉢	陶	466SE	lF15k	12.4	5.4	0.5	2	6	焼締,硬質,高台内「朝□」印,朝日焼か	宇治?
43	茶入	陶	466SE	lF15k	-	*2.2	3.8	-	4	底部糸切,底面を除き鉄（錆？）釉	備前?
44	灰釉丸皿	陶	466SE	lF15k	13.4	2.7	7.1	2	2	灰釉,付高台,17c後半	瀬
45	灰釉丸皿	陶	466SE	lF15k	13.3	2.7	6.8	7	7	灰釉,17c後半	瀬
46	灰釉丸皿	陶	466SE	lF15k	13.3	2.9	7.2	5	8	灰釉,付高台,17c後半	瀬
47	灰釉反り皿	陶	466SE	lF15k	13.0	*2.8	-	2	-	灰釉,17c後半	瀬
48	灰釉反り皿	陶	466SE	lF15k	13.4	2.7	7.6	3	4	灰釉総釉,17c後半	瀬
49	長石釉丸皿	陶	466SE	lF15k	13.6	3.0	7.6	4	5	長石釉,17c後半	瀬
50	灰釉丸皿	陶	466SE	lF15k	13.8	3.1	8.0	2	3	御深井釉総釉,見込に圏線３条,17c前半か	瀬
51	ひだ皿	陶	466SE	lF15k	12.8	2.4	7.8	5	6	長石釉,鉄摺絵,18c初	瀬
52	灰釉丸皿	陶	466SE	lF15k	-	*2.2	7.0	-	11	御深井釉総釉,見込に菊印花,17c前半	瀬
53	志野型打皿	陶	466SE	lF15k	-	*2.5	-	5	-	志野釉,瓜形,三足付か	瀬
54	灰釉中皿	陶	466SE	lF15k	23.0	4.4	10.8	2	4	灰釉,三足欠損後平底で使用（摩耗）,17c後半	瀬
55	鉄釉鉢	陶	466SE	lF15k	26.6	*4.8	-	1	-	鉄釉,印花,17c後半	瀬
56	黄瀬戸鉢	陶	466SE	lF15k	28.6	*4.9	-	3	-	灰釉,緑釉,17c第2四半期	瀬

土器・陶磁器（2）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率 口／12	残存率 底／12	備考	産地
57	壺	陶	466SE	IF15k	10.2	*5.0	-	3	-	灰釉,緑釉,軟質,19c初か（混入）	瀬
58	鉄釉土瓶	陶	466SE	IF15k	-	*5.8	-	1	-	鉄釉,内面に透明釉,17c後半か	瀬
59	鉄釉蓋（栓）	陶	466SE	IF15k	最大径 4.5	2.8	下部径 1.9	7	-	鉄釉（上部のみ）	
60	小壺	陶	466SE	IF15k	-	*2.6	4.0	-	10	織部,17世紀前半か	瀬
61	仏餉具	陶	466SE	IF15k	-	*3.7	3.5	-	9	灰釉,19c初（混入）	瀬
62	灰釉香炉	陶	466SE	IF15k	13.0	6.2	8.7	1	4	灰釉,緑釉,筒形,17c第2四半期か	瀬
63	灰釉香炉	陶	466SE	IF15k	17.7	9.4	-	3	3	御深井釉総釉,袴腰形,三足付,17c後半	瀬
64	鉄釉片口	陶	466SE	IF15k	13.7	9.5	9.4	9	7	鉄釉,筒形,17c後半	瀬
65	灰釉鉢か	陶	466SE	IF15k	-	*4.3	12.0	-	5	灰釉,19c初（混入）	瀬
66	鍋	陶	466SE	IF15k	17.2	*4.7	-	4	-	鉄釉,19c初（混入）	瀬
67	擂鉢	陶	466SE	IF15k	32.4	*7.4	-	2	-	鉄釉,17c後半	瀬
68	擂鉢	陶	466SE	IF15k	-	*8.6	-	1	-	鉄釉,17c後半	瀬
69	植木鉢	陶	466SE	IF15k	-	*3.8	-	1	-	鉄釉,瓶掛か	瀬
70	灰釉練り鉢	陶	466SE	IF15k	31.0	18.7	14.2	3	10	灰釉,見込に径約6cmの輪トチ痕×2	瀬
71	灰釉土瓶蓋	陶	466SE	IF15k	4.6	2.1	最大径 10.4	10	-	灰釉,19c初（混入）	瀬
72	火鉢	陶	466SE	IF15k	18.2	*6.5	-	2	-	錆釉？	
73	火鉢	陶	466SE	IF15k	21.6	*8.4	-	2	-	赤物	常
74	火鉢	陶	466SE	IF15k	-	*14.2	18.0	-	9	赤物,底面全体に砂付着	常
75	火鉢	陶	466SE	IF15k	-	*7.4	-	3	-	端部内外面から指オサエ	常
76	土錘	土	466SE	IF15k	孔0.8	長4.3	幅2.6	-	-	土師質,22.5g	
77	陶錘	陶	466SE	IF15k	孔1.7	長6.4	幅3.6	-	-	焼締,83.3g	
78	陶錘	陶	466SE	IF15k	孔2.1	長7.3	幅4.0	-	-	焼締,85.6g	
79	陶錘	土	466SE	IF15k	孔1.9	長7.1	幅5.0	-	-	焼締,158.0g	
80	陶錘	陶	466SE	IF15k	孔1.6	長5.6	幅3.2	-	-	焼締,68.7g	
81	陶錘	陶	466SE	IF15k	-	長6.0	幅3.8	-	-	焼締,*49.3g	
82	陶錘	陶	466SE	IF15k	孔1.1～1.4	長4.7	幅3.5	-	-	鉄釉総釉,63.8g	
83	甕	陶	466SE	IF15k	-	*17.5	-	2	-	赤物	常
84	甕	陶	466SE	IF15k	42.6	*30.4	-	2	-	赤物	常
85	茶釜	土	466SE	IF15k	11.2	*5.9	-	2	-	鈴木分類羽無釜B4類	
86	内耳鍋	土	466SE	IF15k	27.0	*5.2	-	2	-	鈴木分類内耳鍋B6類,やや深い	
87	内耳鍋	土	466SE	IF15k	30.0	4.5	-	2	-	鈴木分類内耳鍋B6類,やや浅い	
88	焙烙	土	466SE	IF15k	35.4	*3.2	-	1	-	金子分類焙烙D類か（胎土淡褐色）	
89	土師器皿	土	466SE	IF15k	9.8	2.3	5.0	2	5	土師質,ロクロ,全体が油煙で黒く変色	
90	土師器皿	土	466SE	IF15k	7.4	2.0	4.6	11	12	土師質,ロクロ,口縁にスス付着	瀬?
91	青磁碗	磁	466SE	IF15k	-	*2.7	-	2	-	青磁,蓮弁文,中世	中国
92	加工円板	磁	466SE	IF15k	2.5×2.2	厚1.0	-	-	-	青磁,no.33同一個体	肥
93	加工円板	陶	466SE	IF15k	3.2×3.1	厚0.8	-	-	-	黄瀬戸釉,17c前半	瀬
94	加工円板	陶	466SE	IF15k	4.2×3.5	厚1.1	-	-	-	灰釉,17c前半	瀬
95	加工円板	陶	466SE	IF15k	3.6×3.3	厚1.5	-	-	-	京焼風陶器片,周囲研磨	肥
96	染付丸碗	磁	389SK下層	IF15l	10.9	5.3	4.6	4	12	染付,蓴雁文	肥
97	端反碗	磁	389SK	IF15l	10.0	5.0	3.9	4	12	染付,松竹梅,高台内「大明成化年製」	中国?
98	染付丸碗	磁	389SK	IF15l	12.0	*4.7	-	2	-	染付,四方襷,牡丹唐草	肥
99	染付丸碗	磁	389SK	IF15l	10.6	4.6	-	3	-	染付,草花文	肥
100	染付丸碗	磁	389SK	IF15l	11.8	*5.6	-	2	-	染付,笹文？	肥
101	白磁碗	磁	389SK下層	IF15l	9.4	6.4	4.4	8	12	無文,口縁部輪花	肥
102	染付平碗	磁	389SK	IF15l	14.4	5.9	4.7	3	3	染付,網文,梅花文	肥
103	染付碗	磁	389SK	IF15l	8.3	4.9	3.9	5	12	染付,八角形	肥
104	小杯	磁	389SK	IF15l	6.9	4.5	3.3	8	12	染付,草花文	肥
105	小杯	磁	389SK	IF15l	5.2	4.9	2.4	3	12	染付,若松文？,「宣徳年製」	肥?
106	小杯	磁	389SK	IF15l	5.2	3.9	2.4	2	12	染付,若松文？,「宣徳年製」	肥?
107	小杯	磁	389SK	IF15l	5.7	*2.5	-	4	-	染付	肥
108	刷毛目碗	陶	389SK	IF15l	-	*12.6	4.5	-	12	19c初（混入）	瀬
109	碗	陶	389SK最下層	IF15l	-	*3.9	5.8	-	12	灰釉,18c	信
110	灰釉丸碗	陶	389SK	IF15l	13.0	8.2	6.3	6	12	灰釉総釉,高台摩耗,18c前半	瀬
111	灰釉丸碗	陶	389SKベルト上層	IF15l	13.6	9.0	6.8	2	12	灰釉総釉,高台摩耗,18c前半	瀬
112	灰釉丸碗	陶	389SK上層	IF15l	13.6	10.0	6.5	7	12	灰釉(ほぼ)総釉,高台摩耗,18c前半	瀬
113	灰釉丸碗	陶	389SK	IF15l	13.7	10.1	6.8	8	12	灰釉,高台摩耗,18c前半	瀬
114	灰釉丸碗	陶	389SK	IF15l	14.2	9.4	7.0	8	12	灰釉,高台摩耗,18c前半	瀬
115	尾呂茶碗	陶	389SK	IF15l	11.8	7.4	5.3	11	12	鉄釉,うのふ釉,17c後半	瀬
116	天目茶碗	陶	389SK	IF15l	10.2	6.8	4.6	12	12	鉄釉,口縁に溶着痕（焼成不良品）,18c第1四半期	瀬
117	腰折碗	陶	389SK	IF15l	12.1	6.0	5.9	2	12	鉄釉・灰釉掛け分け,18c後半	瀬
118	小碗	陶	389SK	IF15l	8.7	4.6	4.9	12	12	灰釉,17c後半	瀬
119	小碗	陶	389SK	IF15l	8.2	5.1	4.0	12	12	鉄釉,うのふ釉,発色不良（焼成不良品）,17c	瀬
120	小碗	陶	389SK下層	IF15l	8.9	6.1	4.7	7	12	灰釉,18c前半	瀬
121	小碗	陶	389SK	IF15l	6.2	3.6	3.0	2	6	灰釉,付高台,18c初	瀬
122	小杯	陶	389SK下層	IF15l	6.5	4.4	3.4	7	12	灰釉,17c後半	瀬
123	灰釉丸皿	陶	389SK下層	IF15l	13.4	3.1	7.8	3	7	灰釉,17c後半	瀬
124	灰釉丸皿	陶	389SK	IF15l	12.6	2.8	6.7	12	12	灰釉,高台にスス付着,17c後半	瀬

土器・陶磁器（３）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率 口／12	残存率 底／12	備考	産地
125	灰釉丸皿	陶	389SK下層	IF15I	13.0	2.7	7.2	4	12	灰釉,高台にスス付着,摩耗,17c後半	瀬
126	灰釉丸皿	陶	389SK下層	IF15I	13.7	2.4	6.6	4	5	灰釉,17c後半	瀬
127	灰釉丸皿	陶	389SK	IF15I	14.1	2.9	7.2	12	12	灰釉,灯明皿に使用,17c後半	瀬
128	輪禿皿	陶	389SK	IF15I	14.4	3.5	6.7	3	12	灰釉,口縁部油煙汚れ,高台摩耗,17c前半か	瀬
129	折縁皿	陶	389SK	IF15I	17.9	4.2	5.9	1	5	銅緑釉,蛇の目釉剥ぎ	肥
130	折縁皿	陶	389SK下層	IF15I	17.0	4.1	5.8	2	12	銅緑釉,蛇の目釉剥ぎ	肥
131	折縁皿	陶	389SK	IF15I	14.2	3.8	5.0	4	12	鉄釉,蛇の目釉剥ぎ	肥
132	型打皿	陶	389SKベルト下層	IF15I	15.2	3.5	6.3	8	12	灰釉,輪高台,17c末	瀬
133	型打皿	陶	389SK	IF15I	14.8	3.5	6.4	6	12	灰釉,輪高台,17c末	瀬
134	菊皿	陶	389SK	IF15I	15.8	3.5	7.1	6	10	灰釉,緑釉,17c後半～18c初	瀬
135	菊皿	陶	389SKベルト上層	IF15I	13.0	3.1	7.8	4	12	灰釉,緑釉,17c後半～18c初	瀬
136	摺絵皿	陶	389SK	IF15I	-	*1.8	7.8	-	12	灰釉,鉄摺絵,草花文,18c初	瀬
137	摺絵皿	陶	389SK	IF15I	11.7	3.2	5.9	2	12	灰釉,鉄摺絵,梅文,18c後半	瀬
138	ひだ皿	陶	389SK下層	IF15I	11.6	2.4	7.4	2	5	長石釉？,鉄摺絵,18c前半	瀬
139	摺絵皿	陶	389SK	IF15I	17.8	3.2	10.4	2	4	灰釉,鉄摺絵,18c前半	瀬
140	京焼風皿	陶	389SK	IF15I	22.0	*3.5	-	3	-	灰釉,呉須絵	肥
141	灯明皿	陶	389SK	IF15I	11.5	2.3	5.2	12	12	鉄釉（内面）,口縁部にスス付着	
142	灯明皿	陶	389SK	IF15I	10.1	2.4	6.2	9	12	鉄釉,灰釉,19c初（混入）	瀬
143	灰釉丸皿	陶	389SK	IF15I	9.2	2.6	4.0	12	11	灰釉,高台付近スス付着	瀬
144	灰釉小皿	陶	389SK	IF15I	8.2	1.6	5.2	6	6	灰釉,底部スス付着	瀬
145	鉢	陶	389SK	IF15I	19.4	*3.1	-	5	-	三島写,17c後半～18c前半	肥
146	鉄絵鉢	陶	389SK	IF15I	34.4	9.9	17.4	7	8	灰釉,鉄絵,緑釉ちらし,17c後半	瀬
147	花瓶	陶	389SK	IF15I	12.5	13.9	7.3	12	12	鉄釉,灰釉ちらし,薄端形,双耳,18c前半	瀬
148	水注	陶	389SK	IF15I	4.6	11.6	7.6	1	11	鉄釉,灰釉流し掛け,17c前半	瀬
149	小瓶	陶	389SK	IF15I	-	*6.3	3.4	-	12	灰釉,削込高台	瀬？
150	水盤	陶	389SK	IF15I	18.8	9.1	7.2	4	4	灰釉,縦櫛目文様,三足付,19c初（混入）	瀬
151	香炉	陶	389SK	IF15I	10.7	6.5	8.0	4	6	灰釉,半菊ノミ彫り,三足付,口縁端に敲打痕,17c第4四半期	瀬
152	鬢水入	陶	389SK	IF15I	*9.5	4.4	*4.9	3	4	灰釉,摺絵,草花文,17c末	瀬
153	灰釉徳利	陶	389SK	IF15I	-	*15.6	6.5	-	12	灰釉,削込高台,18c前半か	瀬
154	玩具	磁	389SK	IF15I	3.5	2.9	-	12	12	土瓶,上絵付（赤,緑）	肥?
155	擂鉢	陶	389SK	IF15I	38.4	*11.4	-	4	-	鉄釉,17c第4四半期	瀬
156	擂鉢	陶	389SK	IF15I	34.9	16.3	15.7	9	12	鉄釉,17c第4四半期	瀬
157	擂鉢	陶	389SK	IF15I	34.2	15.4	14.2	8	12	鉄釉,17c第4四半期	瀬
158	擂鉢	陶	389SK	IF15I	30.8	12.8	12.0	5	12	鉄釉,17c第4四半期	瀬
159	徳利	陶	389SK	IF15I	-	*9.6	6.6	-	12	透明釉,糸目風,底部に「◇」刻印	備前
160	徳利	陶	389SK	IF15I	2.0	17.8	7.0	11	5	焼締,糸目	備前
161	舟徳利	陶	389SK	IF15I	-	*13.6	13.4	-	12	鉄釉（柿釉）,錆釉,17c後半	瀬
162	甕か	陶	389SK	IF15I	-	*10.0	12.0	-	12	鉄釉,内面灰釉,18c	瀬
163	内耳鍋	土	389SK	IF15I	24.0	*6.5	-	6	-	鈴木分類内耳鍋B6類（橙色）	
164	内耳鍋	土	389SK上層	IF15I	27.0	10.4	16.1	7	11	鈴木分類内耳鍋B6類（橙色）,底面板圧痕	
165	内耳鍋	土	389SK	IF15I	28.0	9.6	16.7	4	4	鈴木分類内耳鍋B6類（橙色）	
166	茶釜	土	389SK下層	IF15I	12.1	*12.2	-	4	-	鈴木分類羽無釜B4類	
167	茶釜	土	389SK	IF15I	-	*17.1	15.1	-	9	鈴木分類羽無釜B4類,やや凸底	
168	茶釜	土	389SK	IF15I	12.6	17.6	16.7	11	10	鈴木分類羽無釜B4類,ほぼ平底	
169	焼塩壺	土	389SK	IF15I	5.8	8.4	5.0	6	9	身A類,内面変色あり	
170	焼塩壺	土	389SK	IF15I	5.0	8.0	4.1	11	12	身A類	
171	焼塩壺	土	389SK上層	IF15I	5.0	8.1	4.0	8	12	身A類,内面変色あり	
172	茶釜	土	389SK	IF15I	11.6	18.3	15.6	9	10	鈴木分類羽無釜B4類	
173	茶釜	土	389SK	IF15I	12.6	*19.0	17.5	12	2	鈴木分類羽無釜B4類,やや凸底	
174	陶錘	陶	389SK	IF15I	孔1.2～1.5	長5.6	幅2.9～3.6	-	-	焼締,63.7g	
175	陶錘	陶	389SK	IF15I	孔1.6～1.8	長6.0	幅3.2～3.7	-	-	焼締,76.8g	
176	陶錘	陶	389SK	IF15I	孔1.8～1.9	長6.0	幅3.2～3.4	-	-	焼締,94.9g,「×」線刻	
177	陶錘	陶	389SK上層	IF15I	孔1.8	長6.8	幅3.4～4.0	-	-	焼締,114.0g	
178	土師器皿	土	389SK	IF15I	15.4	*3.6	-	4	-	ロクロ,橙色	
179	土師器皿	土	389SK	IF15I	15.6	3.3	7.4	5	8	ロクロ,橙色	
180	土師器皿	土	389SK下層	IF15I	12.1	3.8	6.0	3	12	ロクロ,油煙で全体が変色	
181	土師器皿	土	389SK	IF15I	9.5	*1.3	-	3	-	ロクロ,橙色,内面に墨書	
182	土師器皿	土	389SK	IF15I	7.8	1.6	4.8	3	6	ロクロ,橙色	
183	土師器皿	土	389SK	IF15I	7.9	1.6	4.8	9	12	ロクロ,橙色	
184	土師器皿	土	389SK	IF15I	7.6	1.7	4.4	4	6	ロクロ,橙色	
185	土師器皿	土	389SK	IF15I	7.8	1.5	4.0	4	6	ロクロ,橙色	
186	土師器皿	土	389SK	IF15I	7.8	1.9	4.0	12	12	ロクロ,橙色	
187	土師器皿	土	389SK	IF15I	7.6	1.7	4.6	6	8	ロクロ,橙色	
188	土師器皿	土	389SK	IF15I	8.0	1.5	4.9	10	12	ロクロ,橙色	
189	土師器皿	土	389SK	IF15I	8.1	1.9	4.2	12	12	ロクロ,橙色	
190	土師器皿	土	389SK	IF15I	8.6	2.1	4.6	11	12	ロクロ,橙色,口縁端スス付着	
191	土師器皿	土	389SK	IF15I	8.8	2.1	4.2	11	12	ロクロ,橙色,口縁周辺にスス付着	
192	土師器皿	土	389SK	IF15k	9.5	2.2	4.8	12	12	ロクロ,橙色,口縁端スス付着	

土器・陶磁器（4）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率 口／12	残存率 底／12	備考	産地
193	土師器皿	土	389SK	IF15I	9.9	2.4	4.8	11	12	ロクロ,橙色,口縁端スス付着	
194	土師器皿	土	389SK	IF15I	10.4	2.3	5.6	3	4	ロクロ,橙色	
195	土師器皿	土	389SK	IF15I	9.7	2.6	5.3	9	12	ロクロ,淡褐色,口縁周辺にスス付着	
196	土師器皿	土	389SK	IF15I	7.3	1.8	4.3	11	12	ロクロ,橙色	
197	土師器皿	土	389SK	IF15I	7.8	1.8	4.2	11	12	ロクロ,橙色	
198	土師器皿	土	389SK	IF15I	7.2	1.6	4.5	11	12	ロクロ,橙色	
199	土師器皿	土	389SK	IF15I	9.7	2.2	5.2	5	12	ロクロ,淡褐色,口縁部にスス付着	
200	土師器皿	土	389SK	IF15I	9.6	2.0	4.6	6	12	ロクロ	
201	甕	陶	389SK	IF15I	-	*5.9	-	2	-	真焼	常
202	甕	陶	389SK下層	IF15I	-	*11.3	-	1	-	真焼	常
203	染付丸碗	磁	381SK第4～7層・087SD	IF16,17n	10.2	4.3	3.8	4	8	染付,草花文	肥
204	染付丸碗	磁	381SK	IF16n	10.6	4.5	3.8	3	12	染付,折枝松文	肥
205	染付丸碗	磁	381SK,表土掘削	IF16n	9.8	4.9	3.8	2	6	染付,菊花ちらし	肥
206	蕎麦猪口	磁	381SK	IF16n	7.0	5.8	4.7	6	5	染付,若松文	肥
207	蕎麦猪口	磁	381SK	IF16n	7.4	5.9	4.2	6	8	染付,矢羽根の垣に若松	肥
208	蕎麦猪口	磁	340SX	IF16n	7.3	6.3	5.2	7	12	染付,垣に草花文	肥
209	染付蓋	磁	381SK	IF16n	6.6	*2.0	-	4	-	染付,唐草文	肥
210	染付蓋付鉢	磁	381SK第4～7層	IF16n	6.6	3.6	3.7	6	12	染付,梅枝文？	肥
211	染付碗	磁	381SK第4～7層	IF16n	-	*4.3	5.8	-	12	染付,五弁花（コンニャク印）	肥
212	染付碗	磁	381SK第4～7層	IF16n	15.8	8.2	6.0	7	12	染付,五弁花（コンニャク印）,崩し渦福	肥
213	上絵付湯呑	磁	381SK第4～7層	IF16n	9.7	6.1	3.6	6	12	上絵付（赤,青,緑,金）,鶴亀文,19c初	肥？
214	染付碗蓋	磁	381SK（第4～7層）・090SD	IF16n	9.8	*2.0	-	2	-	染付	肥
215	染付蓋	磁	381SK	IF16n	11.0	3.9	最大径 12.6	11	-	染付,唐草文	肥
216	大皿	磁	381SK第4～7層	IF16n	-	*4.1	12.7	-	2	雷文,高台内蛇の目釉剥ぎ	肥？
217	型打皿	磁	340SX茶褐色土	IF16n	-	*3.7	-	3	-	染付,唐草文,八角形皿	肥？
218	染付中皿	磁	381SK	IF16n	15.6	2.6	10.0	4	6	染付,折枝梅文	肥
219	染付皿	磁	381SK	IF16n	13.8	1.3	7.8	2	9	染付,草文,唐草文,五弁花（コンニャク印）,崩し渦福	肥
220	染付皿	磁	381SK第4～7層	IF16n	12.4	2.1	8.8	9	12	染付,羊歯文？,唐草文,蛇の目凹形高台	肥
221	徳利	磁	381SK第4～7層	IF16n	2.1	18.0	5.6	12	7	染付,唐草文	肥
222	上絵付碗	陶	340SX	IF16n	9.6	5.4	3.6	3	12	灰釉,上絵付（赤,緑）,19c初	瀬
223	灰釉丸碗	陶	381SK第2層	IF16n	9.0	5.4	2.9	6	12	灰釉,18c第4四半期	信
224	灰釉丸碗	陶	381SK第4～7層	IF16n	9.9	5.6	3.4	9	12	灰釉,19c初？	瀬
225	灰釉丸碗	陶	381SK第4～7層	IF16n	9.2	5.8	3.2	12	12	灰釉,鉄・呉須絵,19c初	信
226	灰釉丸碗	陶	381SK	IF16n	8.9	5.5	4.1	1	12	灰釉,18c末	瀬
227	灰釉丸碗	陶	381SK第2層	IF16n	15.5	6.6	3.9	12	12	灰釉,18c末	瀬
228	上絵付碗	陶	381SK第4～7層	IF16n	10.2	*5.4	-	3	-	灰釉,上絵付（赤,緑,青）	信
229	灰釉丸碗	陶	381SK	IF16n	-	*1.9	3.6	-	12	灰釉,高台内墨書,丸に「奥」	信
230	小杉碗	陶	381SK第4～7層	IF16n	13.2	5.9	4.0	1	12	灰釉,焼成不良品？	瀬
231	小杉碗	陶	381SK第4～7層	IF16n	10.7	6.9	4.2	8	12	灰釉,鉄絵若松文,18c第3四半期	信
232	鉢か	陶	381SK	IF16n	11.4	7.0	4.7	10	12	鉛釉,透明釉総釉,楽系,軟質	京？
233	上絵付蓋	陶	381SK	IF16n	7.0	*1.6	最大径 8.6	7	-	灰釉,上絵付（赤,緑）	信
234	織部釉蓋	陶	381SK第4～7層	IF16n	11.8	2.4	-	5	-	織部釉,焼成時ヒビ割れあり	瀬
235	織部釉皿	陶	381SK第4～7層	IF16n	14.4	4.2	7.4	5	12	織部釉,no.234と組物か	瀬
236	色見	陶	381SK第4～7層	IF16n	14.2	4.2	-	2	-	灰釉,端反碗片	瀬
237	色見	陶	381SK第4～7層	IF16n	-	*1.8	3.3	-	9	長石釉,碗片	瀬
238	水注蓋	陶	381SK	IF16n	6.4	4.7	最大径 7.8	6	-	透明釉	
239	灰釉丸碗	陶	381SK	IF16n	13.0	7.4	4.4	5	12	灰釉総釉,18c後半	瀬
240	灰釉丸碗	陶	381SK第3～7層	IF16n	13.4	7.6	6.0	4	12	灰釉,見込に線条痕,高台摩耗,18c後半	瀬
241	灰釉丸碗	陶	381SK第１層,第4～7層	IF16n	14.2	*9.5	-	8	-	灰釉,体部下半にスス付着,18c半ば	瀬
242	灰釉碗	陶	381SK第4～7層	IF16n	11.6	8.0	5.0	4	12	灰釉,沈線茶碗,高台内兜巾状,墨書「若月」,17c後半	瀬
243	腰丸端反碗	陶	381SK第4～7層	IF16n	11.0	7.2	4.7	8	5	灰釉,白化粧？に鉄絵,19c初	瀬
244	腰折碗	陶	381SK	IF16n	9.8	5.5	4.0	10	12	灰釉,鉄・呉須絵,せんじ,高台内墨書「山」,18c第4四半期	瀬
245	腰折碗	陶	381SK	IF16n	10.2	5.3	4.0	6	5	灰釉,18c第4四半期	信
246	上絵付皿	陶	381SK	IF16n	11.2	4.3	3.5	8	8	灰釉,上絵付(赤,緑,黒),19c初	瀬
247	上絵付皿	陶	381SK	IF16n	11.8	4.7	3.7	7	12	灰釉,上絵付(赤,緑,黒),19c初	瀬
248	灰釉皿	陶	381SK第2層	IF16n	12.4	4.4	3.8	2	8	灰釉,鉄絵	信
249	笹絵茶碗	陶	340SX茶褐色土	IF16n	12.7	5.8	4.6	2	12	灰釉,呉須絵笹文,18c末～19c初	瀬
250	鉄釉輪花皿	陶	381SK	IF16n	12.9	2.9	6.1	12	11	鉄釉,18c後半か	瀬
251	鉄釉輪花皿	陶	381SK第4～7層	IF16n	14.0	*3.3	-	3	-	鉄釉,18c後半か	瀬
252	鉄釉輪花皿	陶	381SK第4～7層	IF16n	13.6	*2.1	-	3	-	鉄釉,18c後半か	瀬
253	鉄釉輪花皿	陶	381SK第4～7層	IF16n	14.0	*2.0	-	4	-	鉄釉,18c後半か	瀬

土器・陶磁器（５）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率 口／12	残存率 底／12	備考	産地
254	鉄釉輪花皿	陶	381SK	IF16n	14.0	*1.9	-	3	-	鉄釉,18c後半か	瀬
255	灰釉皿	陶	381SK	IF16n	12.3	4.9	3.4	7	5	灰釉,鉄絵,18c第4四半期	信
256	灰釉皿	陶	381SK第2、3層	IF16n	12.6	4.6	4.0	6	3	灰釉,鉄・呉須絵,18c第4四半期	信
257	ひだ皿	陶	381SK第4～7層	IF16n	13.0	2.6	7.8	5	8	灰釉,呉須絵,18c後半	瀬
258	灰釉丸皿	陶	381SK	IF16n	12.0	2.2	4.9	6	12	灰釉,17c後半	瀬
259	灰釉丸皿	陶	381SK	IF16n	12.0	2.5	5.1	5	8	灰釉,17c後半	瀬
260	灯明皿	陶	381SK第2層	IF16n	10.6	2.0	4.7	8	12	鉄釉,19c前半	瀬
261	灯明皿	陶	381SK第4～7層	IF16n	11.4	2.1	5.0	6	5	鉄釉,内面と底部にスス付着,19c第1四半期	瀬
262	灯明皿	陶	381SK	IF16n	12.0	2.2	5.5	7	12	鉄釉,19c初	美濃
263	灯明受皿	陶	381SK第3層	IF16n	9.8	1.3	3.7	12	12	鉄釉,19c前半	瀬
264	片口	陶	381SK第4～7層	IF16n	15.4	10.0	8.0	2	12	鉄釉,灰釉二重掛け,付高台,18c前半	瀬
265	片口	陶	381SK第１層	IF16n	15.7	*7.6	-	7	-	灰釉,体部下半にスス付着,19c初	瀬
266	碗か鉢	陶	381SK・340SX	IF16n	-	*5.4	7.8	-	5	灰釉,高台内墨書「偲」か	瀬
267	小瓶	陶	340SX	IF16n	-	*3.4	3.5	-	12	鉄釉,焼成時破損品	瀬
268	灰釉蓋	陶	381SK第１層	IF16n	5.2	1.3	-	10	-	灰釉	信
269	灰釉蓋	陶	381SK	IF16n	6.8	1.6	-	4	-	灰釉,鉄摺絵,18c初	瀬
270	鉄釉蓋	陶	381SK	IF16n	5.0	1.8	最大径 最小径 8.0	10	-	鉄釉,灰釉二重掛け	瀬
271	土瓶蓋	陶	381SK第4～7層	IF16n	4.1	1.9		8	-	鉄釉(柿釉)	瀬
272	銭甕	陶	381SK	IF16n	11.9	10.7	5.4	7	12	鉄釉,底部穿孔,18c末	瀬
273	水盤	陶	381SK	IF16n	20.6	7.0	14.4	6	3	灰釉,緑釉ちらし,三足付,19c初	瀬
274	鉄絵鉢	陶	381SK	IF16n	24.6	*4.4	-	2	-	灰釉,17c末	瀬
275	灰釉有耳壺	陶	381SK第2層	IF16n	9.0	10.6	7.1	5	12	灰釉	瀬
276	灰釉蓋物	陶	381SK・340SX	IF16n	10.4	8.0	7.6	4	12	灰釉,付高台,18c後半か	瀬
277	灰釉蓋物	陶	381SK第2層	IF16n	-	*5.7	7.6	-	9	灰釉,底部穿孔,18c後半	瀬
278	擂鉢	陶	381SK第4～7層	IF16n	38.8	10.8	-	3	-	鉄釉,丸に「大」刻印,19c前半	瀬
279	耳付鍋	陶	381SK第2層	IF16n	18.8	10.7	9.0	8	2	鉄釉,耳穴２ヶと３ヶ,19c前半	瀬
280	土瓶	陶	381SK第4～7層	IF16n	11.4	*3.5	-	1	-	鉄釉,吊手付近に穿孔	瀬
281	土瓶	陶	381SK第2,4～7層	IF16n	12.4	*11.5	-	4	-	鉄釉,内面錆釉,18c末	瀬
282	土瓶	陶	381SK第4～7層	IF16n	13.6	*12.0	-	3	-	灰釉,呉須絵笹文,19c初	瀬
283	漏斗	陶	381SK第4～7層	IF16n	12.6	8.5	1.3	4	-	鉄釉（錆釉）総釉,19c初	瀬
284	鉄釉徳利	陶	340SX	IF16n	4.2	*6.4	-	12	-	鉄釉（飴釉）,18c前半	瀬
285	徳利	陶	381SK	IF16n	3.1	*11.6	-	11	-	鉄釉,19c初？	瀬
286	練鉢	陶	381SK	IF16n	34.0	*16.8	-	5	-	灰釉,19c初	瀬
287	油徳利	陶	381SK	IF16n	3.7	*17.1	-	12	-	鉄釉（柿釉）,19c初	瀬
288	風炉または火鉢	陶	381SK第2層・340SX	IF16n	20.4	13.9	16.6	8	6	鉄釉,円柱形三足付,19c初	瀬
289	風炉または火鉢	陶	381SK第2層	IF16n	-	*14.2	17.3	-	12	長石釉,円柱形三足付,内面にスス付着,19c初	瀬
290	火鉢	陶	381SK第2層,第4～7層・340SX	IF16n	31.2	15.3	16.8	3	4	緑釉,内面灰釉,円柱形三足付,内面にスス付着,口縁端に敲打痕,19c初	瀬
291	火桶	陶	340SX茶褐色土	IF16n	-	*10.6	19.5	-	12	三足付,接地面摩耗	常
292	植木鉢	陶	381SK第4～7層	IF16n	18.6	14.2	11.4	9	12	灰釉,付高台	瀬戸
293	緑釉丸瓦	陶	340SX茶褐色土	IF16n	厚1.1	-	-	-	-	外面緑釉,17c第2四半期	瀬
294	玩具	土	381SK第4～7層	IF16n		*3.0				土製人形,型作り,婦人	
295	玩具	土	381SK	IF16n	-	6.0				土製,彩色,型作り,天神	
296	玩具	陶	381SK	IF16n	3.9	3.2	2.0	1	12	陶製,灰釉,手捻り、小杯	
297	玩具	陶	381SK	IF16n	正面幅 6.9	7.9	側面幅 5.8			土製,彩色,型作り,茶室	
298	玩具	陶	381SK	IF16n		*3.8				土製,彩色,型作り,天神	
299	土師器皿	土	381SK第4～7層	IF16n	14.2	*2.2	-	2	-	ロクロ,淡褐色,スス付着	
300	土師器皿	土	381SK第4～7層	IF16n	10.6	2.1	5.0	2	5	ロクロ,橙色	
301	土師器皿	土	381SK第4～7層	IF16n	*7.4	1.3	*4.4	5	7	ロクロ,白～ピンク系	
302	土師器皿	土	381SK第4～7層	IF16n	8.2	1.6	4.8	12	12	ロクロ,白～ピンク系,口縁端にスス付着	
303	土師器皿	土	381SK第4～7層	IF16n	7.5	1.5	3.5	8	12	ロクロ,淡褐色,スス付着	
304	土師器皿	土	381SK	IF16n	8.0	1.5	4.0	12	12	ロクロ,橙色,口縁端にスス付着	
305	土師器皿	土	381SK第4～7層	IF16n	8.3	1.6	3.3	6	12	ロクロ,橙色,口縁端にスス付着	
306	焼塩壺	土	381SK	IF16n	6.5	7.5	5.4	12	12	身C類,刻印あり	
307	焼塩壺蓋	土	381SK	IF16n	7.7	1.8	-	12	-	蓋B類	
308	焼塩壺蓋	土	381SK第2層	IF16n	7.4	1.8	-	12	-	蓋B類	
309	焼塩壺蓋	土	340SX（石炭ガラ下層）	IF16,17n	7.9	1.8	-	10	-	蓋B類	
310	焼塩壺蓋	土	381SK	IF16n	7.2	1.6	-	4	-	蓋B類	
311	焼塩壺蓋	土	381SK	IF16n	7.5	1.8	-	12	-	蓋B類	

土器・陶磁器（6）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率 口／12	残存率 底／12	備考	産地
312	焼塩壺	土	381SK	IF16n	-	7.6	5.4	12	12	身C類,「泉湊伊織」刻印	
313	陶錘	陶	381SK第4～7層	IF16n	孔1.6	長5.5	幅3.4	-	-	焼締,62.5g	
314	焙烙	土	381SK第2層	IF16n	33.0	8.9	*14.0	1	-	金子分類焙烙J3類（橙色）	
315	焙烙	土	381SK	IF16n	38.6	*6.8	-	3	-	金子分類焙烙J2類（橙色＜淡褐色）	
316	焙烙	土	381SK第2層	IF16n	38.6	*6.0	-	1	-	金子分類焙烙J2類（橙色＜淡褐色）	
317	焙烙	土	381SK	IF16n	38.6	*6.2	-	1	-	金子分類焙烙J2類か（淡褐色）	
318	竈か	陶	381SK	IF16n	*42.7	*9.8	-	1	-	赤物	常
319	竈か	陶	381SK	IF16n	*31.0	*7.5	-	1	-	赤物	常
320	蕎麦猪口	磁	492SK・381SK	IF15m	7.5	6.4	4.8	10	12	染付	肥
321	蕎麦猪口	磁	492SK・381SK	IF15m	7.5	6.3	4.8	10	12	染付	肥
322	蕎麦猪口	磁	492SK・381SK	IF15m	7.4	6.1	4.8	12	12	染付	肥
323	蕎麦猪口	磁	492SK・381SK	IF15m	7.1	6.2	5.1	9	12	染付	肥
324	蕎麦猪口	磁	492SK・381SK	IF15m	7.5	6.0	4.9	9	12	染付	肥
325	蕎麦猪口	磁	492SK・381SK	IF15m	7.6	6.2	5.1	11	10	染付	肥
326	染付型打中皿	磁	492SK（南西）	IF15m	21.1	3.1	14.8	7	7	染付,葡萄唐草文	肥
327	青磁鉢	磁	492SK（北東）・北壁	IF15m	32.2	13.2	12.8	10	12	青磁,片切り彫り,若松文	波佐見
328	小杯	磁	492SK（北西）	IF15m	5.5	2.5	3.6	7	12	染付	肥
329	紅皿	磁	492SK（南西トレンチ）	IF15m	2.3	1.0	0.8	4	6		肥
330	青磁筒形香炉	磁	492,380SK	IF15m	9.9	7.3	7.4	12	12	青磁,蛇の目凹形高台	肥
331	箱形湯呑	磁	492SK・380SK	IF15m	7.4	5.6	3.3	9	12	染付,竹文,五弁花（コンニャク印）	肥
332	染付型打皿	磁	492SK,北西,北壁トレンチ	IF15m	16.4	3.3	10.1	9	8	染付,口錆,草花文	肥
333	染付皿	磁	492SK	IF15m	19.0	*2.3	-	3	-	染付	肥
334	碗蓋	磁	492SK	IF15m	10.4	3.1	紐径5.5	4	-	染付,割小菱,人物,竹文	肥
335	碗蓋	磁	492SK（南東）・381SK第2層	IF15m	10.0	3.2	紐径4.1	4	-	外面青磁釉,染付,割小菱,三方割銀杏文,方形枠に渦福	肥
336	染付丸碗	陶	492SK・381SK	IF15m,16n	11.4	5.4	4.1	7	6	陶胎染付,松竹梅文,19c初	瀬
337	呉須掛湯呑	陶	492SK（北西）	IF15m	8.2	5.2	3.3	7	12	灰釉,呉須,19c初	瀬
338	染付丸碗	陶	492SK(北西、南西)・312SK	IF15m	11.0	6.2	3.9	7	12	陶胎染付,松竹梅文19c初	瀬
339	刷毛目茶碗	陶	492SK	IF15m	13.6	*5.3	-	4	-	19c初	瀬
340	刷毛目茶碗	陶	492SK（北西）	IF15m	13.3	*5.3	-	3	-	19c初	瀬
341	刷毛目茶碗	陶	492SK・381SK	IF15m,16n	13.6	6.2	4.6	8	12	19c初	瀬
342	鎧茶碗	磁	492SK・312SK	IF15m	12.8	6.1	4.8	6	9	黄瀬戸釉,内面緑釉,付高台,19c初	瀬
343	灰釉碗	陶	492SK	IF15m	11.4	*5.9	-	3	-	灰釉,腰折形	瀬
344	上絵付銚子	陶	492SK・380SK	IF15m	11.8	8.2	6.5	2	8	灰釉,上絵付,三足付,胎土やや精良	瀬?
345	行灯皿	陶	492SK	IF15m	13.1	2.1	9.4	12	12	志野釉,鉄絵	瀬
346	小杉碗	陶	492SK	IF15m	10.4	6.2	3.8	4	12	鉄釉,呉須,若松文,高台内墨書枠に「一」,18c末	信
347	小杉碗	陶	492SK（北西）	IF15m	8.8	0.2	3.5	3	4	灰釉,19c初	信
348	刷毛目文碗	陶	492SK南北ベルト	IF15m	-	*2.8	4.9	-	12		肥
349	灰釉丸碗	陶	492SK	IF15m	8.8	5.7	3.1	6	12	灰釉,19c初	瀬
350	灰釉丸碗	陶	492SK	IF15m	11.8	5.6	4.0	3	5	灰釉,鉄絵,笹文,19c初か	信
351	染付皿	陶	492SK	IF15m	13.1	3.6	5.5	1	12	陶胎染付、雪輪草花文,18c末	瀬
352	灰釉皿	陶	492SK	IF15m	-	*3.2	7.5	-	7	灰釉総釉,呉須絵,18c末	瀬
353	土瓶	陶	492SK	IF15m	7.3	9.6	7.7	12	3	鉄釉,三足付,19c初？	瀬
354	土瓶	陶	492SK（北西）・422SK・598SK	IF15m	7.6	10.3	8.1	11	12	飴釉？,三足付,19c初	瀬
355	土瓶蓋	陶	492SK	IF15m	10.9	3.0	7.7	12	12	鉄釉,灰釉掛け流し,19c初か	瀬
356	土瓶蓋	陶	492SK	IF15m	下部径 5.2	1.8	最大径 8.4	12	12	飴釉？,no.354と組か,19c初	瀬
357	土瓶蓋	陶	492SK	IF15m	7.5	3.7	最大径 9.5	11	-	灰釉,緑釉ちらし,19c初	瀬
358	蓋物蓋	陶	492SK	IF15m	8.8	1.1	-	12	-	灰釉,19c初？	瀬?
359	鳥餌鉢	磁	492SK（南西）	IF15m	5.5	2.7	5.0	5	6	灰釉,19c初？	瀬
360	刷毛目碗	陶	492SK	IF15m	9.1	7.5	4.8	4	12	底部穿孔,蘭鉢か,19c初	瀬
361	灰釉小瓶	陶	492SK	IF15m	1.6	4.9	2.8	12	12	灰釉,神仏具	瀬
362	練鉢	陶	492SK・検出II	IF15m	25.0	13.2	16.2	5	3	灰釉,18c末	瀬
363	練鉢	陶	492SK・北壁トレンチ	IF15m	14.0	*6.5	-	4	-	灰釉,18c末	瀬
364	鬢油壺	磁	492SK	IF15m	2.1	5.7	3.9	12	12	鉄釉,19c初？	瀬
365	餌擂	磁	492SK	IF15m	14.6	*4.8	-	5	-	鉄釉,使用痕あり,19c初	瀬
366	餌擂	陶	492SK・598SK	IF15m	-	*4.0	6.4	-	7	鉄釉,使用痕あり,19c初	瀬
367	鉄絵鉢	陶	492SK	IF15m	33.0	-	-	2	-	灰釉,緑釉ちらし,17c後半	瀬
368	半胴	陶	492SK	IF15m	31.0	*14.5	-	2	-	鉄釉,灰釉掛け流し,19c初	瀬
369	棗形茶入	陶	492SK	IF15m	6.6	5.0	4.2	5	7	鉄釉,17c第2四半期	瀬
370	灰釉蓋物	陶	492SK（北東）・381SK	IF15m,16n	8.4	5.3	6.4	10	12	灰釉,18c末か	瀬
371	鉄釉香炉	陶	492SK	IF15m	13.2	*5.1	-	3	-	鉄釉,筒形,17c後半	瀬
372	灰釉香炉	陶	492SK	IF15m	-	*5.1	6.8	-	12	灰釉,鉄摺絵,17c　第4四半期	瀬

土器・陶磁器（7）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率 口／12	残存率 底／12	備考	産地
373	灰釉徳利	陶	492SK	lF15m	-	*13.0	6.6	-	12	灰釉,19c前半	瀬
374	擂鉢	陶	492SK	lF15m	34.0	*12.5	-	3	-	鉄釉	瀬
375	鉄釉火鉢	陶	492SK	lF15m	22.0	12.9	17.2	6	9	鉄釉,口縁端に敲打痕,19c初か	瀬
376	秉燭	陶	492SK	lF15m	5.1	4.7	4.0	12	12	鉄釉,脚付,19c初	瀬
377	秉燭	陶	492SK	lF15m	5.1	4.4	4.0	8	12	鉄釉,脚付,19c初	瀬
378	秉燭	陶	492SK	lF15m	4.6	2.6	2.0	12	12	灰釉,19c初	瀬
379	植木鉢	陶	492SK	lF15m	-	*2.8	19.0	-	6	19c初？	瀬
380	焼塩壺	土	492SK（北西）	lF15m	4.9	7.7	5.0	11	9	身C類	
381	緑釉丸瓦	陶	492SK	lF15m	厚1.0	-	-	-	-	外面緑釉,17c第2四半期	瀬
382	陶錘	陶	492SK	lF15m	孔1.6～1.8	長6.4	幅3.6	-	-	焼締,表面摩耗,89.4g	
383	茶釜	土	492SK（北西）	lF15m	14.0	*9.6	-	2	-	鈴木分類羽無釜B4類	
384	焙烙	土	492SK（南東）	lF15m	33.8	8.4	-	10	-	金子分類焙烙J2類か（淡褐色）,底面に沢瀉文刻印	
385	玩具	土	492SK（南西、北西）	lF15m	幅22.0	17.4	奥行13.8	-	-	土製,彩色,手捻りと型作り.茶室	
386	水滴	磁	492SK	lF15m	高4.4	幅2.5	-	-	-	磁器製,鉄釉,型作り,聞か猿	肥
387	玩具	土	492SK（南西）	lF15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,お多福	
388	玩具	土	492SK	lF15m	-	-	-	-	-	土鈴,彩色,手捻り,福良雀	
389	玩具	土	492SK	lF15m	-	-	-	-	-	土製,彩色,型作り,大黒	
390	玩具	陶	492SK西ベルト	lF15m	9.0	*2.1	-	2	-	陶製,鉄釉,擂鉢	
391	玩具	土	492SK	lF15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,飾り馬	
392	玩具	土	492SK（北東）	lF15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,騎馬人物	
393	玩具	土	492SK	lF15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,亀	
394	端反碗	磁	387SK	lF15l	10.4	5.6	4.7	5	6	染付,草花文,見込「□□年製」,高台内角福か	
395	小碗	磁	387SK	lF15l	9.4	5.0	3.9	3	7	染付	肥
396	端反碗	磁	387SK	lF15l	11.1	*5.2	-	6	-	染付	
397	呉須掛茶碗	陶	387SK	lF15l	12.3	6.4	4.0	2	4	灰釉総釉,呉須,19c前半	瀬
398	呉須掛茶碗	陶	387SK	lF15l	12.0	6.5	4.1	3	12	灰釉総釉,呉須,19c前半	瀬
399	梅文皿	陶	387SK	lF15l	10.8	3.5	4.0	12	12	灰釉,鉄・呉須絵,18c末	瀬
400	梅文皿	陶	387SK	lF15l	10.7	3.4	3.7	8	12	灰釉,鉄・呉須絵,18c末	瀬
401	行平蓋	陶	387SK	lF15l	17.4	3.7	-	11	-	灰釉,19c初	瀬
402	灰釉皿	陶	387SK	lF15l	-	*4.1	7.2	-	12	灰釉,付高台	瀬
403	鉄釉丸皿	陶	387SK	lF15l	12.4	*3.2	-	3	-	鉄釉,口縁歪みあり	
404	焼塩壺蓋	陶	387SK	lF15l	6.6	1.0	-	6	-	蓋D類	
405	柄杓	陶	387SK	lF15l	8.6	5.9	5.1	9	12	灰釉,目釘用穴,輪高台,18c後半	瀬
406	鳥餌鉢	陶	387SK	lF15l	6.8	3.7	5.4	4	6	灰釉,19c初	瀬
407	鳥餌鉢	陶	387SK	lF15l	6.2	3.1	5.0	7	11	灰釉,19c初	瀬
408	鳥餌鉢	陶	387SK	lF15l	6.9	4.0	5.3	6	8	灰釉,19c初	瀬
409	灯明受皿	陶	387SK	lF15l	6.8	1.7	3.2	12	12	鉄釉	瀬
410	筒形湯呑	陶	387SK	lF15l	7.5	*4.9	-	7	-	灰釉,鉄釉,19c初	瀬
411	掛分小鉢	磁	387SK	lF15l	9.7	5.4	4.0	5.0	12	染付,松竹梅文,腰錆	瀬
412	蓋物	陶	387SK	lF15l	10.6	5.7	7.0	6	12	灰釉,19c初	瀬
413	壺	陶	387SK	lF15l	9.8	6.7	7.8	10	6	焼締（風）,底部に墨書	
414	灰釉大皿	陶	387SK	lF15l	37.0	5.5	-	5	-	灰釉	瀬
415	手水鉢	陶	387SK	lF15l	33.0	*18.7	-	4	-	灰釉,うのふ釉,緑釉掛け分け	瀬
416	鉄釉甕	陶	387SK	lF15l	10.4	9.7	6.5	6	7	鉄釉二重掛け,19c初	瀬
417	手あぶり	陶	387SK	lF15l	13.4	7.7	9.2	2	8	鉄釉,19c初	瀬
418	半胴	陶	387SK	lF15l	15.0	*8.7	-	5	-	鉄釉,19c初	瀬
419	銭甕	陶	387SK	lF15l	13.4	9.2	6.4	12	6	鉄釉	瀬
420	植木鉢	陶	387SK	lF15l	14.8	12.2	10.7	8	10	鉄釉,底部穿孔,19c初	瀬
421	火入	陶	387SK	lF15l	13.8	*5.1	-	3	-	緑釉(呂宋釉),印花,19c初	瀬
422	片口	陶	387SK	lF15l	11.8	4.8	4.5	5	10	灰釉,19c初	瀬
423	耳付鍋	陶	387SK	lF15l	17.8	*7.0	-	4	-	鉄釉,耳穴２ヶ,19c前半	瀬
424	耳付鍋	陶	387SK	lF15l	20.0	9.4	6.8	7	8	鉄釉二重掛け,耳穴１ヶ,19c前半	瀬
425	耳付鍋	陶	387SK	lF15l	24.0	8.3	6.2	4	5	鉄釉,19c前半	瀬
426	行平鍋	陶	387SK	lF15l	16.4	*4.9	-	3	-	灰釉,19c初	瀬
427	擂鉢	陶	387SK	lF15l	21.4	10.3	9.8	2	12	鉄釉,19c中葉	瀬
428	擂鉢	陶	387SK	lF15l	21.3	10.1	9.7	3	6	鉄釉,19c中葉	瀬
429	擂鉢	陶	387SK	lF15l	35.0	5.1	-	2	-	鉄釉,19c初	瀬
430	鉄絵鉢	陶	387SK	lF15l	-	*7.5	15.8	-	3	灰釉,緑釉ちらし,17c末	瀬
431	徳利	陶	387SK	lF15l	-	*14.1	5.5	-	12	鉄・灰釉掛け分け,19c初	瀬
432	横手急須	陶	387SK	lF15l	6.2	8.3	6.5	12	8	焼締	常
433	上絵付土瓶	陶	387SK・596SK	lF15l	6.4	*10.4	-	4	-	上絵付,梅花文,「玉川」刻印,18c末か	
434	土瓶	陶	387SK	lF15l	8.6	11.5	8.0	8	3	灰釉,筒描き（イッチン）,19c中葉	

土器・陶磁器（8）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率 口／12	残存率 底／12	備考	産地
435	土瓶蓋	陶	387SK・236SD	IF15l	4.5	3.1	最大径 6.3	12	-	三彩土瓶の蓋,19c	
436	土瓶蓋	陶	387SK	IF15l	5.4	2.9	最大径 7.4	12	-	緑釉	信
437	土瓶蓋	陶	387SK	IF15l	6.9	2.9	最大径 9.0	3	-	灰釉,鉄絵,19c初	瀬
438	土瓶蓋	陶	387SK	IF15l	7.0	3.0	最大径 9.4	12	-	緑釉,19c前半	信
439	土瓶蓋	陶	387SK	IF15l	5.4	2.6	最大径 9.2	5	5	灰釉,no.434と組,19c初	
440	器種不明	陶	387SK	IF15l	9.2	2.4	-	8	-	焼締,手捻り,外面に布目	
441	蓋	陶	387SK,388SK	IF15l	7.2	1.4	-	11	-	藻掛,no.442と組,19c中葉か	常
442	煎茶器か	陶	387SK	IF15l	7.3	5.9	7.3	4	5	藻掛,19c中葉か	常
443	水盤	陶	387SK	IF15l	最大径 20.6	*2.4	-	2	-	飴釉,19c初	瀬
444	火鉢	陶	387SK	IF15l	20.0	9.5	-	6	-	鉄釉,19c初	瀬
445	火鉢	陶	387SK	IF15l	-	*4.2	15.0	-	12	鉄釉二重掛,底部三足内側にひご用穴,19c初	瀬
446	瓶掛か	陶	387SK	IF15l	33.0	*4.3	-	2	-	鉄釉,19c初	瀬
447	不明	磁	387SK	IF15l	-	-	-	-	-	染付,雷文と鳥文か,大型の筒形容器か	
448	台か	磁	387SK	IF15l	7.4	3.5	-	10	-	染付,竹魚篭と牡丹文,型打成形,六角形,側面３面に扇型透し穴	
449	玩具	陶	387SK	IF15l		*3.2				土製,彩色,燈籠上部	
450	玩具	陶	387SK	IF15l		*4.4				土製,彩色,燈籠基部	
451	焜炉		387SK	IF15l	16.7	9.2	-	2	-		常
452	甕	陶	387SK	IF15l	-	*8.4	-	2	-	赤物	常
453	焜炉	土	387SK・236SD	IF15l	22.7	21.5	19.0	10	12	素焼,二重焜炉,底面に「寿」刻印	
454	目皿	土	387SK	IF15l	10.4	*1.4	-	2	-	素焼,ロクロ,変色なし	
455	目皿	土	387SK	IF15l	-	-	-	-	-	素焼,ロクロ,変色あり	
456	焙烙	土	387SK	IF15l	37.9	*6.0	-	3	-	金子焙烙D6類か（淡褐色）,外面口縁部付近ナデ	
457	焙烙	土	387SK	IF15l	40.0	9.0	9.0	6	5	金子焙烙L類（淡褐色）,底部に沢瀉文刻印（不明瞭）	
458	焙烙	土	387SK	IF15l	41.5	6.1	-	4	-	金子焙烙L類か（橙色）,外面口縁部付近ケズリ	
459	焙烙	土	387SK	IF15l	44.8	*4.1	-	1	-	金子焙烙L類か（橙色）,外面口縁部付近ケズリ	
460	型打皿	磁	413SK（下層）	IF16k	-	*3.2	-	1	-	染付,唐草文	肥
461	青磁香炉	磁	413SK	IF16k	8.8	*6.2	-	4	-	青磁釉	肥
462	織部向付	陶	413SK	IF15k	-	*2.7	9.3	-	4	織部,鉄絵南蛮人（布袋？）,型打,付高台,17c　第1四半期	瀬
463	灰釉腰折碗	陶	413SK	IF16k	11.7	4.7	4.0	3	1	灰釉,せんじ,18c後半	瀬
464	灯明受皿	陶	413SK	IF15k	9.1	2.0	4.0	12	12	鉄釉,19c初	瀬
465	灰釉蓋	陶	413SK	IF16k	-	*2.6	-	-	-	灰釉,17c	瀬
466	秉燭	陶	413SK	IF16k	5.2	4.3	3.9	12	12	鉄釉,脚付	瀬
467	秉燭	陶	413SK	IF16k	5.3	4.2	3.9	12	12	鉄釉,脚付	瀬
468	花瓶か	陶	413SK	IF16k	-	*10.1	9.6	-	3	焼締,側面凹みあり,平底	備前？
469	耳付鍋	陶	413SK	IF16k	20.8	*7.9	-	3	-	鉄釉,19c中葉	瀬
470	碗蓋	磁	413SK	IF16k	8.8	2.5	-	3	-	染付,「道光年製」,19c後期	瀬
471	平碗	磁	413SK・350SK	IF16k・15,16l	16.0	6.5	6.0	10	12	染付,瀬戸赤重窯か,19c後期	瀬
472	カップ受皿	磁	413SK	IF16k	13.2	1.9	7.5	6	7	クロム青磁,鉄絵,高台内「春光製」銘,19c後期	瀬
473	丼	磁	413SK	IF16k	15.6	6.4	5.4	11	12	クロム青磁,鉄絵,19c後期	瀬
474	皿	磁	413SK	IF16k	10.8	2.2	6.3	12	12	クロム青磁,摺絵,垣に鶏,20c初	瀬
475	行平蓋	陶	413SK	IF16k	18.0	4.2	-	2	-	橙色釉,裏面に刻印,19c後期	
476	鉄絵鉢	陶	413SK	IF16k	35.4	*5.3	-	2	-	灰釉,緑釉ちらし,17c後半	瀬
477	半胴	陶	413SK	IF16k	26.9	*9.9	-	2	-	鉄釉,18c	瀬
478	蓋物か	陶	380SK	IF15m	9.6	10.2	6.0	7	12	灰釉,高台付近無釉,18c末	瀬
479	灰釉蓋	陶	380SK	IF15m	10.4	1.6	-	4	-	灰釉,18c後半	瀬
480	灰釉水滴	陶	380SK	IF15m	長*4.6	幅*3.7	-	-	-	灰釉,魚形	瀬
481	陶錘	陶	380SK	IF15m	孔1.7	長5.6	幅3.9	-	-	焼締,「×」線刻,94.8g	
482	腰錆湯呑	陶	471SK	IF15l	9.8	6.8	5.2	9	12	灰釉,鉄釉,18c前半	瀬
483	染付蓋	磁	471SK	IF15l	5.3	2.0	最大径 7.4	4	-	染付	肥
484	耳付鍋	陶	471SK	IF15l	15.4	*4.5	-	2	-	鉄釉,19c中葉	瀬
485	土師器皿	土	153SK	IF16m	9.0	1.2	5.6	12	12	ロクロ,白色	
486	土師器皿	土	153SK	IF16m	9.1	1.4	5.4	12	12	ロクロ,白色,底部墨書	
487	灰落とし	陶	598SK	IF15m	6.2	8.2	7.0	9	12	鉄・灰釉掛け分け,18c後半	瀬
488	焼塩壺	土	598SK	IF15m	5.5	8.2	5.4	9	8	身C類	
489	尾呂茶碗	陶	598SK	IF15m	10.5	6.9	5.4	6	12	鉄釉,17c後半	瀬
490	京焼風碗	陶	598SK	IF15m	-	*2.8	5.4	-	6	灰釉,高台内「小松吉」印	肥
491	秉燭	陶	404SK	IF15k	5.0	4.1	3.9	3	12	鉄釉,脚付	瀬

土器・陶磁器（9）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率 口／12	残存率 底／12	備考	産地
492	秉燭	陶	406SK	lF15k	5.0	4.4	4.0	12	12	鉄釉,脚付	瀬
493	青磁鉢	磁	406SK	lF15k	14.4	5.2	6.1	4	1	青磁釉,型打,編目文,ガラス継あり	
494	陶錘	陶	536SK	lF15k	孔1.7	長6.6	幅4.5	-	-	焼締,105.1g	
495	水盤	陶	536SK	lF15l	-	*9.0	19.7	-	3	灰釉,鉄・緑釉流し掛け,19c前半	瀬
496	水甕	陶	536SK	lF16l	-	*11.5	20.7	-	5	灰釉,鉄絵,19c	瀬
497	箱形湯呑	磁	329,536SK	lF16l	7.7	5.8	3.8	6	12	染付,半菊と松葉文	肥
498	小杯	磁	329SK	lF16l	5.7	3.5	1.9	2	2	染付,端反形	肥
499	灰釉徳利	陶	432,502,536SK	lF15k・15,16l	-	*14.1	-	-	-	灰釉,18c後半	瀬
500	焼塩壺蓋	土	411SK	lF15k	6.3	1.7	-	9	-	蓋A類	
501	擂鉢	陶	411SK	lF15k	-	*7.0	-	1	-	鉄釉,17c後半	瀬
502	京焼風碗	陶	508SK	lF16m,n	-	-	5.4	-	9	灰釉,呉須,高台内「清水」印	肥
503	灰釉碗	陶	508SK	lF16m,n	-	*2.3	4.1	-	5	灰釉	肥
504	染付蓋	磁	検II	lF15m	8.8	*3.1	-	6	-	染付	肥
505	小碗	磁	検出II（炭化物層）	lF15l	8.5	4.5	3.1	1	9	染付,五弁花（コンニャク印）,松葉文	肥
506	箱形湯呑	磁	422SK・598SK・599SK	lF15m	7.1	*4.8	-	11	-	染付,竹文	肥
507	染付皿	磁	北壁トレンチ	lF15l	-	*1.3	6.0	-	4	染付,吉祥文字か	肥
508	腰錆碗	陶	北壁撹乱	lF15l	9.0	5.7	4.2	5	1	透明釉,口錆,腰錆,鉄絵	
509	京焼風碗	陶	北壁トレンチ	lF15l	-	*1.2	5.6	-	7	灰釉,高台内に印	肥
510	筒形湯呑	陶	検II	lF15l	8.7	*5.5	-	3	-	灰釉,呉須,19c初	瀬
511	行平蓋	陶	検II	lF15l	13.9	3.2	-	5	-	19c前半	瀬
512	灰釉蓋	陶	北壁トレンチ	lF15m	13.4	*2.5	-	4	-	灰釉,18c末	瀬
513	灰釉蓋	磁	検II（炭化物層）	lF15m	最大径 5.5	1.2	下部径 3.2	12	-	灰釉	瀬
514	灰釉小皿	陶	北壁トレンチ	lF15m	7.0	1.8	3.8	7	11	灰釉,19c初～中葉	瀬
515	秉燭	磁	検II（炭化物層）	lF15m	5.1	4.0	3.5	8	12	鉄釉,脚付	瀬
516	秉燭	陶	北壁トレンチ	lF15l	4.9	2.2	2.8	12	12	灰釉	瀬
517	二彩唐津皿（鉢か）	陶	検II	lF15l	25.0	8.0	10.0	2	10	透明釉,印花,見込蛇の目釉剥ぎ,砂目積	肥
518	摺絵皿	陶	北壁トレンチ	lF15l	12.6	2.6	7.2	3	12	灰釉,摺絵菊水文,18c前半	瀬
519	灰釉水注	陶	検II	lF15l	-	*7.2	8.1	-	12	灰釉,17c後半	瀬
520	植木鉢	陶	撹乱	lF15l	-	*5.8	-	3	-	鉄釉（飴釉）,貼付文	瀬
521	火消壺	瓦質	北壁撹乱	lF15l	-	*9.8	19.0	-	4		
522	陶錘	陶	検出II	lF16k	孔1.7	長5.8	幅3.2～3.7	-	-	焼締,81.1g	
523	陶錘	陶	北壁トレンチ	lF15m	-	長6.1	幅3.5	-	-	焼締,表面摩耗,*42.4g	
524	甕	陶	検II	lF15m	-	*13.9	-	3	-	赤物	常
525	焼塩壺蓋	土	北壁トレンチ	lF15m	6.5	1.6	最大径 7.6	4	-	蓋B類	
526	焼塩壺	土	検II（炭化物層）	lF15l	4.5	6.8	3.0	1	4	身D類	
527	玩具	磁	検II（炭化物層）	lF15l	-	*1.8	*3.2	3	-	磁器製,上絵付,碗	
528	玩具	土	検II（炭化物層）	lF15l	5.0	2.1	1.9	6	12	土製,彩色,片口	
529	玩具	陶	検II（炭化物層）	lF15l	高*6.7			-	-	鉄釉,陶製,猿（頭部片）	瀬
530	染付丸碗	磁	110SK	lF15t	8.7	4.4	3.4	10	12	染付	肥
531	蕎猪口	磁	110SK	lF15t	7.4	5.7	4.8	1	9	染付,若松文	肥
532	紅皿	磁	110SK	lF15t	5.2	1.2	1.5	3	12		肥
533	白磁小杯	磁	110SK	lF15t	7.1	5.3	4.2	3	8	白磁釉,型打	肥
534	水滴	磁	110SK	lF15t	-	2.3	-	-	-	染付,方形	肥
535	上絵付湯呑	陶	110SK	lF15t	8.9	*6.1	-	5	-	灰釉,上絵付（赤）,笹文,箱形	信
536	箱形湯呑	陶	110SK	lF15t	8.1	*5.3	-	5	-	灰釉,鉄絵,18c末～19c初	瀬
537	上絵付小碗	陶	110SK	lF15t	6.7	3.8	2.2	6	12	灰釉,上絵付（赤,黒）,18c後半	瀬
538	灰釉碗	陶	110SK	lF15t	12.0	7.2	5.0	11	12	灰釉,高台内兜金,焼成時火ぶくれあり,ススト付着,17c半ば～後半	瀬
539	灰釉丸碗	陶	110SK	lF15t	-	*7.8	7.0	-	8	灰釉総釉,18c前半	瀬
540	灰釉丸碗	陶	110SK	lF15t	-	*3.3	7.0	-	12	灰釉,高台内墨書,片口か,18c前半	瀬
541	柳茶碗	陶	110SK	lF15t	12.0	6.3	4.0	9	12	灰釉,鉄絵柳文	信
542	小杉碗	陶	110SK	lF15t	11.1	6.2	4.8	9	10	灰釉,鉄絵若松文,18c第3四半期	信
543	長石釉碗	陶	110SK	lF15t	9.9	6.2	4.3	12	12	長石釉,鉄釉,呉須,18c後半	瀬
544	灰釉蓋	陶	110SK	lF15t	5.2	1.1	-	12	-	灰釉	信
545	灰釉蓋	陶	110SK	lF15t	10.4	2.4	-	10	-	灰釉,19c初か	瀬？
546	灰釉蓋	陶	110SK	lF15t	7.7	3.3	最大径 9.9	12	-	灰釉	瀬
547	灰釉蓋	陶	110SK	lF15t	10.0	*2.0	-	3	-	灰釉,鉄絵	瀬
548	片口か	陶	110SK	lF15t	-	*5.2	8.4	-	12	灰釉（内外面施釉）,平底	瀬
549	手あぶり	陶	110SK	lF15t	-	*7.8	7.0	-	12	灰釉,19c初	瀬
550	鍋	瓦質	110SK	lF15t	-	*9.1	-	1	-		
551	梅文皿	陶	110SK・169SK・検出II	lF15t	11.6	4.5	4.1	5	7	灰釉,鉄釉,呉須,18c第3四半期	瀬
552	灯明皿	陶	110SK	lF15t	10.4	2.5	4.5	11	12	鉄釉	瀬
553	灯明受皿	陶	110SK	lF15t	11.8	2.1	6.3	3	2	鉄釉	瀬
554	摺絵皿	陶	110SK	lF15t	11.5	2.7	6.0	12	12	灰釉,摺絵梅文,18c第2四半期	瀬
555	摺絵皿	陶	110SK	lF15t	11.8	2.6	5.4	12	12	灰釉,摺絵梅文,18c第2四半期	瀬
556	土瓶（火入れに転用）	陶	110SK	lF15t	10.4	11.7	9.6	12	9	灰釉,鉄絵笹文,口縁端に敲打痕,19c初	瀬
557	水甕か	陶	110SK	lF15t	-	6.0	14.8	-	3	鉄釉,三足付	瀬
558	半胴	陶	110SK	lF15t	31.4	*6.8	-	1	-	鉄釉	瀬

土器・陶磁器（10）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率口／12	残存率底／12	備考	産地
559	志野織部向付	陶	110SK・047SD	IF15t	13.3	6.0	6.0	8	12	織部,鉄絵垣に朝顔,輪高台,19c前半	瀬
560	徳利	陶	110SK	IF15t	-	*12.8	6.0	-	12	鉄・灰釉掛け分け,18c前半	瀬
561	錆徳利	陶	110SK	IF15t	-	*10.6	-	-	-	鉄釉,19c初	瀬
562	土師器皿	土	110SK	IF15t	6.6	1.5	3.3	12	12	ロクロ,橙色,ス ス付着	
563	土師器皿	土	110SK	IF15t	8.3	1.7	4.5	7	8	ロクロ,橙色	
564	土師器皿	土	110SK	IF15t	10.3	2.3	4.8	10	12	ロクロ,橙色	
565	土師器皿	土	110SK	IF15t	10.2	1.9	5.4	5	4	ロクロ,淡褐色	瀬？
566	焼塩壺蓋	土	110SK	IF15t	7.3	1.9	-	12	-	蓋B類,黒色付着物	
567	焼塩壺	土	110SK	IF15t	6.1	7.7	5.4	12	12	身C類,「泉湊伊織」印	
568	焼塩壺	土	110SK	IF15t	5.4	6.0	2.9	12	12	身D類	
569	焼塩壺	土	110SK	IF15t	6.4	7.3	5.8	6	7	身C類,「泉湊伊織」刻印	
570	灰釉小瓶	陶	110SK	IF15t	2.4	6.5	2.4	9	12	灰釉,神仏具	瀬
571	灰釉小瓶	陶	110SK	IF15t	-	*4.9	2.5	-	12	灰釉,神仏具	瀬
572	秉燭	陶	110SK	IF15t	4.4	2.4	2.7	12	12	灰釉	瀬
573	秉燭	陶	110SK	IF15t	4.7	2.2	2.0	12	12	灰釉	瀬
574	焙烙	土	110SK	IF15t	32.0	8.9	*16.8	6	7	金子分類焙烙J2類	
575	茶釜	土	110SK	IF15t	13.2	14.1	17.3	12	11	鈴木分類羽無釜B4類（淡褐色）	
576	茶釜	土	110SK	IF15t	15.4	*4.1	-	8	-	鈴木分類羽無釜B4類	
577	茶釜	土	110SK	IF15t	-	*8.5	16.0	-	4	鈴木分類羽無釜B4類	
578	玩具	土	110SK	IF15t	幅6.5	高3.4	奥行4.7	-	-	土製,彩色,型作り,茶室（屋根）	
579	玩具	土	110SK	IF15t	3.5	1.3	-	12	-	土製,彩色,手捻り,蓋	
580	玩具	土	110SK	IF15t	長*4.1	幅3.2	-	-	-	土製,型作り	
581	玩具	土	110SK	IF15t	4.2	3.7	4.3	4	12	土製,型押し,風炉	
582	玩具	土	110SK	IF15t	高4.1	-	-	-	-	土製,手捻り,犬	
583	玩具	土	110SK	IF15t	高4.5	-	-	-	-	土製,手捻り,犬	
584	玩具	土	110SK	IF15t	高6.2	幅4.4	-	-	-	土製,型作り,鳥	
585	玩具	磁	110SK	IF15t	高8.1	幅5.3	奥行7.9	-	-	磁器製,上絵付（赤黒,緑）,型作り,鶏	肥
586	尾呂茶碗	陶	085SK	IF15s	13.0	7.5	6.1	10	12	鉄釉,18c初	瀬
587	鉄釉碗	陶	085SK	IF15s	-	*3.6	5.7	-	5	鉄釉,高台摩耗	瀬
588	掛分茶碗	陶	085SK	IF15s,t	-	*6.2	5.9	-	5	鉄・灰釉掛け分け,胎土緻密	信?
589	灰釉丸碗	陶	085SK	IF15s,t	7.7	4.6	2.4	1	12	灰釉	信
590	染付丸碗	磁	085SK	IF15s	-	*2.6	4.5	-	5	染付,編目文	肥
591	碁笥底碗	陶	085SK	IF15s	-	*1.4	5.0	-	3	灰釉,17c後半	瀬
592	輪禿皿	陶	085SK・716SK	IF15s	13.2	3.2	6.9	12	12	灰釉,緑釉流し掛け,高台内「や」刻書,17c第3四半期	瀬
593	輪禿皿	陶	085SK	IF15s	13.3	3.8	6.5	12	12	灰釉,ス ス付着,17c後半	瀬
594	菊皿	陶	085SK	IF15s	13.2	2.9	7.2	4	12	17c後半	瀬
595	鉄釉丸皿	陶	085SK	IF15s,t	11.6	4.2	5.2	2	4	鉄釉,19c初（混入）	瀬
596	灯明皿	陶	085SK	IF15t	10.8	2.6	6.0	11	12	灰釉,底部回転ケズリ,19c初（混入）	瀬
597	香炉	陶	085SK	IF15s	-	*4.3	8.4	3	1	鉄釉（外面）,灰釉（内面）,袴腰形,三足付,17c後半	瀬
598	台付鉢	陶	085SK	IF15s	-	*4.6	6.8	-	9	赤織部,高脚,17世紀初	瀬
599	擂鉢	陶	085SK	IF15s	-	*3.1	4.0	-	6	焼締,高台内「□日」印,朝日焼か	宇治?
600	擂鉢	陶	085SK	IF15s	-	*5.8	-	1	-	鉄釉,17c後半	瀬
601	擂鉢	陶	085SK	IF15s,t	-	*9.0	-	1	-	鉄釉,18c末（混入）	瀬
602	鉄絵鉢	陶	085SK	IF15s	27.0	*5.0	-	2	-	灰釉,鉄釉,緑釉流し掛け,17c後半	瀬
603	茶釜	土	085SK,067SK	IF15s,t	13.0	18.4	16.0	12	12	鈴木分類羽無釜B4類	
604	土師器皿	土	085SK	IF15t	7.4	2.0	3.5	10	12	ロクロ,橙色,ス ス付着	
605	土師器皿	土	085SK	IF15s	7.4	1.9	4.1	11	12	ロクロ,橙色,ス ス付着	
606	土師器皿	土	085SK	IF15t	7.6	1.7	4.0	10	12	ロクロ,橙色	
607	土師器皿	土	085SK	IF15s	7.6	1.6	4.2	12	12	ロクロ,橙色,ス ス付着	
608	土師器皿	土	085SK	IF15s	7.8	2.1	4.0	12	12	ロクロ,橙色	
609	土師器皿	土	085SK	IF15s	9.6	2.3	5.6	7	12	ロクロ,橙色,ス ス付着	
610	染付丸碗	磁	166SK	IF15s	10.8	7.2	4.5	2	12	染付	肥
611	染付丸碗	磁	166SK	IF15s	10.5	7.5	4.0	1	12	染付	肥
612	輪花皿	陶	166SK	IF15s	14.7	4.1	6.4	3	6	厚い白濁釉,貫入多い,18c半ば～後半	
613	小杯	磁	166SK,北壁トレンチ	IF15s	6.9	4.3	2.9	7	12	染付,蘭文,端反形	肥
614	染付中皿	磁	166SK	IF15s	21.7	*3.0	-	4	-	染付	肥
615	灰釉蓋	陶	166SK	IF15s	3.8	1.2	-	12	-	灰釉,17c第2四半期	瀬
616	陶錘	陶	166SK	IF15s	孔1.7	長6.2	幅3.6	-	-	焼締,表面摩耗,69.4g	
617	陶錘	陶	166SK	IF15s	孔1.8	長6.2	幅4.1	-	-	焼締,表面摩耗,*56.6g	
618	焼塩壺	土	166SK	IF15s	4.9	6.9	3.6	6	12	身A類,内面変色	
619	土師器皿	土	166SK	IF15s	9.4	1.9	4.2	11	10	ロクロ,淡褐色,ス ス付着	
620	土師器皿	土	166SK	IF15s	11.0	1.4	6.6	5	7	ロクロ,淡褐色,中央に穿孔,ス ス付着	
621	土師器皿	土	166SK	IF15s	12.2	2.2	5.5	10	12	ロクロ,橙色,ス ス付着	
622	土師器皿	土	166SK	IF15s	13.2	3.0	8.0	1	9	ロクロ,淡褐色,見込中央ユビナデ,底部に板圧痕,キズ	
623	京焼風皿	陶	124SK	IF15s	12.7	4.8	4.2	5	12	灰釉,高台内に印	肥
624	染付丸碗	磁	166SK	IF15s	9.8	5.3	3.9	2	3	染付	肥
625	鉄絵皿	陶	166SK	IF15s	12.4	2.5	7.6	3	5	灰釉総釉,鉄絵,17世紀前半	瀬

土器・陶磁器（11）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率 口／12	残存率 底／12	備考	産地
626	土師器皿	土	124SK	lF15s	11.4	2.3	5.4	11	12	ロクロ,橙色,口縁周囲スス付着	
627	土師器皿	土	124SK	lF15s	10.8	2.5	5.6	11	12	ロクロ,橙色,内面全体に膜状付着物	
628	土師器皿	土	124SK	lF15s	11.7	2.2	6.2	12	12	ロクロ,橙色	
629	土師器皿	土	334SK	lF15s	13.9	3.2	7.0	11	12	ロクロ,淡褐色,底部に板圧痕スス付着	
630	香炉か	陶	165SK	lF15s	-	*2.0	7.6	-	5	灰釉,鉄絵,高台内に墨書,19c初	瀬
631	半胴	陶	082SK	lF15s	*22.0	18.8	*15.3	5	3	鉄釉（柿釉）,19c	瀬
632	織部向付	陶	716SK	lF15s	-	*6.1	-	-	-	17c第１四半期	瀬
633	土師器皿	土	716SK	lF15s	10.5	2.6	5.8	8	12	ロクロ,淡褐色,スス付着	
634	灰釉蓋	陶	168SK	lF15r	8.6	3.6	-	4	-	灰釉,呉須摺絵,18c	瀬
635	灰釉丸皿	陶	111SK	lF15r	-	*2.8	4.0	-	12	灰釉,鉄絵,高台内墨書,18c末	瀬
636	有耳壺	陶	169SK	lF15t	5.0	7.7	4.6	9	12	飴釉,19c初	瀬
637	焼塩壺蓋	土	１６９SK	lF15t	7.4	1.7	-	10	10	蓋B類	
638	灯明皿	陶	１６９SK	lF15t	12.0	2.7	5.6	2	5	鉄釉	瀬
639	鉢か	磁	194SK・196SK	lF16qr,17s	-	*3.4	-	1	-	染付,内外面に施文,大型の鉢か,19c初～中葉	
640	土瓶	陶	174SD・315SK・492SK・598SK	lF16r	7.8	*8.5	-	1	-	灰釉,鉄絵,19c初か	瀬
641	染付蓋	磁	025SD	lF16s	5.0	1.1	-	5	-	染付,人物文？	肥
642	加工円板	陶	025SD	lF16t	長2.8	幅2.3	厚0.8	-	-	鉄釉碗片,周囲研磨	瀬
643	染付丸碗	磁	047SK・（110SK）	lF15t	10.0	4.8	3.8	1	6	染付,菊花ちらし	肥
644	蓋物身	陶	047SD・004SK	lF15t	17.6	*9.5	-	3	-	灰釉,18c末	瀬
645	染付瓶	磁	０４７SD	lF15t	-	*10.7	8.9	-	6	染付	肥
646	灰釉丸碗	陶	070SK	lF15t	11.6	6.8	5.1	6	12	灰釉総釉,18c前半	瀬
647	火鉢か風炉	瓦質	158SK	lF15q	21.5	*14.0	-	3	-	焼成はやや軟質,表面に細かな凹凸	
648	染付丸碗	磁	撹乱	lF15t	8.3	4.2	2.3	3	12	染付	肥
649	染付丸碗	磁	検出II・北壁トレンチ	lF15t	9.2	4.9	3.6	9	1	染付	肥
650	染付丸碗	磁	検出I	lF15t	-	*4.9	5.2	-	3	染付,花鳥文	肥
651	広東碗	磁	北壁トレンチ	lF15s	11.0	6.5	6.3	11	6	染付,山水文	瀬
652	染付皿	磁	北壁トレンチ	lF15t	-	-	-	-	-	染付	肥?
653	上絵付碗	陶	北東隅・検出II	lF15t	10.5	5.3	3.0	12	12	灰釉,上絵付（赤,青,緑）,18c末	瀬
654	上絵付碗	陶	東壁トレンチ	lF15t	-	*4.5	2.9	-	12	灰釉,上絵付（緑）,19c初	瀬
655	仏餉具	陶	撹乱	lF15t	-	*3.0	4.8	-	12	灰釉,19c初～中葉	瀬
656	上絵付小瓶	陶	北壁トレンチ	lF15r	-	*4.8	2.4	-	12	灰釉,上絵付（赤,緑）,神仏具,19c初か	瀬
657	京焼風皿	陶	検出II（北東隅）	lF15t	12.6	4.4	5.7	2	5	灰釉,呉須絵,高台内「雲」印	肥
658	柳茶碗	陶	検出II	lF15t	*12.5	6.3	4.6	3	6	灰釉,鉄絵柳文	信
659	沈線茶碗	陶	検出I	lF15s	10.4	*6.4	-	3	-	鉄釉,19c初	瀬
660	腰錆茶碗	陶	北東壁		10.3	5.9	4.2	8	12	灰釉,鉄釉,18c後半	瀬
661	水滴	陶	検出II	lF15t	-	3.5	6.3	-	1	鉄釉,型打	瀬
662	志野小壺	陶	北壁トレンチ	lF15s	-	*3.5	5.2	-	4	志野織部,17世紀前半か	瀬
663	鉄絵皿	陶	東側撹乱		11.7	2.5	6.8	8	12	灰釉,鉄絵	瀬
664	梅文皿	陶	北壁トレンチ	lF15s	-	*3.1	4.0	-	11	灰釉,鉄釉、呉須,18c末	瀬
665	辛味次か	陶	北壁トレンチ	lF15s	-	3.7	-	-	-	灰釉,複数の小鉢で構成,18c末	瀬
666	小杯	陶	北壁	lF14,15s	6.7	3.5	4.0	5	7	長石釉,底部回転ケズリ	瀬
667	灯明具	陶	北東壁		8.0	5.3	5.4	11	12	飴釉,使用痕あり,18c中葉	瀬
668	秉燭	陶	検出I	lF15s	4.6	2.2	2.4	7	12	灰釉	瀬
669	秉燭	陶	検出II	lF15t	4.0	2.3	2.1	5	12	灰釉	瀬
670	秉燭	陶	検出II	lF15t	4.0	2.1	2.0	12	12	灰釉	瀬
671	灰釉蓋	陶	北壁トレンチ	lF15r	下部径 11.0	3.0	最大径 13.9	8	-	灰釉	瀬
672	土瓶蓋	陶	北壁	lF14,15s	6.8	1.5	-	6	-	灰釉	信?
673	灰釉蓋	陶	検出I	lF15s	6.0	1.5	-	11	-	灰釉	瀬
674	志野丸皿	陶	検出I	lF15s	8.6	2.0	5.2	5	12	志野,削り込み高台,17世紀前半	瀬
675	灯明受皿	陶	検出II	lF15t	10.8	2.3	5.9	9	12	鉄釉,19c初	瀬
676	灯明受皿	陶	東壁トレンチ	lF15t	11.2	1.7	5.5	7	6	鉄釉,美濃,19c初	瀬
677	片口	陶	撹乱	lF15t	17.4	9.7	7.1	5	12	灰釉,緑釉ちらし,18c末	瀬
678	筒形香炉	陶	北壁トレンチ	lF15s	10.2	*6.0	-	1	-	鉄釉	
679	筒形香炉	陶	検出II	lF15s	12.6	7.2	8.3	3	5	灰釉,鉄摺絵,18c	瀬
680	土瓶	陶	検出I	lF15t	9.9	*10.5	-	11	-	鉄釉（柿釉）,錆釉（内面）,19c初	瀬
681	徳利	陶	東壁トレンチ	lF15t	3.1	19.0	6.2	12	12	灰・鉄釉掛け分け,18c初	瀬
682	灰釉徳利	陶	北東部表土掘削		2.9	*4.7	-	12	-	灰釉,貧乏徳利,美濃	瀬
683	手あぶり	陶	東壁トレンチ	lF15t	10.4	-	13.4	4	3	無釉,三足付	瀬
684	内耳鍋	土	検出II	lF15t	27.8	11.0	*14	8	7	鈴木分類内耳鍋B6類	
685	五徳	陶	東壁トレンチ	lF15t	-	-	-	-	-	白色無釉,断面方形	
686	焼塩壺	土	北壁トレンチ	lF15s	6.3	10.1	-	8	12	身A類	
687	焼塩壺	土	125SK	lF15t	5.9	7.2	5.4	12	12	身B類,「泉湊伊織」刻印,内面黒色付着物	
688	土師器皿	土	検出II	lF15t	9.9	2.4	5.3	6	9	ロクロ,橙色系,スス付着	
689	土師器皿	土	検出II	lF15t	8.4	2.8	4.9	5	5	ロクロ,橙色系	
690	土師器皿	土	検出II	lF15t	7.2	1.4	3.9	12	12	ロクロ,淡褐色	瀬?
691	玩具	土	東壁トレンチ	lF15t	3.8	*3.5	-	12	12	土製,彩色,型作り,土瓶	
692	玩具	土	東壁トレンチ	lF15t	4.8	1.7	1.7	9	12	土製,彩色,紅皿	
693	玩具	土	北壁	lF14,15s	4.4	3.5	2.4	5	5	土製,彩色,手捻り,杯か	
694	玩具	土	東壁トレンチ	lF15t	高6.0	-	-			土製,型作り,鳥	
695	灯芯押	磁	検出II	lF15s	幅3.1	4.2	奥行1.9			青磁,人形（頭部欠損）	肥
696	玩具	土	北東隅トレンチ		-	-	-			土製,型押し,芥子面（般若）	

土器・陶磁器（12）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率口／12	残存率底／12	備考	産地
697	玩具	土	北壁トレンチ	lF15r	高5.9	幅4.5				土製,型作り,手捻り,鶏	
698	玩具	土	東壁トレンチ	lF15t	高5.1	幅2.4				土製,型押し,手捻り,猿	
699	玩具	土	北東隅・検出II	lF15t	高5.3	幅3.4				陶製,緑釉,型押し,手捻り,座り猿	
700	玩具	土	東壁トレンチ	lF15t	高2.5	幅4.0				土製,型作り,蛙	
701	染付丸碗	陶	027SD・077SK	lF18q	10.3	7.8	5.4	11	12	灰釉,呉須,笹垣文	瀬
702	小判皿	陶	027SD	lF18r	幅7.0	1.6	-	5	6	[illegible] 19c後期	淡路
703	蕎麦猪口	磁	602SD（褐灰色土）	lF18s	-	*3.2	5.6	-	3	染付	肥
704	擂鉢	陶	602SD	lF18t	-	*4.0	-	1	-	鉄釉,19c初	瀬
705	灰釉丸皿	陶	602SD	lF18t	-	*1.8	4.3	-	4	灰釉	信？
706	灰釉小杯	陶	602SD	lF18t	6.0	3.4	2.1	5	12	灰釉	瀬
707	灰釉徳利	陶	602SD（褐色斑土）	lF18r,s	-	*2.3	7.4	-	3	灰釉	瀬
708	手あぶり	陶	602SD（褐灰色土,黄斑土）	lF18s	-	*4.0	-	1	-	鉄釉,19c	瀬
709	燭台	陶	トレンチ	lF18t	-	*12.2	7.2	-	12	灰釉,19c初～中葉	瀬
710	染付丸碗	磁	553SK	lF15,16p	11.2	*4.1	-	2	-	染付,no.214碗蓋と文様類似	肥
711	型打皿	磁	118SK	lF17p,q	21.0	*3.1	*12.8	3	2	染付	中国
712	蓋	陶	撹乱（防空壕石炭ガラ）	lF16n	9.8	*1.7	-	4	-	無釉,明褐色	
713	急須	陶	撹乱（防空壕石炭ガラ）	lF16n	-	*4.7	7.4	-	3	無釉,明褐色	
714	卸皿	陶	046SD	lF17p	長14.9	2.3	幅10.7	-	-	錆釉,19c初	瀬
715	灰釉小瓶	陶	撹乱（048SD）	lF17t	2.1	4.7	2.5	12	12	灰釉,神仏具,19c初	瀬
716	染付丸碗	磁	撹乱（048SD）	lF17t	-	*1.9	4.2	-	8	染付,ガラス継痕,高台内朱書	肥
717	焼塩壺	土	089SD	lF16q	6.0	7.1	5.0	5	12	身B類,「□織」刻印	
718	火鉢	陶	090SD	lF16o	20.0	9.6	16.2	3	4	鉄釉,底部穿孔	瀬
719	平瓦	瓦	389SK	lF15l	長30.5	幅28.5	高5.6			本瓦葺,燻し瓦	
720	丸瓦	瓦	389SK	lF15l	長33.5	幅16.5～17.5	高8.0			本瓦葺,燻し瓦	
721	軒丸瓦	瓦	389SK	lF15l	長34.5	幅15.5～16.7	径17.2			本瓦葺,左巻き三巴文,珠文	
722	軒丸瓦	瓦	389SK	lF15l	-	-	径18.2			本瓦葺,左巻三巴紋,12珠文	
723	丸瓦	瓦	389SK	lF15l	長33.4	幅17.6	高8.0			本瓦葺	
724	軒桟瓦	瓦	389SK（下層）	lF15l	軒平厚4.6	丸径8.6	-			左巻三巴紋,12珠文	
725	軒桟瓦	瓦	389SK（下層）	lF15l	-	-	-			三子葉紋,唐草文	
726	隅巴	瓦	381SK第２層	lF16n	-	丸径12.6	-			本瓦葺,左巻三巴紋	
727	軒桟瓦	瓦	381SK	lF16n	軒平厚4.3	丸径9.7	-			左巻三巴紋,15珠文	
728	軒桟瓦	瓦	381SK	lF16n	軒平厚4.8	-	-			三子葉紋,唐草文	
729	軒桟瓦	瓦	381SK（4～7層）	lF16n	軒平厚4.9	-	-			唐草文	
730	軒桟瓦	瓦	381SK	lF16n	軒平厚4.5	丸径8.8	-			三子葉紋,唐草文（退化）	
731	軒桟瓦	瓦	381SK	lF16n	軒平厚4.2	丸径8.8	-			左巻三巴紋	
732	軒桟瓦	瓦	380SK	lF15m	軒平厚4.6	丸径8.9	-			左巻三巴紋,12珠紋、唐草文	
733	軒桟瓦	瓦	492SK	lF15m	軒平厚4.5	-	-			三子葉紋,唐草文	
734	軒桟瓦	瓦	492SK	lF15m	軒平厚4.1	-	-			三子葉紋,唐草文	
735	軒桟瓦	瓦	492SK	lF15m	-	丸径8.7	-			左巻三巴文,12珠文	
736	軒桟瓦	瓦	413SK	lF16k	軒平厚4.8	-	-			三子葉紋,唐草文	
737	軒桟瓦	瓦	413SK	lF16k	軒平厚5.1	-	-			三子葉紋,唐草文	
738	軒桟瓦	瓦	413SK	lF16k	軒平厚5.0	-	-			三子葉紋,唐草文	
739	軒桟瓦	瓦	413SK	lF16k	軒平厚4.9	-	-			唐草文（退化）,○に「作」印あり	
740	軒桟瓦	瓦	413SK	lF16k	軒平厚5.0	-	-			三子葉紋,唐草文	
741	飾り瓦	瓦	413SK	lF16k	厚2.2	-	-			反りなし,穿孔あり	
742	飾り瓦	瓦	413SK	lF16k	厚2.4	-	-			反りなし,穿孔あり	
743	飾り瓦	瓦	413SK	lF16k	厚1.9	-	-			反りなし,断面クランク	
744	飾り瓦	瓦	413SK	lF16k	厚2.0	-	-			反りなし,断面クランク	
745	飾り瓦	瓦	413SK	lF16k	厚1.6	-	-			反りなし,○に「一」印	
746	平瓦	瓦	413SK	lF16k	厚1.7	-	-			小口刻印、○に「一」印	
747	平瓦	瓦	413SK	lF16k	厚2.1	-	-			小口刻印、○に「作」印	
748	平瓦	瓦	413SK	lF16k	厚1.6	-	-			小口刻印、○に「作」印	
749	平瓦	瓦	413SK	lF16k	厚1.8	-	-			小口刻印、○に「作」印	
750	湯呑	磁	088SD	lF16o,n	*6.4	7.0	3.8	3	12	銅版転写「工三」,19c末～20c前期	
751	湯呑	磁	088SD	lF16o,n	7.0	7.1	4.6	6	5	上絵「酒保」,19c末～20c前期か	瀬
752	碗	硬陶	088SD	lF16o,n	11.2	5.6	4.2	7	12	銅版転写陸軍徽章,20c前期～中期	

土器・陶磁器（13）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率 口／12	残存率 底／12	備考	産地
753	小碗	硬陶	088SD	lF16o,n	-	*3.9	-	-	-	銅版転写☆に「工三」,20c前期	
754	把手付碗	硬陶	088SD	lF16o,n	10.8	5.7	5.4	10	12	銅版転写☆に「工三」,20c前期	
755	大型碗	硬陶	088SD	lF16o,n	11.4	*8.3	-	3	-	銅版転写☆に「工三」,20c前期	
756	筒形容器	陶	088SD	lF16n,o	20.1	20.9	18.8	10	12	衛生容器,19c後期～20c中期	
757	碗	硬陶	048SD	lF17t	11.3	5.9	4.4	6	12	銅版転写☆に「工三」,銅版転写☆に「工三」,20c前期	
758	鉢	硬陶	048SD	lF17t	15.6	6.9	8.0	6	8	銅版転写☆に「工三」,20c前期	
759	鉢	硬陶	048SD	lF17t	15.7	6.9	7.4	4	7	20c前期か	
760	皿	硬陶	048SD	lF17t	18.0	2.9	11.0	12	12	中央に銅版転写☆に「工三」,20c前期	
761	皿	硬陶	048SD	lF17t	18.6	2.9	10.8	9	12	中央に銅版転写☆に「工三」、底面脇に「東焼」,20c前期	
762	土瓶蓋	陶	048SD,検出II	lF17t	10.4	3.2	-	9	-	裏面「犬山」印,犬山焼,19c後期	犬山
763	湯呑	磁	048SD	lF17t	7.0	7.5	4.4	12	12	朱上絵「鈴木　（丸に）善」,19c後期～20c前期	
764	土瓶	陶	089SD	lF16p	8.3	11.6	9.6	9	10	緑色釉,筒描き（イッチン）,19c後期～20c中期	
765	大型碗	硬陶	089SD	lF16n	11.3	9.4	6.7	2	5	銅版転写陸軍徽章,20c前期～中期	
766	端反碗	磁	089SD・136SD	lF16p,q	11.8	6.1	4.8	6	12	染付、高台内に「香正園製」,19c後期～20c前期	
767	把手付碗	硬陶	046SD	lF16,17q	10.5	5.5	5.3	10	12	銅版転写陸軍徽章,20c前期～中期	
768	碗	硬陶	046SD・118SK	lF17p,q	11.0	5.5	4.2	12	10	20c前期か	
769	碗	磁	046SD	lF16r	11.2	5.7	4.3	4	5	クロム緑二重圏線,底部にスタンプ「RC NORITAKE」,19c前期～中期	ノリタケ
770	筒形容器	磁	046SD	lF17p	7.8	11.6	9.8	3	5	19c後期～20c中期	
771	湯呑	磁	088SD	lF16o,n	6.6	7.1	3.8	6	12	上絵付「酒保」「工三」,19c末～20c前期	
772	筒形容器蓋	磁	046SD	lF16r	最大径 19.2	7.8	5.0	11	12	衛生容器蓋,19c後期～20c中期	
773	筒形容器	磁	046SD	lF16r	17.9	17.8	17.5	4	12	衛生容器,19c後期～20c中期	
774	中皿	磁	046SD・118SK	lF1617q	15.4	1.6	8.3	7	11	染付,高台内に角福?,19c後期～20c前期	瀬?
775	碗	磁	090SD	lF16o	12.6	5.6	6.0	5	2	クロム緑二重圏線,20c前期～中期	
776	鉢	磁	090SD	lF16o	14.3	6.0	5.2	11	12	クロム緑二重圏線,スタンプ「RC NORITAKE 砲三ノ穴」,20c前期～中期	ノリタケ
777	碗	磁	090SD	lF15,16o	10.7	4.7	4.4	4	9	飯茶碗形,コバルト縞文,19c後期か	瀬?
778	湯呑	磁	090SD	lF15,16n	6.0	7.0	3.6	4	12	上絵付「将集」,19c末～20c中期	
779	中皿	磁	090SD,検出II	lF15,16o	14.2	2.3	7.6	6	12	摺絵,19c後期～20c前期	
780	中皿	磁	090SD	lF15,16o	13.2	2.9	5.8	4	6	手描き,19c後期か	
781	碗	磁	047SK	lF15t	11.8	5.1	3.8	2	12	飯茶碗形,スタンプ文？,19c後期～20c前期か	
782	丼蓋か	磁	047SK	lF15t	14.8	3.3	-	7	-	「名病」銘	
783	湯呑	磁	387SK	lF15l	7.6	6.0	3.8	3	8	染付,手描き,19c後期か	瀬
784	水滴	磁	387SK	lF15l	長辺7.8	2.7	短辺6.2	8	4	染付,型打成形,19c後期か	瀬
785	湯呑	磁	021SD	lF16t	6.8	6.8	4.4	12	12	クロム緑二重圏線,底面「日陶製」,20c前期～中期	日本陶器
786	鉢	磁	001SD	lF18m	-	-	-	-	-	20c前期～中期	ノリタケ
787	染付丸碗	磁	072SK	lF15q	10.3	4.6	4.2	10	12	飯茶碗形,銅版印刷,高台内「梅花造」銘,19c後期～20c前期	
788	上絵付鉢	磁	023,025SD	lF16s	15.4	7.3	6.4	1	8	上絵付文様、○に「S」,19c後期～20c中期	
789	徳利	陶	273SK	lF15q	1.9	13.3	5.5	12	12	灰釉,19c後期～20c中期	
790	徳利か	陶	655SK	lF17o	2.3	*8.2	-	12	-	灰釉,19c後期～20c中期	
791	釜	土	030SK,撹乱	lF15s・15r,s・17q	23.0	15.8	17.2	4	5	透明釉（内面）,スス付着,19c後期～20c中期	
792	置き竈か	陶	381SK	lF16n	20.4	*6.5	-	8	-	鉄釉（柿釉）,19c後期～20c中期	瀬
793	湯呑	陶	340SX	lf16n	7.1	7.4	4.6	11	12	上絵付,菊花文,19c後期	
794	小碗	磁	340SX茶褐色土	lF16n	8.1	4.5	3.8	8	12	銅版印刷、牡丹文19c後期～20c前期	瀬
795	湯呑	磁	340SX	lF17n	7.2	7.1	4.6	7	12	上絵付「工三下集」,19c末～20c前期	
796	湯呑蓋	磁	340SX茶褐色土	lF16n	6.0	2.2	最大径 7.9	11	-	染付,手描き,19c後期～20c前期	
797	湯呑	磁	340SX茶褐色土	lF16n	7.3	7.2	3.8	12	12	染付,手描き,19c後期～20c前期	
798	丼	磁	340SX	lF15n	14.9	6.6	5.9	10	12	手描き,鉄・コバルト,19c後期～20c前期	
799	丼	磁	340SX	lF15n	14.6	5.5	6.2	6	12	手描き,鉄・コバルト,19c後期～20c前期	
800	大型碗蓋	硬陶	342SX	lF17r	13.6	*1.8	-	3	-	20c前期～中期	
801	碗	硬陶	340SX茶褐色土	lF16n	11.3	5.6	4.1	6	7	銅版転写陸軍徽章,高台内「硬陶」銘,20c前期～中期	日本硬質陶器
802	深皿	磁	340SX茶褐色土	lF16n	18.4	4.6	13.0	7	3	19c末～20c中期	
803	丼蓋	磁	北東部表土掘削		13.7	3.9	-	8	-	コバルト青色二重圏線,20c前期～中期	
804	丼	硬陶	340SX茶褐色土	lF16n	15.5	7.3	5.7	6	10	コバルト青色二重圏線,20c前期～中期	松村陶器
805	丼蓋	磁	340SX茶褐色土	lF16n	15.1	4.8	-	7	8	クロム緑二重圏線,20c前期～中期	
806	丼	磁	340SX茶褐色土	lF16n	16.8	7.9	6.4	4	7	クロム緑二重圏線、高台内「瀬」,20c前期～中期	
807	小杯	磁	340SX茶褐色土	lF16n	8.4	5.7	3.4	8	12	手描文様、高台内スタンプ「岐724」,20c中期	美
808	瓶	磁	340SX茶褐色土	lF16n	3.0	12.0	4.8	12	12	底部エンボス「岐765」,20c中期	美
809	丼	磁	南東隅表土掘削		15.4	7.1	6.8	6	12	手描き,鉄・コバルト,見込「寿」,19c後期～20c前期	
810	丼	磁	表土掘削		14.8	7.1	6.5	11	12	手描き,コバルト,19c後期～20c前期	
811	湯呑	磁	北東部表土掘削		7.8	5.3	3.0	11	8	高台内エンボス「岐497」,20c中期	美
812	丼蓋	磁	表土掘削		13.6	3.3	-	5	-	手描き,コバルト,19c後期～20c前期	

土器・陶磁器（14）

E-no.	器種	種別	遺構	グリッド	口径（cm）	器高	底径	残存率口／12	残存率底／12	備考	産地
813	井	磁	表土掘削		15.6	6.2	5.8	1	12	手描き,コバルト,19c後期～20c前期	
814	酒杯	陶	111SK	lF15r	7.0	2.7	3.0	2	6	灰釉,内面に朱？付着,外面上絵「明治□」,19c後期	
815	酒杯	磁	検出l	lF16s	7.7	3.1	3.0	10	12	高台内「菅沼」金彩,19c後期～20c前期	
816	小杯	磁	136SD	lF16q	8.8	4.9	3.9	5	9	高台内「秀□作」,19c後期～20c前期	
817	鉢	磁	南東部表土掘削		21.1	8.0	9.0	9	12	スタンプ,海老・若松文,19c後期～20c前期	
818	中皿	磁	380SK	lF15m	15.0	4.3	6.8	7	12	摺絵,19c後期～20c前期	
819	中皿	磁	136SD	lF15q	13.9	3.3	7.6	1	12	摺絵,19c後期～20c前期	
820	便器	陶	404SK	lF15l	-	-	-	-	-	手描染付,角形,19c後期	
821	便器	陶	404SK,表土掘削	lF15k,l	-	-	-	-	-	手描染付,朝顔形,19c後期	
822	小碗	硬陶	検出ll	lF16s	7.8	5.3	4.4	6	5	鉄釉スタンプ高台内○に「N」「H」,19c末～20c前期か	
823	碗	磁	北壁	lF15q	11.3	5.1	3.7	8	12	鉄釉スタンプ見込○に「N」「H」,19c末～20c前期か	
824	碗	磁	西壁		12.2	4.5	4.0	4	7	鉄釉スタンプ側面「△」、見込○に「N」「H」,19c末～20c前期か	
825	碗	磁	北壁	lF15q	-	*4.4	4.6	-	12	鉄釉スタンプ側面○に「N」「H」,19c末～20c前期か	
826	碗	硬陶	撹乱（防空壕石炭ガラ）	lF16n	10.8	5.7	4.0	6	7	銅版転写陸軍徽章,高台内「硬陶」角印,20c前期～中期	日本硬質陶器
827	小杯	硬陶	撹乱	15,16,17n	8.4	5.9	4.7	1	5	銅版転写裏面に「硬陶」角印,20c前期か	日本硬質陶器
828	湯呑	磁	検出l,撹乱	lF16s	7.4	8.2	4.1	6	12	上絵高台内「１」,エンボス○に「兵」,口縁と高台に銀圏線,19c末～20c中期	
829	鉢	磁	南東部表土掘削		16.5	7.1	7.8	4	12	銅版転写陸軍徽章,19c後期～20c中期	
830	大型碗	磁	南東部表土掘削		10.9	9.4	6.2	4	3	銅版転写陸軍徽章,19c後期～20c中期	
831	碗	磁	撹乱	lF16r	11.4	5.8	6.5	6	6	クロム緑二重圏線「NORITAKE」,20c前期～中	ノリタケ
832	皿	磁	北東部表土掘削		14.8	3.5	8.0	3	3	銅版転写陸軍徽章付,20c前期～中期	
833	皿	硬陶	検出l	lF15t	18.8	2.8	11.0	4	7	見込陸軍徽章,底面「名古屋□□松村」印,20c前期～中期	松村陶器
834	把手付碗	硬陶	検l	lF18q	11.0	5.7	5.4	7	10	銅版転写☆に「工三」,20c前期	
835	把手付碗	硬陶	撹乱	lF17s	10.8	5.6	5.5	11	12	銅版転写☆に「工三」,20c前期	
836	把手付碗	硬陶	表土掘削		11.4	5.7	5.4	7	12	銅版転写☆に「工三」,20c前期	
837	皿	硬陶	048SD	lF17t	18.8	3.0	11.1	8	12	20c前期～中期	
838	不明	陶	北壁	lF15q	-	-	-	-	-	19c後期か	
839	飯茶碗	磁	088・089SD	lF16o	10.9	4.9	4.3	4	12	青・緑縞文,写真図版 遺物15	
840	飯茶碗	磁	089SD	lF16n	11.7	5.0	4.0	9	12	鉄釉,写真図版 遺物15	
841	飯茶碗	磁	046SD	lF17p	11.4	5.2	4.0	6	2	手描か,写真図版 遺物15	
842	小杯	陶	046SD	lF16r	9.5	*4.4	-	5	-	灰・鉄釉,写真図版 遺物15	
843	飯茶碗	磁	046SD	lF16r	11.6	5.2	3.9	4	12	銅版転写,写真図版 遺物15	
844	飯茶碗	磁	090SD	lF15o	11.5	4.9	-	4	2	ゴム印か	
845	丸碗	磁	021SD	lF16t	9.1	*6.3	-	1	-	高台内「京陶風」,写真図版 遺物15	
846	飯茶碗	磁	北壁	lF14,15r	11.2	5.5	4.0	2	12	手描,写真図版 遺物15	
847	飯茶碗	磁	東側撹乱		11.0	6.1	4.0	4	12	手描,エンボス「岐40」,写真図版 遺物15	美
848	ピン型碍子	磁	表土		最大径*6.3	11.3				写真図版 遺物18	
849	ノップ碍子	磁	表土		2.8	4.2				写真図版 遺物18	
850	ノップ碍子	磁	東トレンチ	lF16t	3.7	4.3				写真図版 遺物18	
851	ノップ碍子	磁	051SK	lF16t	3.7	4.9				写真図版 遺物18	
852	碍子	磁	表土		5.5	2.6				写真図版 遺物18	
853	碍子	磁	021SD	lF16t	6.6	4.2				写真図版 遺物18	
854	クリート碍子	磁	089SD	lF16p	長8.4	幅2.0	厚1.2			写真図版 遺物18	
855	ピン型碍子	磁	089SD	lF16p	5.4	7.5				写真図版 遺物18	
856	耐火煉瓦	煉瓦	表土掘削	-	長22.5	10.6	5.9			「チ C.K.R」陰刻スタンプ	

ガラス製品

X-no.	分類1	分類2	銘柄	発色	気泡	遺構	グリッド	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備　考
1	薬瓶	一般用薬瓶		透明でわずかに赤色	細かい気泡	046SD	IF17p	0.9	*3.9	1.1	
2	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	046SD	IF16n	1.2	4.2	2.8	
3	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	046SD	IF16n	1.2	4.0	2.9	
4	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに黄色	わずかにあり	046SD	IF17p	1.5	4.0	最大6.4	
5	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに黄色	わずかにあり	046SD	IF17p	1.5	4.4	最大6.2	
6	文具瓶	インク瓶	桜花にSK	透明でわずかに黄色	なし	046SD	IF16r	1.5	3.8	最大6.3	桜花枠に「SK」
7	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに黄色	細かい気泡	046SD	IF16r	1.5	4.2	4.1	
8	薬瓶	薬品瓶	兵か長	透明でわずかに青色	わずかにあり	046SD	IF17p	0.9	6.1	2.4	
9	薬瓶	一般用薬瓶	ヨヂュムエキ	透明でわずかに青色	わずかにあり	046D	IF17o	0.9	6.6	2.1	「ヨヂュム液　東京高田製」
10	薬瓶	医療用薬瓶		透明でわずかに黄色	わずかにあり	046SD	IF17p	1.2	8.4	4.2	目盛付き
11	薬瓶	一般用薬瓶	美顔水	半透明で濃青色	わずかにあり	046SD	IF17p	1.1～1.3	7.4	2.6	「美顔水」
12	薬瓶	一般用薬瓶	美顔水	半透明で濃青色	わずかにあり	046SD	IF17p	1.2	9.2	3.5	「美顔水」
13	薬瓶	薬品瓶		透明でわずかに青緑色	なし	046SD	IF17q	2.1	8.2	3.6	
14	薬瓶	薬品瓶	星にY	透明でわずかに青緑色	わずかにあり	046SD	IF17o	1.9	7.9	3.4	
15	板ガラス	鏡		透明でわずかに青色	なし	046D	IF17p	6.4×9.0	厚0.6	-	角形板ガラス、やや緑色がかる
16	薬瓶	一般用薬瓶	全治水	透明でわずかに青色	わずかにあり	340SX	IF16n	0.9	7.1	2.2	「全治水」
17	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに青緑色	わずかにあり	340SX	IF16n	3.8	4.5	4.7	スクリュー栓
18	文具瓶	インク瓶		透明	わずかにあり	340SX	IF15n	3.8	4.6	4.5	スクリュー栓
19	文具瓶	インク瓶		半透明で青緑色	大きな気泡	340SX	IF15n	4.6	4.4	5.0	スクリュー栓
20	薬瓶	医療用薬瓶		透明でわずかに緑色	わずかにあり	340SX	IF15n	1.0	6.8	2.7	目盛付,コルク付属
21	栓	薬品瓶の栓？		透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	340SX	IF16n	最大径4.3	3.5	下部径1.7	栓
22	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに緑色	細かい気泡	340SX	IF17m	外径3.2	6.5	4.6	
23	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに緑色	わずかにあり	340SX	IF15m	1.4	4.7	4.0	
24	調味料瓶	ソース瓶	ハナソース	透明でわずかに青緑色	わずかにあり	340SX	IF16n	1.7	14.9	3.6	「ハナソース　弥生商
25	調味料瓶	不明調味料瓶		透明でわずかに緑色	なし	340SX	IF16n	2.0	16.4	4.5	
26	薬瓶	薬品瓶？	J.M.&C	透明でわずかに黄色	細かい気泡	089SD	IF16p	1.2	7.0	3.6	「J.M&」
27	化粧瓶？	不明		不透明で白色	なし	089SD	IF16p	2.6	8.0	4.4	栓付属,スクリュー栓
28	板ガラス	鏡		透明でわずかに青緑色	なし	089SD	IF16p	4.9	厚0.2	-	円形板ガラス
29	文具瓶	インク瓶	MARUSHIRO SHIYOKAI	透明でわずかに黄色	わずかにあり	089SD	IF16p	1.4	5.1	3.9	「MARUSHIRO SHIYOKAI」
30	化粧瓶	化粧クリーム瓶	SANTANEY	不透明で白色	なし	342SX	IF17s	3.9	3.8	4.8	スクリュー栓
31	板ガラス	凸レンズ		透明でわずかに青緑色	なし	342SX	IF17s	7.5	厚0.7	-	
32	薬瓶	薬品瓶	津生	透明でわずかに赤色	なし	088SD	IF16o,n	1.1	5.7	1.5	「□生□」
33	薬瓶	薬品瓶		透明でわずかに青色	なし	051SK	IF16t	1.0	4.5	1.7	
34	化粧瓶	不明	COMBI	透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	185SK	IF17m	0.6	7.4	3.6	「KONBI」
35	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに青色	わずかにあり	023SD	IF16s	2.3	6.3	5.5	
36	文具瓶	インク瓶	丸善	透明でわずかに緑色	多くあり	072SK	IF15q	1.4	3.8	4.8	○に「M」
37	板ガラス	鏡		透明でわずかに青緑色	なし	070SK	IF15t	6.0×10.0	厚0.6	-	角形板ガラス
38	薬瓶	薬品瓶？		透明でわずかに黄緑色	なし	127SK	IF15r	1.6	5.9	3.7	
39	薬瓶	薬品瓶？	下里	半透明で茶色	わずかにあり	110SK	IF15t	1.3	6.4	2.2	
40	化粧瓶	化粧水瓶	ホーカー液	透明でわずかに黄色	わずかにあり	203SD	IF15r	1.4	9.8	3.2	「ホーカー液　堀越」
41	化粧瓶	化粧クリーム瓶		透明でわずかに青緑色	わずかにあり	333SK	IF15l	6.0	2.5	5.8	スクリュー栓
42	化粧瓶	化粧クリーム瓶	MIDO	半透明で白色	なし	158SK	IF15q	3.9	4.9	3.8	クリーム容器、スクリュー栓
43	乳製品瓶？	牛乳瓶？	塚本	透明でわずかに青緑色	わずかにあり	376SD	IF15p	1.0	15.2	4.2	「登録商標　塚本　（○に）少　愛知　名古屋組合　容器　非賣」
44	調味料瓶	酢瓶		半透明で青緑色	わずかにあり	001SD	IF17s	1.7	18.0	5.4	
45	薬瓶	一般用薬瓶	タムシトリ	半透明で青色	わずかにあり	北壁トレンチ	IF15r	0.9	5.1	1.8	
46	薬瓶	目薬瓶	晴光水	透明でわずかに黄緑色	多くあり	東壁トレンチ	IF15t	0.9	5.7	2.5	
47	薬瓶	一般用薬瓶		透明でわずかに緑色	わずかにあり	表採		1.1	6.2	-	
48	薬瓶	医療用薬瓶		透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	撹乱	IF15,16,17n	1.0	7.8	4.2	目盛付
49	化粧瓶	不明	ロマン	透明でわずかに赤色	なし	検出II	IF16l	蓋1.1	5.5	最大2.8	香水ビン、スクリュー栓、キャップ付
50	化粧瓶	化粧水瓶	TELLME	不透明で白色	なし	北壁撹乱	IF15l	1.9	9.8	6.0	「TELLME 80c.c.」、スクリュー栓
51	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	北壁	IF15o	1.4	4.4	最大6.5	
52	文具瓶	インク瓶		半透明で青色	わずかにあり	撹乱	IF15,16,17n	外径3.2,内径1.9	6.0	4.7	
53	文具瓶	インク瓶		透明でわずかに黄色	わずかにあり	検出II	IF16s	1.4	4.4	最大4.6	
54	文具瓶	糊瓶	ふくのり	半透明で黄緑色	多くあり	北壁撹乱	IF15l	4.3	4.5	4.8	「ふくのり」蓋付、スクリュー栓
55	化粧瓶	化粧クリーム瓶		不透明で白色	なし	表採		4.0	4.6	3.8	スクリュー栓

その他（骨製品）

X-no.	器種１	材質	長（cm）	短（cm）	（cm）	遺構	グリッド	備　考
56	歯ブラシ	骨か	14.2	幅1.1	厚0.7	089SD	lF16p	４列
57	歯ブラシ	骨か	14.0	幅1.3	厚0.7	127SK	lF15r	
58	歯ブラシ	骨か	13.7	幅1.2	厚0.9	047SD	lF15s	
59	歯ブラシ	骨か	12.7	幅1.1	厚0.6	089SD	lF16o	４列
60	歯ブラシ	骨か	*10.6	幅1.1	厚0.6	127SK	lF15r	４列、ブラシ部欠損
61	歯ブラシ	セルロイド	14.1	幅1.1	厚0.5	撹乱	lF15n	４列「☆　軍人歯刷子　内外工商株式会社」
62	歯ブラシ	セルロイド	*9.8	幅*0.9	厚0.4	撹乱	lF15n	４列「SUPERIOR QUALITY」
63	ボタン	骨か	径1.6	-	厚0.35	047SD	lF15s	

金属製品（１）

M-no.	器種	種別	計測1（cm）	計測2（cm）	計測3（cm）	遺構	グリッド	取上no.	備　考
1	鎹か	鉄製品	長16.0	幅1.0	厚1.0	606SD-f中層	lF16q		処理no.111
2	鉄鏃	鉄製品	-	幅1.2	厚1.2	603SD	lF17r	399	未処理
3	細板	銅製品	長9.5	幅1.4	厚0.3	389SK	lF15l	77	処理no.92
4	飾り金具	銅製品	長4.6	幅3.5	厚0.3	389SK上層	lF15l		処理no.42
5	吸口	銅製品	長-	径0.9	厚1.0	389SK	lF15l	114	処理no.11
6	雁首	銅製品	長5.7	幅1.5	厚0.1	389SK	lF15l		処理no.9
7	雁首	銅製品	長4.5	幅1.8	厚0.8	389SK	lF15l	106	処理no.10
8	棒状含鉄遺物	鉄製品	長6.2	幅2.0	厚1.2	389SK	lF15l		未処理
9	釘	鉄製品	長7.7	幅1.2	厚0.6	389SK	lF15l		未処理
10	釘	鉄製品	-	幅1.5	厚0.8	389SK	lF15l		未処理
11	釘	鉄製品	-	幅1.2	厚0.5	389SK	lF15l		未処理
12	釘	鉄製品	長9.5	幅2.0	厚0.6	466SE	lF15k		処理no.112
13	釘	鉄製品	長9.0	幅0.6	厚0.6	466SE	lF15k		処理no.112
14	釘	鉄製品	長5.1	幅1.0	厚0.6	466SE	lF15k		処理no.112
15	釘	鉄製品	長5.5	幅1.4	厚0.6	466SE	lF15k		処理no.112
16	雁首	銅製品	長3.2	幅1.4	厚0.9	110SK	lF15t		処理no.5
17	含鉄遺物	鉄製品	長7.0	幅4.2	厚0.9	110SK	lF15t		処理no.113
18	釘	鉄製品	長6.7	幅1.7	厚1.0	110SK	lF15t		処理no.113
19	釘	鉄製品	長4.0	幅0.9	厚0.7	110SK	lF15t		処理no.113
20	釘	鉄製品	長3.9	幅1.0	厚0.8	110SK	lF15t		処理no.113
21	釘	鉄製品	-	幅0.9	厚0.9	110SK	lF15t		処理no.113
22	含鉄遺物	鉄製品	長7.1	幅2.2	厚1.0	381SK	lF16n	462	処理118
23	雁首	銅製品	-	-		492SK	lF15m	467	処理no.13
24	吸口	銅製品	長7.9	径1.0		087SD	lF17n		処理no. 2
25	銭か	銅製品	径2.7	厚0.5		492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
26	銭か	銅製品	径2.5	厚0.7		492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
27	鉄滓	鉄製品	長4.5	幅4.0	厚1.5	492SK	lF15m	686	処理no.120
28	釘	鉄製品	長7.3	幅1.2	厚0.6	492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
29	釘	鉄製品	長6.0	幅0.8	厚0.8	492SK（北西）	lF15m		未処理
30	釘	鉄製品	-	幅1.0	厚0.6	492SK（北西）	lF15m		未処理
31	釘	鉄製品	-	幅0.9	厚0.7	492SK（北西）	lF15m		未処理
32	釘	鉄製品	長5.0	幅1.4	厚0.9	492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
33	釘	鉄製品	長3.9	幅0.7	厚0.6	492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
34	釘	鉄製品	長2.5	幅0.8	厚0.5	492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
35	釘	鉄製品	長2.6	幅1.0	厚0.7	492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
36	釘	鉄製品	長3.5	幅0.7	厚0.6	492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
37	釘	鉄製品	-	幅0.7	厚0.6	492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
38	釘	鉄製品	-	幅0.7	厚0.7	492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
39	釘	鉄製品	-	幅1.2	厚0.7	492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
40	釘	鉄製品	-	幅1.5	厚0.7	492SK（西ベルト）	lF15m		未処理
41	煙管（揃）	銅製品	長11.4	径0.9		048SD	lF17t		処理no.20
42	煙管（一体型）か	銅製品	-	幅0.7	厚0.3	046SD	lF17p		処理no.1
43	吸口	銅製品	長7.1	径0.9		表土掘削	-		処理no.15
44	フイゴの羽口	陶器	外径7.3	孔径2.9		北壁トレンチ	lF15r		
45	重複椀型鉄滓	金属	長8.1	幅6.2	厚3.6	604SD	lF16s		
46	重複椀型鉄滓	金属	長10.5	幅8.6	厚5.3	492SK	lF15m	426	
47	椀型鉄滓	鉄製品	長5.2	幅4.6	厚2.0	466SE	lF15k		処理no.112
48	重複椀型鉄滓	金属	長4.9	幅3.7	厚3.1	110SK	lF15t		
49	碗	アルミ	15.0	3.5	8.0	340SX（茶褐色土）	lF16n		
50	碗	アルミ	16.0	5.0	9.0	340SX（茶褐色土）	lF16n		
51	開閉式ケース	銅製品	長5.0	幅3.7	厚0.6	東壁トレンチ	lF16t		処理no.64
52	配線留金具	鉛か	長3.8	幅1.2	厚0.6	606SD-f上層黒色土	lF15q		処理no.32
53	棒状塊	鉛製品	長11.2	幅1.0	厚0.1	089SD	lF16p		処理no.109
54	ベルト金具	銅製品	長4.0	幅4.0	厚0.1	376SK	lF15p		処理no.41
55	ベルト金具	銅製品	長2.1	幅3.0	厚0.1	046SD	lF17p		処理no.1
56	ベルト金具	銅製品	長1.9	幅2.3	厚0.1	264SK	lF17k		未処理
57	ベルト金具	銅製品	長3.3	幅2.1	厚3.3	204SD	lF15r		処理no.31
58	陸軍徽章	銅製品	径2.5	厚0.1		089SD	lF16p	55	処理no.27
59	ボタン	銅製品	径2.4	厚0.8		340SX	lF15n		処理no.45
60	ボタン	銅製品	径2.3	厚0.6		127SK	lF15r		処理no.39

金属製品（2）

M-no.	器種	種別	計測1（cm）	計測2（cm）	計測3（cm）	遺構	グリッド	取上no.	備　考
61	ボタン大	銅製品	径2.4	厚0.5		204SD	lF15r		処理no.31
62	ボタン	銅製品	径2.3	厚0.6		検出I	lF18q		処理no.53
63	ボタン	銅製品	径2.4	厚0.6		東壁トレンチ	lF16t		処理no.64
64	ボタン	銅製品	径2.0	厚0.5		340SX	lF15n		処理no.45
65	ボタン	銅製品	径1.4	厚0.4		検出I	lF18q		処理no.53
66	蝦蟇口金具	銅製品	復元6.8	厚0.8		342SX	lF17r		処理no.49
67	蝦蟇口金具	銅製品	径5.7	厚0.8		127SK	lF15r		処理no.39
68	煙管（一体型）	銅製品	長11.5	幅0.9	厚0.9	撹乱	lF15s		処理no.19
69	煙管（一体型）	銅製品	長9.3	幅0.9	厚1.0	046SD	lF17p		処理no.1
70	こしきの目皿？	銅製品	径11.0	厚0.1		北壁	lF14s		処理no.103
71	L字状針金	銅製品	長13.0	径0.1		387SK	lF15l	180	処理no.88
72	針金	銅製品	長20.0	径0.1		387SK	lF15l	639	処理no.90
73	針金	銅製品	長9.4	径0.2		085SK	lF15s,t		処理no.86
74	留め具	銅製品	長5.8	幅2.8	厚0.4	492SK	lF15m	350	処理no.96
75	飾り金具	銅製品	長3.5	幅4.1	厚0.1	127SK	lF15r		処理no.39
76	飾り金具	銅製品	長4.1	幅2.1	厚0.1	269SK	lF16q		処理no.40
77	鍵ホルダー	銅製品	-	幅1.0		撹乱（土管）	lF17k		処理no.105「一等客室八号」銘
78	留金具	銅製品	長6.7	幅4.0	厚0.6	342SX	lF17r		処理no.49
79	環状品	銅製品	径5.6	厚0.4		118SK	lF17q		処理no.38
80	棒状金具	銅製品	長4.9	径0.5		検出I	lF16t		処理no.51
81	薬莢？	銅製品	-	径1.5		340SX	lF15n		処理no.47
82	留め具	銅製品	長7.6	幅3.2	厚0.2	118SK	lF17p		処理no.37
83	棒状金具	銅製品	長10.0	径0.4		検出II	lF19p		処理no.55
84	棒状金具	銅製品	長8.5	幅0.5	厚0.1	389SK	lF15l		処理no.91
85	拍車	銅製品	長12.0	幅5.8	厚1.2	撹乱	lF16s		処理no.61
86	拍車	鉄製品	長15.6	幅10.3	厚1.9	検出II	lF16s		処理no.126
87	拍車	鉄製品	-	幅9.2	厚1.0	340SX（茶褐色土）	lF16n		処理no.122
88	金槌	鉄製品	長8.1	幅2.7	厚2.3	089SD	lF16p		処理no.108
89	目盛	鉄製品	長21.6	幅17.2	厚1.0	046SD	lF16r		処理no.107
90	角棒	鉄製品	長26.8	幅2.2	厚2.0	413SK	lF16k	800	処理no.143
91	蹄鉄	鉄製品	長12.5	幅12.2	厚1.0	表採			処理no.137
92	蹄鉄	鉄製品	長13.1	幅13.1	厚1.0	表採			処理no.137
93	蹄鉄	鉄製品	長12.2	幅12.6	厚0.8	表採			処理no.137
94	蹄鉄	鉄製品	長13.5	幅13.4	厚0.8	表採			処理no.137
95	蹄鉄	鉄製品	長13.7	幅14.1	厚1.0	表採			処理no.137
96	蹄鉄	鉄製品	長14.2	幅13.8	厚1.2	撹乱	lF15n		処理no.130
97	蹄鉄	鉄製品	長14.1	-	厚1.1	089SD	lF16p		処理no.138
98	蹄鉄	鉄製品	長15.0	幅12.2	厚1.4	285SK	lF17l		処理no.116
99	蹄鉄	鉄製品	長12.5	幅11.8	厚1.1	表採			処理no.137
100	蹄鉄	鉄製品	長14.4	幅12.4	厚1.2	表採			処理no.136
101	寛永通宝	銅製品				294SD	lF17l		処理no.66
102	寛永通宝	銅製品				149SK	lF16m		処理no.68
103	寛永通宝	銅製品				387SK	lF15l	568	処理no.76
104	寛永通宝	銅製品				329SK	lF16l		処理no.71
105	寛永通宝	銅製品				204SK	lF15r		処理no.70
106	寛永通宝	銅製品				381SK（4～7層）	lF16n		処理no.72
107	寛永通宝	銅製品				387SK	lF15l	87	処理no.73

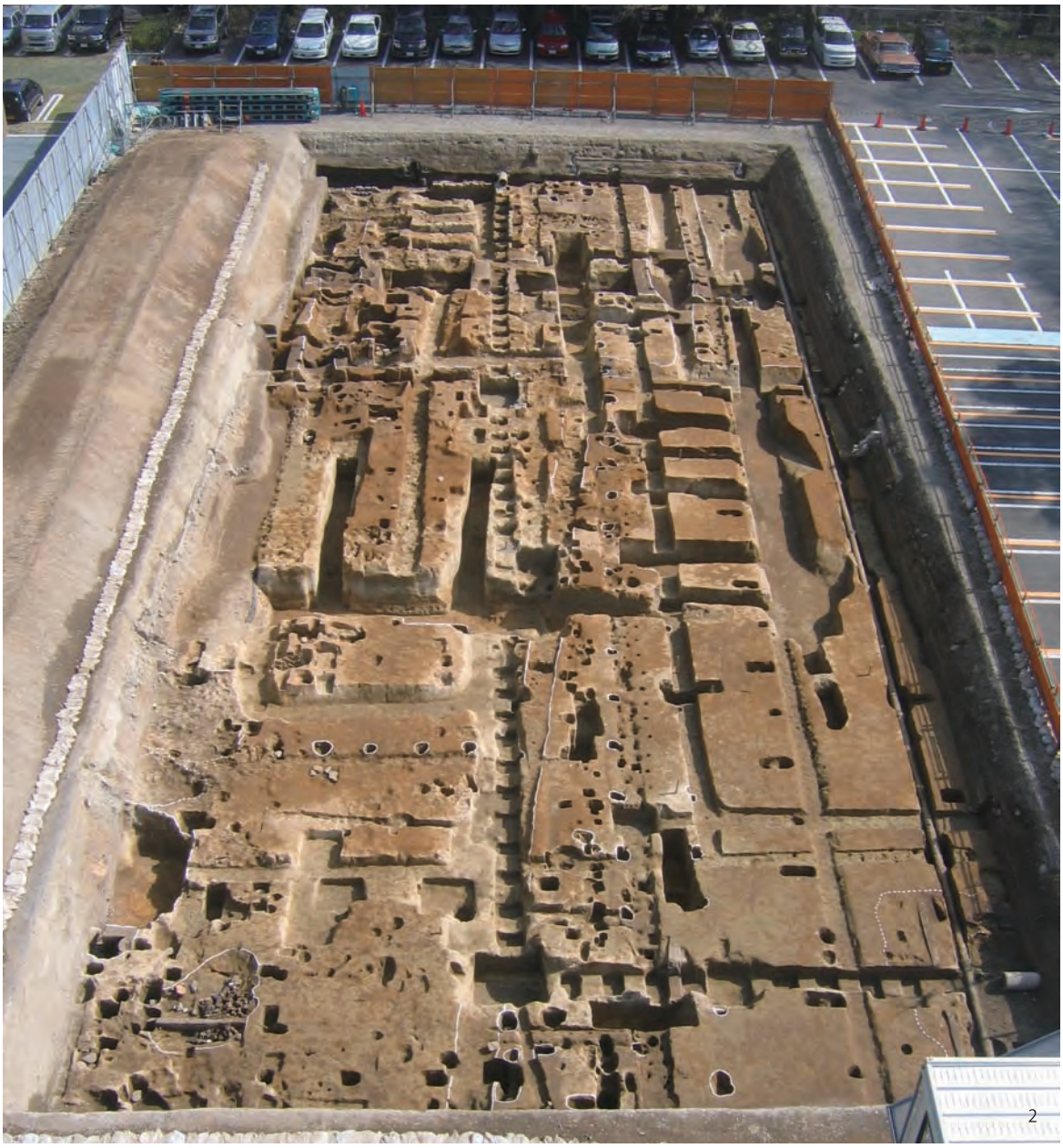
石製品

S-no.	器種	石材	遺構	グリッド	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考	取上no.
1	石鏃	下呂石	118SK	lF17q	2.2	幅*1.7	厚0.4	無茎	
2	打製石斧	ホルンフェルス	605SD	lF17,18r	11.2	幅4.2	厚1.3		779
3	碁石		004SK	lF15t	径2.2	厚0.6	-	白（磁器）型作り	
4	碁石	凝灰質泥岩	095SK	lF17n	径2.1	厚0.45	-	黒	
5	硯	頁岩	432SK（上層）	lF15,16l	*10.7	幅5.0	厚1.9		
6	硯	泥質凝灰岩	122SK	lF15s	*5.5	幅6.1	厚1.6		
7	砥石	凝灰質泥岩	334SK	lF15s	4.1	幅2.2	厚1.3	研磨面三角形	398
8	砥石	凝灰質砂岩	088SD	lF16n,o	*7.3	幅6.1	厚2.4		
9	砥石	泥質凝灰岩	389SK	lF15l	16.1	幅5.4	厚1.1		109
10	砥石	凝灰質泥岩	110SK	lF15t	*6.9	幅4.7	厚*1.2		
11	砥石	凝灰質泥岩	389SK(上層)	lF15l	*11.7	幅5.3	厚1.7		



1　調査区南東隅
（駐車場右側が南辺土塁、側を外堀がめぐる，北西から）

2　調査区全景
（下面，戦国期の堀はベルトを残した状態，西から）











3　戦国期の堀
（中央の南北溝が 605SD, 北から）

4　堀（605SD 北壁での断面 , 南から）

5　堀（605SD ベルト断面 , 北から）

6　溝（606SD-e 地点断面 , 南から）













7　上面 東半部分（戦国期の堀・区画溝の検出状況 , 北から）／ 8　溝（東西にのびる 603SD, 東から）

9　溝（南北にのびる 606SD,603SD と T 字に接続する , 南から）／ 10　溝断面（603SD 東壁にて , 西から）／

11　溝断面（606SD-a 地点 , 北から）／ 12　溝断面（606SD-c 地点 , 南から）


13


14


15


16

13　下面 完掘状況（戦国期の堀・区画溝 , 北東から）
14　溝断面（607SD, 東から）
15　堀断面（606SD-f 地点北壁にて , 南から）
16　溝完掘状況（607SD, 西から）





17　屋敷境の溝と柱穴列
（496SD, 画面左の壁面に境の溝廃絶後に掘削された土坑 070SK,110SK がみえる，北から）
18　調査区北東隅壁面
（廃棄土坑の重複が著しい , 南から）





19　土坑完掘状況（085SK, 北から）
20　土坑遺物出土状況
（085SK ベルト南側部分 , 東から）



21　調査区北西部 廃棄土坑群
（瓦溜 413SK は明治期 , 西から）
22　土坑 遺物出土状態
（492SK, 北から）
23　土坑断面（389SK, 南東から）
24　土坑完掘状況と調査区北壁
（387SK,492SK 付近 , 南から）
25　土坑完掘状況と調査区北壁
（389SK, 南から）
26　土坑遺物出土状態と壁面
（380SK, 南から）

























27　土坑検出状況（413SK 上層掘削段階 , 南東から）
28　土坑遺物出土状態　（413SK の桟瓦と焼土塊 , 北から）
29　土坑完掘状況（413SK 底面南寄りに 2 カ所の凹みをもつ楕円形土坑 , 東から）
30　土坑遺物出土状態
（153SK 胞衣埋納遺構か , 東から）
31　土坑遺物出土状態（387SK, 南東から）
32　土坑ベルト断面（387SK, 東から）
33　地下室断面（381SK 下層褐色土層は無遺物 , 南から）





34　地下室完掘状況（381SK, 南東から）
35　下層遺物出土状態（381SK, 東から）

















36　礎石を伴う土坑（460SK, 北から）／　37　礎石を伴う土坑（120SK, 北から）
38　礎石を伴う土坑（326SK, 南から）／　39　礎石を伴う土坑（412SK, 東から）
40　礎石を伴う土坑（421SK, 東から）／　41　礎石を伴う土坑（408SK, 南から）
42　礎石を伴う土坑（409SK, 東から）／　43　礎石を伴う土坑（495SK, 北から）



44　版築状埋土断面
（196SK, 南から）
45　土坑最下層
（196SK, 手前が東）
46　版築状埋土と段削り出し
（196SK, 南から）
47　土坑検出状況
（196SK, 長軸が 605SD の幅にあたる，北西から）













48　版築状埋土最下層（194SK 付近，南から）
49　土坑断面（版築状埋土の 832SK, 東壁にて）
50　土坑最下層（553SK, 西から）


51


52


53


55

51　溝完掘状況（026SD・027SD 重複 , 東から）
52　溝断面（東壁 026SD・027SD 付近 , 西から）
53　調査区南東隅壁面（西から）
54　調査区南壁面（606SD 付近 , 北から）

55　石材廃棄 検出状況
（001SD・002SD, 北西から）
56　石材廃棄状況 部分（001SD, 北から）


54


56


57


58

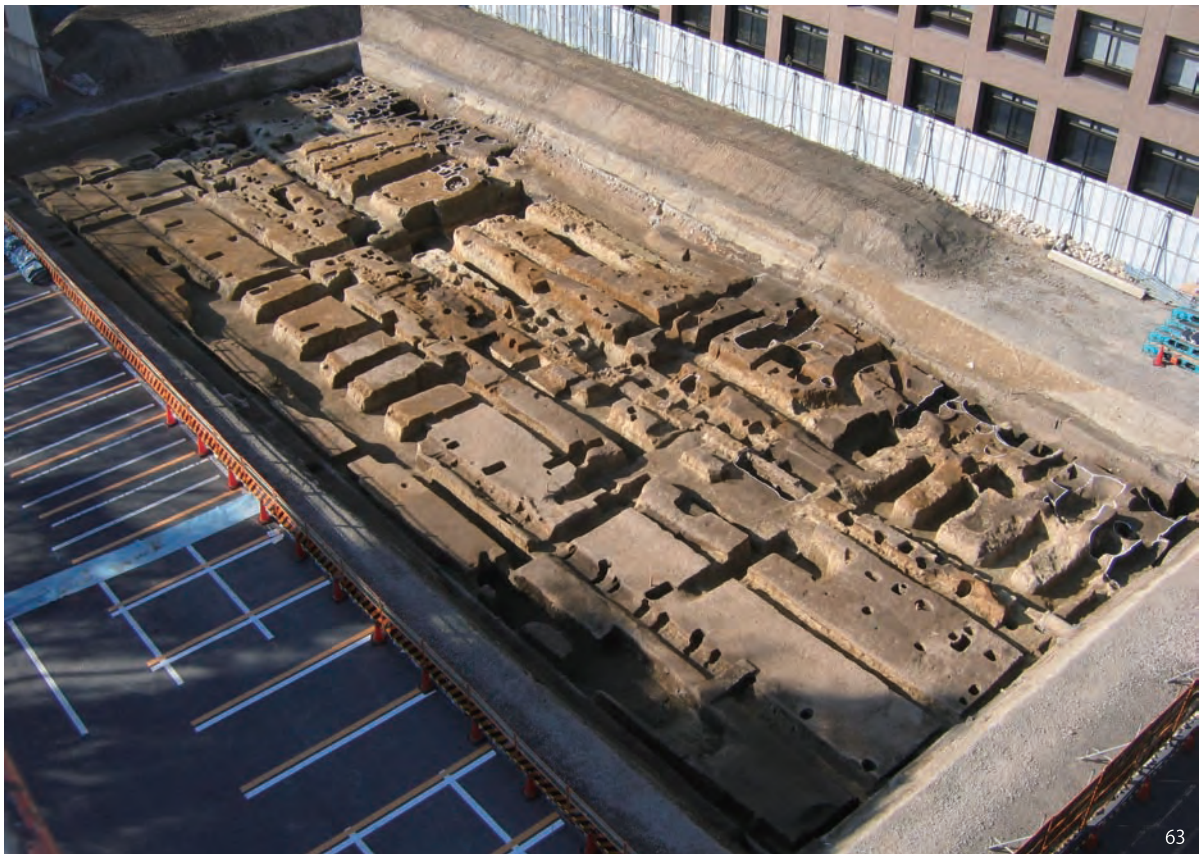

59


62


60


61

57　防空壕埋土（090SD, 西から）
58　防空壕出入口スロープ（340SX, 北から）
59　防空壕完掘状況（090SD, 西から）
60　防空壕と地下室（340SX と白線が 381SK, 北東から）
61　防空壕と当時の掘削痕（340SX 周辺 , 北から）
62　産業廃棄物の分別（煉瓦、石材、コンクリート、鉄筋等）



63　上面 完掘状況（南東から）



64 下面 完掘状況（東半部分 , 北から）



65　下面 完掘状況（中央部分 , 北から）



66　下面 完掘状況（西半部分 , 北から）


96


101


212


530


648


103


105


104


613


497


332


208


323


320


325


322


324


344

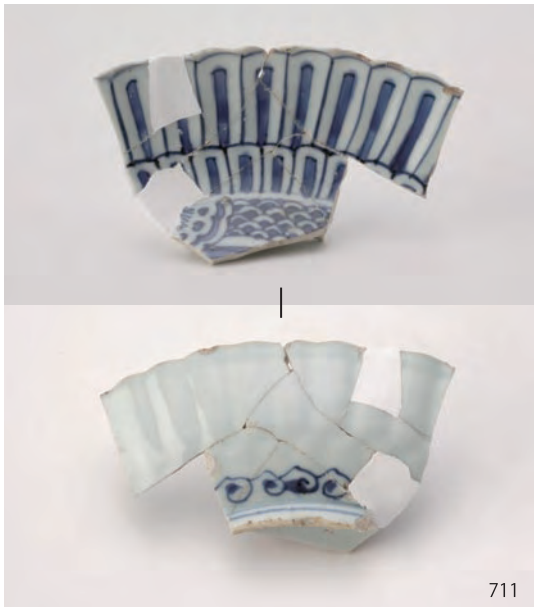

213


651


331


218


220


711

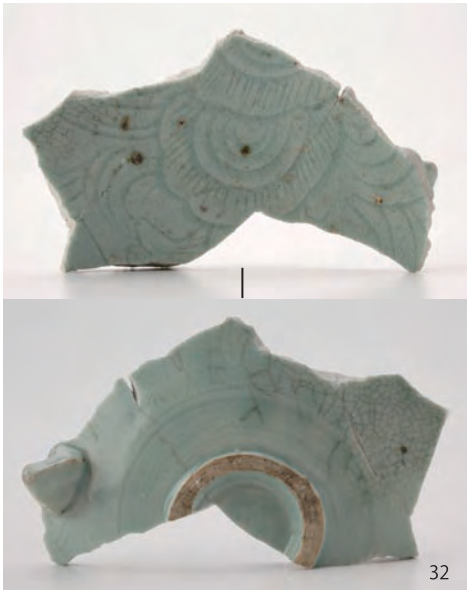

326


639


327


215


448


32


330


116


115


538


586


112


113


114


119


225


224


239


349


482


543


653


244


342


701


337


338


541


542


231


346


132


134


593


592


663


400


399


255


247


623


555


246


250


554


131


130


345


124


127


143


141


552


675


464


516


492


572


467


462


612


559


632


232


238

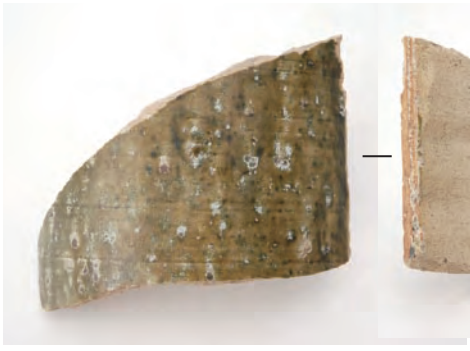

441


440


599


432


433


293


42


636


413


434


354


556


680


401


233


439


356


438


358


275


478


405


276


370


715


570


487


364


147


431


681


160


714


279


288

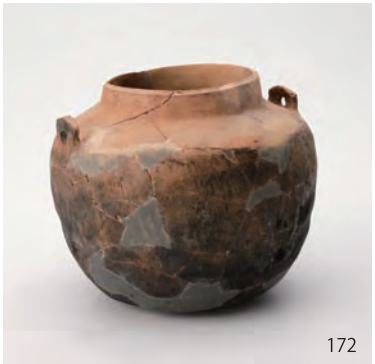

146


292


283


157


173


172


575


603


608　607　605


192　191　196


168


627　626　628


384


686


164


574


618


684




312


457


453


567


458


568


485,486


629


500


311


566


696


583


585


695


698


699


582


388


154


691


297


385


721

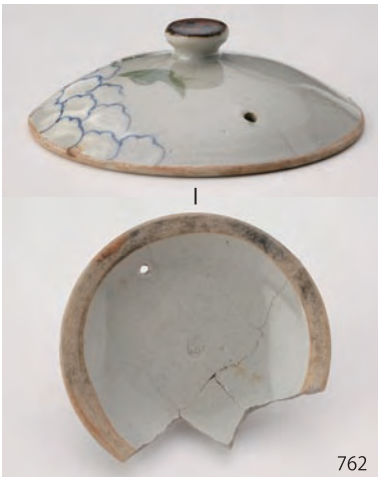

726



856

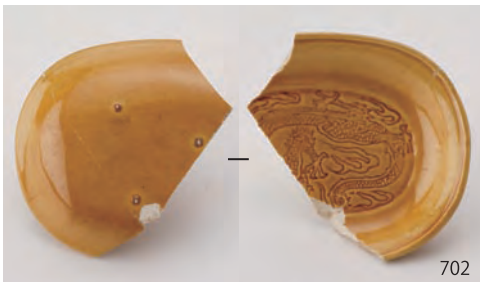

789

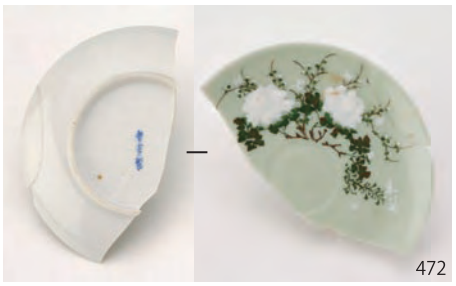

474


762


1


2


702


472


471


794


793


473


816


763


798


766


785


810


787


809


817


774


834


752

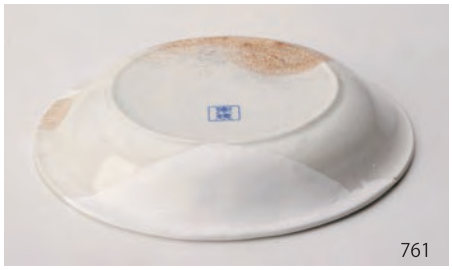

776


808


811


764


760


761


842


845

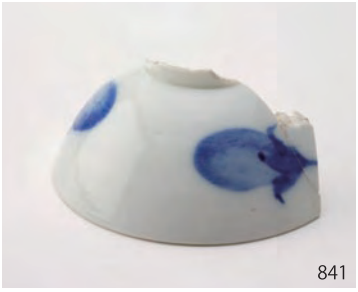

846


840


807


839


843


841


847


58


57


56

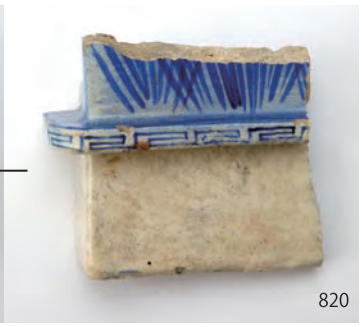

59


61


63


791




820


14 15 28 9 13 12


24


43


4


2 1


78


82


821


59　64


54　55


79


85


88


66




96


100


98


87


86


50


41


68


69


9


45


43


24


44


48


11


12


46


6


40




53



29



ふりがな	なごやじょうさんのまるいせき
書名	名古屋城三の丸遺跡　VIII
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第161集
編著者名	武部真木（編集）・鈴木正貴・加藤博紀・鬼頭　剛・蔭山誠一・川添和暁
編集機関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なごやじょう 名古屋城 さんのまる 三の丸	あいちけんなごやし 愛知県名古屋市 なかくさんのまる 中区三の丸一丁目	23106	007027	35度 10分 43秒	136度 53分 54秒	2006.11 ～2007.3	1,089	名古屋高等・地方・簡易裁判所庁舎増築
				（世界測地系による）				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名古屋城 三の丸遺跡	城館跡	戦国時代 江戸時代 近代	堀・区画溝・井戸・土坑・防空壕	近世陶磁器,土器 近代陶磁器 金属製品	旧陸軍関連遺構

文書番号	発掘届出（18埋セ第37号） 通知（18教生第1275号） 終了届（18埋セ第105号） 発見届・保管証（18埋セ第105号） 監査結果通知（19教文第10-3号）

要約	戦国期那古野城に関連する堀、溝等を確認し、近世では南面する武家屋敷の屋敷表の範囲、および道の一部が明らかになった。明治以降この地を占有した陸軍第三師団に関連する遺物、防空壕跡などを確認した。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第161集

名古屋城三の丸遺跡Ⅷ

2008年3月31日

編集・発行　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　新日本法規出版株式会社